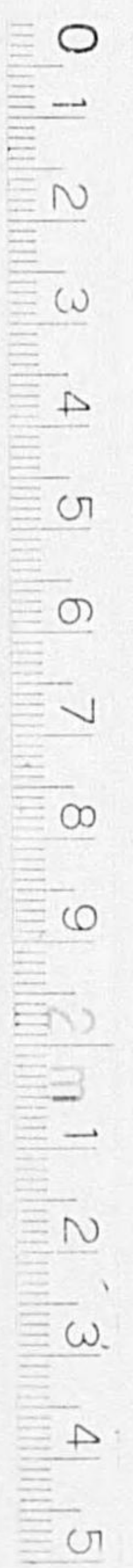
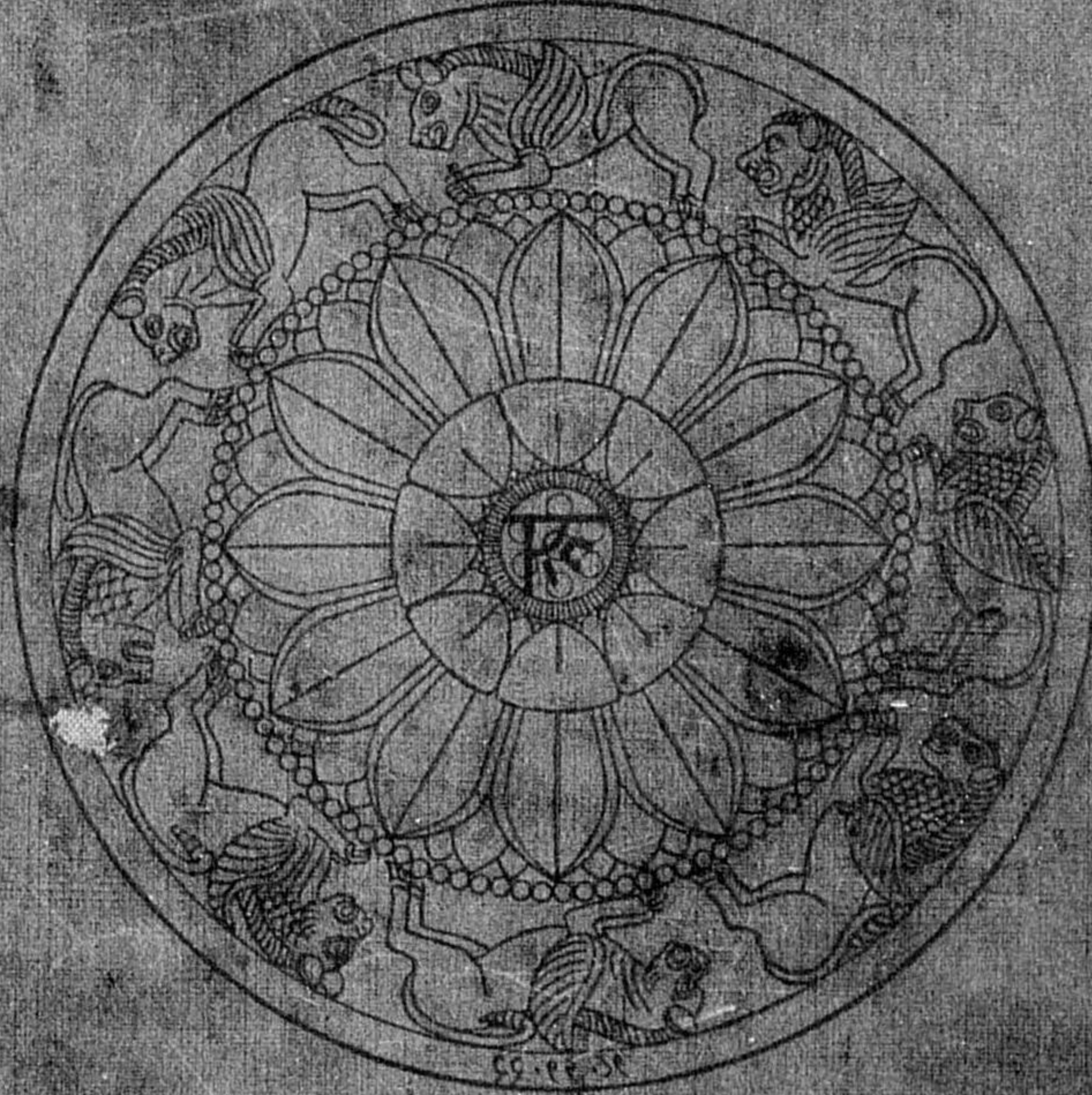
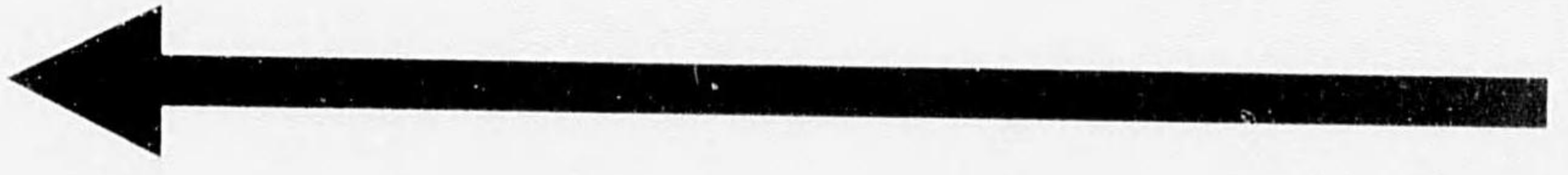


522.5-A437
1200500745266
25
17



始



2-58-37

522.5
A43



昭和十九年

印度乃建築

三沼俊一

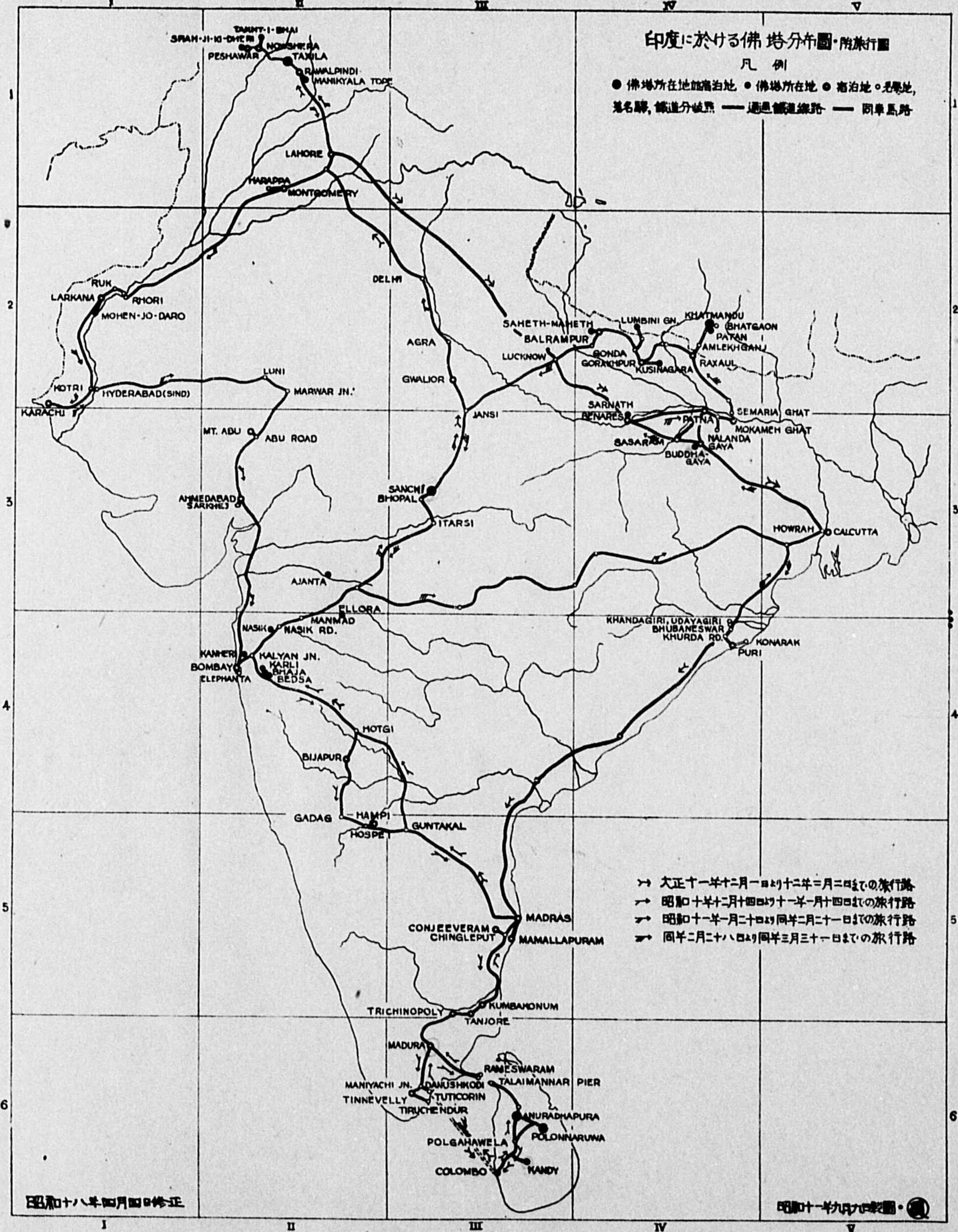


昭和十九年

印度に於ける佛塔分布圖・附旅行圖

凡例

● 佛塔所在地 ● 佛塔所在地 ● 高治地 ● 聖地 ● 聖地
 地名、鐵道分岐點 — 通車鐵道線路 — 同車馬路



→ 大正十一年十二月一日より十二年二月二日までの旅行路
 → 昭和十年十二月十四日より十一年一月十四日までの旅行路
 → 昭和十一年一月二十日より同年二月二十一日までの旅行路
 → 同年二月二十八日より同年三月三十一日までの旅行路

昭和十八年四月四日修正

昭和十一年九月九日製圖

昭和十七年五月頃と記憶してゐるが、芸艸堂から印度建築の圖録を出版してみようと思ふがといふ相談を受けたのが始めて、最初は玻璃版でといふ説もあり、且つ登載圖の豫定數に就いても、書肆との間に大分の開きがあつたが、結局互にくらかつ譲歩して、圖版頁數百三十二、圖數百九十、圖版と解説と向ひ合せにして、緋續に便利な様にする事に決定した。其結果は一頁では解説が書き切れなかつたり、又餘り過ぎたりしたところもある。自然繁簡當を得ないものが出來上つたのは、止むを得ない次第である。

私としては、カシユミール、シツキム及びデツカン高原地方、即ハイデラバード、マイソール方面と、印度のカジュラホを割愛して了つた事とが、今から考へてみると如何にも残念であるが、これは如何ともなし難かつたとして、附圖に記した通り大體思ふ様に歩き廻つたから、とつて來た寫眞は相當の數に上つてゐる。この多數の寫眞の中から僅かに百九十枚を選び出すのは、實を言へば可なりやつかいてあつた。さうして場合によつては掲載した寫眞では、其建築物の片鱗さへ伺ふことができかねるし、十分には入れられないし、やめるのも惜しいといふ様なものもあつたが、此圖録は専門家用のではないから、ある程度迄でがまんしてしまつたのもある。續編でも出さなければ、これだけではどうも物足りない。

標題は『印度の建築』であるが、印度ばかりでなしに、ネバル國のも錫蘭島のものもあるし、又時には風景寫眞もある。風景なら多少私にも判るが、普通此種の圖録に見る様な住民の寫眞は一枚もとらなかつた。理由

は種概がおしかつたからと、此方面には全く門外漢で、従つて趣味がなかつたからやめたのである。つまり建築九割五分に風景五分位の割合になつてゐるだらう。其風景といふ中にも、多少建築は入つてゐるが、どうかすると砂漠に駱駝が歩いてゐるのや、山脈ばかりの寫眞が一二枚はある。

寫眞選擇の方針は、これまで印度に關する拙著にないものをなるべく採つたつもりである、併し同時にどうしても省くことのできないものは入れておいた。だから讀者にしてみれば、こんなのはもう一枚位内部の寫眞を入れたらよかつたらうとか、何故にあれをやめたらうとか、又もつといいものがあるのに、こんなつまらないものを出してゐるのだらうとか、いろいろお考へになる方方もおありでせうが、右に記した様な方針でえらびだした結果、さういふ事になつたのである。

寫眞登載の順序は、先づ寒い方から暑い所へ行く様に、北の方から始めて南の錫蘭島に終る様にしておいた。だからネバル國が一番初めて、北印度から中印度の一部を経て西北印度、即古への健駄邏地方からアフガニスタン國境に近づき、引返してインダス河に沿ひて南下し、孟買市に出てて附近の窟殿を探り、更に北上して再び中印度地方の遺址を訪ひ、東海岸を南方に向ひ、プーリにて此方面を打切り、改めて孟買市よりビジャプールとハンビを経てマドラス市に出て、南印に於ける印度教の大殿堂を見て錫蘭島に渡り、二大遺跡の巡歴を以て終る事にした。さうして最後に印度國甲谷他博物館出陳のパールハット廢塔玉垣の一部及び阿育王柱頭彫刻二種を載せておいた。

解説には成るべく専門術語を使用しない様にとめたが、さうばかりしてゐると如何にも長たらしくなる

ので、その様な折には僅かばかり用ひたところもある。専門の辭書でなくとも、少し大きな辭典にはのつてゐるから、判らなければ參考書はいくらもあるが、ここには讀者諸君の便利をはかり、簡單ながら附録に其説明をしておいた。これも圖を入れなければ不十分な事は承知してはゐるが、そこまでは手が届きかねたから、知りながら省略しておいた。

今になつてみれば全部書き直し度いものだから、決して自分の書物の廣告をするのではない上に、文字通りの拙著、換言すれば拙劣なる著書ではあるが、十何年前にだしたのに『印度旅行記』といふ菊版の誤植だらけの書物がある。これには随分餘計に圖が入れてある。夫から『印度美術寫眞集』が百二十枚一組で、此外に雑誌『四天王寺』へ書きちらしたのに『嵐毗尼園參詣記』・『祇園精舍址と舍衛城址』・『涅槃佛塔と茶毘塔』・『印度佛塔玉垣圖文内の文様に就いて』等があり、此等にも多くの圖が挿入してあるから、夫等の圖をみれば參考になり、本圖録の闕を補ふにはいくらか役に立つてあらう。文句はくだらないから讀まずに、圖版と其解説だけ讀めばよからう。此他に目下校正中だから、其うち出版の運びにならうが、訂正増補をした『印度佛塔巡禮記』といふのがある。この最後の分だけは、何とかしたものにしたく考へてゐる。勿論全部建築を主にした事は斷るまでもあるまい。

明治十六年、故北島道龍師が單身佛陀伽耶の大塔へ參詣された時は、一方ならぬ苦心をされた事は『天竺行路次所見』に詳細に記されてゐるが、夫から三年後、明治十九年に當時の陸軍歩兵大尉福島安正氏と陸軍

工兵中尉田内三吉氏とが、菅谷軍醫と共に印度へ派遣された際は、たとひその目的は軍事視察にあつた爲とはいへ、萬事が非常に好都合に運んだ事は、これまた明治二十年陸軍文庫として發行された『印度紀行』に明らかである。其頃には既に公立宿舍もあり、記されてゐる其平面圖をみても、又其宿泊に關する規定をみても、現行のものと殆んど同じで、官憲の背景がある上にこれなら困る事は殆んどなかつた筈である。

今日でも少し田舎へ入ると食物もない状態だから、日本人なら米・味噌・醤油・塩を初め、諸罐詰及瓶詰の食料品、茶・樂罐・土瓶・急須・炊事用焜爐等、寢具一切に蚊捕線香迄持參の上、日本料理のできる従僕を連れなければならぬ。其上に若し米が途中でなくなりてもしたら、買ふ事もできず補充がつかないとなると、食麵包でも買ひ込んでおいて、幾日でもその一品で辛抱しなければならぬ時もある。定つた時間には食事のできない場合も少なくない。人に連れて行つて貰つたのでは、思ふ所へ行けない場合もあるし、先方が自分に絶対服従のかたい約束でもあればとにかく、さうでないといふと直に仲間割れがする。所詮印度旅行は單獨に限る。私は二度共ただ一人て歩いて、相當に目的を達することができた。要するに餘程覺悟をしなければ、初めは大變な勢ひで出かけても、雄圖は忽ち挫折して了ふであらう。歐米各國を汽車と自動車で行し、夜は第一流の大旅館へ泊つて歩いたのでは勿論、たとひ印度にしたところで、甲谷他のあたりから孟買へ、或は其反對に、大きな町ばかり歩いたとて、印度旅行のほんたうの味は判るものではない。

採録の圖版は五月十八日より二十日迄に整理を終り、二十一日から止むを得ない用事のあつた日を除き、

他は連日解説を記し、一ヶ月を費して六月二十日に書き上げる事ができた。次に銘文のうち、嘗て『印度旅行記』に用ひたものを二度役立たせた二枚の他の五枚（及び挿圖一枚）を淨書をしたが、これは活字では誤植・大さ・書體等の心配をしたからで、昔の版木と同様、書いて凸版にすれば字配等もある程度迄、眞に近づける事ができると思つたから、試みたのである。七月一日からは他に着手せねばならぬ事があり、如何にしても六月中に是非原稿全部を片づけなければならなかつた爲、いけないと知りつつ随分いそいだ、だから申譯の様ではあるが、漸く字がよめる程度で、可なりきたならしいものになつて了つた。この點に就いては特に讀者の諒解を願ひ度いのである。

昭和十八年十二月一日

京都市に於いて

天 沼 俊 一

昭和十八年十一月一日

大 陸 地 図

本図は、我が國の領土を正確に示し、その地勢、交通、産業等を簡明に表現することを目的として編纂されたものである。凡そ、我が國の領土は、北海道、本州、四国、九州の四つの島嶼にわたる。本図は、この四つの島嶼を正確に示し、その地勢、交通、産業等を簡明に表現することを目的として編纂されたものである。凡そ、我が國の領土は、北海道、本州、四国、九州の四つの島嶼にわたる。

目 次

名稱の下括弧内の數字は地圖に於ける大體の位置を示す。

一、北海道	一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百
二、本州	一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百
三、四国	一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百
四、九州	一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

ネバル國の部

- 一、ビムフェデの小祠 (■・2) 三 頁
- 二、シサガリの小祠 (■・2) 三
- 三、マルク川畔のボワー (■・2) 五
- 四、首都の名の元となったと傳ふる木造家屋 (■・2) 七
- 五、首都の廣場に建てる層塔の基壇 (■・2) 九
- 六、マハツ・デパール (■・2) 一一
- 七、バシユバチ堂 (■・2) 一三
- 八、ボドナート寺大塔全景 (■・2) 一五
- 九、ボドナート寺大塔近景 (■・2) 一七
- 一〇、スワヤムブ丘全景 (■・2) 一九
- 一一、スワヤムブナート寺大塔全景 (■・2) 一九
- 一二、スワヤムブナート寺大塔正面の大金剛杵 (■・2) 二一
- 一三、スワヤムブナート寺大塔の平頭と相輪 (■・2) 二一
- 一四、バータンの中央塔遠望 (■・2) 二三
- 一五、バートガオン王宮正面 (■・2) 二五

印度國の部

- 一六、バートガオン市の五重塔 (■・2) 二七
- 一七、嵐毗尼園の「釋種浴池」と傳ふる池 (■・2) 二九
- 一八、嵐毗尼園の阿育王柱殘闕 (■・2) 二九
- 一九、ラクサウルの農家 其一 (■・2) 三一
- 二〇、ラクサウルの農家 其二 (■・2) 三一
- 二一、祇園精舍址 其一 (■・2) 三三
- 二二、祇園精舍址 其二 (■・2) 三三
- 二三、舍衛城址のソブナート・テンプル (■・2) 三五
- 二四、舍衛城廢墟の一 (■・2) 三五
- 二五、クシナガラの涅槃塔 (■・2) 三七
- 二六、クシナガラ茶毘塔 (■・2) 三七
- 二七、グワリヤ城塞全景 (■・2) 三九
- 二八、マン・マンデル宮東面全景 (■・2) 四一
- 二九、マン・マンデル宮附屬小塔 (■・2) 四一
- 三〇、サス堂 (■・2) 四三

三一、	バフ堂 (I・2)	四三
三二、	ムハマッド・ガウス廟 (I・2)	四五
三三、	グワリヤ市回教墓 (I・2)	四七
三四、	グワリヤ市回教墓の石燈籠 其一 (I・2)	四七
三五、	グワリヤ市回教墓の石燈籠 其二 (I・2)	四七
三六、	アグラ市タージ・マハル廟 (I・2)	四九
三七、	シカンドラのアクバア大王廟 正面 (I・2)	五一
三八、	シカンドラのアクバア大王廟 部分 (I・2)	五三
三九、	フアーテール・シクリの宮址 (I・2)	五三
四〇、	デリー市ジャーマ・マスジド (I・2)	五五
四一、	デリー市郊外フマユン王廟墓 (I・2)	五七
四二、	ラホール市ワチール・ハン寺の中庭 (I・1)	五九
四三、	シャリマール園池風景 其一 (I・1)	六一
四四、	シャリマール園池風景 其二 (I・1)	六一
四五、	シャダラのジャハンギル王廟 (I・1)	六三
四六、	ラホール郊外ゼブンニッサ・ベガム墓全景 (I・1)	六五
四七、	ラホール郊外ゼブンニッサ・ベガム墓部分 (I・1)	六五
四八、	ラホール城内宮殿窓部分 (I・1)	六七

四九、	マニキヤラ塔 (I・1)	六九
五〇、	タキシラに於けるシルカップの遺址 (I・1)	七一
五一、	タキシラに於けるシルカップの雙頭鷲殿正面 (I・1)	七三
五二、	タキシラのジャンデアル堂全景 (I・1)	七五
五三、	タキシラのジャンデアル堂正面柱詳細 (I・1)	七五
五四、	タクチ・バハイの町風景 (I・1)	七七
五五、	タクチ・バハイの廢寺のある山 (I・1)	七七
五六、	タクチ・バハイ廢寺址 其一 (I・1)	七九
五七、	タクチ・バハイ廢寺址 其二 (I・1)	八一
五八、	ベシャワー市俯瞰 (I・1)	八三
五九、	ベシャワー市街一部 (I・1)	八三
六〇、	ベシャワー市隊商宿の中庭 (I・1)	八五
六一、	ベシャワー市郊外シャ・ジ・キ・デーリに於けるカニシカ寺の塔址 (I・1)	八七
六二、	ハラッパの遺址 其一 (I・1)	八九
六三、	ハラッパの遺址 其二 (I・1)	八九
六四、	モヘンジョ・ダロの遺址 (I・2)	九一
六五、	インダス河の鐵橋 (I・2)	九三
六六、	唐地郊外所見 (I・2)	九五

六七、アブウ山のデルワラ堂全景 (Ⅱ・3)	九七
六八、アブウ山のジャイナ建築部分 其一 (Ⅱ・3)	九九
六九、アブウ山のジャイナ建築部分 其二 (Ⅱ・3)	九九
七〇、アブウ山のジャイナ建築の天井 其一 (Ⅱ・3)	一〇一
七一、アブウ山のジャイナ建築の天井 其二 (Ⅱ・3)	一〇三
七二、アーメダバード市の三門 (Ⅱ・3)	一〇五
七三、アーメダバード市シチ・サイヤド・モスク背面 (Ⅱ・3)	一〇七
七四、アーメダバード市シチ・サイヤド・モスク窓詳細 (Ⅱ・3)	一〇七
七五、アーメダバード市鳥の家 其一 (Ⅱ・3)	一〇九
七六、アーメダバード市鳥の家	
七七、アーメダバード市鳥の家	
七八、アーメダバード市鳥の家	
七九、アーメダバード市鳥の家	
八〇、アーメダバード市鳥の家	
八一、アーメダバード市鳥の家	
八二、サルケッジの回教寺 其一 (Ⅱ・3)	一一三
八三、サルケッジの回教寺 其二 (Ⅱ・3)	一一三
八四、サルケッジの回教寺 其三 (Ⅱ・2)	一一三

八五、孟買市ゲート・オブ・インヂヤ正面 (Ⅱ・4)	一一五
八六、孟買市タージ・マハル・ホテル全景 (Ⅱ・4)	一二七
八七、孟買市の圓堂 (Ⅱ・4)	一二九
八八、孟買市邸宅の一例 (Ⅱ・4)	一二九
八九、孟買市バンガング・タンク (Ⅱ・4)	一二一
九〇、エレファンタ窟殿部分 (Ⅱ・4)	一二三
九一、エレファンタ窟殿柱頭 (Ⅱ・4)	一二三
九二、孟買市ピクトーリア公園の石象 (Ⅱ・4)	一二三
九三、カーリー窟殿制多窟入口 (Ⅱ・4)	一二五
九四、カーリー窟殿制多窟内部 (Ⅱ・4)	一二七
九五、バージャ窟殿制多窟全景 (Ⅱ・4)	一二九
九六、バージャ窟殿塔婆窟内部 (Ⅱ・4)	一三一
九七、バージャ窟殿の内南方僧坊内部 (Ⅱ・4)	一三一
九八、ベドサ窟殿制多窟窟正面 (Ⅱ・4)	一三三
九九、ベドサ窟殿制多窟正面柱頭詳細 (Ⅱ・4)	一三三
一〇〇、ベドサ窟殿制多窟内部 (Ⅱ・4)	一三五
一〇一、ベドサ窟殿毘訶窟内部 (Ⅱ・4)	一三五
一〇二、ナシック窟殿制多窟外部 (Ⅱ・4)	一三七

一〇三、ナシツク窟殿制多窟内部 (I・4)	一三九
一〇四、ナシツク窟殿ゴウタミブトラ窟内部 (I・4)	一三九
一〇五、アジャンタ窟殿全景 其一 (I・4)	一四一
一〇六、アジャンタ窟殿全景 其二 (I・4)	一四一
一〇七、アジャンタ窟殿第十號制窟内部 (I・4)	一四三
一〇八、アジャンタ窟殿第十九號制窟外部 (I・4)	一四三
一〇九、エロラ窟殿佛教窟群 (I・4)	一四五
一一〇、エロラ窟殿毘首羯磨窟外部 (I・4)	一四五
一一一、エロラ窟殿毘首羯磨窟内部 (I・4)	一四七
一一二、エロラのカイラサナータ堂 (I・4)	一四九
一一三、サンチ丘全景 (I・3)	一五一
一一四、サンチ丘第一塔 (I・3)	一五三
一一五、サンチ丘第二塔 (I・3)	一五五
一一六、サンチ丘第三塔 (I・3)	一五七
一一七、那爛陀僧伽藍址 其一 (I・3)	一五九
一一八、那爛陀僧伽藍址 其二 (I・3)	一六一
一一九、華氏城址の發掘 其一 (I・2)	一六三
一二〇、華氏城址の發掘 其二 (I・2)	一六三

一二一、華氏城址の發掘 其三 (I・2)	一六三
一二二、ベナレス市恒河河畔一景 (I・3)	一六五
一二三、鹿野苑遺址全景 (I・3)	一六七
一二四、鹿野苑グメーク塔 (I・3)	一六七
一二五、鹿野苑出土阿育王柱頭 (I・3)	一六九
一二六、ササラムに於けるセヤ・シャール廟 (I・3)	一七一
一二七、佛陀伽耶大塔 其一 (I・3)	一七三
一二八、佛陀伽耶大塔 其二 (I・3)	一七三
一二九、ウダヤギリ窟殿全景 (I・4)	一七五
一三〇、ウダヤギリ窟殿虎窟 (I・4)	一七七
一三一、カンダギリ窟殿入口 (I・4)	一七七
一三二、ブバネスワー大堂遠望 (I・4)	一七九
一三三、ブバネスワー大堂 其一 (I・4)	一八一
一三四、ブバネスワー大堂 其二 (I・4)	一八三
一三五、ブバネスワー大堂 其三 (I・4)	一八五
一三六、カナラック黒塔遠望 (I・4)	一八七
一三七、カナラック黒塔全景 (I・4)	一八七
一三八、カナラック黒塔部分 (I・4)	一八九

一六

一三九、プーリのジャッガアナート堂 其一 (■・4) 一九一

一四〇、プーリのジャッガアナート堂 其二 (■・4) 一九三

一四一、ビジャプールのゴル・グムバーツ全景 (■・4) 一九五

一四二、ビジャプールのミハタリ・マハル全景 (■・4) 一九七

一四三、ビジャプールのイブラヒム・ラウザ全景 (■・4) 一九九

一四四、ビジャプールのジャーマ・マスジド内石燈籠正面 (■・4) 二〇一

一四五、ビジャプールのジャーマ・マスジド内石燈籠部分 (■・4) 二〇一

一四六、ビジャプールのアサール・マハル内石燈籠背面 (■・4) 二〇一

一四七、ハンビ廢墟の樓閣 (■・5) 二〇三

一四八、ハンビ廢墟の象廐 (■・5) 二〇五

一四九、マ馬拉ブラムのショーワ・テムブル遠望 (■・5) 二〇七

一五〇、マ馬拉ブラムのショーワ・テムブル近景 其一 (■・5) 二〇九

一五一、マ馬拉ブラムのショーワ・テムブル近景 其二 (■・5) 二〇九

一五二、マ馬拉ブラムの謂はゆる「恒河の由來」部分 (■・5) 二一一

一五三、マ馬拉ブラムの五「ラタ」全景 (■・5) 二一三

一五四、コンジーベラム市郊外カイラサナータ堂 (■・5) 二一五

一五五、コンジーベラム市バイクンタ・ペルーマル堂 (■・5) 二一七

一五六、タンパコナムのマハコナム池 (■・5) 二一九

一五七、タンジューワ大堂 (■・5) 二二一

一五八、タンジューワ大堂廻廊内の隣伽 (■・5) 二二一

一五九、トリチノポリ市大岩 (■・5) 二二三

一六〇、トリチノポリ市郊外スリ・ランガム堂一部俯瞰 (■・5) 二二五

一六一、マツラ大堂ゴブラム (■・6) 二二七

一六二、マツラ大堂境内千柱堂西面 (■・6) 二二七

一六三、マツラ市郊外テッパ・クラム 其一 (■・6) 二二九

一六四、マツラ市郊外テッパ・クラム 其二 (■・6) 二二九

一六五、チンネベリ大堂ゴブラム脇石燈籠 (■・6) 二三一

一六六、チンネベリ大堂千柱堂内部 (■・6) 二三一

一六七、チンネベリ大堂内テッパ・クラム (■・6) 二三三

一六八、チンネベリ大堂内マンダバム一部 (■・6) 二三三

一六九、チルチルセツールのスブラマンヤ堂遠望 (■・6) 二三五

一七〇、ラメヌワラム大堂廻廊内部 (■・6) 二三七

一七一、アナラジャアラの無畏山塔遠望 其一 (■・6) 二三九

一八

一七二、アナラジャブラの無畏山塔遠望 其二 (一・六)……………二四一

一七三、アナラジャブラの無畏山塔遠望 其三 (一・六)……………二四一

一七四、アナラジャブラの無畏山塔全景 (一・六)……………二四二

一七五、アナラジャブラの祇園塔遠望 (一・六)……………二四五

一七六、アナラジャブラの祇園塔全景 (一・六)……………二四五

一七七、アオマシヤブラの廢佛蘭寺一部 (一・六)……………二四七

一七八、アオマシヤブラの廢佛蘭寺前半圓石部分 (一・六)……………二四九

一七九、アオマシヤブラの北方佛殿前半圓石部分 (一・六)……………二四九

一八〇、ミヒンタリレの僧坊址 (一・六)……………二五一

一八一、ボロンナルワのワタ・ダグと六重塔 其一 (一・六)……………二五三

一八二、ボロンナルワのワタ・ダグと六重塔 其二 (一・六)……………二五五

一八三、ボロンナルワの蓮花風呂全景 (一・六)……………二五七

一八四、ボロンナルワの蓮花風呂部分 (一・六)……………二五七

一八五、ボロンナルワのランコット塔遠望 (一・六)……………二五九

一八六、ボロンナルワのキリ塔 (一・六)……………二六一

印度甲谷他博物館

一八七、パールハット塔婆玉垣部分 其一 (V・三)……………二六三

一八八、パールハット塔婆玉垣部分 其二 (V・三)……………二六三

一八九、ランブルワ出土阿育王柱頭「獅子」 (V・三)……………二六五

一九〇、ランブルワ出土阿育王柱頭「牛」 (V・三)……………二六五

(以上一九〇圖)

Figure 1-190: A very faint diagram or illustration, likely related to the 'Figure 1-190' reference in the adjacent text.

Figure 1-190: A very faint diagram or illustration, likely related to the 'Figure 1-190' reference in the adjacent text.

解 說 一 一 九 〇
圖 版 一 一 九 〇

圖 版 と 解 說

一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇
一六二	一六三	一六四	一六五	一六六	一六七	一六八	一六九	一七〇	一七一	一七二	一七三	一七四	一七五	一七六	一七七	一七八	一七九	一八〇

一。ネバル國ビムツアの村。(昭和十一年三月二十二日)

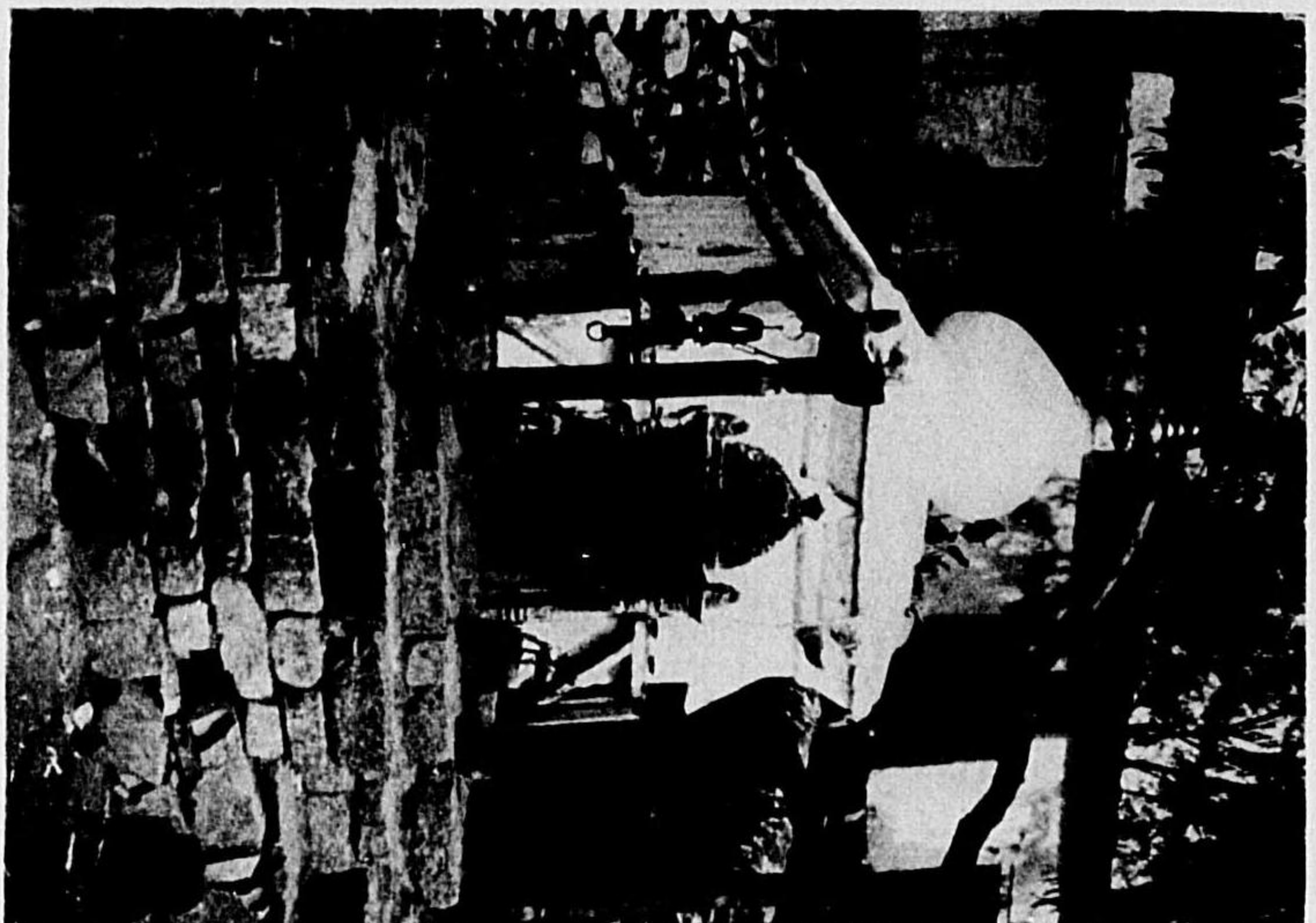
ネバル國有鐵道の終點なるアムクガンジ(Amlekhang)から、首都カトマンズへの順路の可なり繁華な部落なるビムツア(Bhimthar)迄は荷物自動車が汽車に連絡してゐる。ここからは車は通じない。此部落に圖の如き小祠がある。途中の部落にも此種の祠はあつたらうが、まるで氣がつかぬ。

方一間寶形造の小建築であるが、屋根は金銅を以て葺き、露盤に當るところに特有な鈴形の飾を置き、ここから正面軒口から垂下する如く、同じく金銅の長帯を下げ、正面の左右にも赤金銅の扉を樹つ。全體として形式は格段で、此國特有のものと考えられる。

二。ネバル國シカガリの小祠。(昭和十一年三月十四日)

ビムツアの部落の終る所は即チ(Chitwan)川で、馬にのるか、ダシナイ(一種の乗物)にのるか、又は徒渉すると、夫から先はのぼりばかりで、シカガリ(Shikhar)といふ小部落に達する。ここに税關と旅券の檢査所がある。此關所を突破しなければ、入國は不能である。

此所には國立の宿舎があるので、入國又は出國のものは一泊することができ、ここにも圖の如き小祠があるが、前例の様に屋根は寶形造ではなくて、寶珠型即菊花屋根(Bulbous Dome)になつてゐる。これはいふも純粹のネバル式ではなくて、回教建築の影響を受けたものではないかと思はれる。こればかりではなく他にも實例がある。鑑を吊つてある方式に注意せよ。



る。然らばどこかといふに、今のネパール國內、印度國境に最も近い
ビルガンジ (Birganj) の北方位に當るらしい。これが一説。

もう一つはブータンに境を接するカムループ縣の主邑なるゴーハチ
の北岸に Sal Kusa といふ村があるが、世尊の入涅槃地はここだ
といふのが一説。

洵に遺憾ながら、其方面の智識皆無で、批評も判断もしようがない。
併し現地をとにかくも涅槃の傳説地として 二五・二六 に寫眞をだし
ておいた。序ながら近年ビルマ人により再建されたといふ涅槃堂後
方の塔は、何とも拙いものを建てたので、筆者をして忌憚なく言は
せるなら、あんなものは建てない方が餘程いい。せめて専門家にで
も相談をして、たとひ舊塔より少し小さくても、夫は費用の關係で
仕方がないから、形だけはもう少し何とかできなかつたものか。

隅 弓。 「グウキウ」とよむ。正方形か正八角形の室に圓い形の平面を持
た半球形の屋根(即圓蓋 (Dome)) を架けるときは、四角なり八角
なりから圓に移るところには、曲面をもつた一種の三角形ができる。
其部分の名で、英語では Pendentive といふ。英和辭典等には「三
角穹窿」「隅折上」等の譯がつけてあるが、我我は「隅弓」といつて
ゐる。

サ

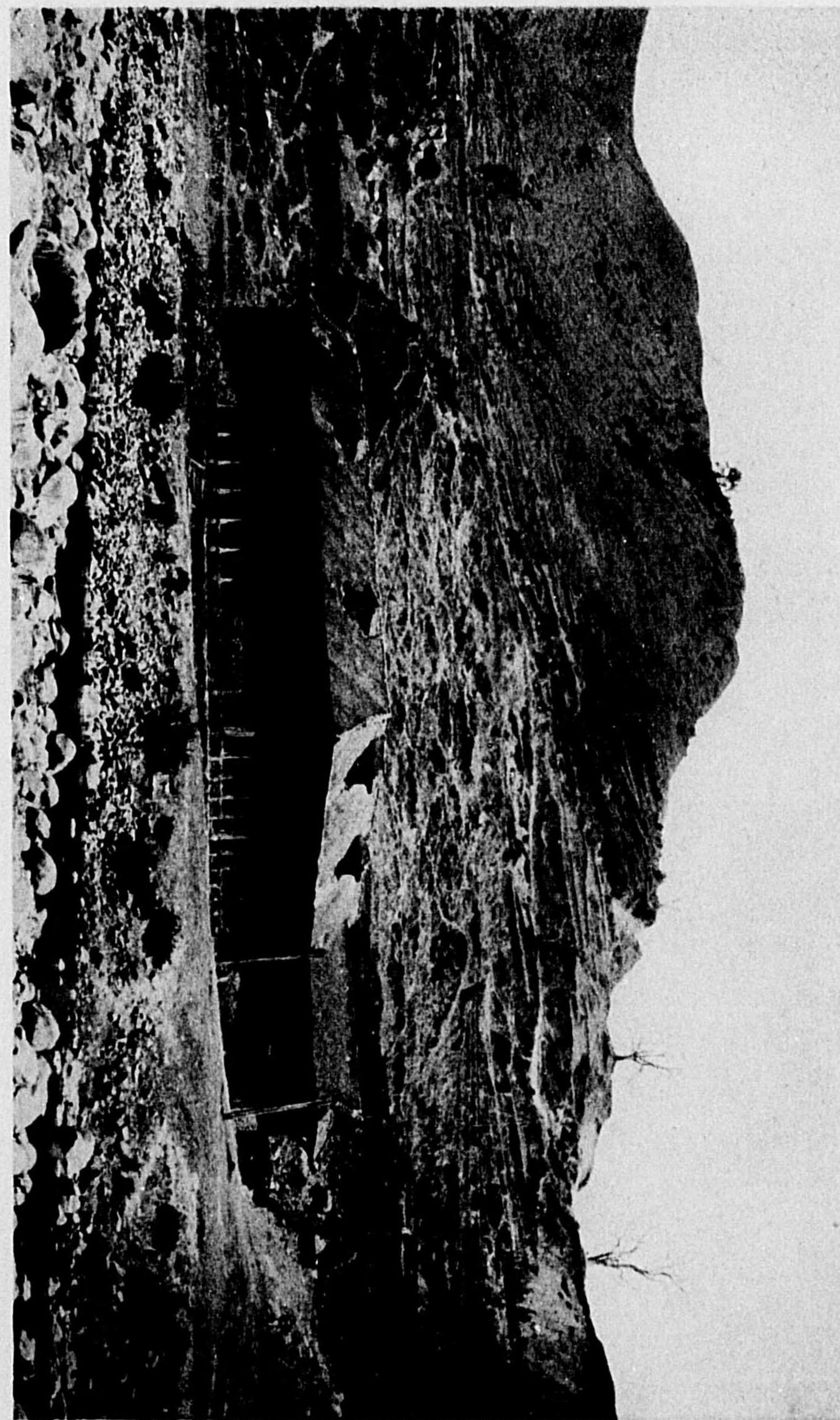
サンタ・マリア・デル・フィオーレ。 伊太利國フロレンス市の大會堂、Santa Maria del Fiore とかく
(A. D. 1296 (永仁四年)—1462 (長祿三年))。アルノルフォ・ヂ・カム
ビオ (Arnolfo di Cambio) の設計。後大分に擴張された。

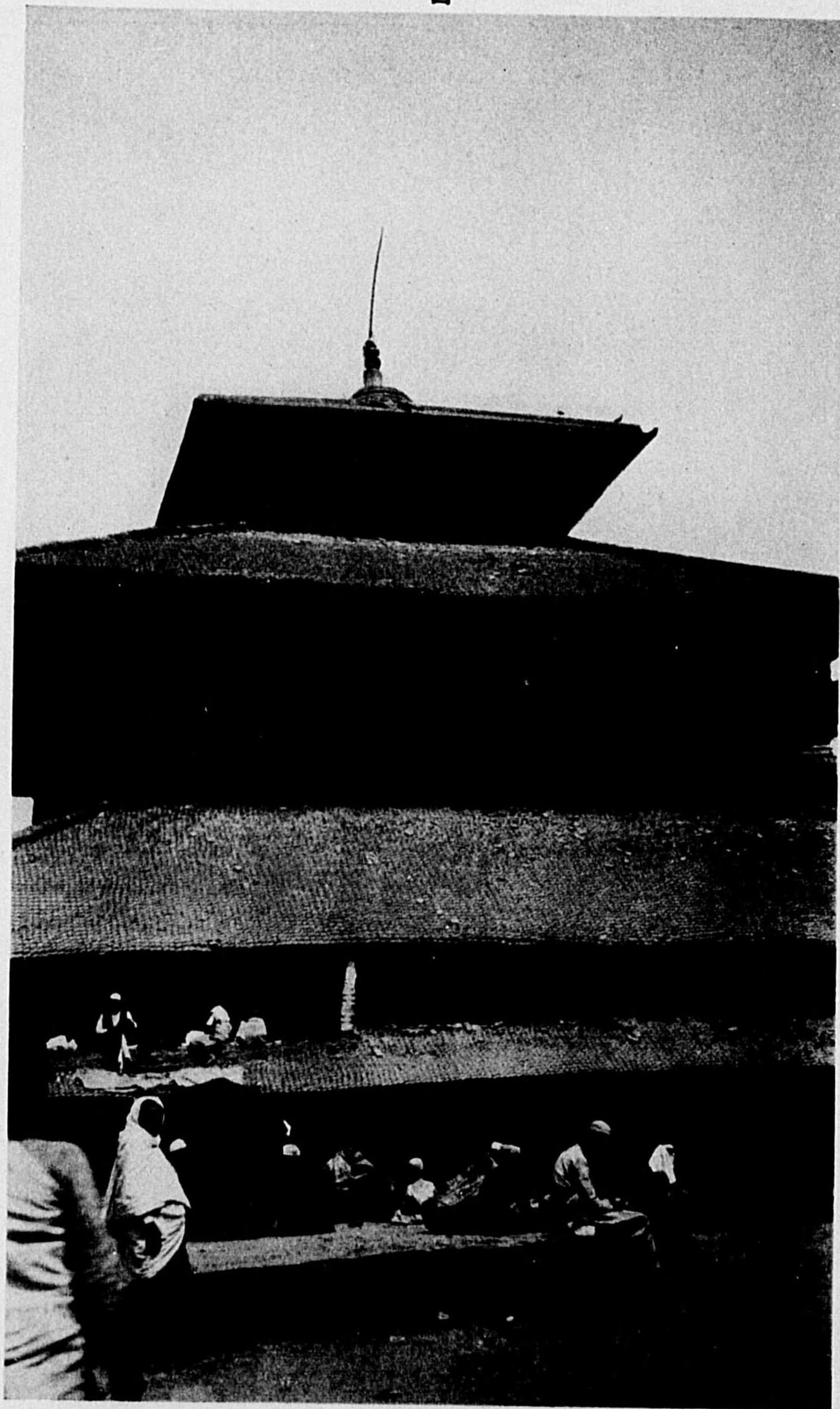
相 輪。 塔の最上部金屬製の部分。日本の塔は下から順に露盤・伏鉢・請花・
九輪・水烟・龍車・寶珠より成る。普通は輪數九であるので、相輪
を「九輪」といふが、九とは限らない。

標。 サツ。塔の心柱のこと。

シ

身 廊。 耶蘇會堂内の中央の廣間 (Nave)。





四

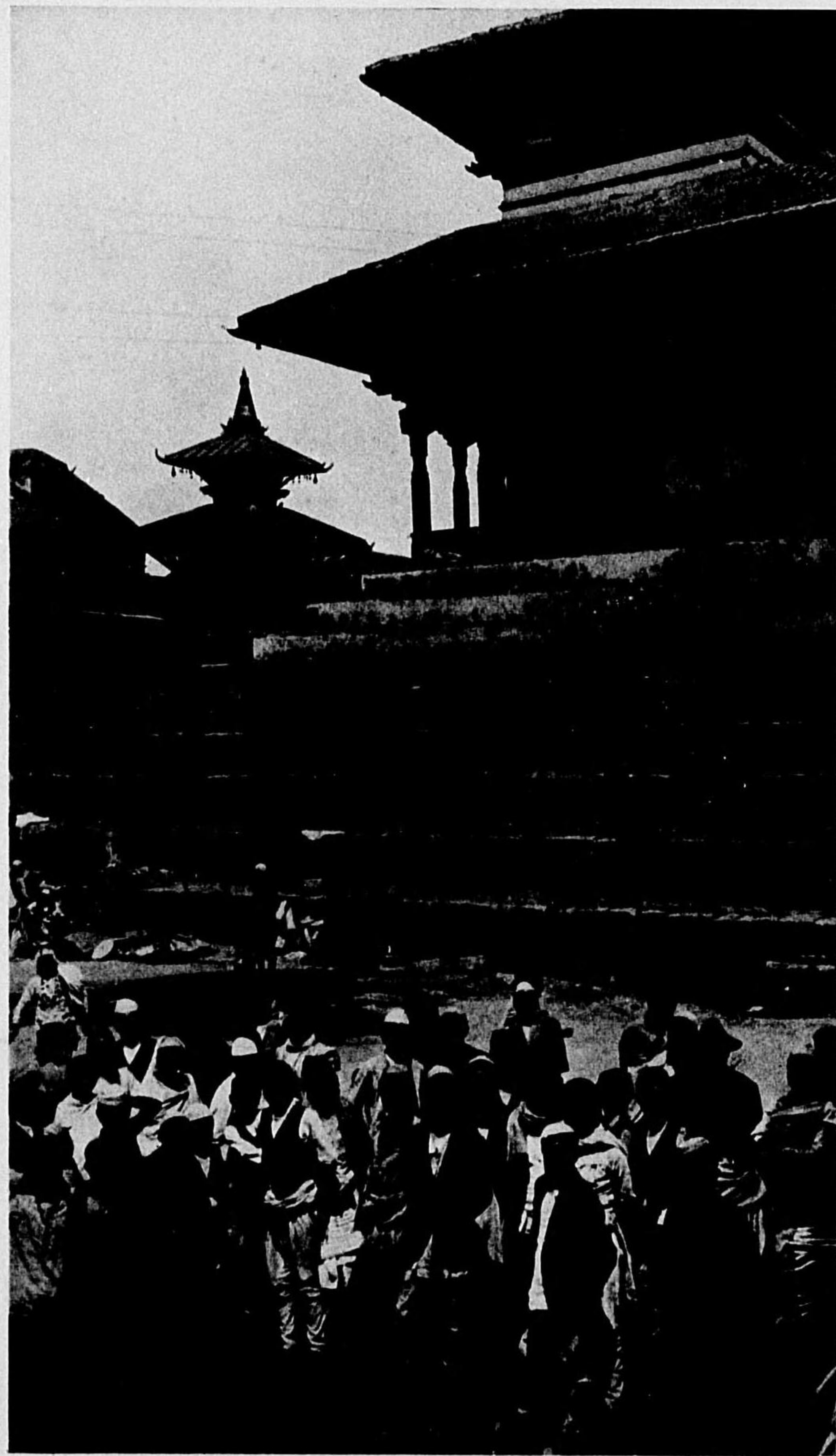
四。首都の名の元となつたと傳ふる木造家屋。

(昭和十一年三月十五日)

ネパル國の首都は「カトマンヅ」であるが、Katmandu, Khatmandu, Katmandoo 等と綴つてあるのでみると、どれでもいいのだらう。とにかくこの町は西紀七二四年(神龜元年)に建設されたのださうで、今此町に圖で見える様な非常に嵩高い、太た装屏付三重塔がある。外觀は頗る怪しげな風體だが、内部は甚だ陰氣で薄暗く、日光等は全く入らないさうである。往來に面した窓のある室でない限り、中庭でもなければ、夫は如何にも陰鬱であらう。雨でも降たら殆んど仕方があるまい。

此建築は西紀一五九六年(慶長元年)にラクミナ・シン・マル王(Raja Jachmina Sing Mal)の建立といふのだから、たとひ隨時隨所に修理が入つてゐるにしても、桃山末期だから相當なものである。さうして巡禮や行者の宿に用ひられてゐるといふことである。

「カトマンヅ」といふ名は此家からでたといつてゐる。つまり此装屏付三重塔は、一本の偉大なる樹木で建てたといふ。こんな傳説は日本にもある。恐らく世界各國にあるだらう。Kathといふのは木材といふ事で Mandu とは家屋とか祠堂とかいふ意で、Kath + Mandu = Katmandu だといふ。筆者がきいたのでは Kasta が木材で、Mandap が祠堂だから Kasta + Mandap = Katmandoo だ。

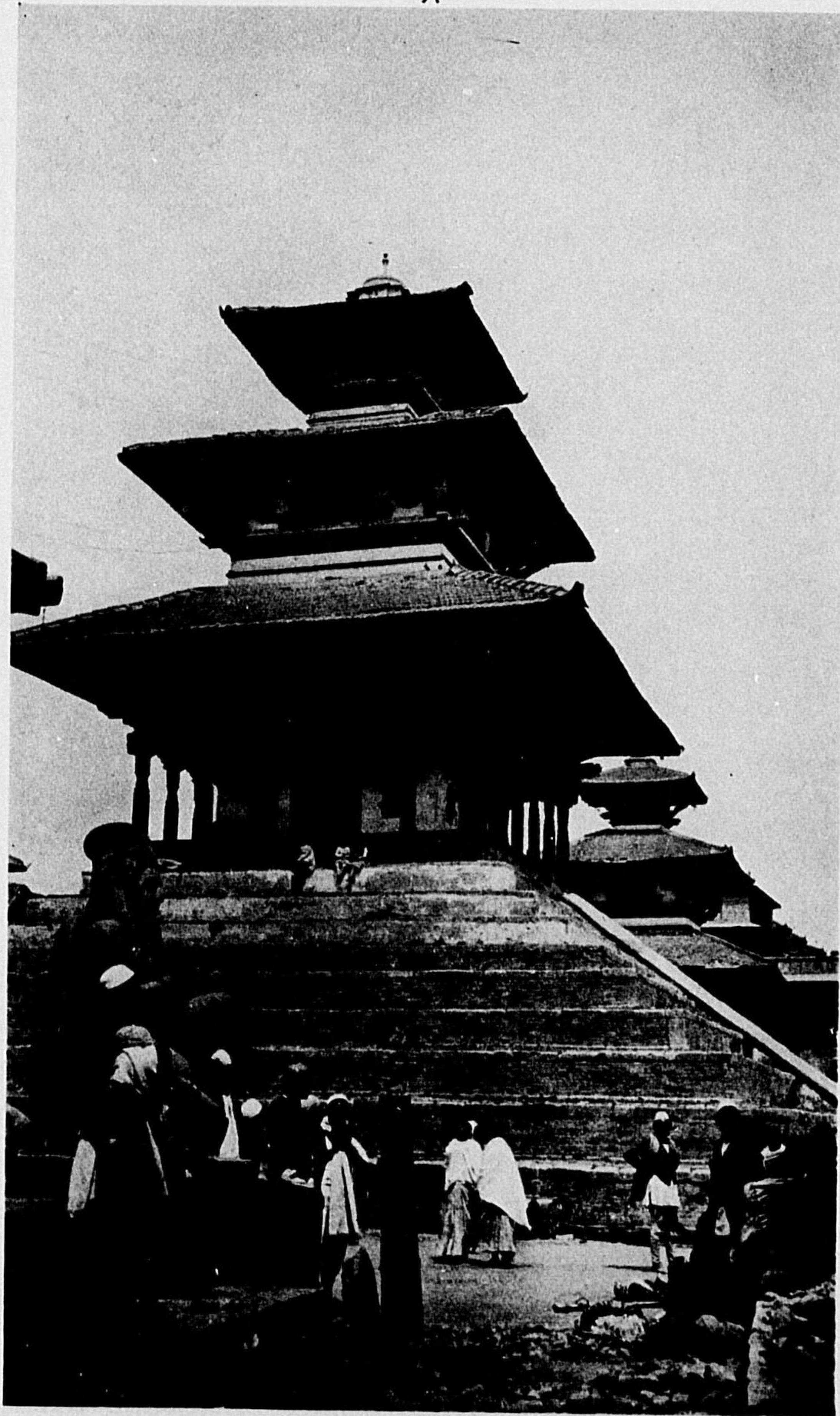


五。首都の廣場に建てる層塔の基壇。

(昭和十二年三月十七日)

首都の廣場には印度教の祠堂が多い。先般地震で大部分顛倒したので、今では随分淋しくなつたが、夫でも幸に倒潰の難を免れたのが相當にある。多くは二重又は三重で、特有な外觀を有し、基壇の最も多いのは十重——九重で下にもう一つ廣いのがあるから、夫を數へると十壇になる——少ないので三重だから、見たところは實に立派である。圖には丁度壇が九つ見えて居り、其上に初重が方五間の單列周柱式三重塔が建てる(六参照)。此基壇は私がネバル國でみた祠堂のうち最多のものであつた。

何にしる外國人の入國は非常に困難で、めつたに許されないから、住民は外國人の顔なにかめつたに見られない。それでも歐羅巴人は、英國の公使もゐるし、左程珍らしくもないかも知れないが、日本人等は全然知るまい。だから私が寫眞をとらうとしたら、子供は勿論、相當の年輩のものまでが、大して賢明とも思はれない顔面を連子の前に突きだしてしまつた。其結果は圖の通り。



六。マハツ・デパール。

(昭和十一年三月十五日)

此所の廣場には三重塔が三基竝んでゐる。これは其中央ので、マハツ・デパール(Maha du Dewal)と呼ぶ祠堂ださうだが、果して正しい名か否か、又綴りもこれでいいかどうか判然しない。併し既記の様に基壇の数はここに見へてゐるだけでも九つで、洵に立派である。堂は初重が方五間の單列周柱式で、軒桁を支へてゐる方杖も一面が六本だから、つまり方五間で、第二重は方三間、第三重は同じく方一間だから、各重遞減の割合は五・三・一の割合で比較的多く、従つて全體としては甚だ安定である。

此堂の手前、即ち圖の左端に屋根の一角が出てゐる三重塔は六壇、更に此堂の後方即右遠景に初重の一部竝に第二・第三重が寫してゐるのは三壇の上に建ててゐるから、この廣場は何といつても美しい。これ等の他に小型の塔もある。實に此種の塔はネパール國でなければ見られず、隣りのブータンのは、やはり三重にしても全然異なつた感がある。洵に特殊な珍しい建築である。



七. パシユパチ堂

(昭和十一年三月十六日)

カトマンヅ市を距る約三哩たとのことであるが、バグマチ (Bagmati) 川の右岸にパシユパチ (Pashupati, Pasupati, Pashpatti) といふ村があり、ここに印度教徒にとって最も神聖なパシユパチ即シバを祀った大堂がある。圖でみる如く二重塔に過ぎないが、屋根は全部金銅板を以て葺き、上層の頂上には中央に大、四隅に一個づつの小金鈴を置いてあるから、屋蓋全體は日光を受け燦然と輝き、如何にも美しい。其一方——圖の右方初重の軒に近く——にシバ神のしるしである三叉戟が立っている。

此圖は東方の高地から境内を俯瞰したところである。異教徒は境内へ足を踏み入れる事は愚か、門のあたりは近寄つてのぞく事さへ許されない。尤もそこにはそこがあるのかも知れないが、私の様な孤立無援のもの企及し得る限りではない。この高地は勿論境外だが、夫でさへ最初はグズグズ言つた位である。併し私はこれは何かほしいためと解したので、先方の望みを叶へてやり、私もここから寫眞をとり、又雙眼鏡で長時間のぞいておいた。

昔は境内の建物は、全部純ネバル式の頗る興趣に富んだものであった事は、古い木版圖により知る事ができる。今では半ば歐洲式のつまらぬものに建變つてゐるのは遺憾であるが、また止むを得ない。圖によると本堂即二重塔の前に門があり、此門を出ると數十級の石段があり、踊場の下の方の五級の石段を下りると石敷の通路が川縁にあり、更に石段七級で水邊に達する。これは即バグマチ川で、印度教徒が最も神聖と考へてゐる川だから、ここで水浴すれば最も身體はきよめられるし、又最後にはここでいきを引取れば極樂往生疑なしと信じてゐるのである。つまり神聖中の最神聖な聖域だから、異教徒をして一步たりとも入る事を許さないのは、尤もな事といへる。

此堂即二重塔の頂上にある金鈴、即ち露盤寶珠に當る所の金鈴は、中央に大形、四隅に小形の一個づつおいてある。其配置たるや、正に佛陀伽耶の大塔式(二八)である。この點に於いて、この印度教祠は佛教の影響を蒙つてゐると考へられなくもない。尤も四角な露盤の中央へ圓い平面の鈴を置けば、四隅は自然に三角形の空地ができるから、別に佛教の影響なんか受けないでも、自然にそこをうめるため、この様なことになり得るから、さう考へるのは當らないかも知れないが、想像は自由だから、考へてはいけない事はあるまい。尙ほこの境内には平面が圓形の三重塔がある。

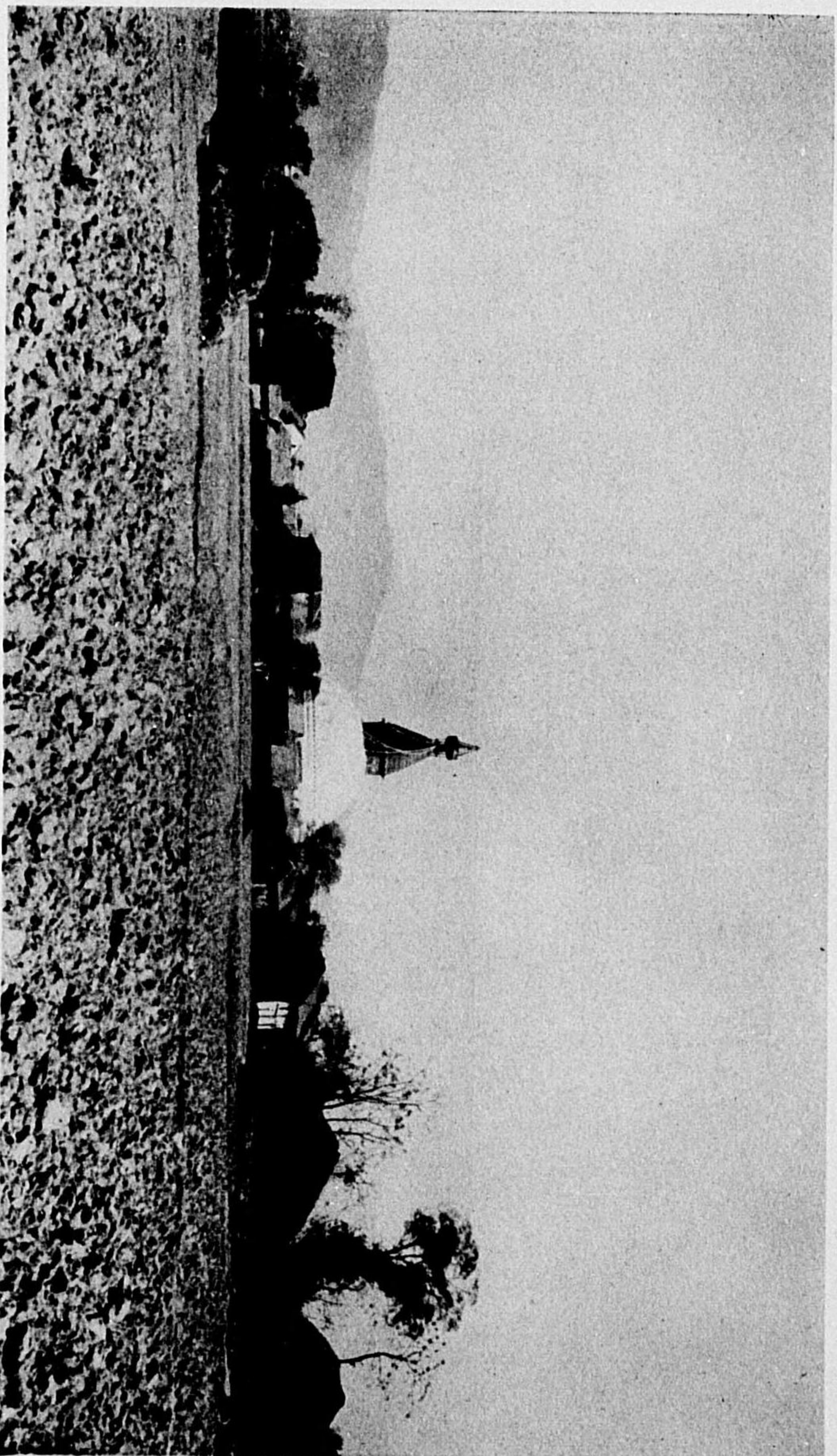
八、ポドナト寺大塔全景
(昭和十一年三月十七日)

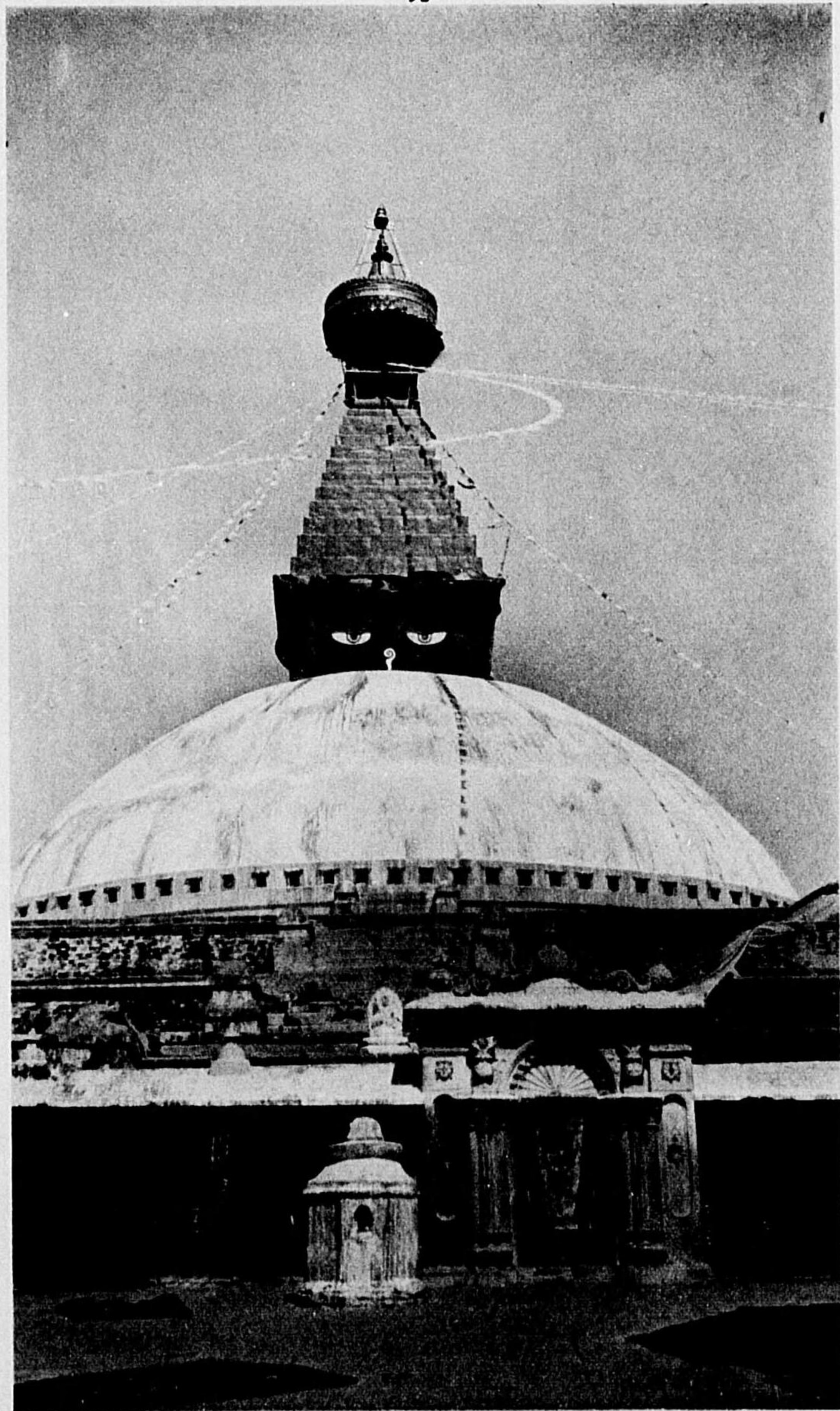
スワヤムフナト寺(一〇一三)の東方約三哩、バシバチ祠の長に當り、ポドナト(Bodhi)と呼ぶ大寺があり、大塔を中心に周圍に圓形に村落がある。ネバル國所在の最大にして最古の大寺といふ。此塔は第六世紀にマナブ(Manab)王の創立ともいひ、一に後世西藏國の僧カサ(カサ)の創建とも、或はまたチチイといふ老婆——此名をカンマとしたものもある——が、時の王に特別の許可を得て建立したもあり、ほんたうの事は判つてゐるのかも知れないが、何れが正しいのか私にははきりしてゐない。

白色の大依鉢の上には、相輪に當る段段になつてゐる方錐體があり、内部は何で造つてあるか知らないが、外は金銅で非常に美しく、綠色の樹木と、遠景の山と、青空と河に美しい對照をなしてゐる。周圍を取圍んでゐる村落の、土色の壁と藥肆の屋根ともよく調和し、何ともいへぬ美しさである。

此塔には十方諸佛・三世佛・菩薩等、總ておまつりがしてあるさうだから、參詣さればたしかに御利益はある筈である。殊に願をかければ富と子供とを授けてくださうといふ、だから僧俗共に西藏方面や印度方面からも、おまつりの時は參詣者が續々さうである。西藏人はマクダ・チルチン(Makda Chirin)又はヒルン・カソル・チルチン(Chirin Chirin)といふさうである。

河口慈海師の「西藏旅行記」(上巻第三九・四〇頁)には、此塔の名を「チ・ルン・カソル・チ・エチン・チエソ」とし、其名邦譯は「成すことを許すと命じてはれり」といふ意味だとある。其謂れ因縁はチチイと呼ぶ老婆が四人の子供と共に迦葉佛の遺骨を納めたさうだが、この大塔を建てる前に、老婆は時の王に大塔建立を願ひ出て、王の許可を得たので、五人がかりで大塔の基礎を築いた時、當時の大臣長者は驚異の眼を睜り、あの様な貧困な老婆があの様な大塔を建てるなら、自分等は大山の如きものを築かなければならぬ、これは一層中止させるがよからうと議一決したので、其由を王に申出たところ、彼の王は自分は既に老婆に「成すことを許すと命じてはれり」王者に一言はないから、今更何と申出ても取消すことなんか出来ないと仰せられた、だから許成命了之大塔」といふのださうな。バシバチ祠の大著ネバルにはカンマといふ女が建立を願ひ出て、王は「成すことを許すと命じてはれり」と答へたとある。





九。ボドナート寺大塔。

(昭和十一年三月十七日)

此寺の入口はカトマンヅ市の方から行くと、道路の左手にある。そこから入って塙の外を巡るのは少しも差支はないが、此圖に見えてゐるもう一つの入口から内部へは絶対に入れないのである。のぞく事もできない。だから塔の基壇及び下部は見る事は到底できない。村の民家の二階へでも上ったら稍、いいかも知れないが、夫も一旅行者の力には及ばない。

基壇は三重で高さ四十五尺といふ。塔は此三重の基壇上に建ててゐるので、其上は大伏鉢があるが、其直徑九十尺、高さは其半分の四十五尺。伏鉢の頂上には例の如く方形の平頭と、其上に方錐體の相輪がある。併し上の方は全部影になつて、いくら雙眼鏡でもどいても何も見えなかつた。其上は頗る手の込んだ天蓋で、更に其上は鈴型の飾に終つてゐる。平頭の四面には例の疑問符の様な鼻と、雙眼とを描いてゐるが、色彩は上眼瞼と紅彩の部分とに、青と薄紅色が用ひてあるだけで、眼球は白色で下三白、夫と鼻とを除いては全部金色燦爛として、其美なる事比ぶるものなく、水彩畫か油繪でもかけたならば、いくらか其佛を傳へることができると思はざるを得なかつた。此部分は西紀一八二五年(文政八年)から一八二六年(文政九年)にかけて、全く従前通り寸分違はず再興したさうである。

相輪の上、天蓋の下から八方に細い綱を張り、其綱に小旗をつけてゐるのが、風に吹かれて一種の風致を添えてゐる。私が見たのは此大塔だけであつたが、この綱を鎖とし、小旗の代りに小風鐸を用ふれば、我國多寶塔の屋蓋の飾りになる。多寶塔のあの屋蓋の飾りは、ことによつたら源は随分遠方にあるのではないだらうかと、この綱と小旗とを見て、ただだはんやりそんな事を考へてみたのである。とにかくこの裝飾は甚だ興味のあるものではないかと思はれる。

10. スワヤムプ丘全景。

(昭和十一年三月十六日)

カトマンヅ市の西北約二哩(一哩としたものもある)、ポドナートの西に當り低い丘がある。南方からは特立した圓錐形に見え、其頂上に大塔一基建つ。圖は西方からの眺めだから、丘は後方にも高地が続いてゐて、完全な圓錐にはなつてゐないが、夫でも何でも綠樹と背景の青空との間に、金色の相輪だけが見えてゐて、ポドナート寺のあたりとはまた別種の趣がある。前景は練兵場。

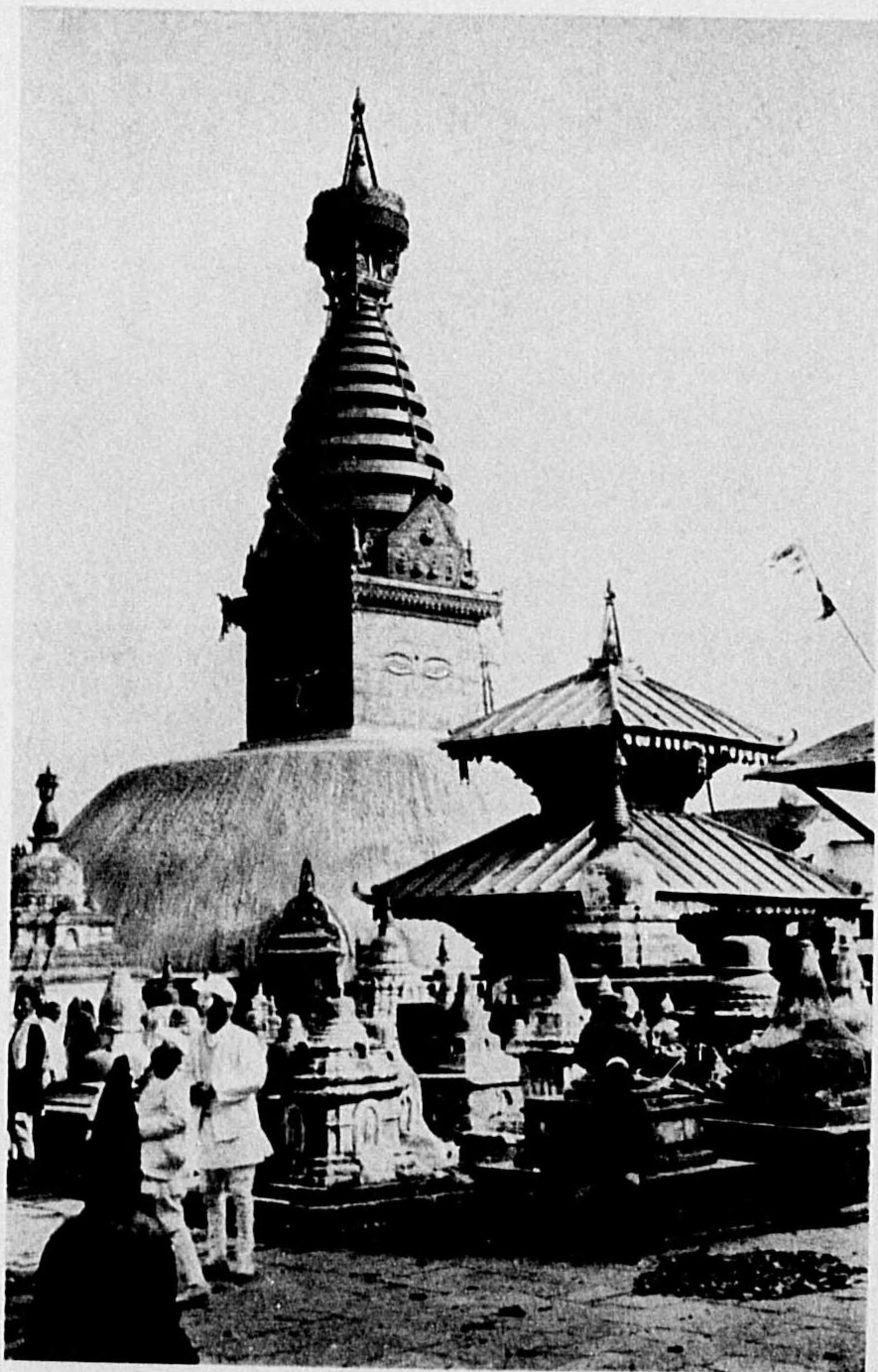


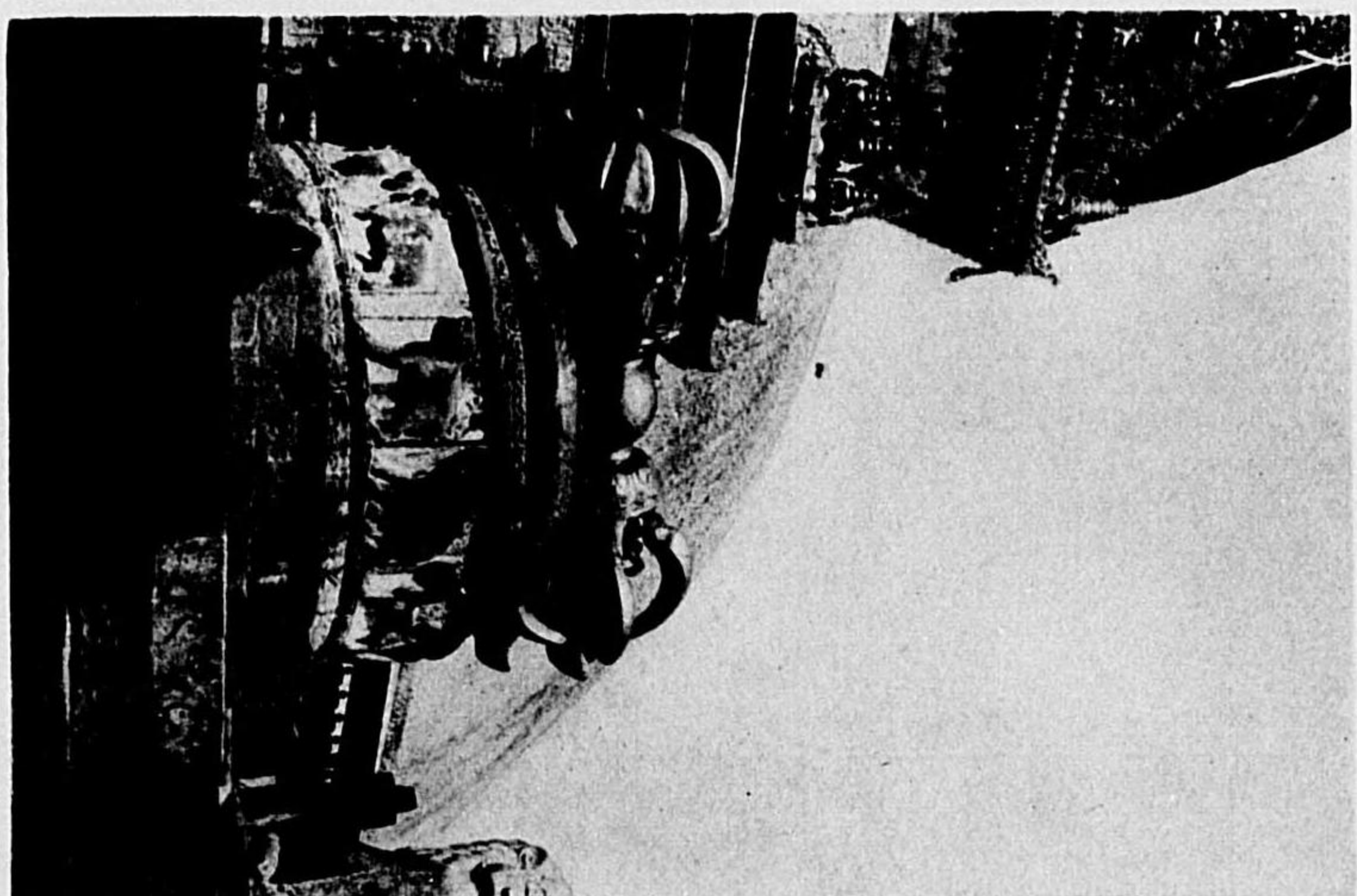
11. スワヤムプナート寺大塔全景。

(昭和十六年三月十六日)

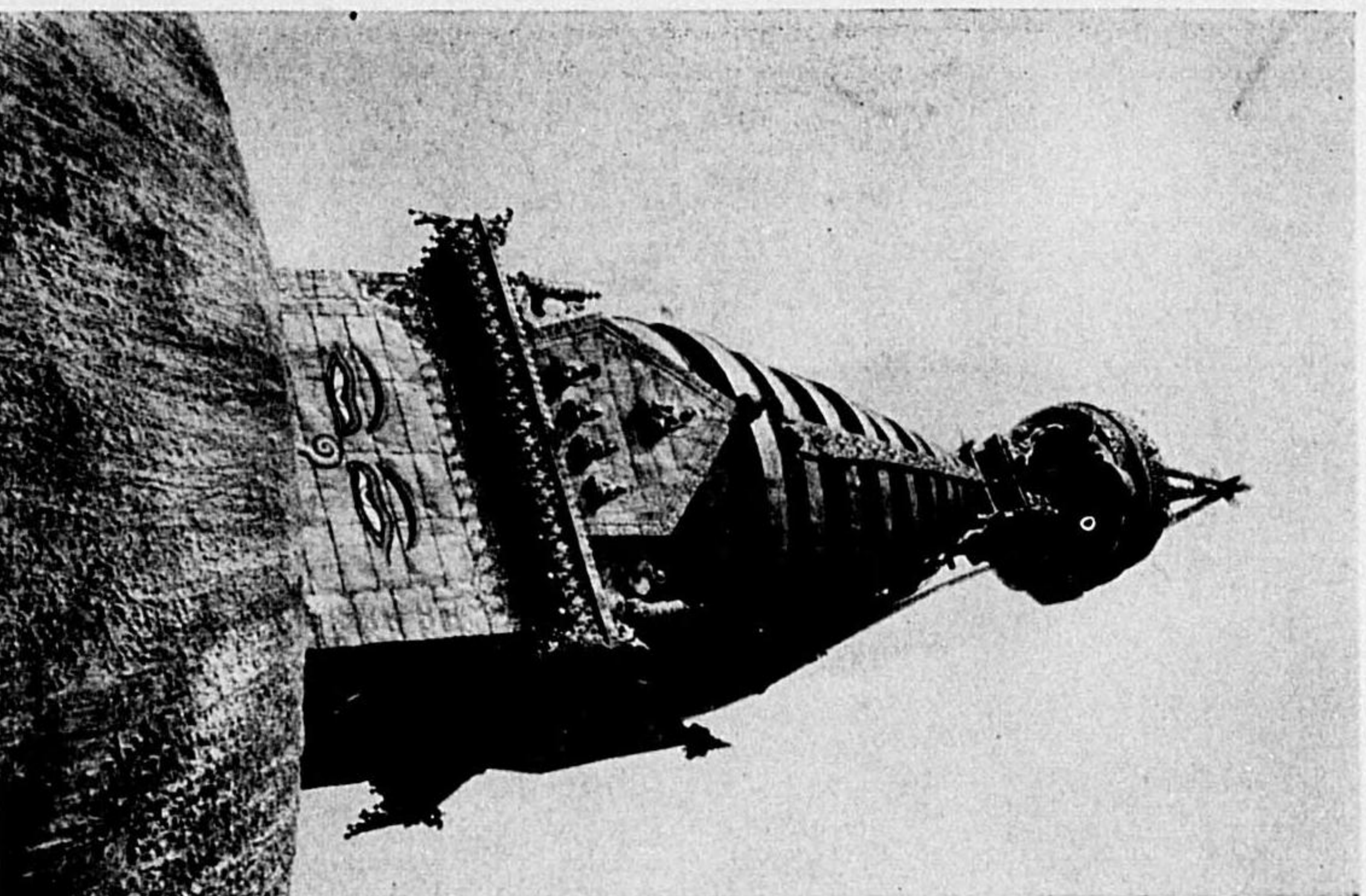
首都滞在中私は二度此大塔へ參詣したが、二度共正面即南方から此丘に近付かず、西方即上圖左端に見えてゐる家屋の前を通り、丘麓に達し、一度は右方の正面に廻り、石段四百(五百としたものもあり、自分では數へなかつたから、何れが真か何れも嘘か判然しない)を登らねばならぬが、石佛があつたり、或は奉獻小塔婆があつたりする。二度目の時はネバル國軍の中堅、勇敢なるグルカの兵隊が實彈射撃の演習をしてゐたので、あぶなく追歸されることを漸く助かつて裏から登つた。裏の方には石段はなく斜面で、途中に可なり大きな廢塔があつたり、正面とは全然別種の趣がある。

圖は西北端から大塔の全景の眺めである。全體としてはポドナートの大塔と殆んど同じであるが、平頭に五佛をつけた寶冠式の五角板が附屬してゐると、相輪が斜面の少し外に張り出してゐる圓錐體で、四方に金帯を垂れてゐるのが、彼塔と異なつてゐる點である。この相輪と上方の天蓋の状態とは充分注意して觀察する必要がある。といふのは此式の相輪はネバル以外の國にも存在してゐるからである。前景の二重塔は印度教祠なるべく、其他奉獻小塔婆が所狭き迄に建てられてゐる。スワヤムプナートとは普通 Swayambhunath と綴つてゐるが、又 Simbu としたのも Shambhunath としたのもある。





一一



一二

一一、スワヤムナト寺大塔正面の大金剛杵。

(昭和十一年三月二十日)
スワヤムナト寺へ参詣するためには、正面の石段數百を登るか、或は背面に巡つて斜面を登るのである。正面の石段は四百か五百か、とにかく澤山あるから、下から見上げた時は可なりうんざりするけれども、短て登つてみると宝生寺奥の院の御影堂へ参詣するよりは樂である。此石段を登りつめると、そこには圓い臺の上に、到底他所では見られない様な、偉大なる金色の五鈷杵がある。

圖でみる如く下に方形の臺があり、其上に上部を運轉で裝飾した圓形の平面を持つた座をのせ、更に大五鈷杵が其上にあるのである。興味のあるのは圓形座の周圍に薄肉に陽刻してある十二支である。ところが我々の考へでは「子」は正北に位置すべきであると思つてゐるのに、ここでは東にあるのが少しばかり氣になる。丁度右から左へ「戌亥・子・丑」と見え、「寅」の尾のあたりが左端に現はれてゐる。「子」がどう(左へ)

一二、スワヤムナト寺大塔の平頭と相輪。

(昭和十一年三月十六日)
「右より」も「子」らしく見えないのは、短かからべき前肢が、後肢と同じ位置達してゐるからで、圖に現はれてゐないが「卯」も亦然りである。つまり齧齒目の動物の特徴を無視してゐて頗る面白い彫刻である。臺上の大五鈷杵は長約六尺、いふ迄もなく世界第一。この左右に一對の石獅が正面を向いて置いてある。圖にはその一方だけが半分見えてゐる。

大塔は其後方に半分寫つてゐるが、四佛の一を安置してある龕が臺座の後方に、更に其龕の間、大塔の周圍に設けられたる「オム・マ・ニ・パドメ・ナム」の六字を鑿出し、圓形のもの、中心軸で回轉し得る様にして多數にある一部分が顔を出してゐる。平頭以上相輪頂上に至る迄の有様は一二に可なり精しく描かれておいた、既記の通り全部金銅板で覆ふである。尙ほ一二の金剛杵の前、最上の石段中央に1568と刻んであるが、西紀1646に當ると思ふ。此中心柱は1640に取替へたといふから、全部修理終了の年かも知れない。

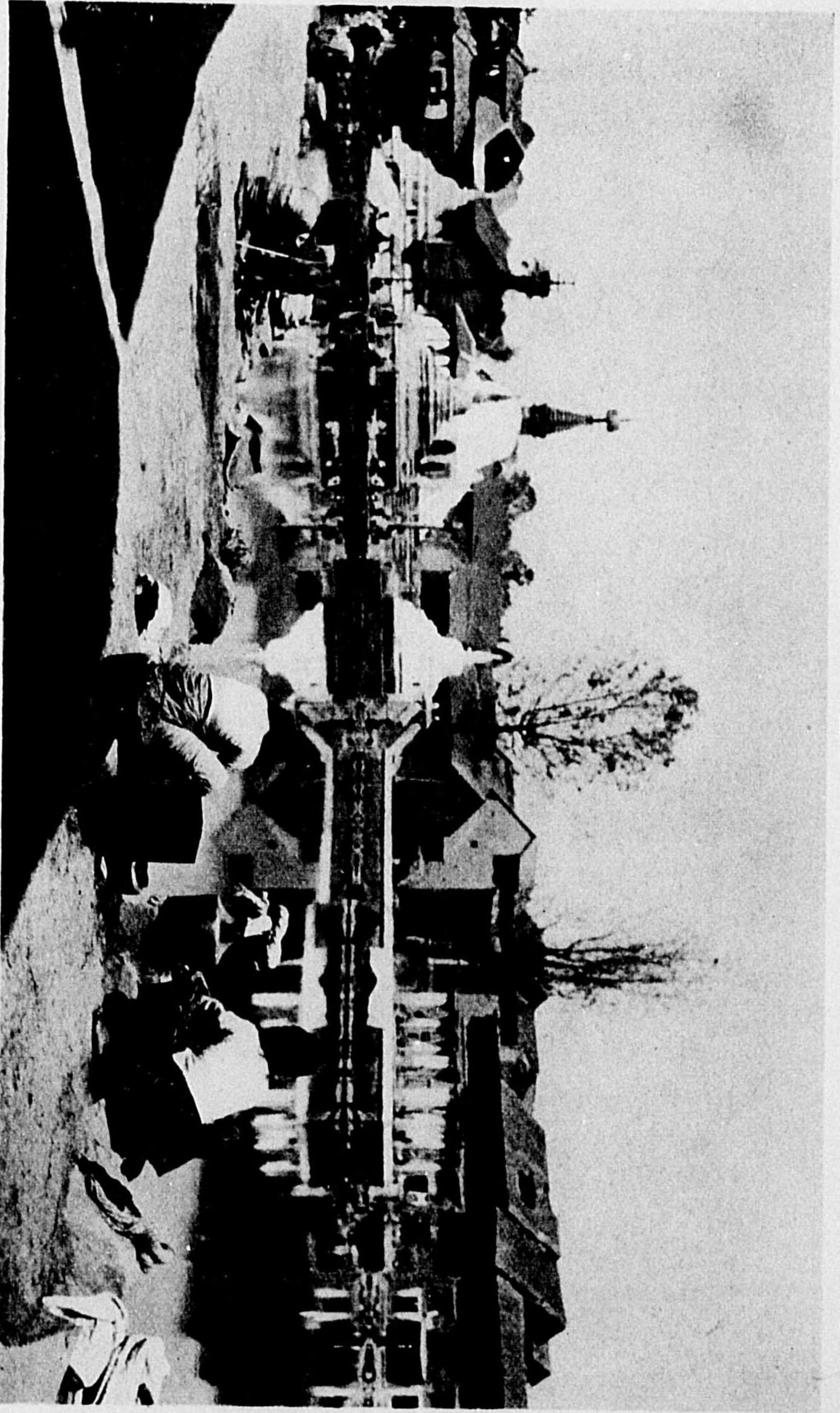
一四、パトナムの中央塔遺蹟。

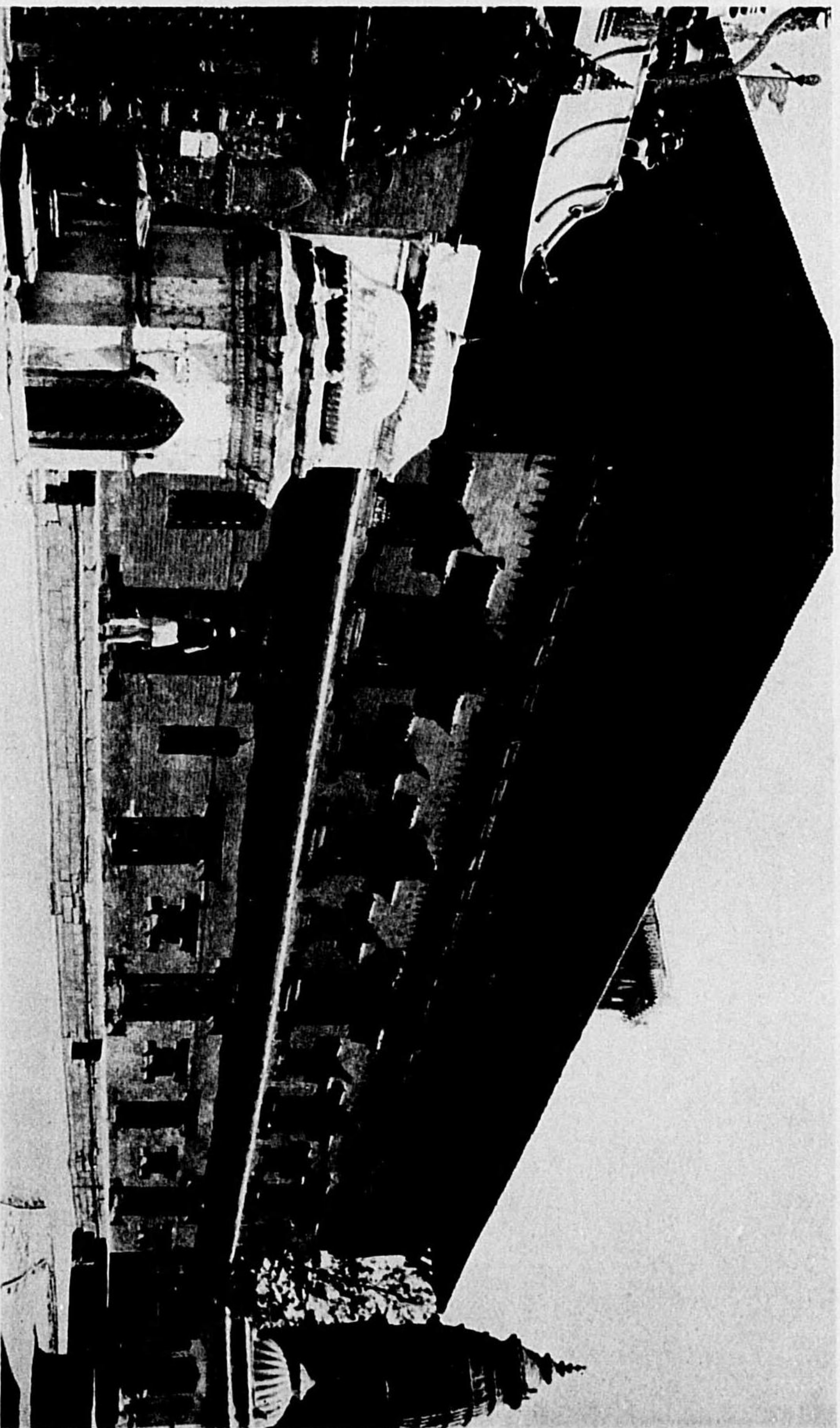
【昭和十一年三月二十日】
パトナム(Pnam)はカトマントと殆んど家続きといつてもいい位、間に建築からみれば大した價値があると思はれない門が、往來の真ん中にたつてゐるので境は明らかである。この町も首都を距る二哩とか三哩とか、何れがほんたうか知らない。一度歩いて往復したのだが、歩かしてくれなかつたから、馬車で見當がつかなかつた。

パトナム市には、其東西南北の四方と、市内とに五基の佛塔がある。其四方塔は何れも煉瓦を以て積み、土で被覆したもの、つまり謂はゆる土饅頭であるが、中央塔は市内の大池畔にあり、此圖の如く特殊の景觀を呈してゐる。此あたりの景色は西紀一八八六年(明治十九年)出版のモシル・ペンダル著「ネバル及び北印旅行記」に寫眞がでゐるので、前から大體の見當をつけてはゐるのだが、初めて見て無量の感に打たれた。此書によると大池は、パトナム市に於いて、初めは今日に於いても、尙ほ割合に原形を保つてゐる、といふ

様なことが書いてある。
大池の水は、少しばかり濁つてゐる鼠色をしてゐるが、此で、これで美しく澄んでゐる、伏鉢は純白に、相輪は金色で、空は青く天候はよく、池に申分ない状態である。事があり、殊に池の周圍は洗濯女で賑はつてゐる。一層あたりの風物とよく調和がとれてゐた。ペンダルの寫眞にも洗濯女が寫つてゐるから面白い。恐らく先祖代、住民の女はここで洗濯をしてゐるのであらう。

池畔の佛塔は、親子共進に池に寫つてゐるから、他に見られない特殊の景觀である。寫眞の左端に印度教祠の様な外觀を有し、初重の四隅に一本づつの柱のたてゝあるが、眞の左端に印度教祠の様な外觀を有し、初重の四隅に一本づつの柱のたてゝあるが、眞の左端に印度教祠がたてゝある。寫眞にはでなかつたが、右方には三重塔の印度教祠がたてゝある。さうするといふとこの親子佛塔は、ネバル特殊の層塔式建築の間に挟まれてゐる現狀である。





— 15 —

二五. ベイトガオン王宮正面。

(昭和十六年三月十九日)

京都を東微南に距る約九哩——地圖上で眞直に測ると七哩半位になるが、書物には九哩とあるし、實際は曲りくねつてゐるから其位にならう——にベイトガオン(Beitragan)といふ町がある。この近所では首都に亞ぐ大きな町だが、この王宮前の廣場には、震災前幾多の宗教建築があり、王者の威を四方に示すに充分であつた。私は此廣場の建築見學を主たる目的とし、大なる期待を以て出かけたが、大部分は無慘に倒潰したと見え、あるべき管のなかつたり、又幸に残つたものでも、屋根の瓦が落ちて了たせいか、臨時に生木板で雨仕舞をしてゐた様な状態であつた。

併し王宮は直に修理をしたか、或は被害がなかつたか、立派な正面を廣場に向けてゐた。圖の左端に半分寫つてゐるのは、有名な出入口の金門で、扉・框・上部の裝飾、屋根及び屋上の附屬裝飾等は全部金色、洵に善美を盡したもので、日光に照されて文字通り金色に光り輝き、正視する事ができない位だが、細部に興味のあるところはあるにしても、全體としては左程の感興はなかつた。

寧ろ私はここに其全景を現はしてゐる様な三階建の大建築に感心をした。窓も第一階のは小さく、出入口も簡單であるが、出入口五個所の内、中央のもの最大に、兩端のは稍々小さく、其間の二つを最小として變化をつけてある。二階の窓も亦第一階の出入口と窓との比を保ち、而も細縁には此國獨特の飾りをつけてあるので、何れも階下の開口と中心線が一致してゐる。此大窓は中央のは最大に、左右のものは最少に、兩端のものはその中間の大きさとし、其間には同大の小窓を配してある。第三階は更に多くの窓を並べ、軒を大膽に突出せしめ、垂木・持送り等、總てネバル國特有の建築様式を遺憾なく發揮してゐる。

要するに全體の意匠は、伊太利國に於ける文藝復興期の建築、例へばフロレンスのパラツォ・リッカルヂ、羅馬のパラツォ・フッルネー等と思はせるもので、而も正面取扱の意匠は寧ろ彼に過ぎるものといつても、決して濫美でないと思はせる。此様な建築をネバル國におくのは惜しい様な気がする。



一六。パトガオン市の五重塔。

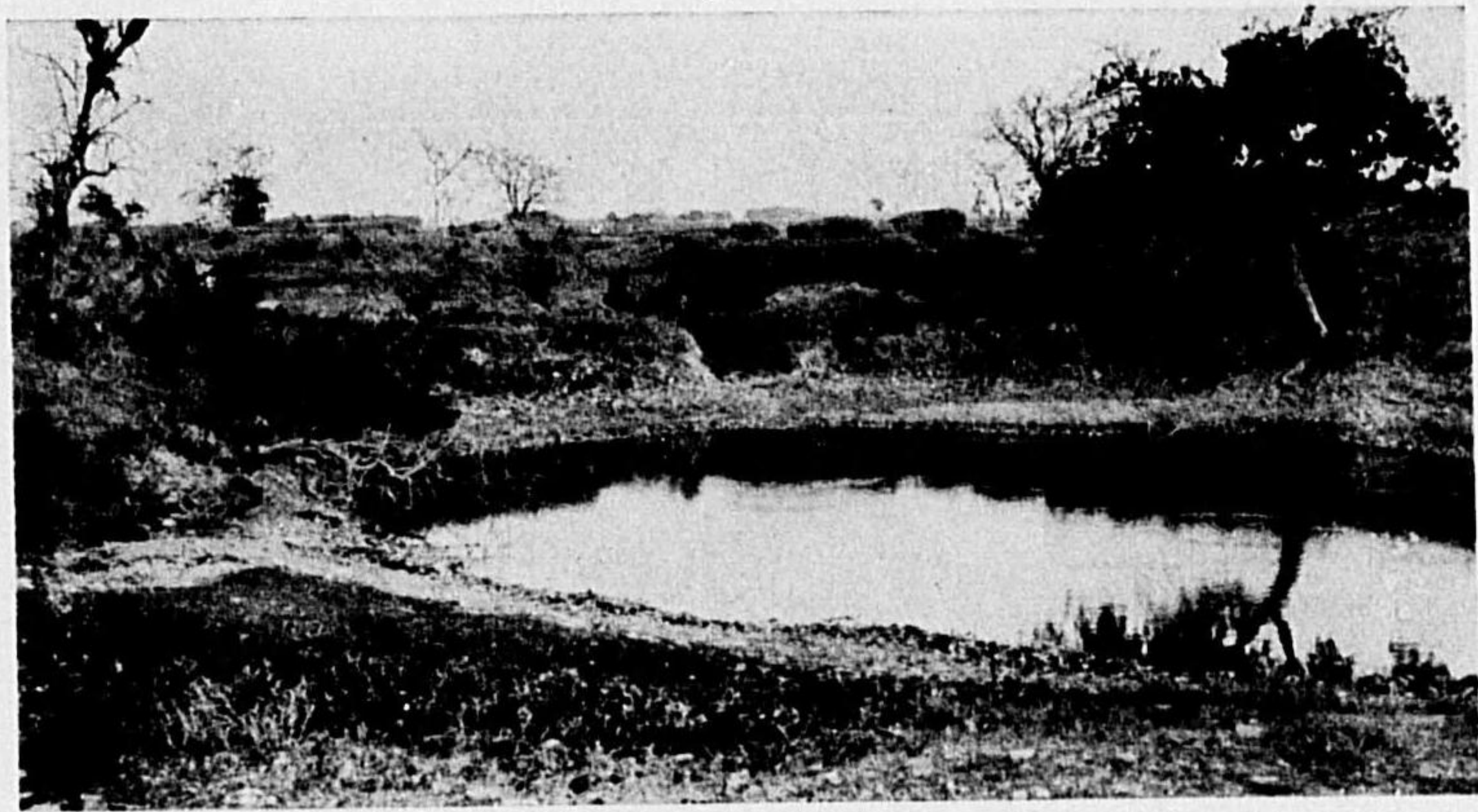
(昭和十一年三月十九日)

首都に到着後、毎日の様に五重塔を探したが、カトマンヅには初めからなかったのか、或は震災で倒潰したか、遂に一つも見出さず、更にベンダルの著書の挿繪により、パータン市のクムベスワラ堂をたづねたが、此は痕跡のない迄に、徹底的に壊れて了つてゐた。殆んど絶望に近かつたとき、パトガオン市に残つてゐたのは、ほんたうに有難い幸であつた。ファーガッソンには「デビ・パリーニー・テムブル」(Devī Bhāvanī Temple)としてあり、又「ニアトボラ・デパール」(Niyatpola Devāl)と書いた本もあるが、實は「ニ・ア・ト・ボ・ラ」と發音するの、「ニ・ア・ト・ボ・ラ」といふのかよく判らずにしました。

漸くの事で見付けた五重塔は、廣場に面してゐるが、取片付中で木材がばいに基壇上に積んであり、掘出した土で遠方からは下の方が隠れてしまつたが、五重基壇——そのうち四重が圖に現はれてゐる——上に建てる五重塔で、其堂堂たる英姿を仰いた時は、實に多年の希望が叶ひ、幸運を感謝せずには居られなかつた。

初重は例の如く單列周柱式で方五間、其上は遞減の割合の比較的多い構架が四重積み重ねてある。さうして最上部は、これも例により例の如く金鈴に終つてゐる。これで若し相輪があつたらどうであらうか。たとひあつたとしても、極めて短いものと想像するのが穩當と考へる。果して然りとせば、差向き朝鮮忠北の大本山法住寺捌相殿の様なものになるであらう。勿論細かいところでは異なつてはゐるが、大體に於いては同一意匠といへるものである。

五重塔基壇の最下壇、石階の兩脇には人物がおいてある。一人はジャヤ・マラ、一人はフワタといひ、何れも十人力の勇士ださうな。其上壇の象は十倍の力があり、其上の獅子、更に其上の迦樓羅は夫夫十倍と十倍の十倍の力があり、最上に位置せる舟型の後光を背負つてゐるのは10⁵即十萬人力の神様の像だといふ。異教徒だとの理由で一段も登つてはいけないといふのを、頼み込んで象の所迄行けたが、そこから雙眼鏡で覗いても、初重軒の邊ははゞり見えなかつた。此塔西紀一七〇三年(元祿十六年)の建立といふ。



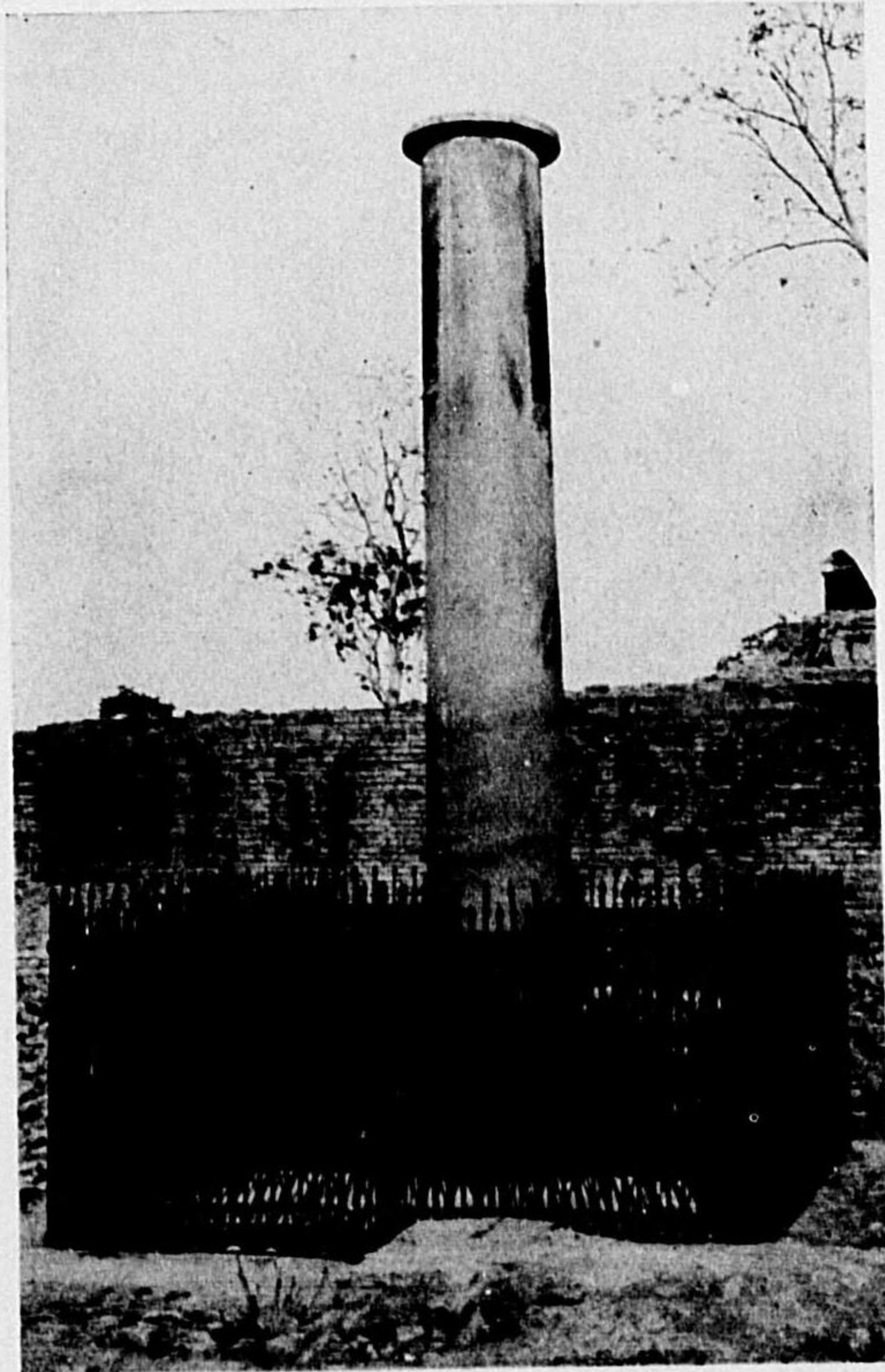
一七

一七・嵐毗尼園の「釋種浴池」と傳ふる池。

(昭和十一年三月二十六日)

ルンビニ (Lumbini) 園即世尊誕生地はネパールの一部で、現在はルンミンディ (Rumindai) と呼び、印度の國境から遠くない。道路や橋梁が完全なら、國境の驛ノータンワ (Nautanwa) から、ともかくも自動車と名のついでる車で往復ができるところ迄漕ぎつけてゐる。ルンミン・デイとはルンミン・デビ (ルンビニ皇后) の轉訛だといふことである。

先年來、世尊降誕地へ阿育王が建てたといふ石柱の周圍に繁茂せる樹木を伐り、その邊を美しく手入れをなし、發掘をしたり建築の修理をしたり、土地の保存と顯彰とに努めてゐるが、序に此地に於いて摩耶夫人が靜養中、水浴をされたと傳ふる蓮池も、大分綺麗にした様だが、先年は未だ水が少しばかり濁つてゐた。



一八

一八・嵐毗尼園の阿育王柱殘闕。

(昭和十一年三月二十六日)

ルンビニ園の正しい位置が現在の所に發見されたのは、さう古い事ではない。さうして世尊降誕の地はここと決してから、クシナガラも今の所では不都合だといふ事になつて來た。其事は後に記すとして、ルンビニ園は嵐毗尼・藍毗尼・臘伐尼・論民等、いろいろの漢字が當嵌めてある。此頃は假名文字でかくのが最もいいかも知れない。

阿育王柱は途中で折れてはゐるが、周圍に生ひ茂つてゐた樹木を伐採し、附近を整理し、誰にでも見える様に世に出したのは結構だし、保護のため鐵柵もまた止むを得ないが、西洋式の何とも殺風景なものにしたのは氣が知れない。一層のことサンチあたりの大塔の石玉垣でも摸した方が、遙に調和したであらう。我國内地外地の國寶建築の周りの鐵柵同様困りものの隨一である。



一九。ラクサウルの農家共一。(昭和十一年三月二十三日)
 ラクサウル(Raxaulu)といふ村は、印度でもずっと北の方、ネバル國との境にある村落で、B. & N. W. R. (Ben gal & North-Western Ry.)の一驛。この村にはネバル國有鐵道の起點で、同名のラクサウル驛があり、二十五哩の輕鐵がアムレクカンジ迄通じてゐる。

ネバル入國の時は夕方に着いて、翌朝早く出發したから其様なひまはなかつたが、出國の時は可なりつかれてゐたし、休養の必要があつたので、ラクサウル驛に近き國立宿舎なるバンガローに一日滞在し、村の農家を見て歩いた。其時とつた寫眞のうち二枚を参考のため掲げておく事にした。

家は大概四柱造で藁葺だが、稀に切妻造もある。入つて見た次第ではなく、外からの視察だから誤つてゐるかも知れないが、殆んど總て長方形の平面で、窓はなく、出入口は一個所あるだけだから、この簡單至極の平面からの立面は、複雑にしようと思つても、出来る筈(下へ)

二〇。ラクサウルの農家共三。(昭和十一年三月二十三日)
 (上より)はない。だから屋根も自然四注切妻で片附いて了ふ。壁は頗る粗末で褐色の土を以て中塗程度。その壁面へ墨・白・褐色(代赭色即インデヤン・レッド)で至極原始的の繪を描いたり、時には一面に文字(デバナガリだらうが、私には一つも讀めないから判らない、併し立派に裝飾になつてゐる)を書いたりしてある。甚だ稚拙ではあるが、捨て難い趣がある。

一九は此日私が此地方でみたうち、最も裝飾の多い農家の一で、前記の三色を以て幾何模様と馬に乗つてゐる人物とが三個所に描いてある。二〇は側面に大きな樹木と大きな鳥とを描き、鳥の背に人がのつてゐる。馬でも樹木でも、殊に莫大な鳥へ人が乗つてゐるの等は、何れも主人所有の財産を現はしてゐるのではないだらうか。

此種の裝飾を施した民家は、東西ほどの位廣がつてゐるかも知れないが、南北のうち少なくとも北の方はラクサウルから十三哩のバルウニブール(ネバル領)迄確にあつた。



二一・祇園精舎址 其一。

(昭和十一年三月二十八日)

祇園精舎址なるサト・マヘト (Sath-Maheth) を見學するならバルラムプール (Balrampur) の客館へ泊り、そこから行くのが最もよろしい。といふのは舍衛城址と共にバルラムプールの西方約十哩にあるし、客館は日を期して前以て支配人宛に依頼状さへ出しておけば、とめてくれることは確かだと聞いてゐるので、其通り實行した。

論民園に參詣してからゴラクプール (Gorakhpur) 驛に引返し、汽車でバルラムプール驛に下車、依頼状の効果は靚面で、州立の客館から馬車二臺と世話役の老英人とが驛へ來てゐた。そこで直に宿舎へ急いだが、夫はとても立派な西洋館で、着いた時はまるで貴族の様な待遇であつた。二十八日は朝から自動車の用意ができたとの事で、晝の辨當も飲料も積み、客館から案内役として事務員二人、夫に連れてゐた従僕と合せて四人で遺址見學に出かけた。

「祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり」といふ「平家物語」開卷第一の句は、頗る人口に膾炙してゐるが、其鐘も未だ發見されてゐない様だし、鐘樓もあつたかなかつたか、無く(下)

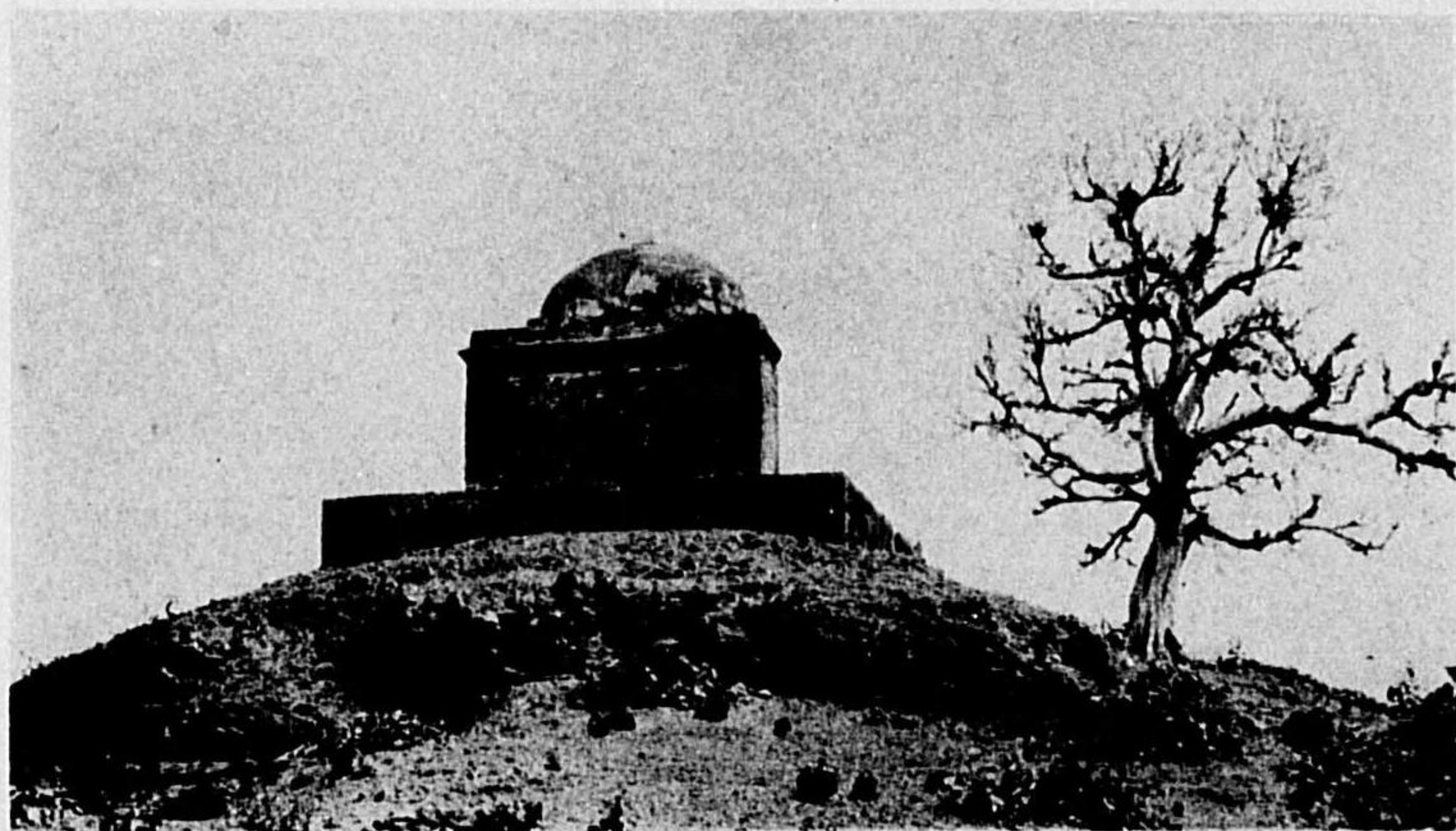


二二・同 其二

(昭和十一年三月二十八日)

(上より)て梓の様なものに吊つてあつたなら勿論、あつたとしても其址も判つてゐないらしいが、併し僧坊其他諸建築の址は、實によく發掘が行届いてゐる。實際驚くべく多くの建築のあとが、ここへ行けば見られるので、其昔如何に隆盛であつたかが偲ばれるのである。

二一・二二共、大規模の僧坊であつたと思はれる。ここは新に發掘のできた那爛陀精舎の建物とよく似てゐる。兩圖共中央に大中庭がある、上圖の場合はさうなつてゐないが、下圖では一面に石敷になつてゐる。坊さんの室は其周圍にあり、一室毎に隣室とは厚い煉瓦壁を以て分れてゐる。時には入口のない室も見えてゐるが、これは其位置が判らなかつたので、發掘後この様にしておいたものと思はれる。又中庭には井戸を掘り、下水の流れるための水はけ口を設ける等、どこ迄も周到の注意が拂はれてゐたことがよく判る。



二三・舍衛城址のソブナート・テムブル

(昭和十一年三月二十八日)

普通一般にサヘト・マヘトといへば祇園精舎の遺址を指すのであるが、實はサヘトが夫で、マヘトの方は舍衛城の址になって居り、兩者の間は少しばかり離れてゐる。サヘトの方は午前中で終り、午後はマヘトの方へ向つた。丁度其間は歩いてざつと十五分位であつた。

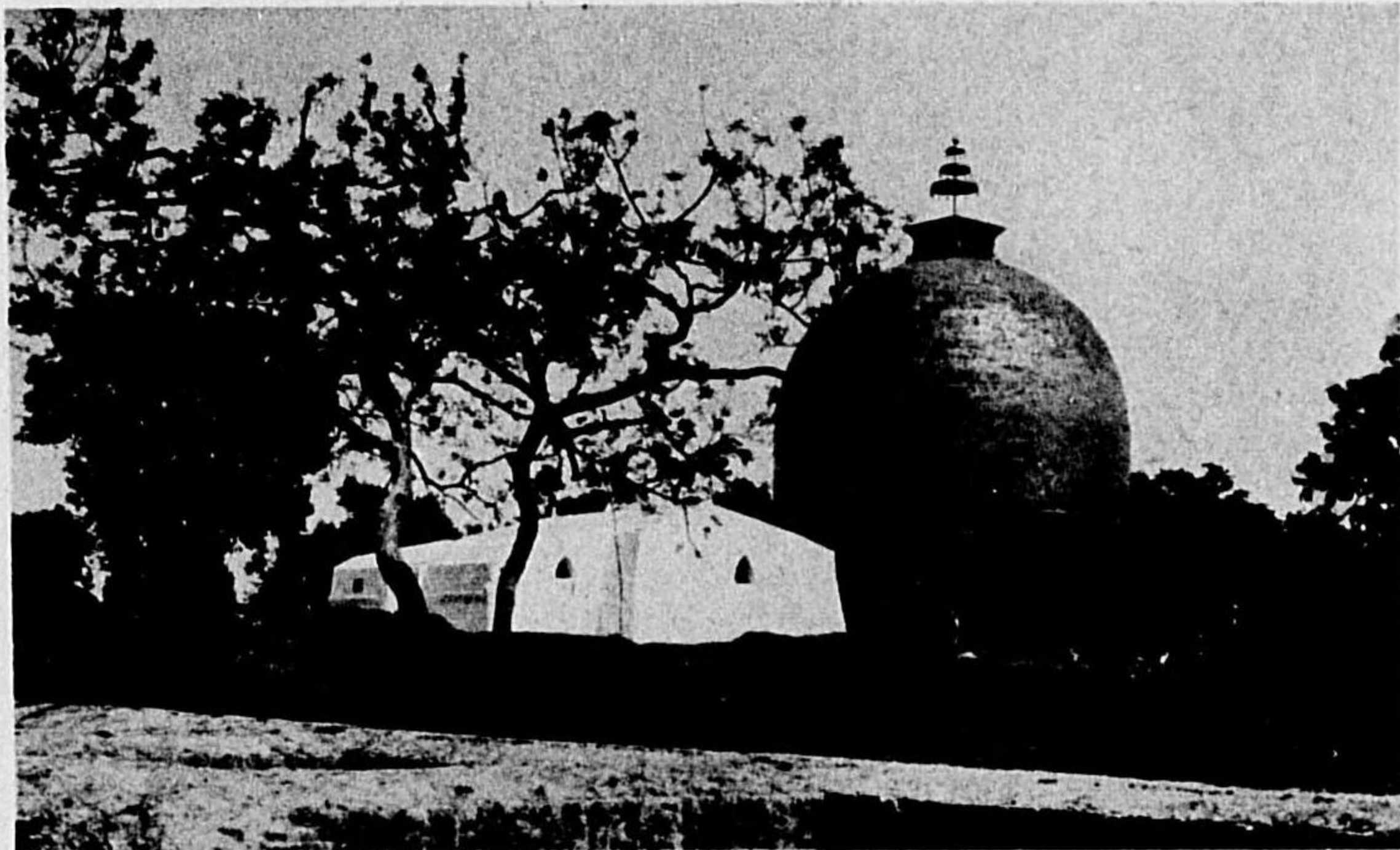
舍衛城の廢墟は大體三ヶ所發掘ができてゐた。遺址に入ると先づ第一に小丘の様なところがあつり、其上に圓屋根を頂いた半分壊れた方形の平面の建物がある。これはバータン時代の回教墓の殘骸で、奥壁には聖籠が設けてある。今ではソブナート堂(Sobhnaht Temple)と呼んでゐる。併し其基礎をなせる煉瓦壁には古い建物の煉瓦を一部に用ひてゐる。これは著伊那教の殿堂の遺跡の上に後に建てたものである。

二四・舍衛城廢墟の一。

(昭和十一年三月二十八日)

前記の小丘阜から前方にもう一つ廢墟が見えたので、次にそこへ行つたところ、未だ大分下の方は埋まつてゐるらしく、高さ僅に三尺足らずの三角形の開口があつた。兩方から煉瓦壁を積みだして、遂に上で相會せしめた原始的の出入口の上部であるから、そこを腰をかがめて通り抜け、中庭らしいものへ出たところ、今度もまた三角形よりは稍やよろしい幼稚な迫持の出入口があつた。この方は半圓拱擬ひだが、やはり下部は前同様に埋まつてゐるらしい。とにかく拱又は拱に非ざる出入口上の煉瓦の積み方は面白い。

此第二廢墟に近く第三廢墟がある。圖は其遠望で、全體が不規則に穴のあいた岩の様に見えるが、この方は煉瓦壁から片蓋柱や蛇腹の様なものが見出されて、元は美事な建物があつた様に思はれた。併し修理法は如何にも粗末で、新しい控壁を隨所不慮に積んであつた。



二五。クシナガラの涅槃塔。(昭和十一年三月二十五日)

今日クシナガラ (Kusinagara) といつてゐるところは、B. & N. W. R. のゴラクプール (Gonakpur) 驛の東方直徑約三十二哩(約五十二キロ)にあるカシア (Kasia) の少し手前といふ事になつて居り、ここへ行くには、ターシル・デオリア (Tahsil Deoria) からカシアに出るのが普通らしいが、私はさうしないで、ゴラクプールの町の公立第一宿泊所を根據とし、自動車を雇つて往復をした。多少費用はかかるが、この方が時間に於いては餘程節約ができるし、まごつかないですむ。但しゴラクプールの宿舎は前以て泊る手続をしておく必要がある。左もないと驛の二階位でなきけな夜をあかさなければならぬ。

ゴラクプールからカシアへの街道は廣くて平坦であるが、實に殺風景でつまらない。とにかく其街道を走り走ると途中にハタといふ部落があるだけで、遂に途は二つに分れてゐて、曲り角に「涅槃塔」と(下)



二六。クシナガラの茶毘塔。(昭和十一年三月二十五日)

(上より) いふ道標が立つてゐるので、そこから曲ると直に塔の前に達し得る。

現在の状態は二五に見る如く、塔前に白色の建築があり、内に涅槃の大像を安置す。塔は近年の復興で、忌憚なくいふと形式は實に拙い。折角再建するならもう少しやり方があつたらう。見れば見る程拙い形。ここから約十四五町、茶毘塔といふのがある。二六はその全景、全部崩潰して小山の様な有様である。

拘尸那揭羅の地はカニングムがカシアの附近を夫と推定し、現位置で大涅槃像其他を發見してここに定めたと、ルンビニ園が發見せられてからは大分怪しくなり、今のネバル國內に有力な候補地ができたが、又ブラマプットラ阿畔なる古へのカムループ國の首都ゴウハチ (Gauhati) の附近との説もある。だから今の所はどうなるか判らない。

二七。グリヤ城塞全景。

(昭和十年一月二十六日)

グリヤ(Graya)市の大旅館、印度ラセ
ン式で建築した名証自稱囃儀ないグラマド・ホ
テルの正面向て右の砲塔の四階から、此市の大
城塞が一目に見える。そこから記念のためにと
った寫眞が此である。

此城塞は平地から特立してゐて、素人が考へ
ても、昔は非常な要害の地であつたと思はれる。

地図で測つてみると、長さ約二十五町、幅最も
狭いところで約一町、廣いところで約八町あり、

上は平坦で宮殿其他の歴史的建築が建ち、又貯
水池等も相當にある。北端に於いては三百尺の

高さに達するも、東北隅の正門の邊からたと二
百七十餘尺といふ事である。

城塞内の建物は、右端に近く各種の城門・官
殿・陳列館等があり、圖に於いて左右の中間よ

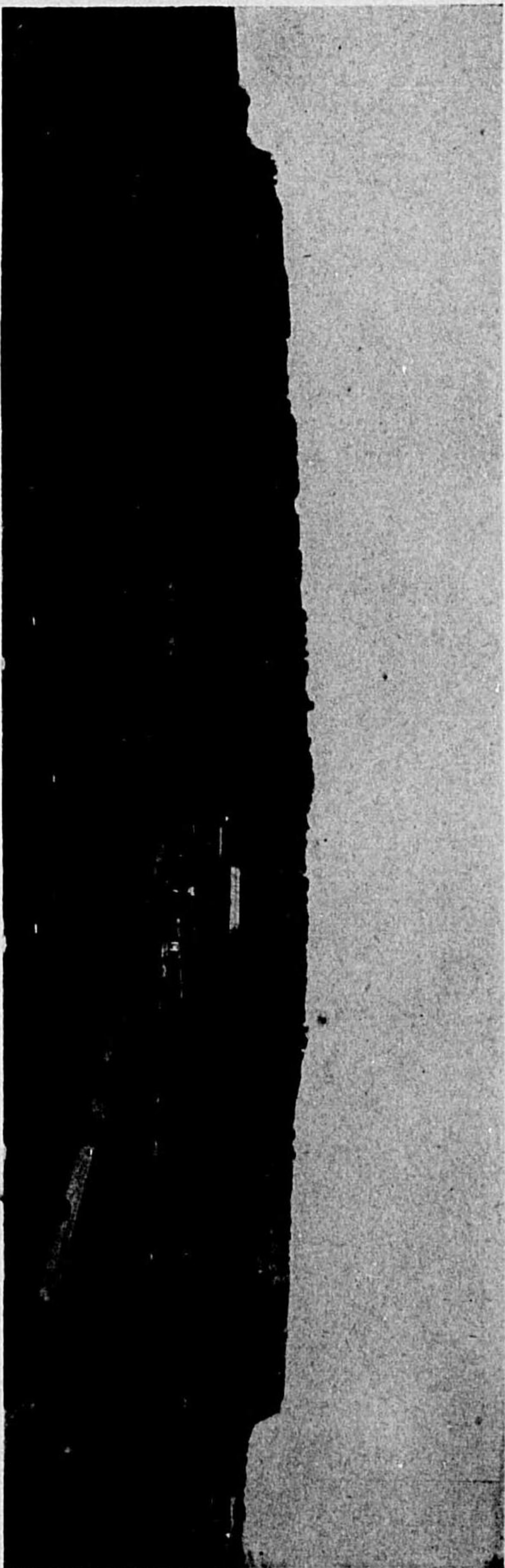
り僅か左方に、小さく梯形に空線に突出して
ゐるのは「ナリ・カ・マンチル」(Narika Manchi)

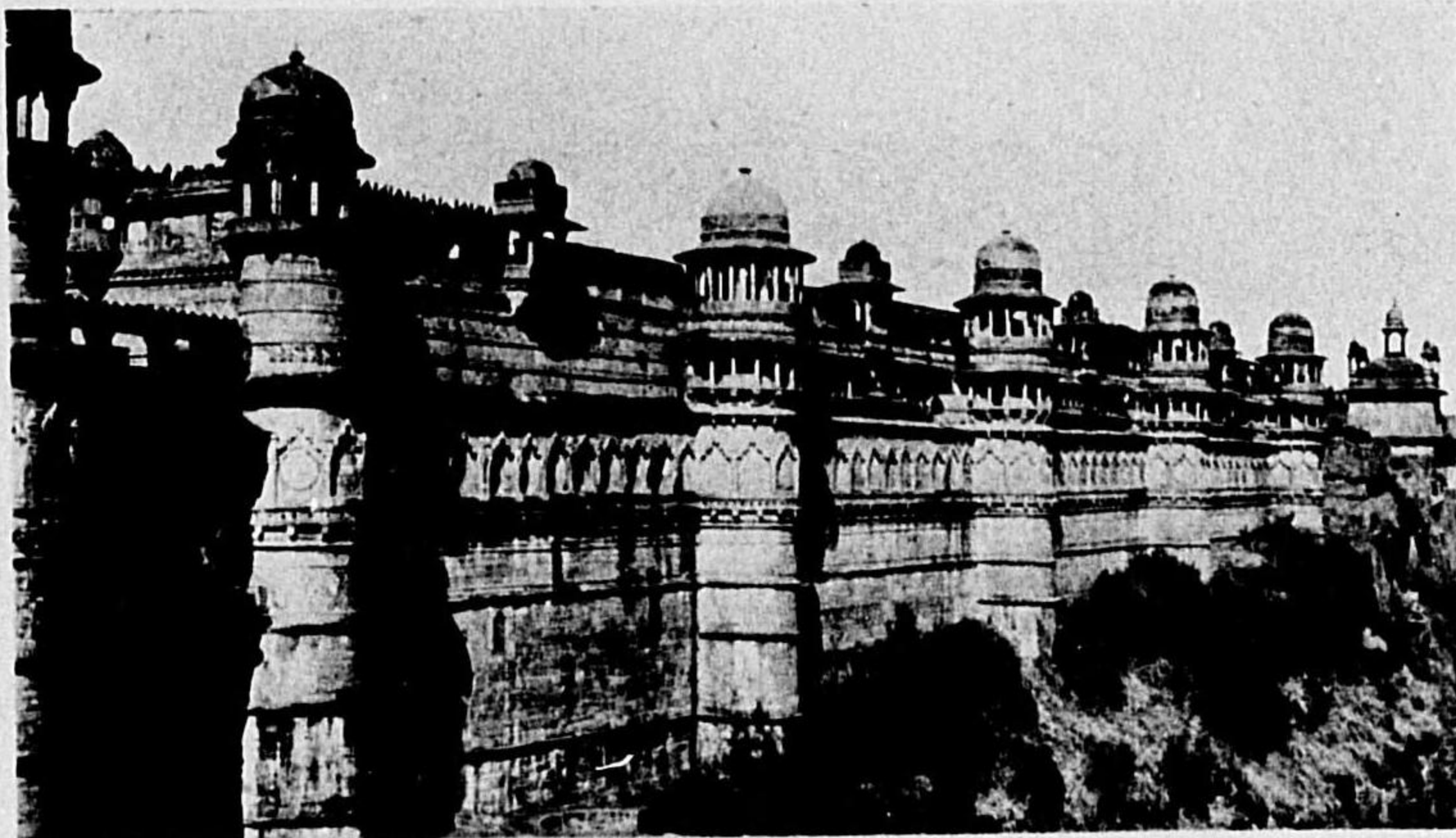
(三)と呼ぶ特殊の建築で約百坪の面積を有し、
第十一世紀(鎌倉時代)のもつと推定されてゐ

る。城塞と右端との建築との殆んど中央には
サス・ベン堂(Sasubendou)といふのがあり、其一

に西紀一〇九三年(寛治七年)の刻銘があるとい
ふ。何にしろあたりは平地だから、城塞内から

どの方面を見ても絶景だし、ここだけの觀光に
も數日を要するであらう。



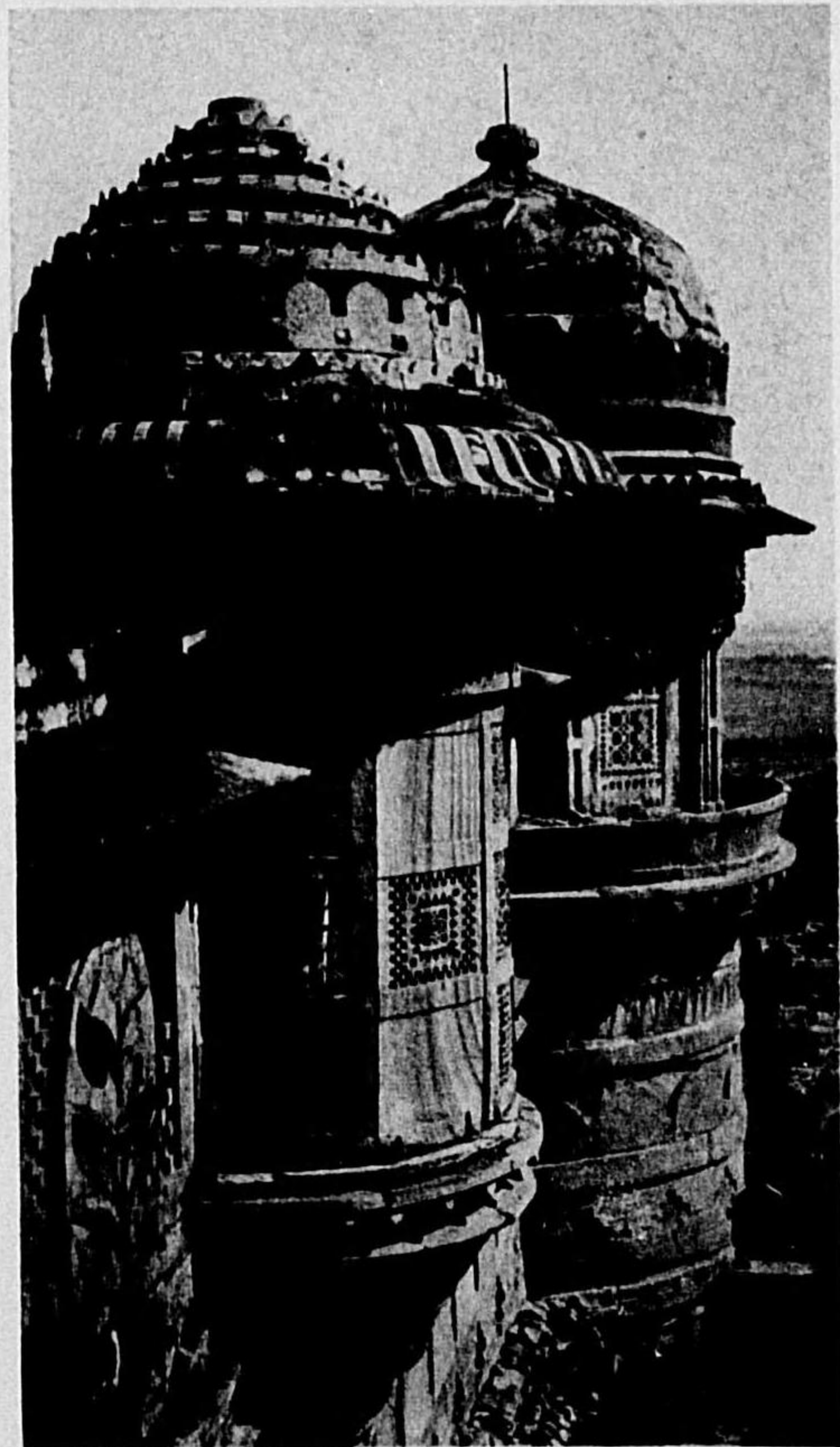


二八。マン・マンデール宮東面全景。

(昭和十一年一月二十四日)

グワリヤ要塞東北方の正門を入ると、左に曲る様になって、道は爪先上り、間に四つ門があり、六つ目即最後の「象門」(Hathiya Paan)に達する。この門を入るとそこがマン・マンデール宮の入口である。此宮殿は案内記によるとマン・シン宮 (Man Singh Palace) とあるが、入口の立札には下記の様な文字がある。マン・シン王の御世——室町時代——に建立されたのだから、夫でよからう。二八でみるように東面の絶壁に五基の塔がたっているのが非常に目立つ。一八八二年から一八八三年(明治十四年—十六年)に互り、大修理が施され、今では美しい状態で申分のない迄によく保存されてゐる。

此宮殿は各室内・中庭・地下室一階・地下室二階等、見るべき部分は多過ぎる程ある。私は特に或一室の天井が化粧屋根裏になって、(下)



MAN MANDIR PALACE
BUILT
IN THE REIGN OF THE
RAJA MAN SINGH
A.D. 1486—1516

マン・マンデール宮
マン・シン王在位中(文
明十八年—永正十三年)
の建立にかかる

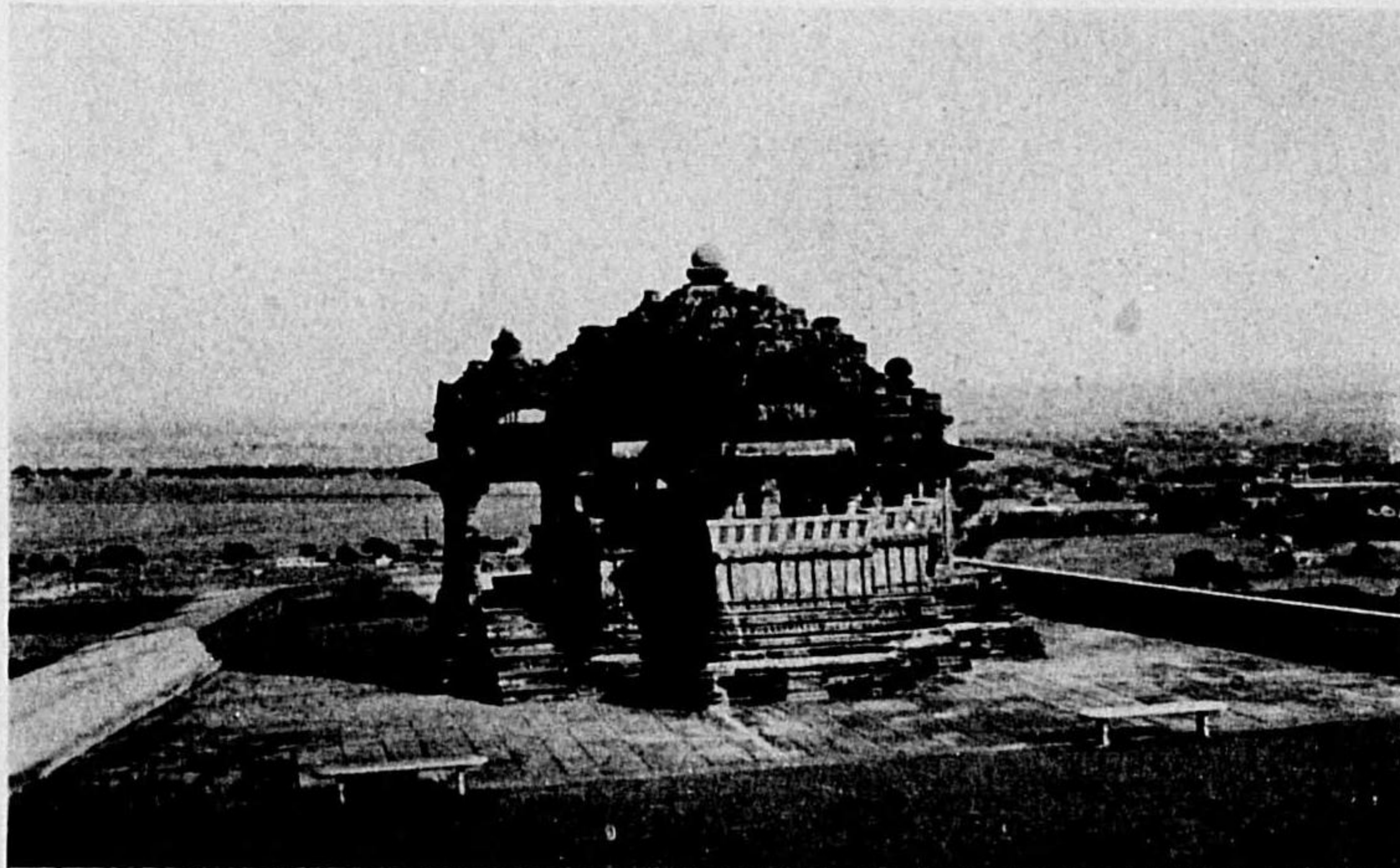
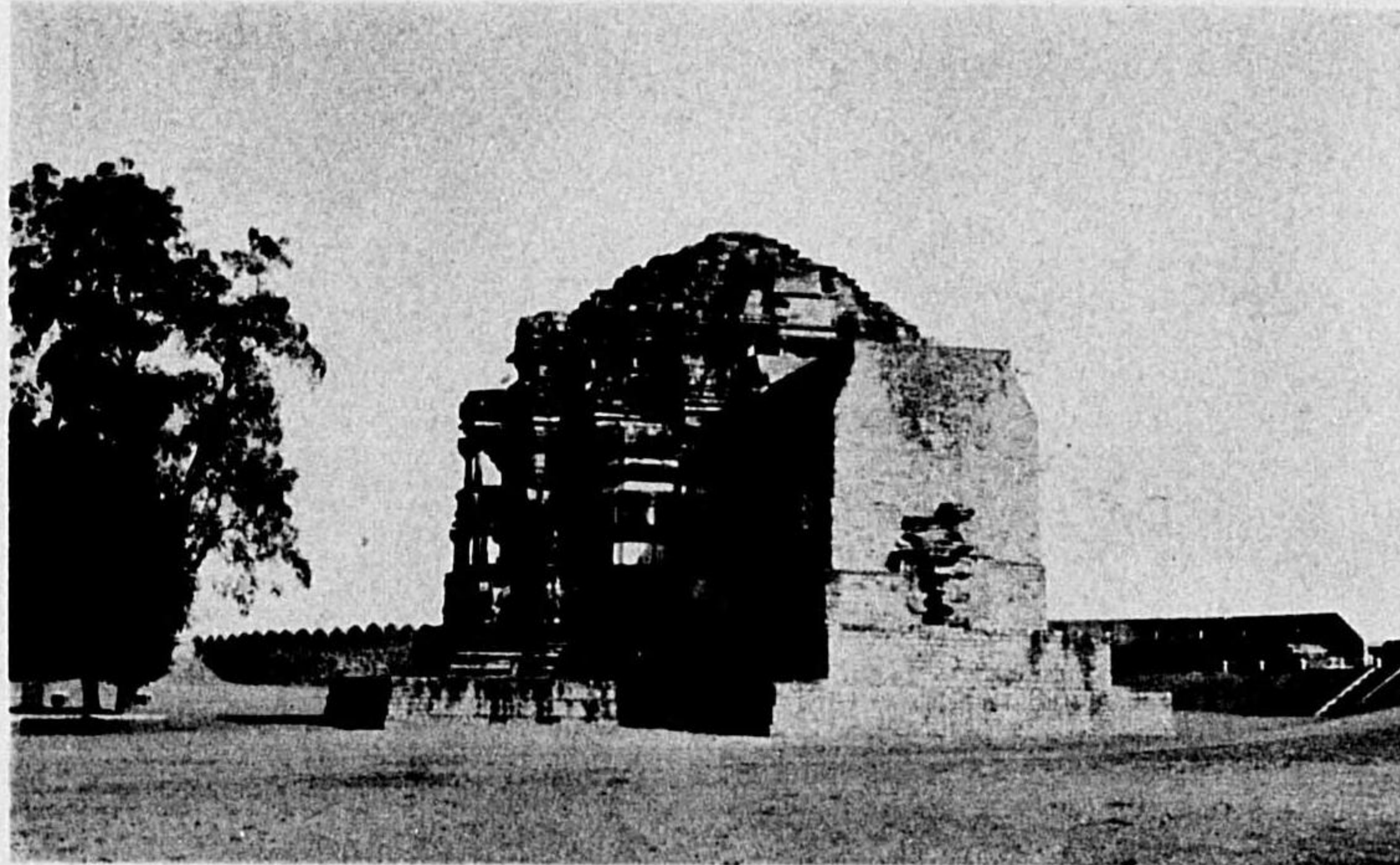
上。原文
下。譯文

二九。マン・マンデール宮附屬小塔。

(昭和十一年一月二十四日)

(上より)其裏板に當る石に蓮瓣を刻みだしてあり、又其裏板の附近に、内部から出てる桁の端とも見ゆる所を支へるために、孔雀の持送り(雄孔雀が尾翼を弧状に曲げて上を向け、其先で桁下端を支へしめた様にしてある)を用ひたのを面白く思った。此様な意匠は、孔雀の産地でなくては到底考へつけ難いであらう。

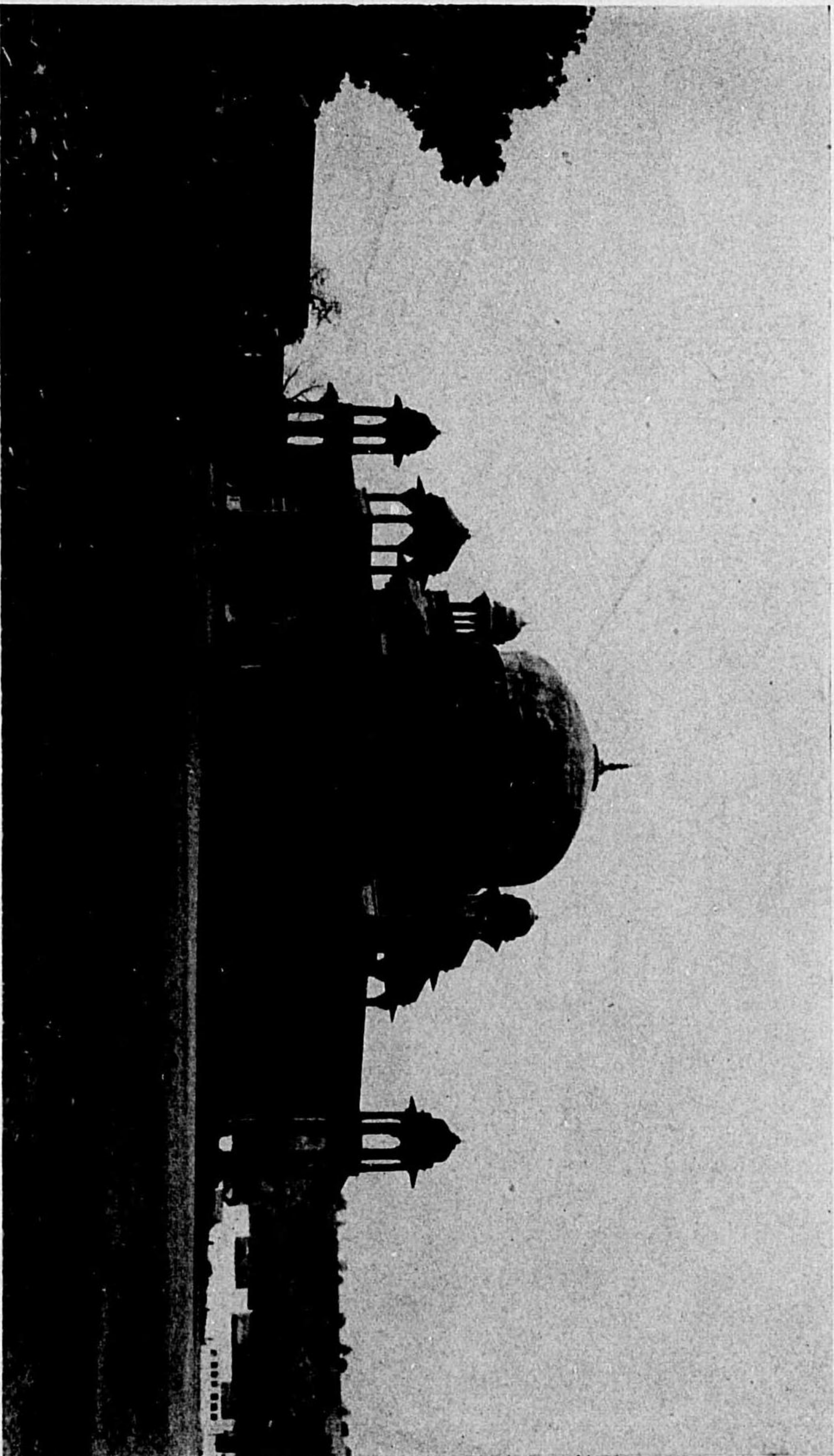
二九は上圖左端の半分見えてゐる塔の後方、少しかくされてゐる宮殿附屬の小塔と隅塔とを西方から見たもので、小塔の意匠、殊に塔身の壁に當る石を、此場合には三つに区劃し、其石に幾何模様をつくる様に穿孔し、壁面を美化すると同時に、内より外を自由に観得るが、反對に外から内をみる事の不能な様に、謂はゆるマッシュラビエー細工(Mashrabiyeh work)化せしめた點に注目すべきである。此種の取扱は印度の中世建築に珍らしくない。石工事は實によく發達した事を示してゐる。



上、三〇。サス堂。 (昭和十一年一月二十四日)
 下、三一。バフ堂。 (昭和十一年一月二十五日)
 此二堂は城塞内に互に相隣りあつて建てらるゝ、さうして兩方一緒にして「サス・バフ堂」(Sas Bahu Temple)と呼んでゐる。共に西紀一〇九三年(寛治七年、平安後期)完成した刻銘があるといふ。雙方共内外の彫刻は精巧を極め、殊に興味を惹いたのは、我が飛鳥時代の裝飾金具の文様に似たものや、法隆寺金堂内の天蓋等に現はれた連続等脚三角形の文様等を用ひてゐることである。先年鹿野苑で此種の文様を刻した軒飾の殘闕を見て、大凡五六世紀のものではなからうかと思つたのは大變な誤りであつた事を知つたのである。此等の建築は明治十四年から十六年にかけて、一萬一千六百二十五ルーピーを費し、大修理をした事が、前記の「テリ・カ・マンデル」の門に刻してある。下に參考のため此二堂の修理銘を記しておく。但しこれは原文の儘である。

サス・バフ堂内刻銘
 THESE TEMPLES ARE FAMOUS BY THE NAME OF SAS BAHU WHICH MEANS MOTHER-IN-LAW AND DAUGHTER-IN-LAW THESE ARE SAID TO BE JAINA TEMPLES BUT IN FACT THEY ARE HINDUS AS IS PROVED BEYOND DOUBT BY THEIR FIGURE SCULPTURE AND BY THE INSCRIPTION RECORDING THAT THE EDIFICE WAS COMPLETED BY MAHIPALA A KACH HYAHA RAJPUT PRINCE OF GWALIOR IN THE YEAR 1093 A.D.

テリカ・マンデル門の刻銘
 THE MAN MANDIR PALACE TELIKA MANDIR AND TWO SAS BAHU TEMPLES IN THIS FORTRESS WERE RESCUED FROM NEGLECT AND REPAIRED BY ORDER OF THE SUPREME GOVERNMENT UNDER THE DIRECTION OF THE CURATORS OF ANCIENT MONUMENTS IN INDIA THE COST WAS MET BY AN IMPERIAL GRANT OF RUPEES 7625 SUPPLEMENTED BY A CONTRIBUTION OF RUPEES 4000 FROM HIS HIGHNESS THE MAHARAJAH SCINDIAH THE EXECUTIVE OFFICER MAJOR KEITH WAS ENGAGED ON THE WORK BETWEEN 1881 AND 1883



三二。ムンブアドカウス廟。(昭和十一年二月二十六日)

グワリヤ市の東北、城塞東北門への途上、街路の左側にムンブアドカウス(Munbhadra Gauri)の堂たる廟

墓がある。彼はバトバト(Butoba)王やアクトバト(Akhotoba)

王と共に第十六世紀中葉のモリガル王朝の大王の

時代、衆庶の尊敬を一身に集めた聖人であつたといふ。

廟は廣場に建てゐるから、何れの方角からもよく見

える。石築で方百尺、正方形の平面を有し、四隅に六角

塔、各邊の中央には方形の掘出し窓がある。内部中央の

墓室は方四十三尺あつて周透より一段高く四屋根を架

け、四隅に小塔を置く。だから全體としては随分賑か

ある。建物の周囲には溝縁を廻らし、軒の出は深く、持

送りを以て支へてある。

窓は總て石の薄板に美しい幾何模様を透彫したもの

で、前に掲げたマン・マンデール宮小塔の壁面の夫の一

層手の込んださし(二九参照)。アグラやデリー

の城塞内の宮殿建築に比べて一歩も引けをとらない、全

く同意匠手法である。

上、**三三**。グワリヤ市回教墓。

右下、**三四**。グワリヤ市回教墓の石燈籠 共一。

左下、**三五**。同

共二。

前圖に掲げたカハマッド・ガウス廟墓の後方に、小型の回教墓が相當數並んでゐる事**三三**の如くであるが、此等の墓の殆んど總てに、其一方に簡單な石燈がたててある。而も夫が唯一基中央に位置してゐるのだから、我國に於ける有産階級の新しい墓に一對たててあるより遙に意義がある。

私は嘗てネパール國バータン市の佛塔傍に於いて一基、首都の東北チャバイル(Chabaili)に於ける廢塔の傍に二基、印度國ではビジャプール(Bijpur)のジャーマ・マッスジド(Jama Masjid)及びアサリ・シャリフ(Azar-i-Sharif)に於いて一基づつ(一四四—一四六)、更に又南方コモリン角を距る遠くない大都チンネリ(Tinnevely)の印度教祠の入口の傍に一基(一六五)、合せて六基の石燈を見てゐる。この様にあちこちに、たとひ僅かでも實例のあるところをみると、其分布は或は全印に亘つてゐるのかも知れない。根氣よく探したら或は意外の獲物もあらう。

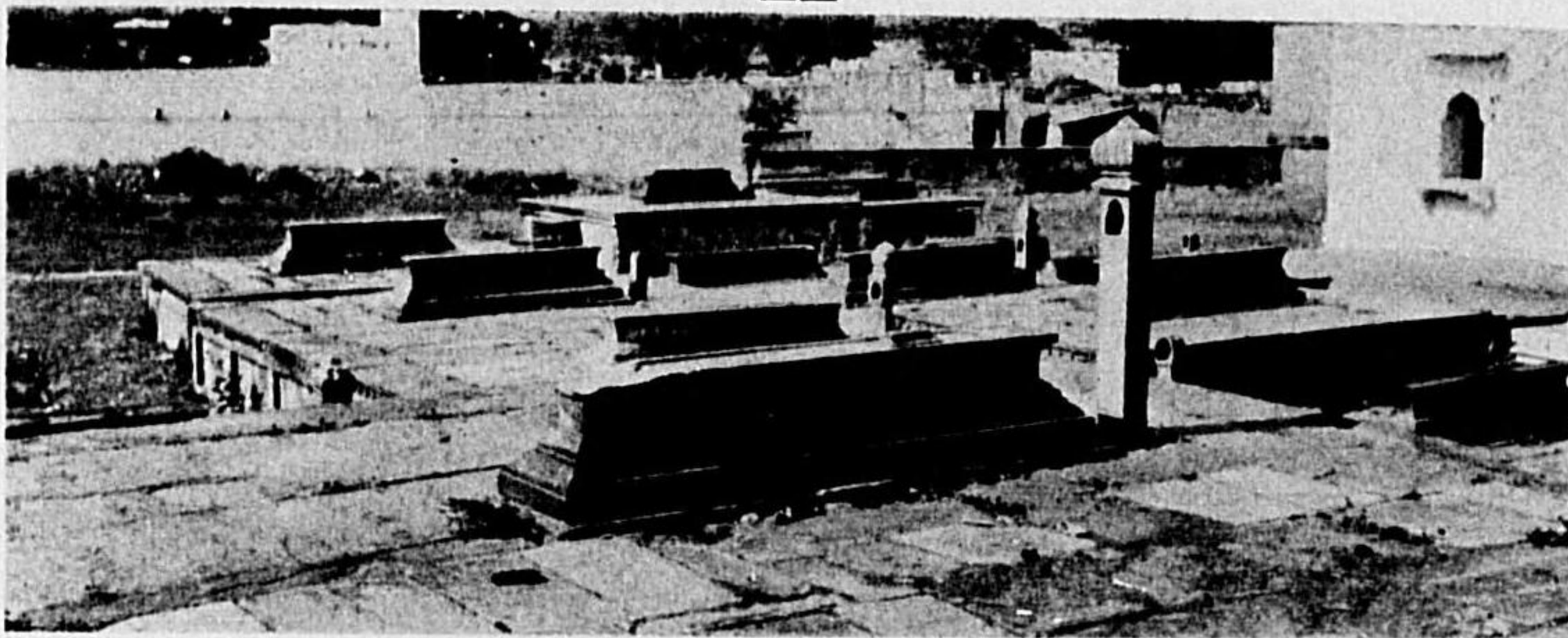
何れの石燈も、我國のに比較して關してゐるのは中臺(必ずとは限らないが、あつても發達不全)で、あとはともかくも全部を具へてゐるのが普通である。此場合**三四**は甚だしく簡單であるが、**三五**の方は大分複雑で、基礎の四方には花頭形を、竿を八角形にして八方に矢筈文を刻み、火袋・笠・寶珠何れも巧みに彫刻がしてあり、又雙方共火口は花頭形で、共に寶珠頂上の尖った部分を失つただけで、小回教建築をみる如く、何れも上乘の作である。

(昭和十一年一月二十四日)

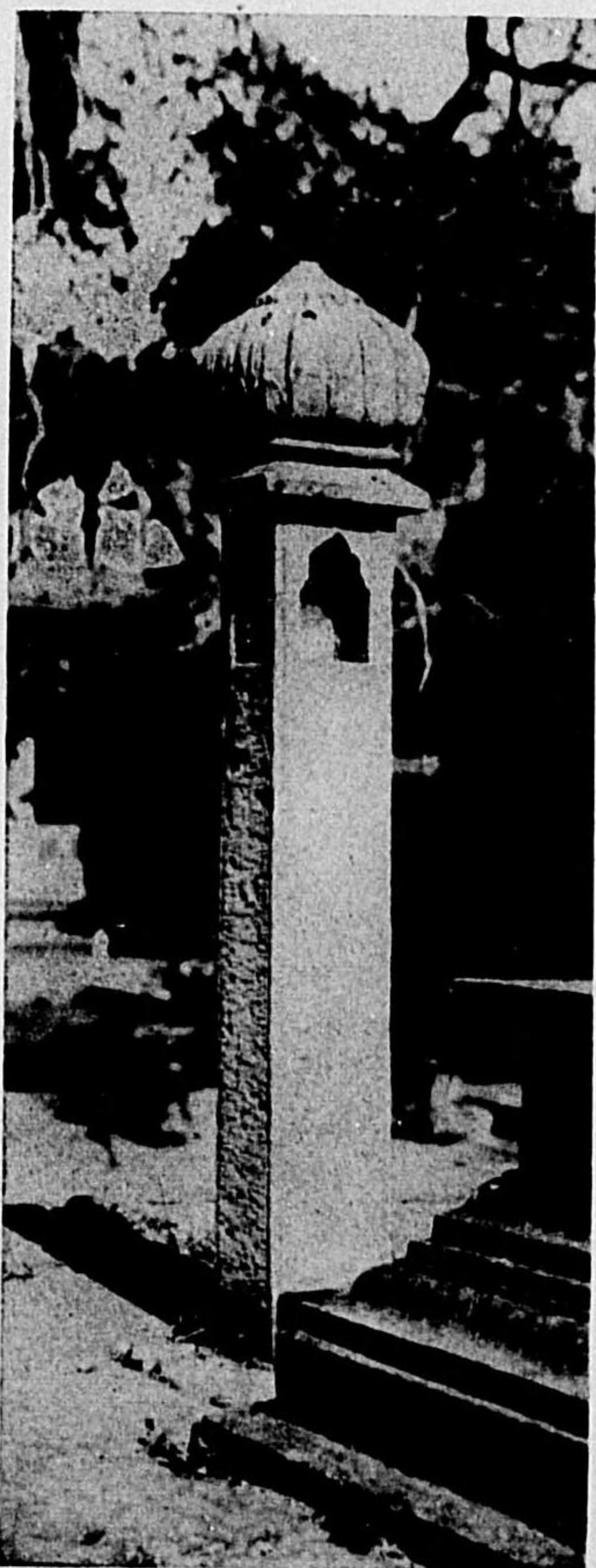
(昭和十一年一月二十四日)

(昭和十一年一月二十四日)

三三

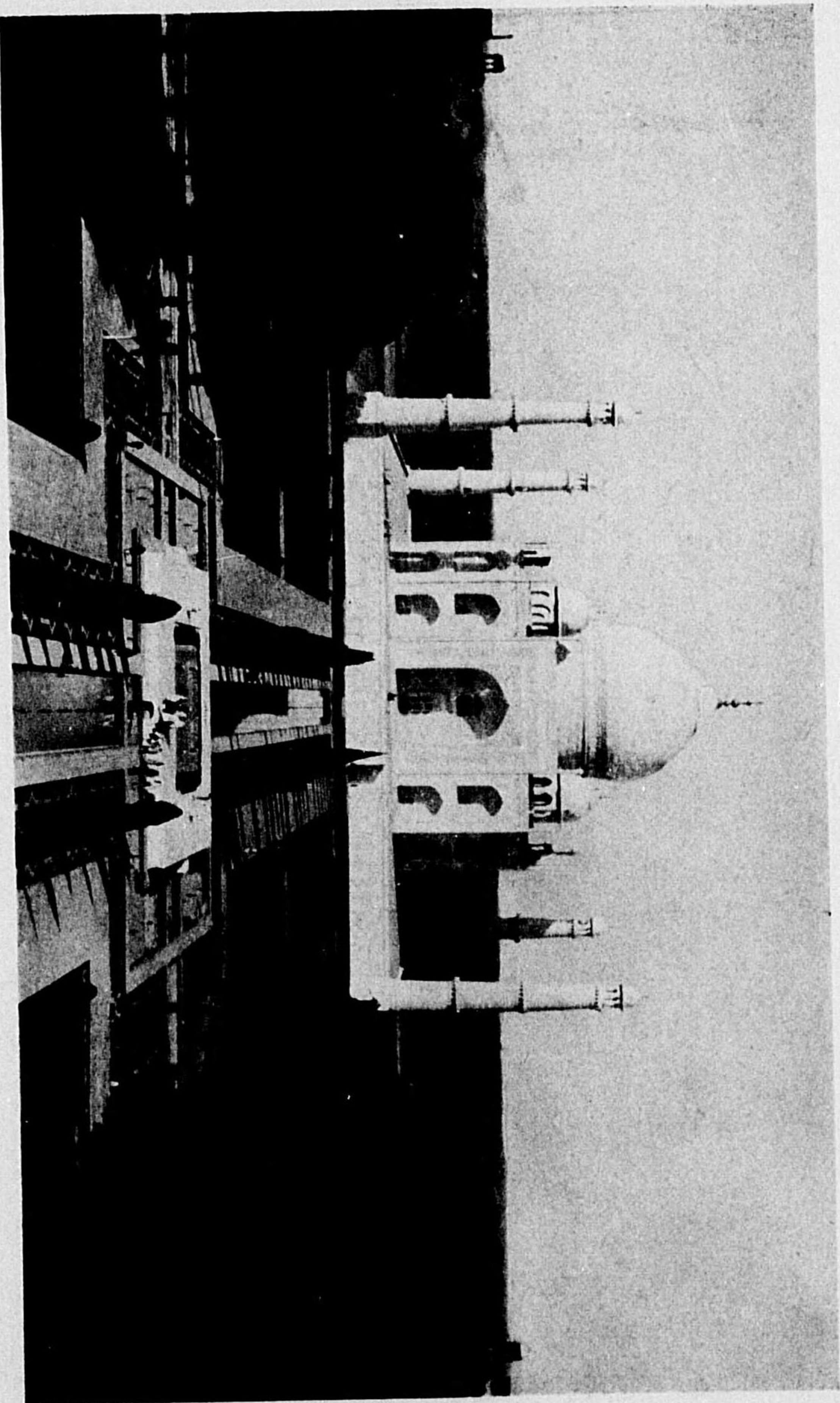


三四



三五





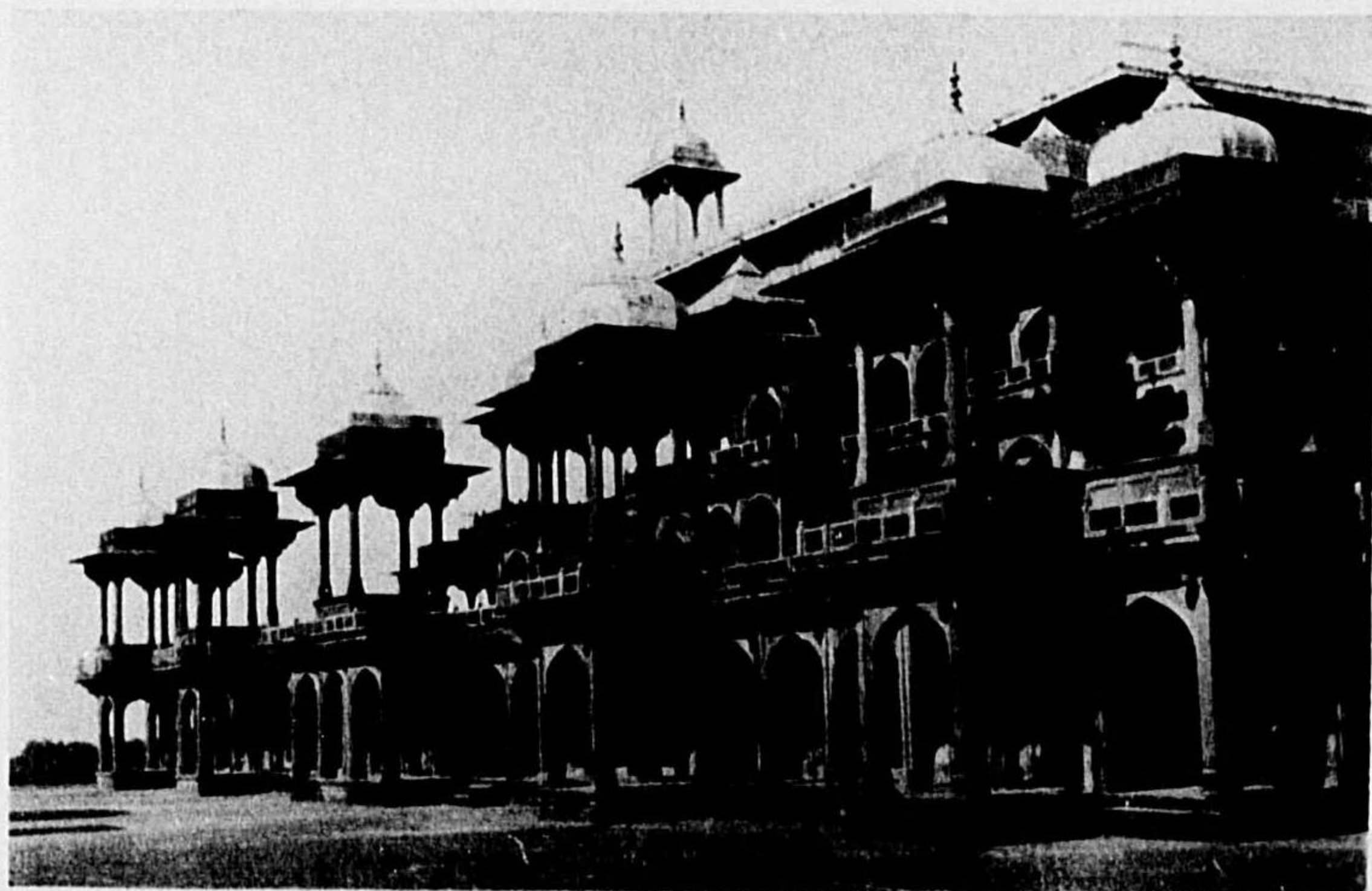
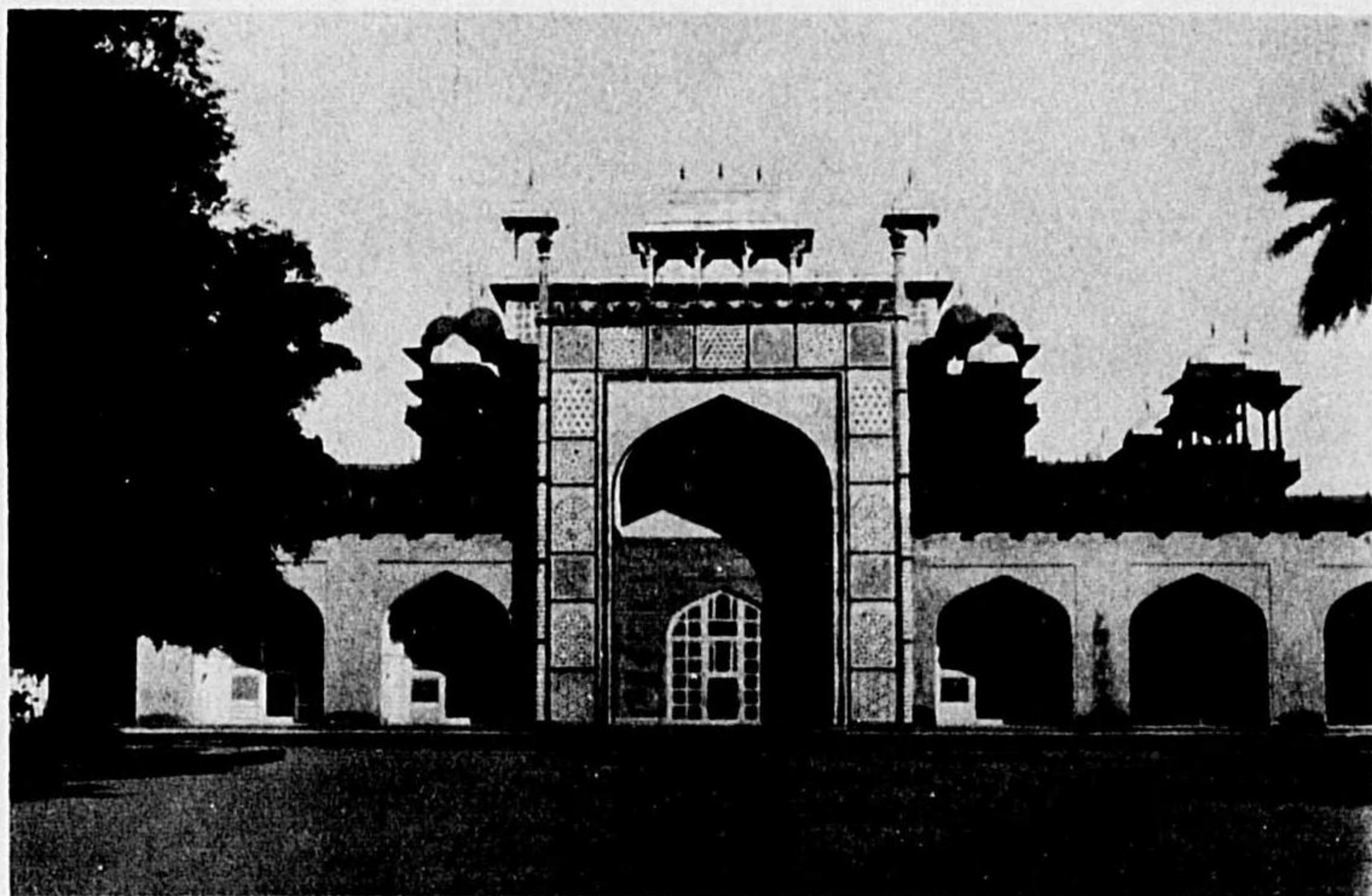
三六. アグラ市タージ・マハル廟。(大正十一年十二月八日)

誰でも知つてゐる位有名なから、やめにしてもいい位だが、どうも荷も印度建築の圖録たる以上、やめると體をなさなから、且並ではあるが、正面の門の上から、とた寫眞を一枚だしておく。古い寫眞でみると、構内は大分きたらしいが、其後修築をして河に美しくしてゐる。

本廟の本名はタージ・ビ・カ・ラガ (Taj Mahal) といふのがほんとうで、「寶冠を頂ける貴女の墓」といふ意ださうである。タージ・マハル (Taj Mahal) が皇后なるムターチ・マハルと呼ばれたアルジマフ・バム (Arjumand-Bano) の薨去を悲み、西紀一六三〇年(寛永七年)着手、二十二年以上を費して落成したといふから、假に丁度きうとしても、慶安四年といふ事になる。

廟は南北八百八十尺、東西四百四十尺の長方形の構内に、南面して大理石の基壇上に建つ。基壇の大きき方三百十三尺高さ二十二尺で、四隅に夫夫高さ一百三十七尺の光塔が一基づつある。其方形基壇の中心に廟がある。方一百八十六尺、中央に八角形の大室、四隅に同様の小室があり、建物の四隅は大面取してある。其四隅の小八角室の上及び中央の八角室の上には圓蓋を架く、而してこの中央の大圓蓋は一百八十七尺の高さに達するといふ。

廟は内外共寶石を以て白大理石に象眼してあるから、其美なること例ふるにもなく、殊に中央大室に安置せる皇后及び皇帝の記念碑、夫を圍める透彫を施した障屏等、詳細の解説は一冊の書物でなければ、到底記載はできかねるのである。



三七. シカンドラのアクバア大王廟正面。

(大正十一年十二月六日)

シカンドラ (Sikandra) はアグラ市の西方五哩半、ここにアクバア大王の廟がある。アクバア (Akbar) といふのは、印度に於けるモーガル王朝の最も盛んな王で、室町末から桃山にかけての人 (天文十一年—慶長十年)。私は馬車でアグラから往復したが、往に四十分復に四十分を費し、見學には二時間かかった。

アクバア大王の廟墓は四方を高い壁で圍み、其中央には高さ七十尺と稱する立派な大門がある。西門にはジャハンギル王 (在位二十三年、アクバアの次の王) が慶長十七年に此廟墓を落成せしめた事がベルシヤ文で刻んであるといふ。

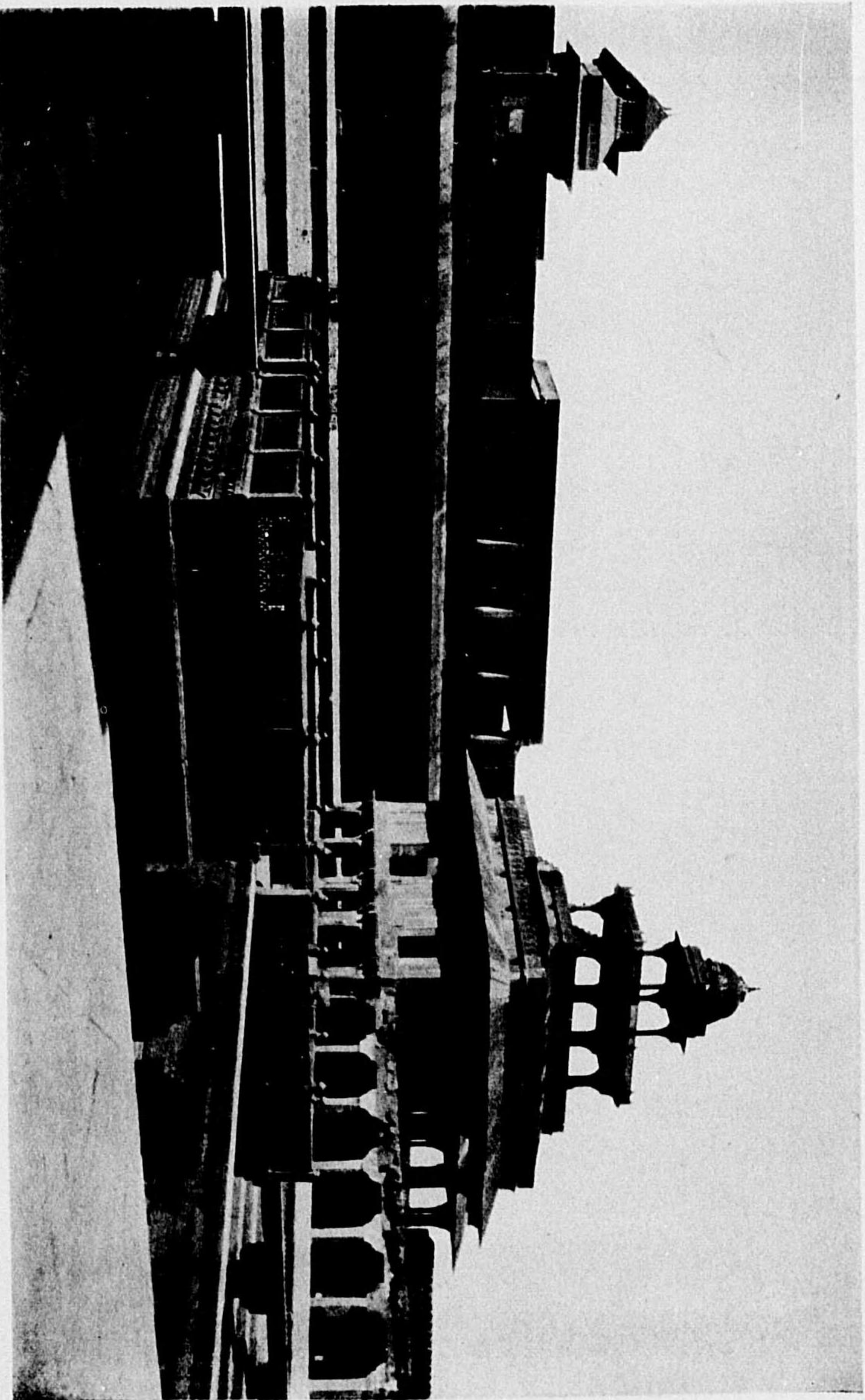
三七は正面の出入口であるが、其中央の部分は圖に見る如く實に偉大であり、四心拱型の半穹窿をなし、其中央に同様に相似形の四心拱があり、其中央の開口が眞の出入口になつてゐる。由是觀之、其全體が如何に (下)

三八. シカンドラのアクバア大王廟部分。

(大正十一年十二月六日)

(上より) 大規模であるかを判断し得るのである。其大半穹窿の左右及び上方に、幾何文様の見えるのは、赤砂岩に白大理石で象眼したためである。穹窿上部の隅弓の取扱も亦注目のある。

廟は四階建 (地下室共に五階) で全體は上に行く程小さく、方錐體をなし、地上七十四尺といふ。第三層迄は赤砂岩にて築造し、第四階は全部白大理石より成り、中央に記念碑石、其記念碑の直ぐ前に、美しい彫刻を施した大理石柱がたつてゐる。此石柱は傳説によると當初は金板を以て覆はれ、内にコイ・メール (Koh-i-nur、有名な金剛石、今英國に在る) があつたさうである。三八は第一階の屋上から、第二階以上を見たもので、四階の様に見えるが、其最上部なる平たくて四隅の方一間の小さな小亭のあるのが、即最上階で、この透彫の窓狭間飾は大した美術品である。



三九。フーテリアル・シクリの宮址。
(大正十二年十二月七日)

フーテリアル・シクリ(フーテリアル宮址)とはクバ大王の築造した都城で、内に王宮もあり、全部赤砂岩より成る。アラ市を距る二三哩といふ。公立宿舍があるから、とまてゆぐり見学ができる。アラから自動車に通ずるし、又汽車もある。汽車だとアラを出てから、約一時間でフーテリアル・シクリ驛に着く、遺跡は驛から近いから、費用の節約にはこれが最もよろしからう。

此都城はクバ大王が後にアラに移つたので、自然放棄されて了つたが、とにかく自身の指揮で建設した事と、非常に完全に保存されてゐるといふ點とから、モイガル王朝の最盛期に於ける代表的都城として、類例のない遺跡の資格を充分に具へてゐる。だからあらゆる點に於いて重要視されてゐるのである。この様な堂々たる都城が、何故に放棄されたかといふ確實な理由は、飲料に適する水が得にくかつた事と、周囲が甚だ不健康地であつたためといふ事が書物にのつてゐる。アラ遷都後、此所を訪れたフレンチといふ人が、「舊都は荒廢甚極に達し、夜間の通行は甚だ危険である」とかいてゐるが、これは大分誇張があるらしく、ただ此地の交通不便であるのを形容したのであらうといふ。

都城内の宮室建築を観るときは、大王自身が室の配置等を熟考の上施工した事が充分想像し得る。其理由は大王の私室(此圖の前景に見える水槽の左方に當つてゐるので、寫眞にはでてゐない)からは、どこからも誰人からも注視される事なく、宮廷内の何處へも往復し得る様にしてあつたからだといふ事である。其他各種の建物があり尚ほ城内には大回教寺があり、この境内に都城建築の際樞機に參與したサリム・チマスチ(五三三三三三三三三三三三)の墓がある。

此圖は宮廷の中心にある大王の私室、北面して建てられてゐるクワガア(六三三三三三三三三三三三)といふ。「夢の家」といふ意ださうな。寢室)の前の美しい水槽の東南方から西北方の眺めで、右方に高い方錐體の建築はベンチ・マハル(五三三三三三三三三三三三)と呼ばれ五層建、各階の柱間は吹放しで、最上層は方一間の小亭に終つてゐる。此ベンチ・マハルは多分宮女懸安のたといふ事に考へられてゐる。第一層の五十六本の柱は柱頭が全部意匠を異にしてゐるの

で有名である。全都城は赤砂岩より成り、日光にあたると赤く光り輝き洵に美しい。

●。デリ市ドー・マスタド。

(大正十一年十二月一日)

デリ市城塞の西南方は廣場になつてゐる。尤もこれは今から二十一年前の状態だから、今では家が建つてしまつたかも知れないが、先づ大概そんな事はなく、やはり廣場であらう。其廣場を西北から東南にエルクン通り、其途中、丁度城塞の西南隅の邊から、直角にカース(カース)通りがこの回教寺の正面に通じてゐる。いふ迄もなくメッカは印度からだつと西方に當るから、この回教寺は總て東面してゐるのである。東が正面にきまつてゐるのだが、見學には午前中に行つた方がよしい。午後だと逆光線になる。

此回教寺はあたりが廣いのと、非常に高い基壇上に建つてゐるので、三方

の門前に澤山の大规模な石階がある事と、赤砂岩へ白大理石を象眼して裝飾

してゐるのと、一基の光塔があるのと、その様ないろいろの理由で洵に美しく且つ立派に見える。ものは全く異なり、あたりの條件も一つも共通の點は

ないが、英國のソールズベリーの大教會堂が、あたりに何もない廣場に建て

ゐるので、特殊の景觀を呈してゐる様に、この回教寺も亦、他の追隨を許さ

ない有利な位置を保てる。

寺はゾハンマド(ソハンマド)の次の玉立(玉立)が西紀一六四四年(正

保元年)建築に着手したが一六五八年(萬治元年)に漸く落成したやうである、

だから先づ江戸初期の末頃のものが、とても大した建築。これ程威嚴のあ

る莊重なる、さうして美麗なる大建築はめだにあるものではない。

本堂桁行二百尺、梁間六十尺、正面兩隅の光塔の高さ百三十尺、門を入

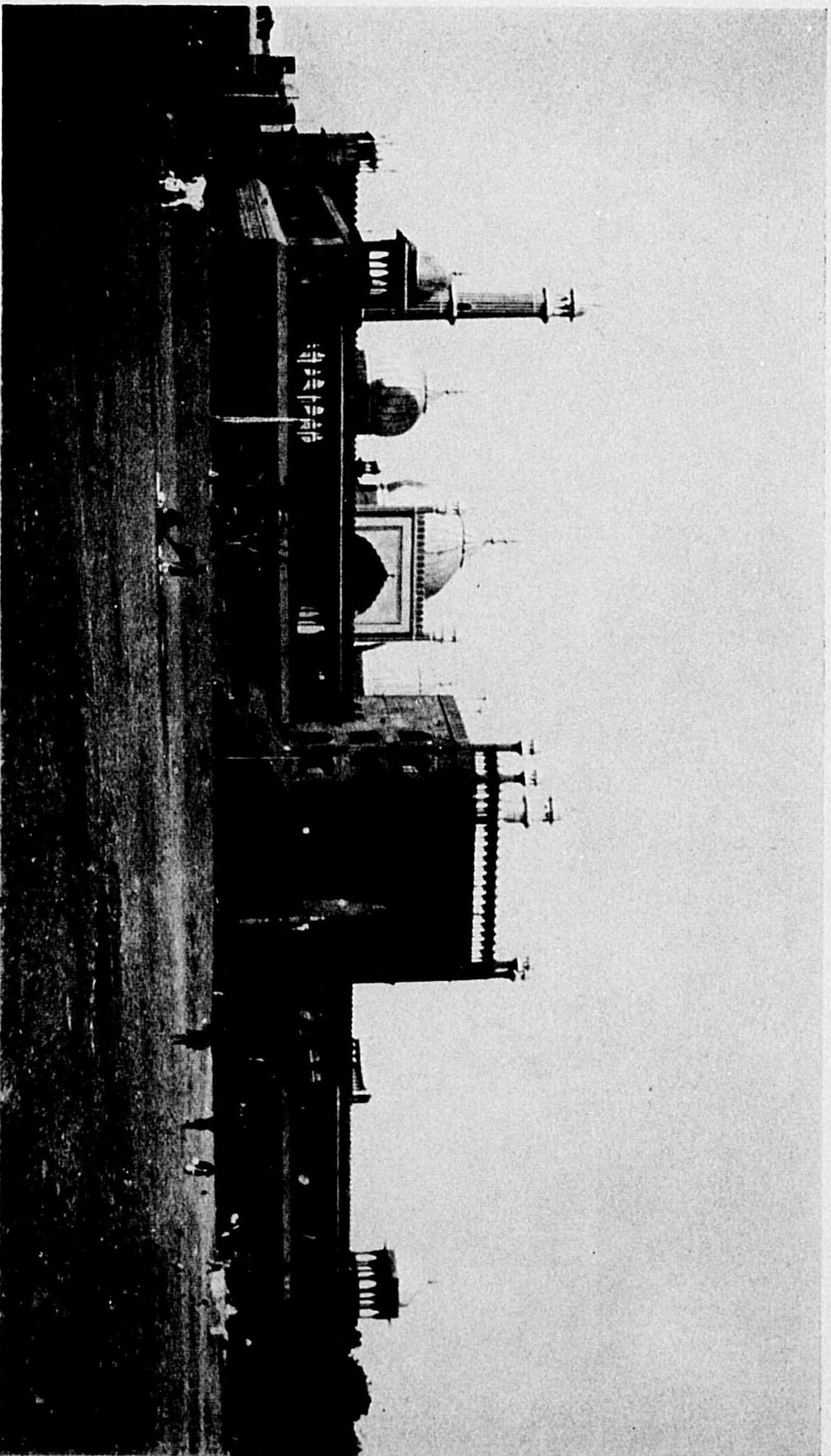
た本堂正面の廣場即方庭は三百二十五尺角といふのだから、まづざつと一町

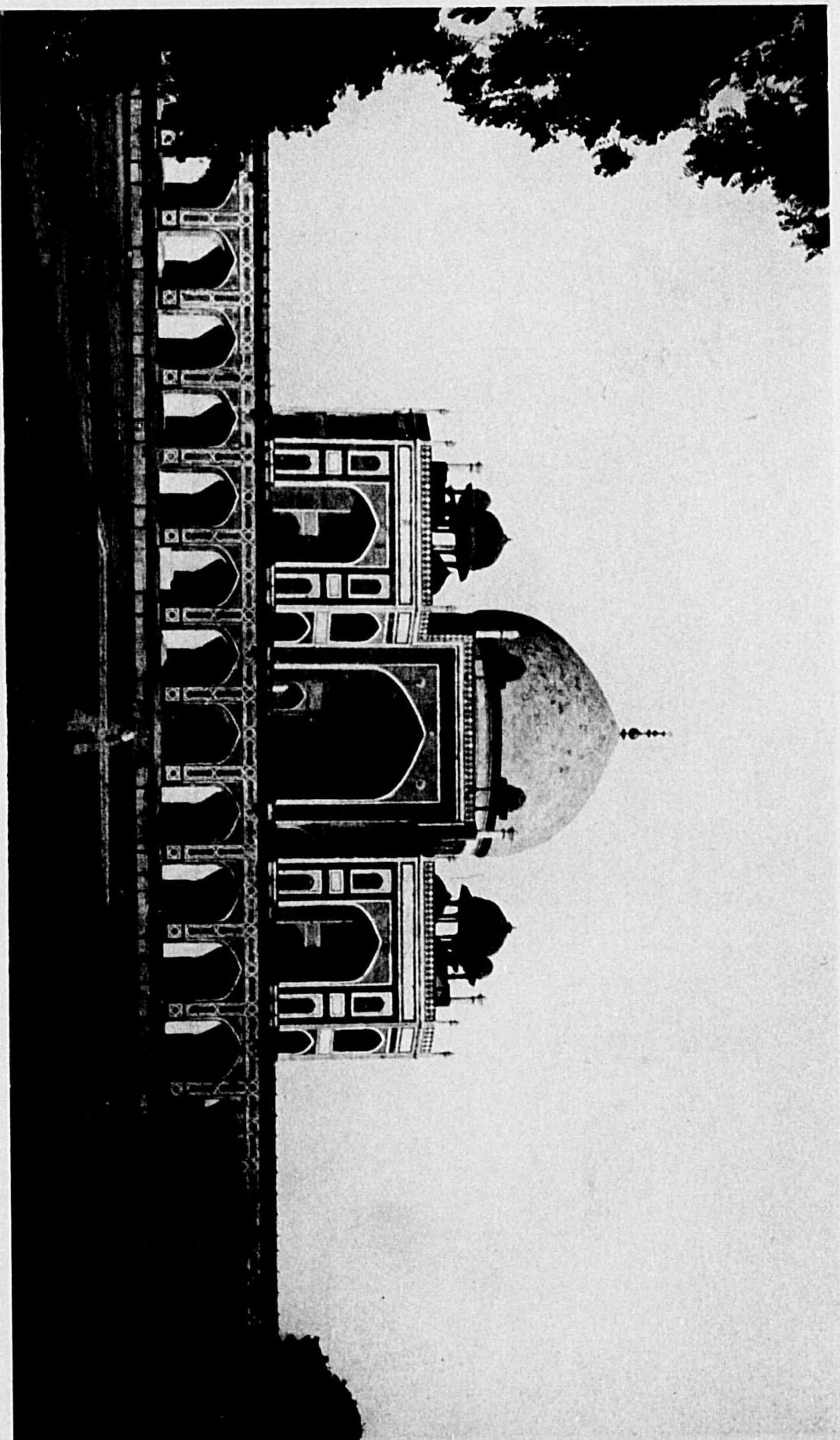
四方あるわけ、さうして其中央に大理石製の噴水と水槽とを設く。歩廊は梁

間二間半といふ。正面即ち東門は、昔は皇帝のみの通行に供したのだらう

な、併し現今では印度總督又は州長官の來た時だけ開門するといふ。

四〇





四一。デリ市郊外フヌン王廟墓。(大正十一年十二月一日)

デリ市城壁の東端の門、デリ門を南に距る事約一里半、ムトラ街道の東側に一大廟墓がある。ズンバト王の子で、ズンバト大王の父なるフヌン年(永祿三年)頃の建立といふ。フヌン廟の西方約三十町に一七五六年(寶曆六年)築造のサフグアジアン(フヌン)廟と比べると、さすがに時代の差による様式の變遷を誰人も雖も確認し得る事程左様に著しき差がある。

此廟の門は形式が普通と少しく異り、兩翼が中央部と鈍角をなしてゐるが、恰も屏風をたてた如くで、見たところは異様の感がある。廟は廣大なる地域に建ち、あたりはさか何かが利らないが、綠色をした美しく刈り込んだ芝の様な草が生へてゐて、靜かで大變によかつた。其平面は方形で、四隅及び中央に大室があり、四面の中央に出入口を設け、一邊の大きき一百五十六尺、中央圓蓋の頂上迄一百二十五尺、赤砂岩の廣大な基壇上に建ち中央は正八角形をなし、四隅の室は大面取の正方形といつた體裁である。

中央の大室は直径八間といふ。中央に白大理石無銘で至極質素簡單なフヌン王の記念碑を安置し、他の四隅の小室にも夫夫記念碑をおく。此廟の平面に就いて、フアグアジンは此平面は後にダージ・ベハの夫(三ノ三)に用ひられたが、どうもこれはあれ程に詩的のところも深みもないといふ様な事をいつてゐる。成程よく似てはゐる。前のものから暗示を得て、後により以上ものを建造するのは當然の成行である。赤砂岩に白大理石の象眼は洵に面白く美術的に施工されてゐる事は圖を見て知るべきで、廟墓としては申分のない出来栄であるといへる。

四二．ラホール市ラチール・ハン寺の中庭。

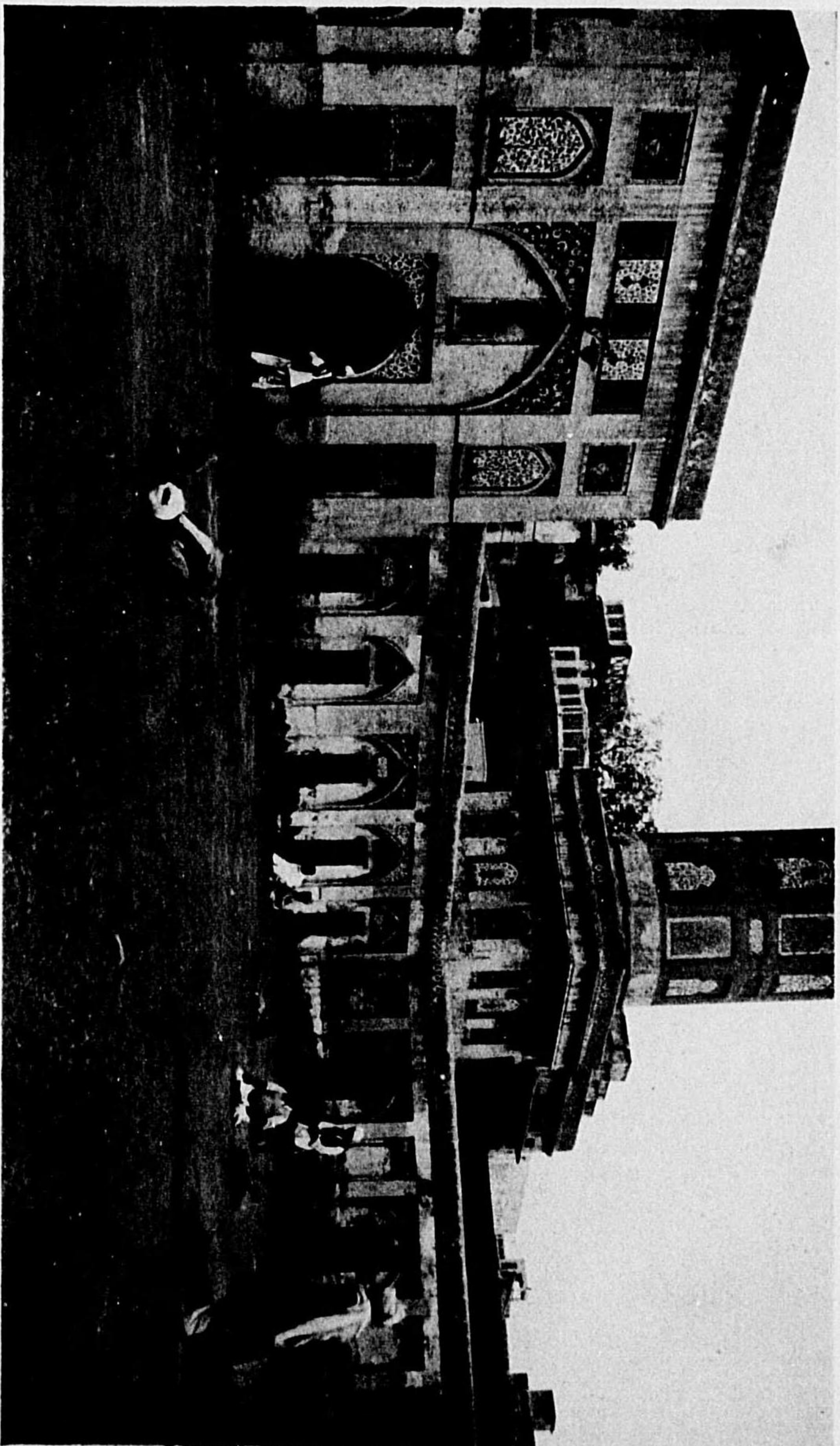
(昭和十一年二月五日)

ラチール・ハン (Raihan) とは共に暴夜語たさうで、ラチールとは總理大臣、ハンは殿とかいふのに當るとあるから、さうすると「モスク・オブ・ラチール・ハン」は「總理大臣閣下の寺」といふ様な意味かも知れない。どうでもよさうな事だが、序に書いておく。

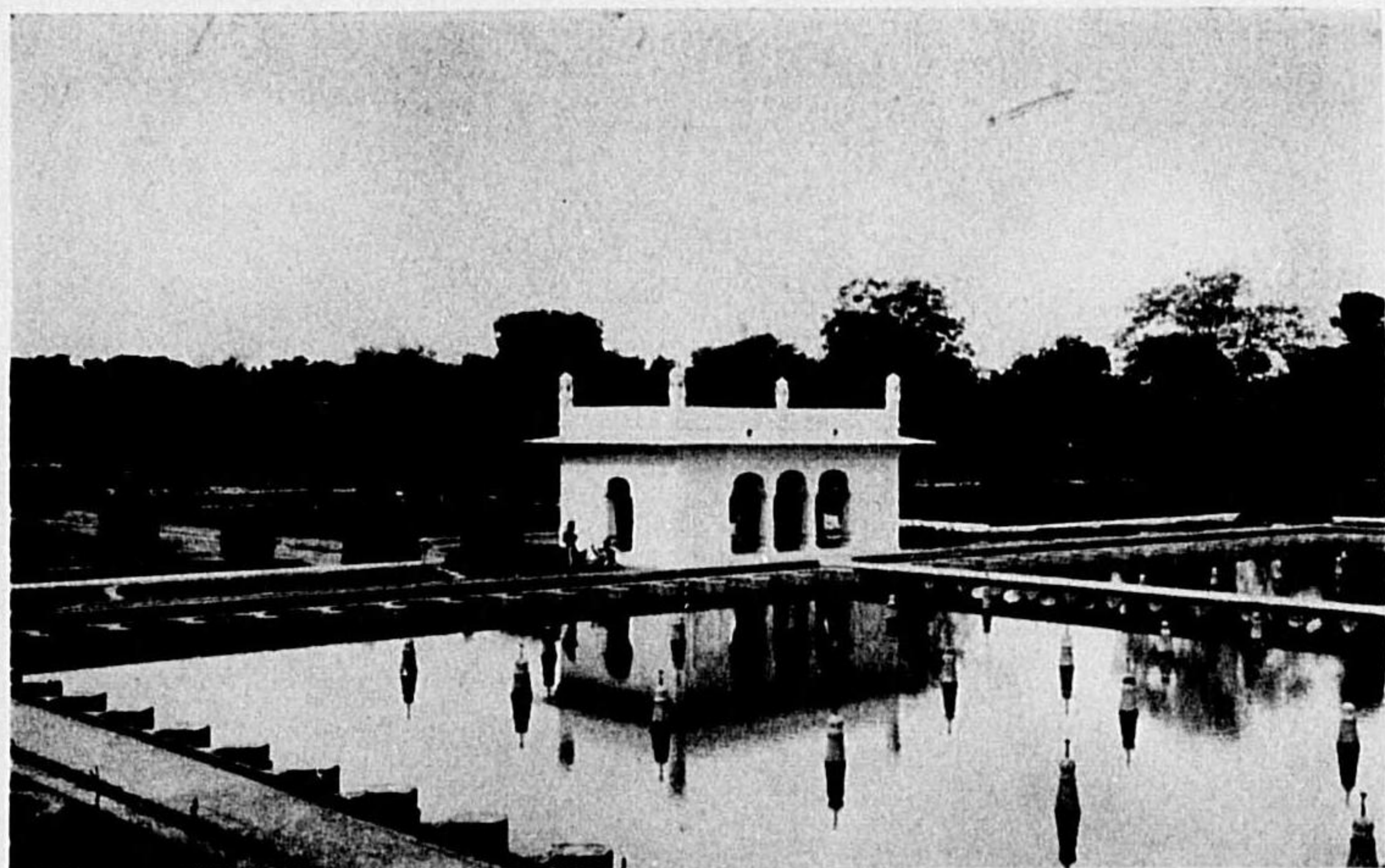
本寺はシ・シハンの御世にベンシナ (Bansina) 地方の長官であつたハキム・ラウ・ウ・ヂン (Habib Ali-ud-Din) が西紀一六三四年(寛永十一年)の建立と傳へてゐる。壁面は藥引裝飾瓦を以て化粧をしてゐるので、大變に美しい。正面大入口の左右には小さい出窓を設けてあるから、このあたりの意匠特に見るべきものがある。

此所に掲げたのは中庭の有様である。徹處なる回教徒は、中庭の敷石の上に坐り、両手をついてメヅカを遙拜してゐる。ここでは座具を用ひてゐないが、これで他の回教徒の様に座具を敷けば、我國の臨濟宗の僧侶の禮拜と全く同様式といへる。唐様建築の細部としての花頭窓と禮拜の方法とは、何か縁がありさうに思はれる。

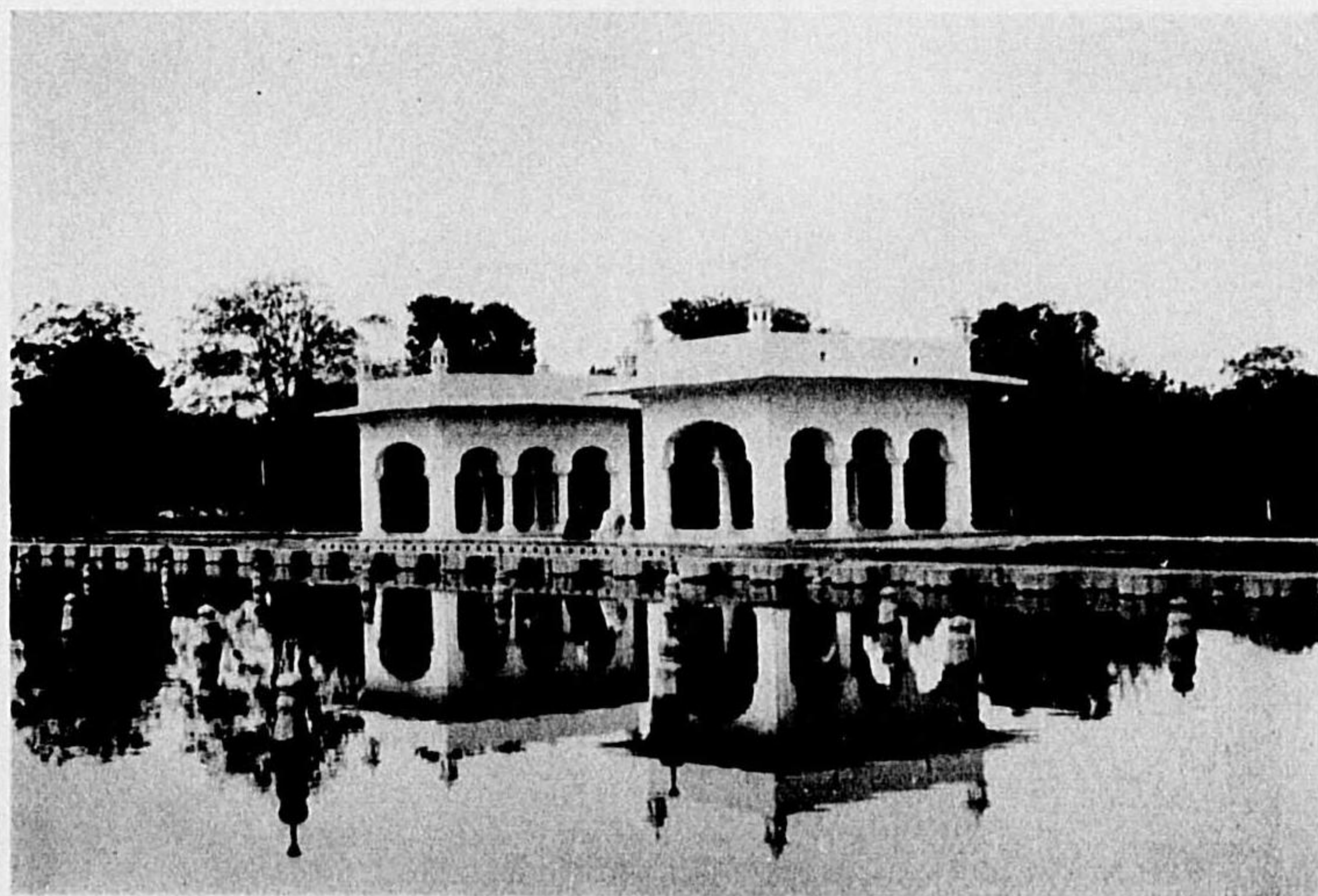
四二



四三



四四



上、四三。シャリマール園池風景 其一。

下、四四。同

其二。

シャリマール園地 (Shalimar Gardens) はラホール市の東北方に位し、驛から五哩を距るといふ。長方形の地所と噴水と白色の小建築とを配した園に過ぎないが、美しい。西紀一六三七年(寛永十四年)ジャハン王の命により築造すといふ。

大體に就いて記せば大きな四角な池の中央に長い橋があり、橋の中央に同じ様な四角な廣場がある。總て白大理石で築造してあるから、大變に綺麗である。建築は何れも長方形で、上圖の様に見えるものもあるが、多くは柱間が吹放しで、拱は花頭形、即ちサラセン建築の多葉拱とし、軒の出多く平屋根で、四隅の屋上に小塔を設く、總て水に投影し、其美を撞にしている。池の周囲も亦大理石を花形に刻んだもので築造してある。

(昭和十一年二月四日)

(昭和十一年二月四日)

四五. シーダラのシハンギル王廟。(昭和十一年二月四日)

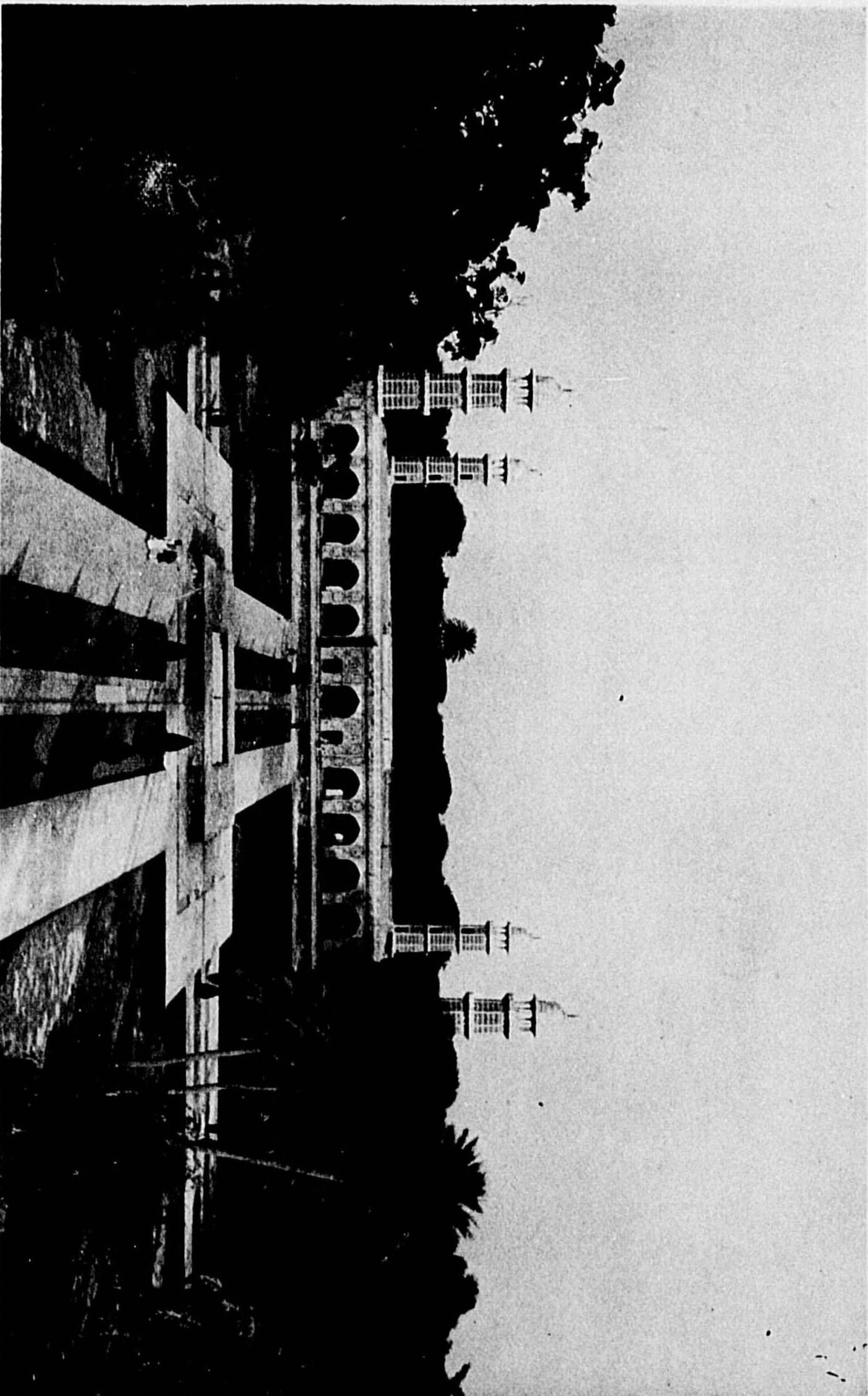
シーダラ(Shidar)驛はラホール驛を距る西方五哩、こ
から廟迄一哩四分の一と案内書にある。地圖で測るとラホ
ール驛から五哩四分の一で、どこか少し間違がある様であ
る。これはシーリヤール湖池とは正反對の方向にある。

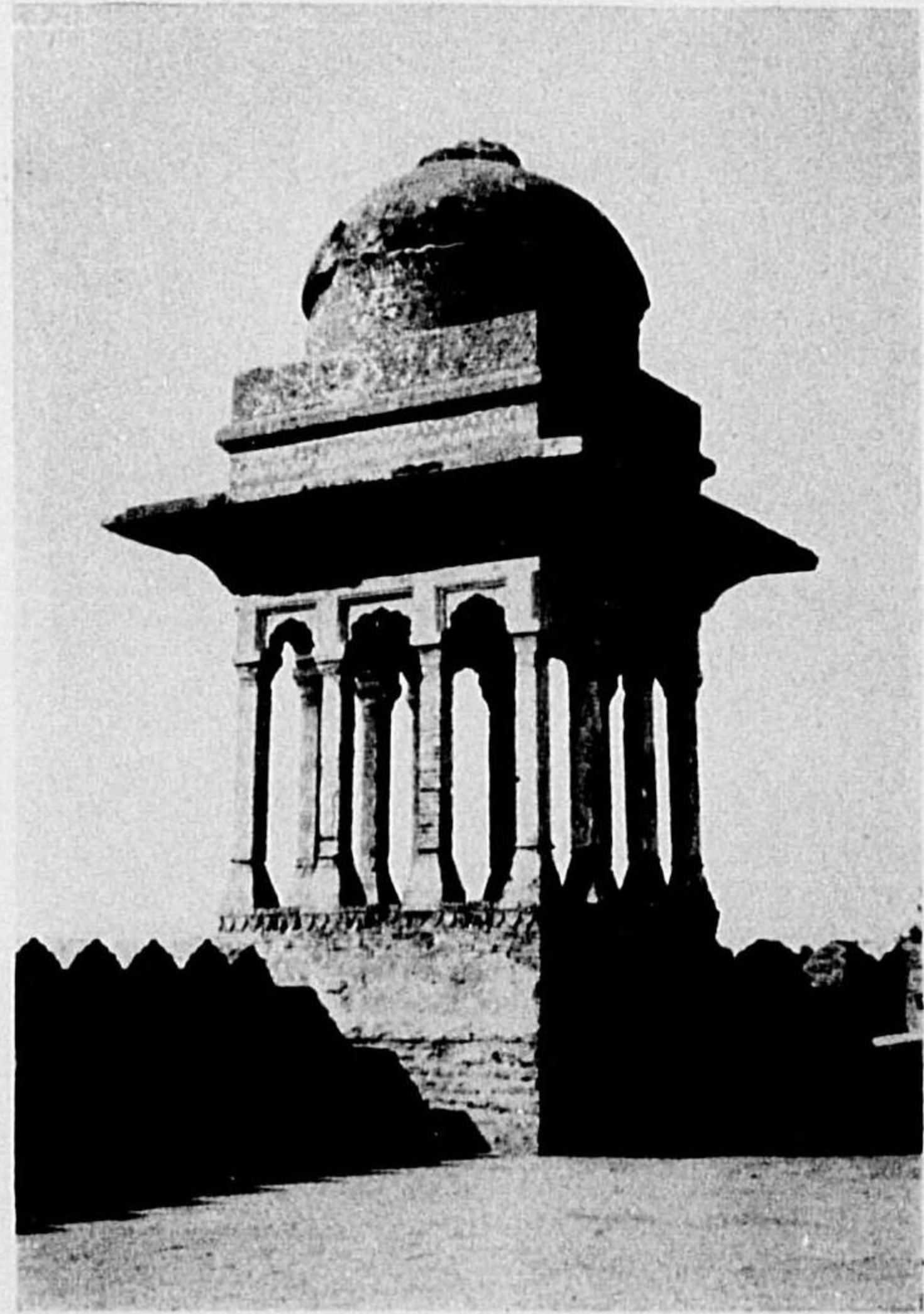
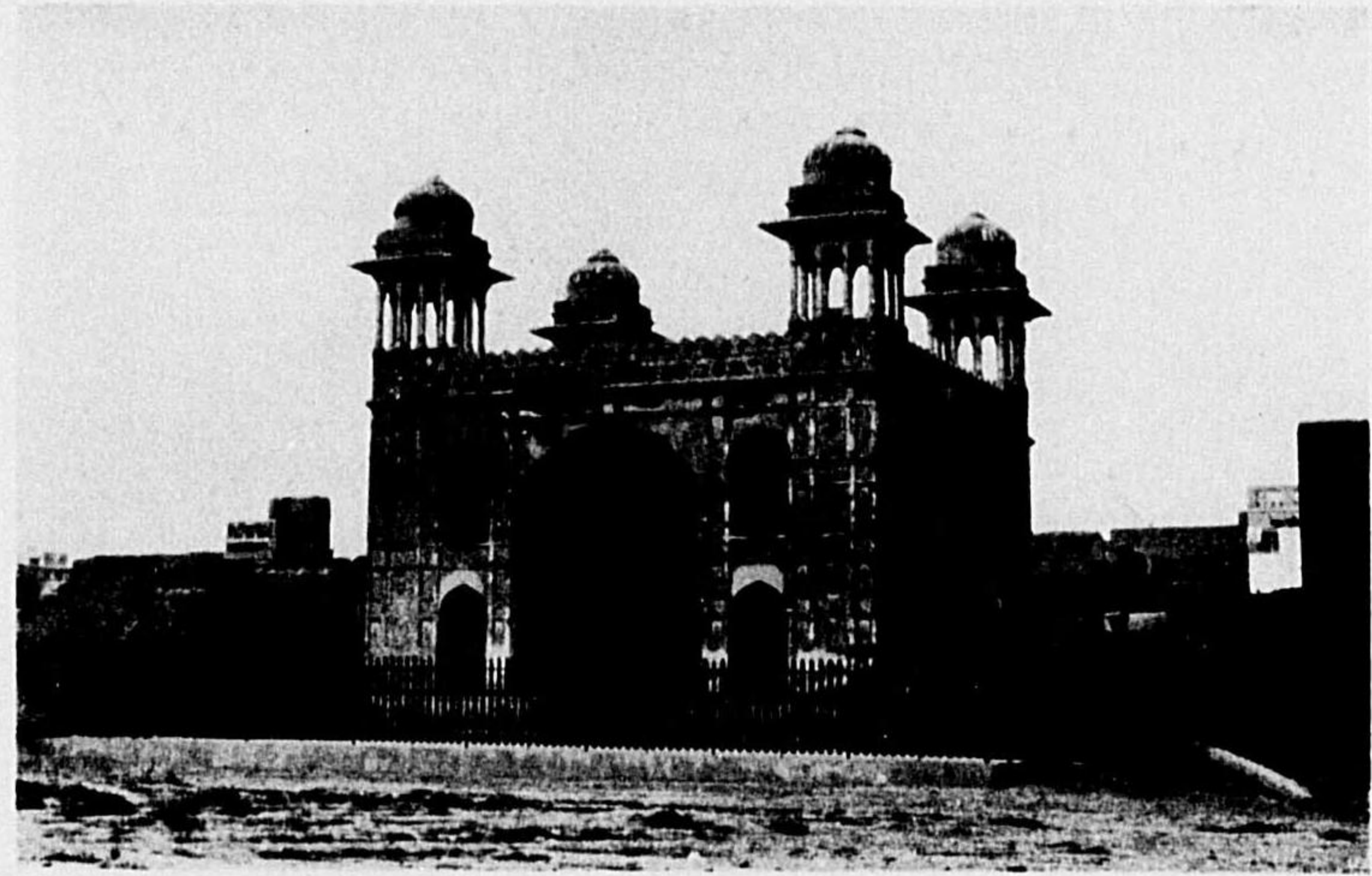
シハンギル王は既記の通り慶長十年から寛永四年に亙り、
在位二十三年、其廟は圓の如く廣びるとした構内にたち、平

たい建築で、四隅に高い光塔一基を備へてゐる。だから其外
觀は甚だ特な形をしてゐる。光塔の高さ各九十五尺で階數
は四。案内書によると、中央墓室の上に小亭がある。あるが、
現在は何もないから、どうも少しばかり物足りない様な氣が
する、餘り淋しい。四角な平たいもの四隅に光塔があるだ
けだから、大入國の客間用の机をひっくり返しておいた様に
見えなくもない。

内部中央の墓室は八角形で、白大理石の記念碑が安置して
ある。其四方には透彫の美しい障屏をおき、天井から下げて
ある燈はコタール州の土侯夫人の幟納といふ。
前回此廟へ行つた時は、番人が心附を要求すること實に入
念で、うさくて非常に困したが、少し改良ができたと思へ、
二度目はその様なことは全くなかった。

四五





上、四六。ラホール郊外ゼアンニッサ・ベガム墓全景。

(昭和十一年二月四日)

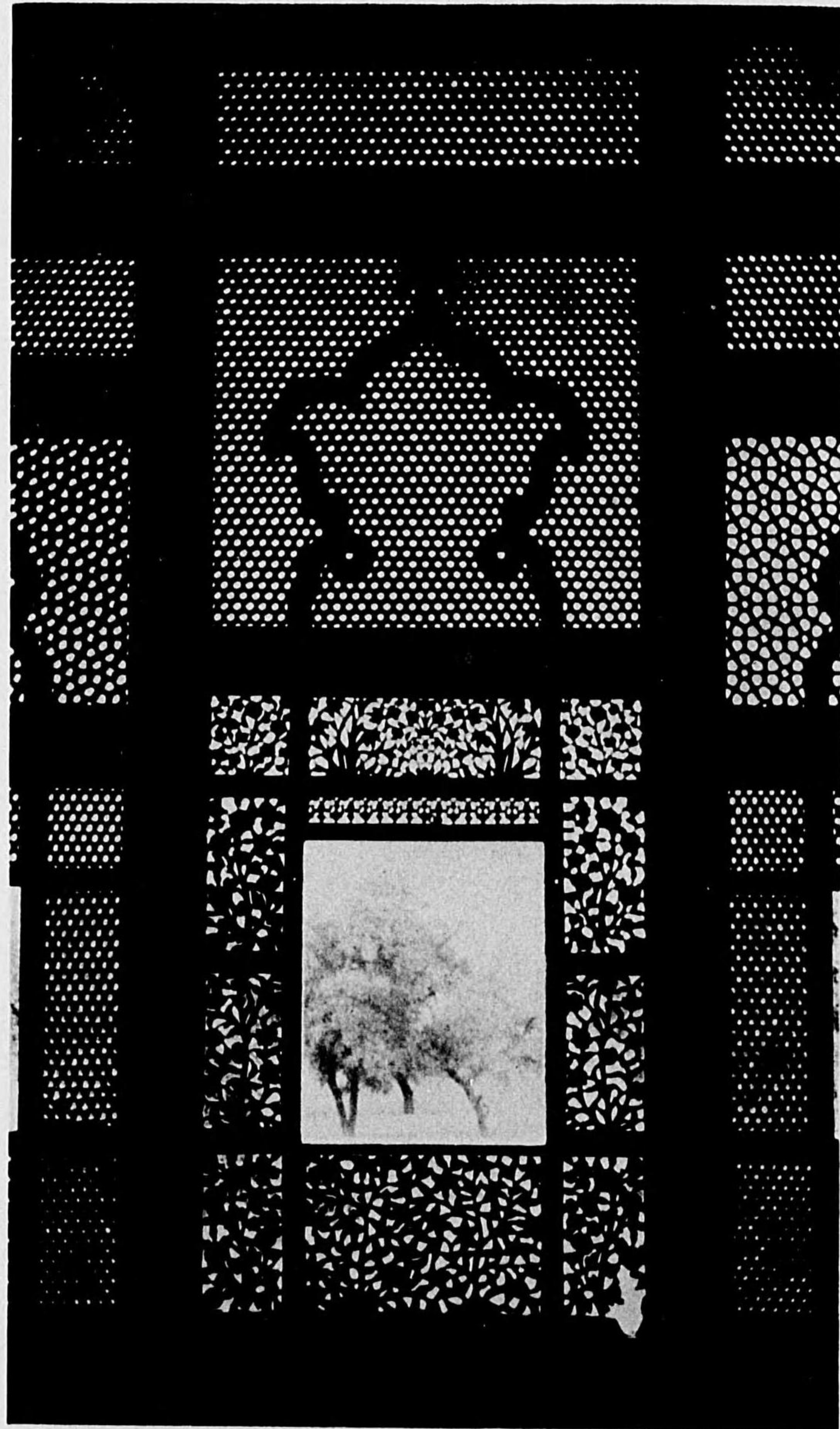
下、四七。同

屋上小塔。

(昭和十一年二月四日)

ラホール市の西南、ラホール驛から約三哩半、ムルタン街道を行くと、「四塔門」がある。「チャウブルジ (Chaubutji)」といふ。今塔は一基を失ひ三基だけだが、あたりは頗る混雑をしてゐる。其門を右手に見て更に同じ街道を一哩行くとナワン・コト (Nawan Kot) といふ村に出る。その村にゼアンニッサ・ベガム (Zahunnissa Begam) の墓がある。

此墓のある所も、現在は大分ちぢむさく、墓も往來から樂に入れないで、大して美しくない所を少し歩かなければならない。此人はオーランゼーブ (Aurangzeb, 西紀一七〇七年(寶永四年)死)の娘で、一六六九年(寛文九年)、父に先だつ三十八年に死んだのであるが、青及び緑色の瓦で化粧してあり、墓其物は甚だ美しく、窓の狭間飾は大部分は龜甲つなぎとし、或は花頭形を入れ、又は他の幾何模様を入れて裝飾してある。



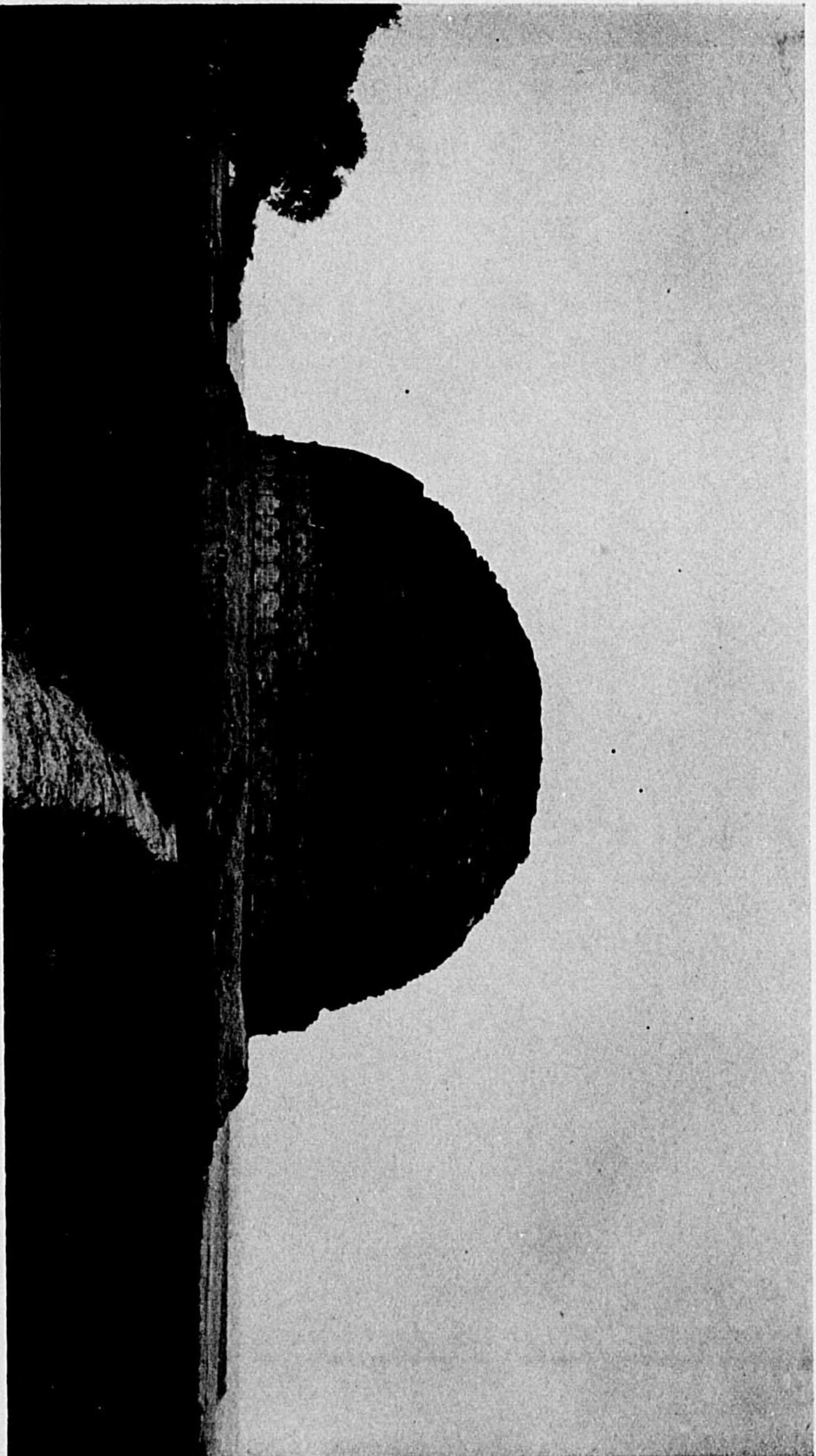
四八。ラホール城内宮殿窓部分。

(昭和十一年二月五日)

改めて述べる迄もなく、ラホール城内の舊王宮には、拜観すべき幾多の建築があり、これまた大急ぎでは何にもならないのであるが、夫はやむを得ないとして、ここには窓の狭間飾を一つ掲げておく。

王宮の西北隅に「サマン・ブルジ」(Samana Buri)と呼んでゐる一廓がある、ところが其名は割合に近世のこと、元は「シャー・ブルジ」(Shah Buri)即「王塔」といたさうである。「サマン」とは暴夜語ムサマン(Musamman)の略で、八角の意だとある。此一廓の室が北方へ隅切りに張り出してゐるので、八角塔といふ様なことらしい。此室の一部にシャー・ジャハン(Shah Jahan)の即位の第四年、即西紀一六三二年(寛永八年)から一六三三年(寛永九年)にかけて落成した刻文があるさうである。

此一廓の北の室は「シーシュ・マハル」(Sish Mahal)即「鏡御殿」といひ、總てが同時代でないとしても、天井から壁一面に硝子嵌細工を施して、甚だ美しいが、その部分から、西北側に廊の様な袖が出てゐる。其袖の柱間に窓があり、例により例の如く大理石に手の込んだ透彫をしてゐる。圖は其窓の一部で、また全形としては、左右と上と同じ様な透彫がある。此圖録にも二八・三三・三六・三七・七四・等に覚えてゐるが、もと立派なのが他にいくらかもある。アグラ及びファータープール・シクリの等、恐らく見物人は何れも驚異の目を睜るであらう。



四九。マニカラ塔。
（昭和十一年一月二十八日）

印度國西北、亞富汗國に近き重要都市、ヘンガリー・カントメント驛を距る二百二十四哩、ラホール驛からたと二百六十三哩にマニカラ(Mankara)といふ驛があるが、田舎の寒驛のせい、急行車は停らない。このマニカラ驛の近くで、僅に二哩の距離にマニカラ塔(Mankara Top)といふがある。昭和十一年一月二十八日に、漸くの事で此塔の見學をした。

實は一月二十三日、サンチからグワリヤへの汽車中で、偶ま同席した英人に、此塔はどこから行くのが最もよろしいかと尋ねたら、此人は三十年も印度にゐるといひながら、そんな名の塔なんか聞いた事がない。併しラウルペンデからラホール迄は立派な道があるから、多分車で行けるだらうといつた。

私は一月二十七日、マニカラ驛を急行車で通過したが、目的の塔は車窓から一面に年後の日光を受けては、まりと見えた。思ひ切つてラウルペンデ(Rawalpindi)驛迄行き、同市に一泊し、翌日自動車で往復した。車たと塔の基礎の所迄のりつける事ができる。少し金と時間とはかかるが、將來この塔へ行つて見ようと思ふ諸君は、私の試みた方法で見學するのが、最も簡單ではないかと考へる。

塔の現状は圖の如く平頭以上を失ひ、野原の真ん中に寂しく建つてゐる。伏鉢は眞の半球形で、直徑二百二十七尺、基礎約二百六十尺、四方に階段があつて、幅十六尺の禮拜堂に登ることができ。この上下、即基礎及び伏鉢の下部側面には、等間隔に配置された片蓋柱を以て裝飾されてゐるが、これは周圍の玉垣を簡略化したものと考へられてゐる。この片蓋柱は我國に於ける古代須彌壇東石のもの如く、塔の化粧に用ひられてゐる右から刻み出されてゐる。其片蓋柱の一に「Pillar No 189」(明治二十年復原)と三行に書いてあつたが、どうも柱頭等は推定復原であらうと思はれた。此塔は西紀一八二五年(文化十二年)以來追と研究調査が進められたが、現在の外郭は第八世紀の初期らしいといふ以外は、餘り剩つてゐない様である。

五〇、タキシラに於けるシルカワの遺址。
(昭和十一年一月二十九日)

タキシラ(タキシラ)驛はラウルベツ驛から鐵路僅に二十哩、急行車だと四十三分

達する。つい先頃迄サライ・カラ(タキシラ)といつてゐたが、其後改名して今の名

になった。この町には公立宿舎はあるが、前以て手續をおかかないと、到底宿泊し

得る見込はないから、驛の待合室で泊り、驛の食堂で食事をする様にせねばならぬ。

此所は古の希臘印度王の都城のあった咀又始羅(タキシラ、タキシラ、タクシ

ラ)國の廢墟が、殆んど全部とじていい位に發掘ができてゐて、至極容易に見學が

できる。簡単な馬車(トツガといふ)を雇つて悉覽するに、急げば一日、普通二日もあ

れば充分。尤もこれは単に見物程度と知るべきで、研究するなら別問題たる事いふ迄

もない。私は前日に二日、今回二日、合計四日で一通りします事ができた。

タキシラの遺址には都城址が三ヶ所ある。最古のはビル丘(Bir mound)と呼び、

これは驛前で眼と鼻の間の所、次は少し離れたシルカワ(タキシラ)と稱する一區域

これはタムラ川(タキシラ)東岸と、其支流ダ川(タキシラ)とに圍まれた部分で、

ここには宮城・神殿等の址もあり、民家も町の有様もよく判る情態に保存されてゐる。

第三はシルカワの東北約一哩にあるシルカク(タキシラ)で、これは第二世紀に貴霜

(タキシラ)王朝の有名な迦賦色迦王(タキシラ)の建設したものと考へられてゐる。

其他各種の遺物があるが、塔婆としてはタムラ川塔・クナラ塔(これはシル

カワ遺址の東端丘にある)・ペーラ塔、殿堂としてはタムラ川塔・シラワラ・

モーラモラ等、是非其見學しなければならぬ。これ等の他に考古陳列館の列

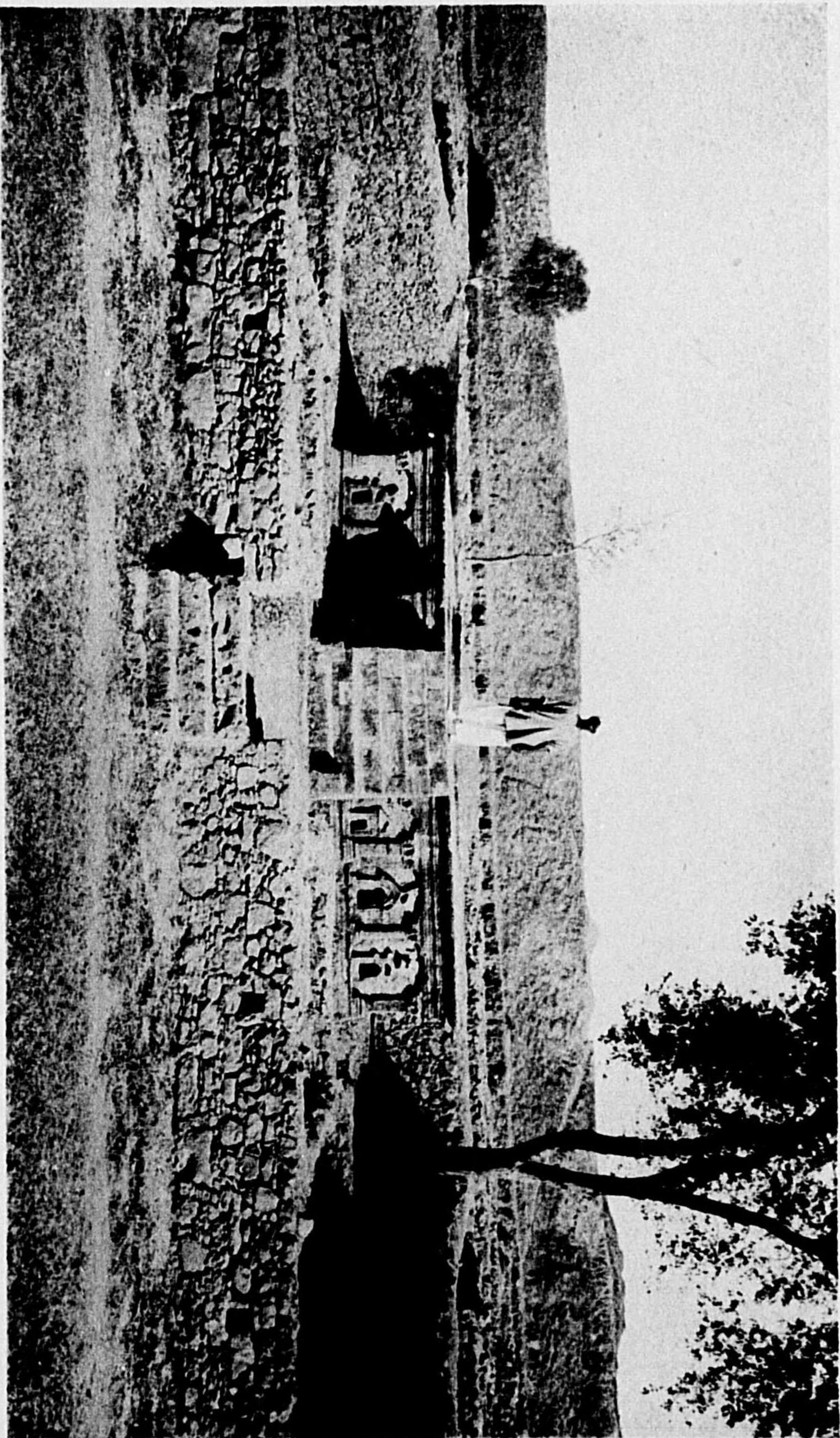
品も見逃してはならない。

圖はシルカワ都城の一部の寫眞であるが、ここが最も面白く、次圖に掲げた雙頭

鷹殿も此町にある。ともかくも其善玄葬三祇がこゝ來た時「伽藍ハ多シト雖モ荒蕪

スルコト已ニ甚ダシ」かつたのだから、今これ位置遺址があるのはいい方であらう。





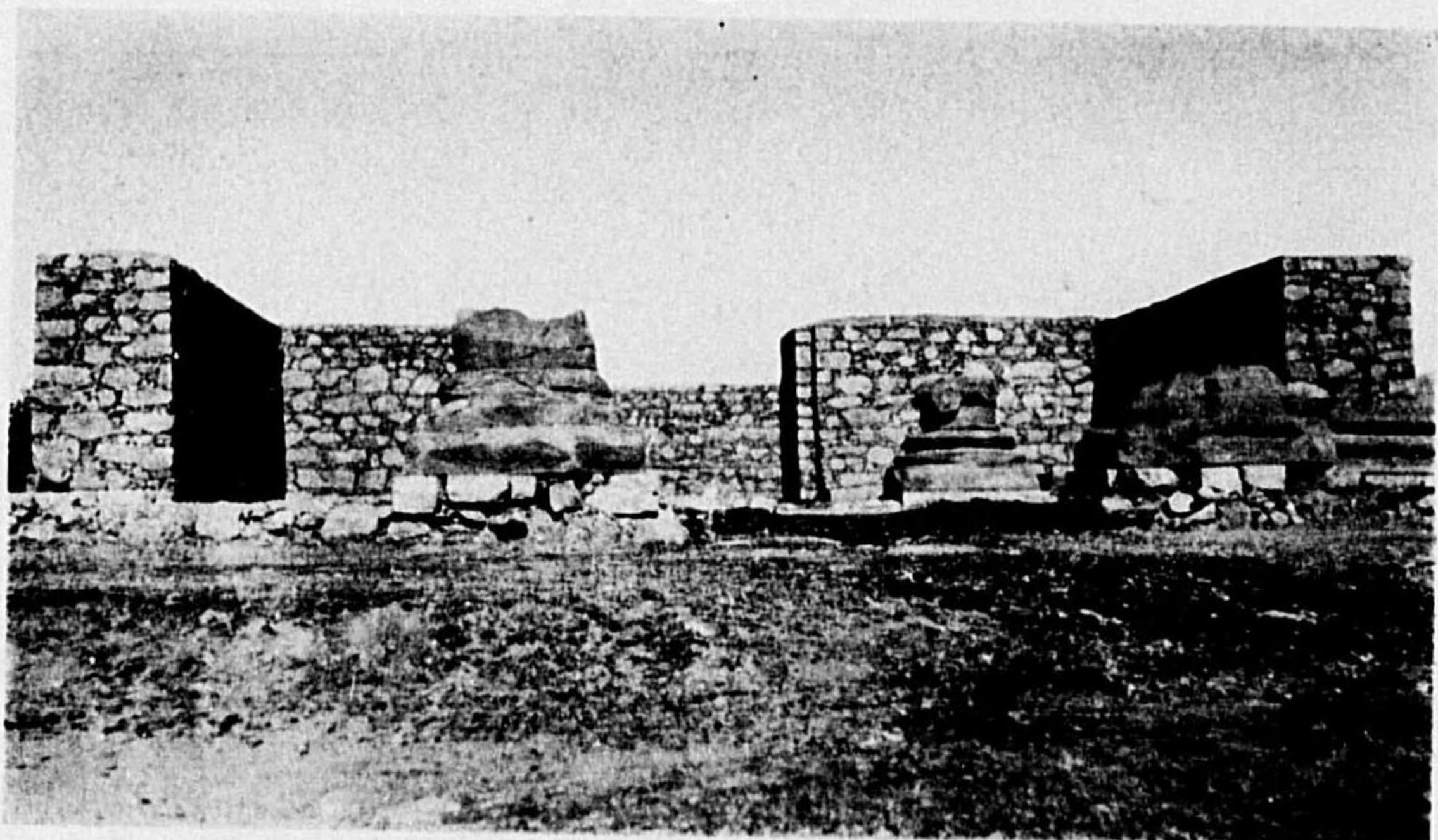
五一。タキシラに於けるシルカプアの雙頭毘殿正面。

（昭和十一年一月二十九日）
シルカプアの遺址は、現在は北より出入する様にしてゐるが、道路即ち其昔の町の中央には溝をほり、排水をよくし、其兩側に家をたてたのであるが、各家屋の石壁の積み方等にもいろいろ面白い點があり。これまた相當に詳しく觀察するためには、短時間で不十分である。

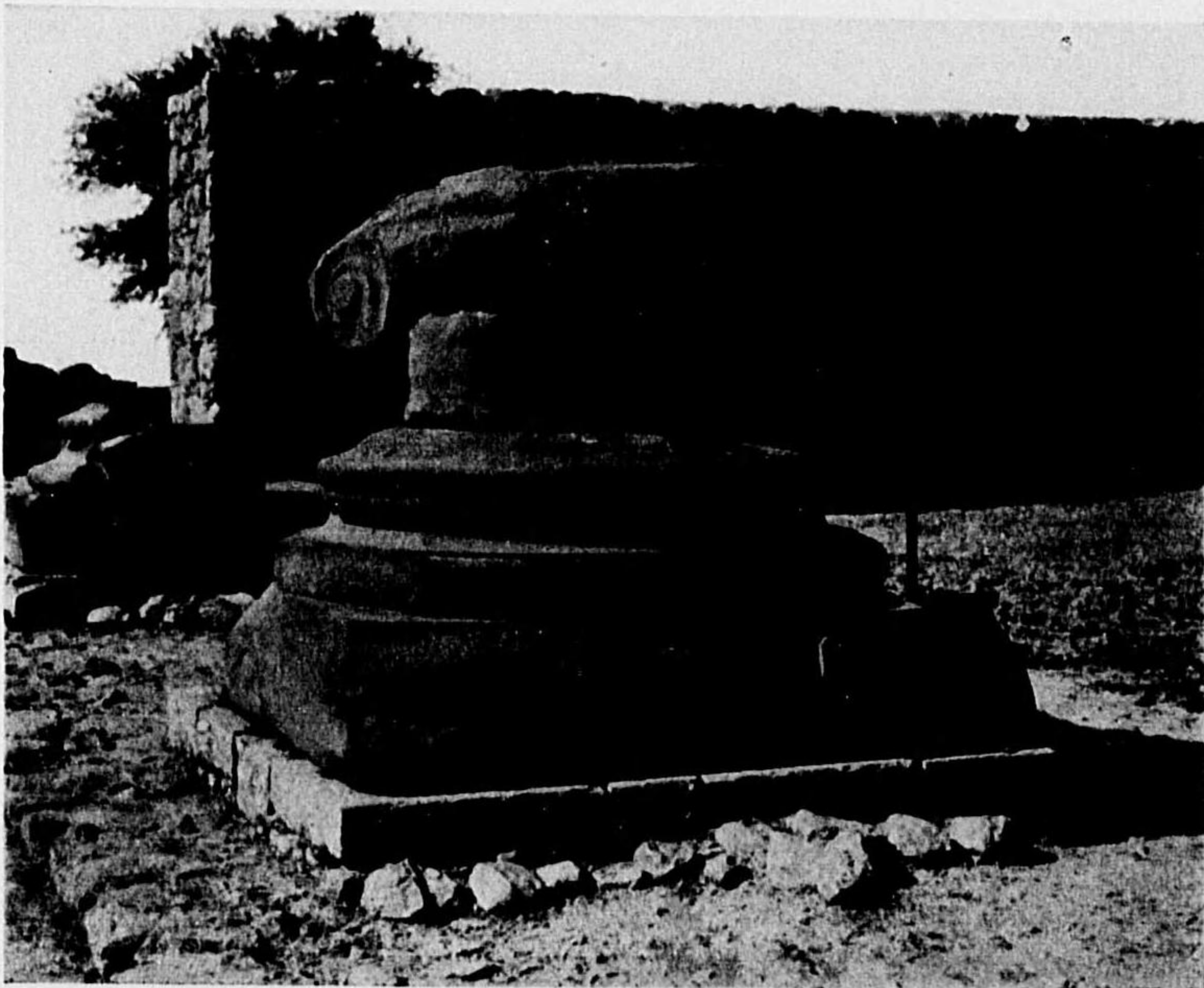
町のうちで私が最も面白いと思つたのは、此所に圍示した建物で、現在では基壇が残つてゐるだけであるが、正面六級の石階の左右、片蓋柱の間に現はされた龍は、左右に夫夫三つづつあるが、何れも其形を異にしてゐる。其兩端から内へ二つ目のものは、上が惣花形をなし、其頂上に雙頭の髻（？）を厚肉に刻みだしてある。これは驚くべきかも知れないが、先づその様な形だから、この建築を「雙頭髻殿」としておいた。この雙頭髻龍の外方は、純印度式で上には一羽の鳥を刻みだしてあり、内方即ち正面階段左右のものは、古典建築式三角形の切妻、即ペンダメント（Pediment）に終つてゐる。さうして其區劃をなしてゐる片蓋柱も亦コリント式（Corinthian Order）を用ひてゐる。尙ほ此興味ある龍は正面にのみあり、側面には方形に積みだしてある片蓋柱だけで、正面中央の様な圓形のものはなく、又背面はどうなつてゐるか隠れてゐる。然然しない。【タキシラ案内記】の挿圖には、基壇上中央の圓形の部に、雙頭形に土を盛りた寫眞が出てゐるが、其後この盛土は除去したものの如くである。

正面右階左右のこの三個の龍の裝飾は、謂ゆるカンタラ地方の希臘印度式を最もよく現はしてゐる。右階に近いもの、ペンダメントの笠石に縁形がなく、其勾配も急に過ぎ形は頗る不満足であるが、古典建築の模寫である事は否めない。次の雙頭髻龍の髻は【タキシラ案内記】によると、古代のヘテ人（Hittite）の彫刻に現はれ、後ヌキタイ人（Nusaites）に賞用され、この地方に輸入したのは恐らくヌキタイ人であらう、さうして後に印度國に於いてはビジャヤナガール王國及び錫蘭島に分布されたといつてゐる。其次即最外のは印度のトラン（Tran）型、サマシ丘の塔婆出入口の石門式（二二三六）で、此三個の龍が希臘と印度の藝術を如何に現はしてゐるのである。

五二



五三



上、五二。タキシラのジャンジアル堂全景。

下、五三。同。

正面柱詳細。

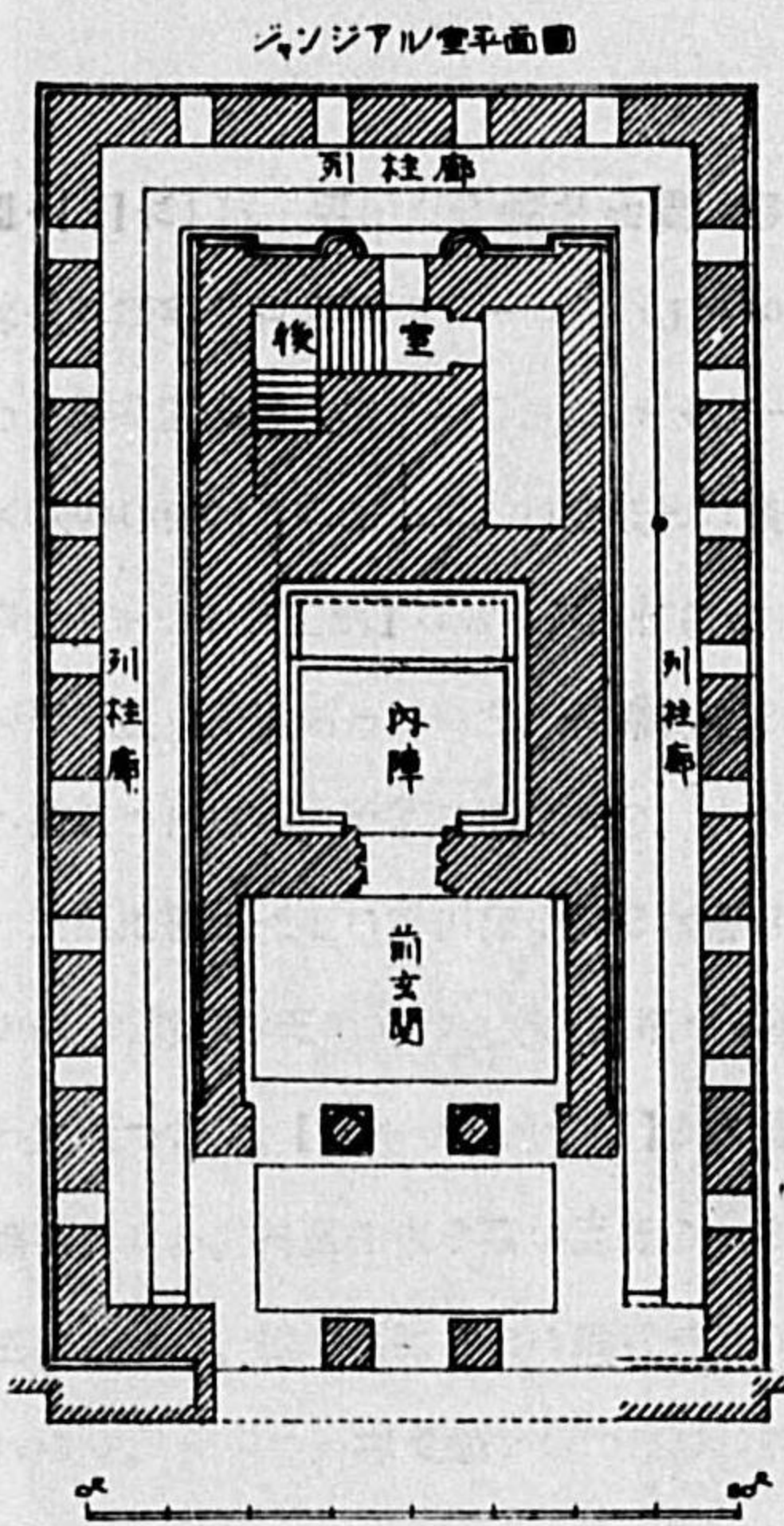
(大正十一年十二月十八日)
(物差は曲尺の一尺・昭和十一年一月二十九日)

シルカップの遺址の更に北方に當るが、道路は先づ東北に進み、左折して西北に少しばり行くと、土地は爪先上りになって、そこに一殿堂の廢址がある。ジャンジアル(Jandial)堂といふ。挿入平面圖でみる様に、後方の一部を除いては純然たる希臘式殿堂で、正面には二本のイオニア式(Ionic Order)柱のある事五二・五三兩圖に見るが如くである。基礎は謂はゆる「アチック・ベース」(Attic base)であり、柱頭にはイオニア式渦文を有してゐるのは、下圖に於いて一層明かであらう。

此殿堂は古く西紀一八六三年から四年(文久三年から元治元年)にかけて、カニングムがほんの表面から調査をしたが、地面から七八尺の位置に大建築の壁跡を發見し、古殿堂であらうと推定をしたが、後の調査で彼の考への正しかった事は確かとなつた。併し彼が發見した壁跡は後

タキシラ遺址より

五二・五三



世のものであり、古壁は更に八九尺地下に埋設してゐたさうである。

此堂は周囲の地所より約二十五尺高く位置し、シルカップの北門に對してゐた。此殿堂が古希臘の夫と異なつてゐるところは、内陣(Inner Sanctuary)後方が一室をなさずして、全部石を積み、階段を設けてある事で、種種の點からここには約四十尺の高さに達する塔が建つてゐたといふ風に推定されてゐる。塔はどの様な意匠から成つてゐたか判らないが、この様なところにも亦、希臘印度式が現はれてゐるから甚だ面白い。

五四



五四。タクチ・バハイの町風景。

(昭和十一年一月三十一日)

タキシラ驛から數へて十二目にノウシユラ (Nowshera Jn) といふ驛がある。急行だとタキシラとの間に一驛停るだけで、二時間と六分かかる。途中インダス河に架した鐵橋を渡る時は甚だ絶景である。

ノウシユラからヅルガイ (Durgai) 間四十一哩、重要な線と見え、標準軌間の立派な汽車が運轉してゐる。ノウシユラで乗換て六つ目、哩數二十四、時間は一時間半、タクチ・バハイ驛 (Takht-i-Bhai, Takht-i-Bahai) 驛に達する。驛を出て左に行くと町にでる。五四は此町の風景で、歸りがけであつたが、交通が餘りに亂雑であつたのと、風俗が面白かつたのと、街路が粉末の乾燥泥土で渾濁濛濛としてゐたのと、跣足が多くて履物をはいてゐるのは數へる程しかなかつたので、記念に一枚とつたのが即此。

五五



五五。タクチ・バハイの廢寺のある山。

(昭和十一年一月三十一日)

上圖解説中に記した通り、驛を出て左折すると町になるが、夫を途中から右に曲り、もう一度右に曲ると、少し線路より離れはするが、線路に沿ひて逆戻りをする事になる。さうすると汽車中から右手に見えてゐた秃た山脈、圖に見る如き山脈は、今度は左になる。此山脈の終らうとするあたり、即右端に近い頂界線に少し凹所が見えてゐる。つまり此寫眞の右端から、曲尺ではかると一寸五分位の、少し陰影のついてゐる鞍部を向ひ側へ越して、右へ曲ると廢寺址(五六・五七)へ出るのである。つまり廢寺は頂界線の向ふ側になつてゐるから、こちらからは見えない。

山へ登るのは羊腸たる小徑を行くのであるが、手入も行届き割合に歩きいい。だから大概普通の體格の人なら、誰でも割合に樂に行ける。

五六、タクチ・バハノ廢寺址 其一。(昭和十二年一月三十日)

タクチ・バハノ (Taktchi-Bahano, 正名不明) とサリリ・ベロル (Sariiri-Berul) の見學は一日で一通はできる。私はノウウツラの公立宿舎(タクチ・パンガロ)に滞在し、汽車で往復した。勿論時刻表は一定不変のものでないから、何

もなるまいが、マア参考のために書いてみれば、八〇五ノウツラ驛發、九・三〇六目的驛着、正一〇・〇〇徒歩で驛を出て寺址を見學、一三・四〇下山の途に就

き、一旦驛に歸り、馬車を雇つてサリリ・ベロルの廢掘址を見に行き、再び驛へ歸つたのが一六・〇〇、二時間休んで一八・〇〇の汽車へのり、一九・二ノウツラ

に歸着をした。こんなであつたから、時間は充分ある。但し辨當を飲料を忘れてはならない。私はつい四日前、大切な魔法瓶を盗まれてしまつたので、タクチ・

バハノ驛で驛の工夫を一人雇ひ、藥箱に飲料水を入れたのを持たせ、傍ら道案内に連れて行つた。さうして從僕に夫を湧かさせ、晝食の時紅茶を入れて飲んだか

ら、何の差支もなかつた。以上寺の廢址と別に關係はないが、全然先づくりで手薄な準備で知らない土地へ出かける時は、見當がつかないで困る。今ほとん

く、將來この邊へ行つて見まうと思ふ諸君の參考にもと書きつけておいたのである。又一方、昭和時代にこゝへ行つた時は、この様であつたかといふ記録にもな

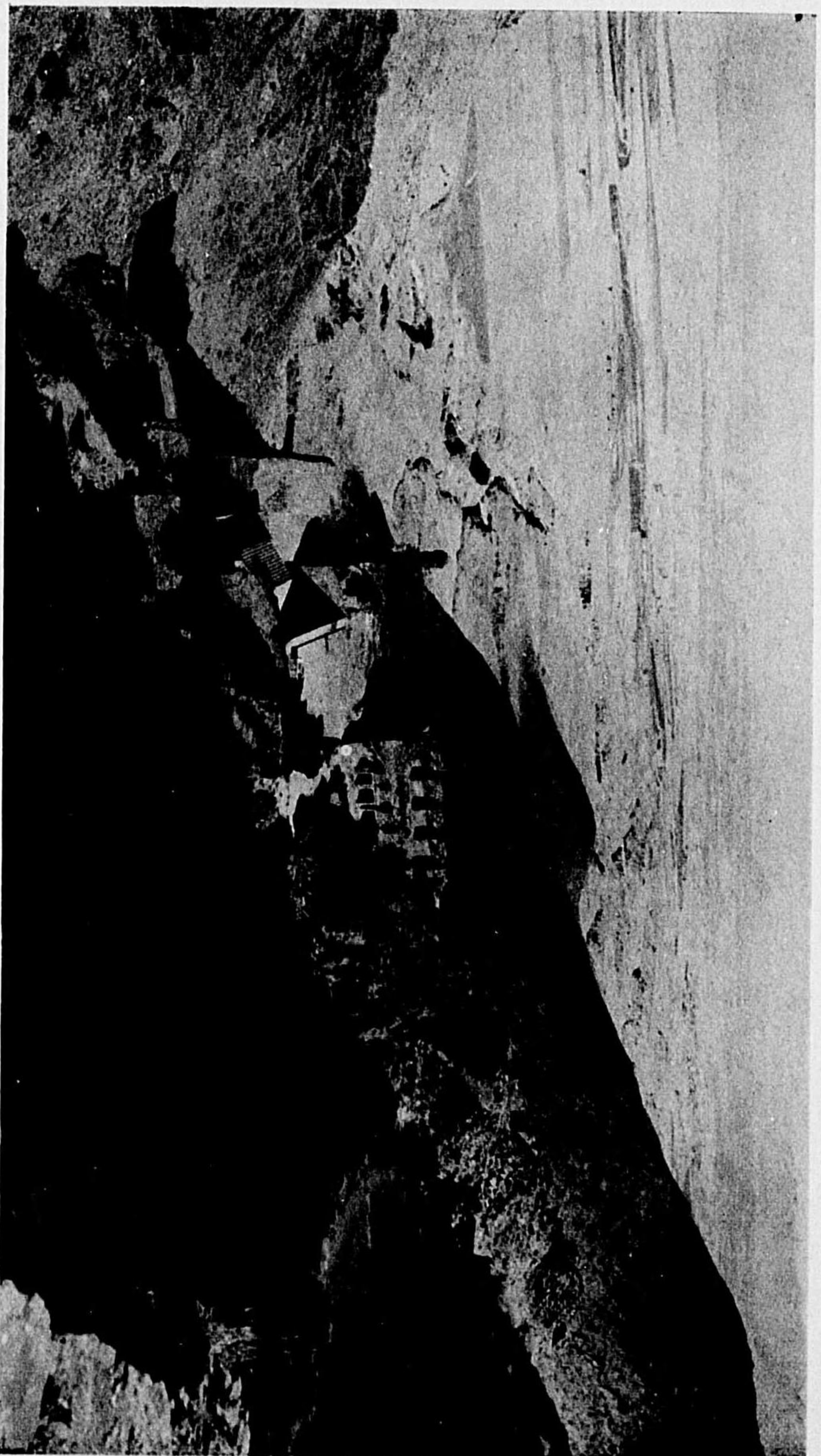
らと思つたから。
* * * * *
タクチ・バハノの寺址は、フーガソンの【印度及び東洋建築史】にも、其面平圖がでてゐるが、其後一九〇八年(明治四十二年)、印度國考古局西北圖主任マフ

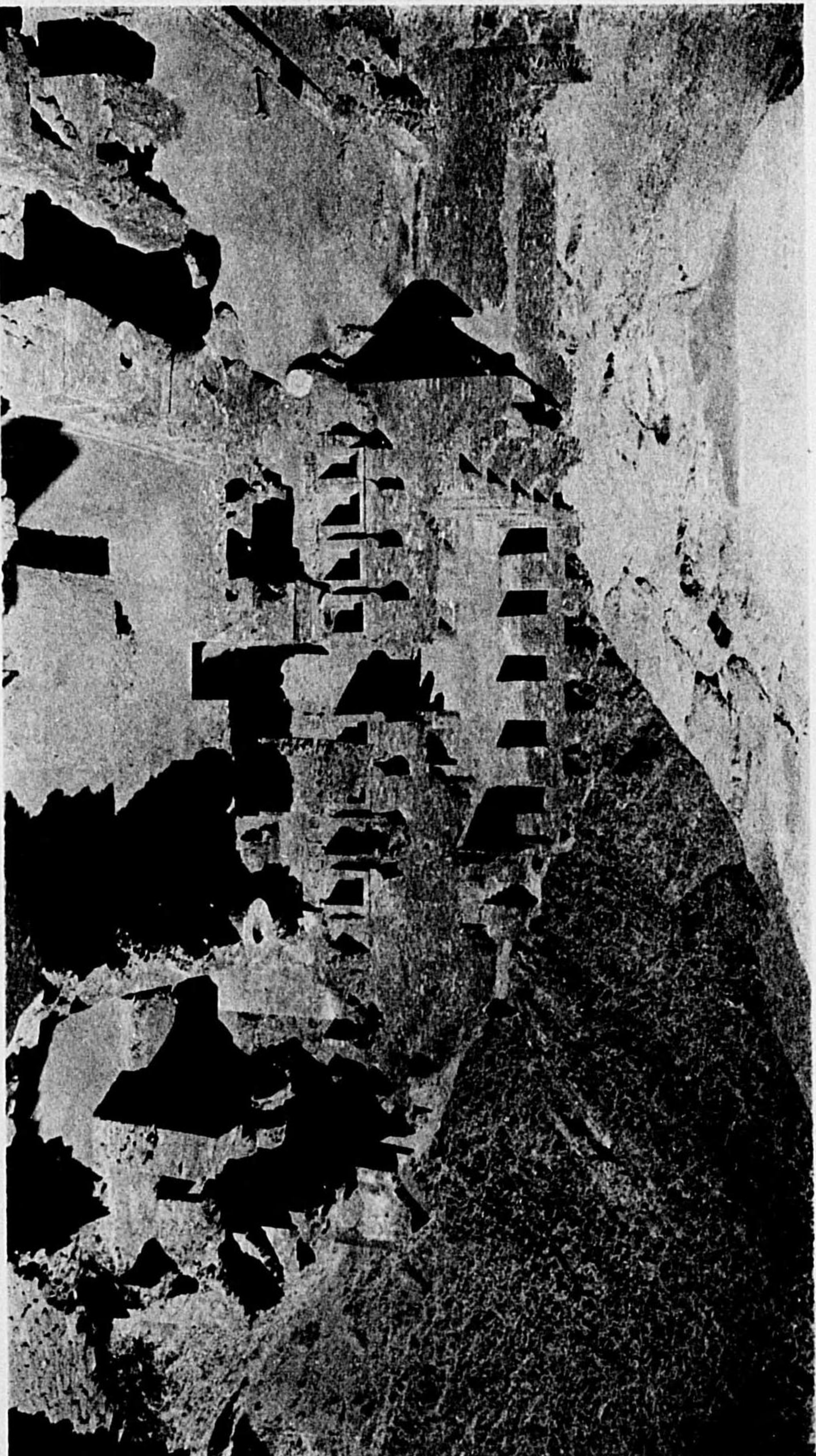
ナト博士の手により大規模の發掘が行はれ、いろいろのものが發見され、詳細な一從來のとは比較にならない程の一圖ができてゐる。これによると主塔婆の

ある一廊(五七)下方中央の邊に見ゆる方形のものが塔婆と、最北端の竹坊の一廊との間にある通路の東及び西の廣場には、主として小塔婆の基礎と思はれるもの

が、數多く發掘されてゐるから、古い圖とは比べものにならない。實に(81頁へ)

五六





五七. タクチ・バハ・聖寺址 其二

(昭和十一年一月三十日)

(78頁より)どうも大變な、大規模のものであったのである。五六はこの寺址の存する山の鞍部を越へて、右へ曲つて前方、即北方を向くと直ぐ眼下に見えたままの右へ曲るより他に道はなく、曲ればこの様な景が眼前に展開するのだから、こ

こ迄遙かゝつて来て、決して失望する事はない。暫く進むと下りる道がきて

るて、容易に寺址に達し得るのである。

五七は其南端即主塔の一廓の南端から、正北方をみた寫眞で、これを前圖と比べてみると、其殆んど中央より、稍や右下に當り、大きな建物正面の向つて左端

に、直徑約二耗の白い圓形のものが見えてゐるが、此圖に於いては、すつと左下方により、徑も亦約倍の四耗位に寫つてゐる。これによく見當がついてあらう。更に此俯瞰圖に於いて、主塔が中心となり、其周圍に特殊型式の禮拜堂があり、

正面(即北方)の階段を下り、奉獻小塔婆の林立せる東西兩中庭間の通路を北に進めば、石階を登つて僧坊の中庭に出る。この僧坊南正面右階の左右には、小禮拜所が並び、南折して東側に沿ひ、更に西折し、此等は夫夫西面及び北面して、奉獻小塔婆のある中庭の三方を隈つてゐること、圖を見て知るべきである。

一般に健甌羅地方の伽藍は、常に塔婆と僧坊とより成る。先づ最初に圓形又は方形の一廓があり、塔婆を中心とし、周圍に小禮拜堂即小籠があり、佛菩薩の像を安置す、次に小籠をおいた一廓があり、同じく彫像等をおく、さうして其外は僧坊で、これも亦この公式通りである。

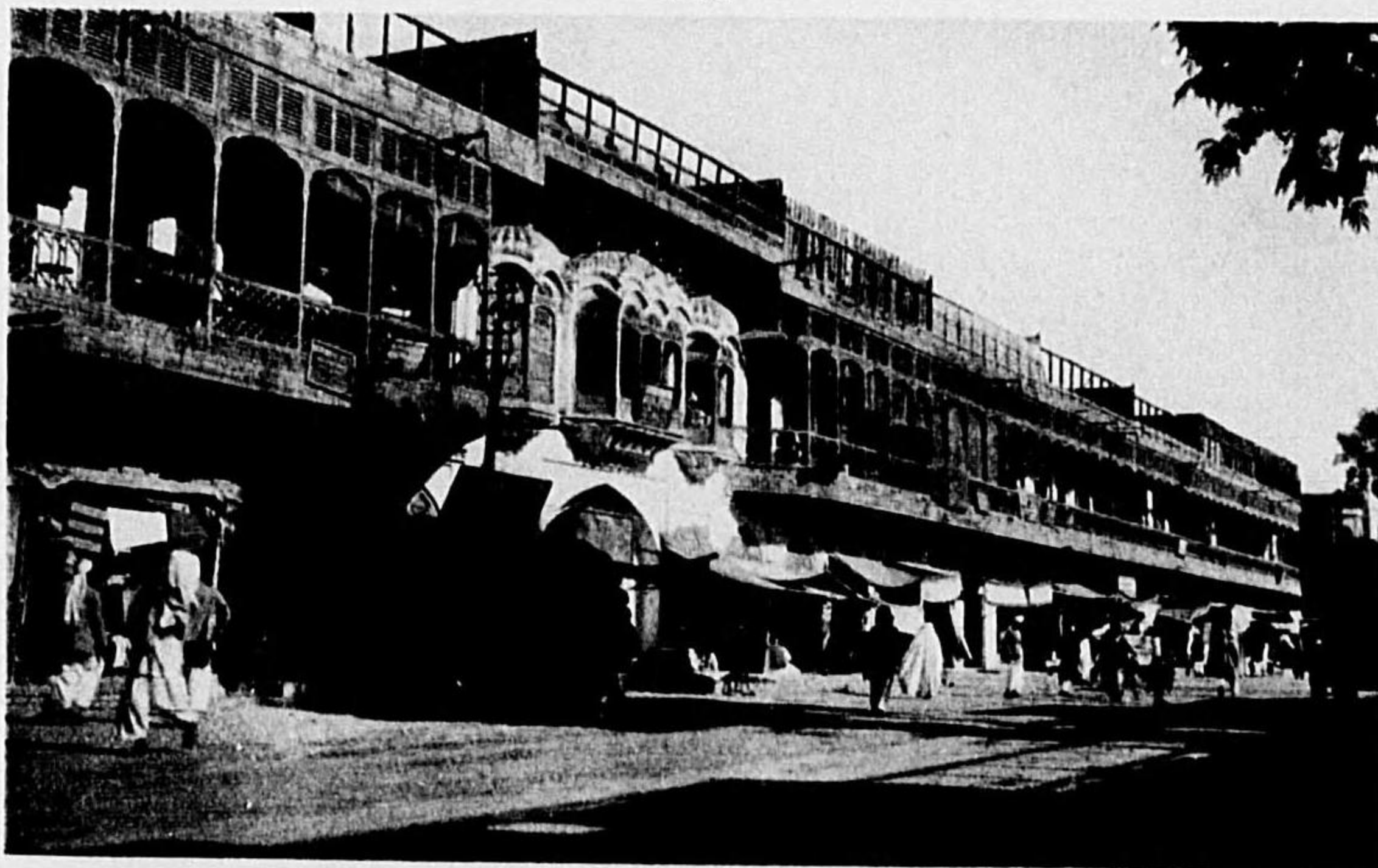
此場合塔婆區の主塔は、基壇一邊約十五尺、前方即北方にこの基壇に昇降する

ための石階がある。これが健甌羅やベンジナ地方の塔婆の特徴の一で、シムカ、

アの遺跡にあるクナトラ塔も、モヘンジ・ダロの塔も同様である。其他此境内に

も精巧な塔婆の基壇もでたし、他に面白いものも多々あるが、今は全部省

略しておく。



上、五八。ベシヤワー市俯瞰。

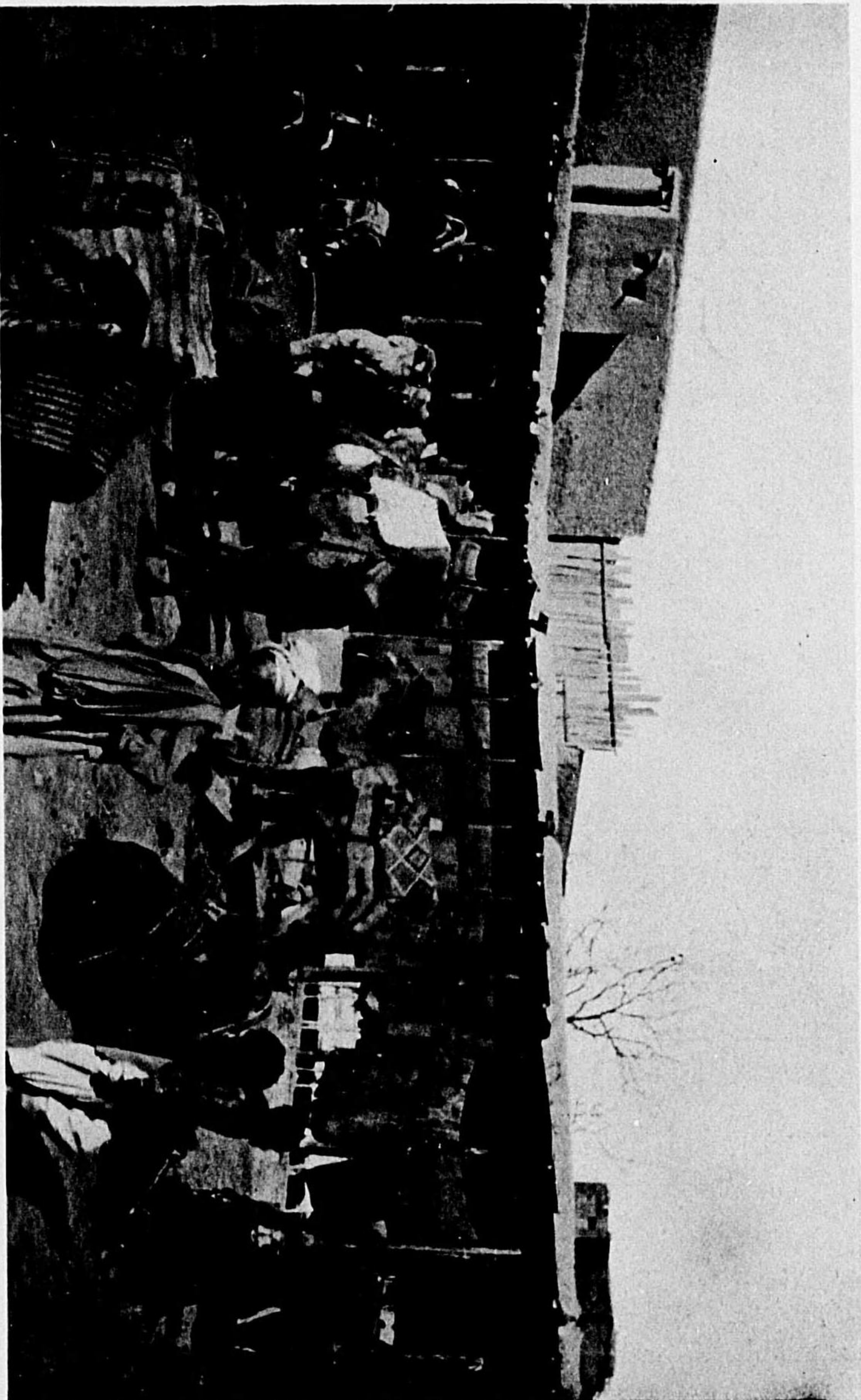
下、五九。同 市街一部。

(昭和十一年二月二日)
(昭和十一年二月二日)

今更事新しく述べるもなく、ベシヤワー(Peshawar)は印度國西北分の重要都市であるが、ここは即往昔の布路沙布邏(Po-lu-sha-pu-lo, Purushapura)で、【法顯傳】には「弗樓沙國」としてあるもの、

【大唐西域記】には健駄邏國の首都として、「國の大都城を布路沙布邏と號く、周四十餘里有り。王族の嗣は絶へ迦畢試國(ヒンヅール・クッシ山脈の南方、印度との境、今のカフリスタン(Kafiristan)地方といふ)に役屬せり。邑里は空荒にして居人は稀少なり……僧伽藍は千餘所あり、摧殘荒廢して蕪漫蕭條たり……諸の窰塔波は頗る多く頽圯せり……」とある。

併し現在なかなか盛な美しい町で、五八はゴール・カトリ(Ghor Khatri)と呼ぶ建物の門上から寫した寫眞で、住民の部落が如何に段賑を極めてゐるかが想像できるであらう。五九は市街目貫の大通り。幸にして「邑里荒廢」は昔の夢になつて了つた。尙ほ此地の陳列館は健駄邏美術の寶庫で、迦膩色迦王の塔址出土の舍利容器を藏してゐる。



六〇。ベシクリ市隊商宿の中庭。(昭和十一年二月二日)

隊商宿はキラベンスカリ・キラベンスカリ等といひ、CITYBERRY, CITYBERRY, CITY, CITYBERRY, CITYBERRYともかく、字引には「トルコ・ペルシヤ等東洋諸國の隊商宿で、中央に大きな中庭がある」とあり、更に(Caravan + serai (Persa sera mission; inn)) (研究社、新英和大辭典)とある。マニションといふとは随分の相違があると心得てゐるが、「サライ」といふ言葉には廣い意があり、便利至極な様である。

私はこの隊商宿内部の情態を見度く思つた。實はダマスカス市でも可なり大きなの一つ見たが、果してさうかどうか、どうも勝に落ちなかつたし、又左程の面白味もなかつた。併しこの邊だと隣りのアラガニスタンあたりから勇敢にして猛烈なが出て来るから、定めて心ゆくばかり觀察ができるだらう、といふ見當をつけて出かけた。併しあとで考へてみたのに、單身はいけない。土地の有力者で考古學者なるガイ(Gay)といふ人に、蓋置にゐたあるベシクリが紹介してくださつたのだから、一緒にガイさんに行つて頂いたら都屋等も見せて貰ふ事ができなかつたかも知れなかつたが、何にしろ寫眞を四五枚とるのがよつとで、駱駝のそばへ行つたり、ほしてゐる汚らしい蒲團をはねて室内を覗く事等は、到底及びもつかなかつた。

何にしろこの寫眞の様な有様で、中庭は亂雜極まり且つ頗る汚らしく、甚だ以て非衛生的である。駱駝がかう勝手にゐるのでは馴れないと歩くのにも困り、又甚だ恐縮だが、排泄物等も、其儘といつた有様だから、鯉其他の蟲けりも相當に集つてくるし、又可なり臭氣も高いから、一刻も辛抱はしかねる。けれども汚ければ汚い程如何にも隊商宿らしく、調子は何によくでゐる。アラガニスタンは勿論、サマカニフ・ユルカニフ・ヤルカニフあたり、皆こんなであらうといふ見當がつく。後にベシクリで見たのは、隊商宿は泊つてゐなかつたが、大分美しかつたので、大して似合はなかつた。

六一。ベシワリ市郊外シ・ジ・キ・チーリに於けるカニシカ寺塔の址

(昭和十一年二月二日)

ベシワリ市郊外、程遠からぬところに一寺址がある。こはシ・ジ・

キ・チーリ(五三三三三三)といふ名のところで、馬車で樂に往復がで

きる。カニシカは貴霜(クニシカ)王朝の大王で、世尊涅槃の後四百年、布

路沙布羅で君臨したさうである。此王の名は【法顯傳】には彌伽、大

唐西域記】には迦膩色迦とあり、あとの方はどうやらよめるが、初めの

はただでは讀めない。羅馬字では KUNIKI、KUNIKI 等とあり、はき

りしてゐる。

此所の發掘は一九〇八年(明治四十二年)一月十六日、故マアナー博士

指揮の下に行はれ、翌年にかつたが、塔址調査の結果、非常に大きなも

のであり、一辺二百八十六尺、各邊の中央に凸字形の突出部があり、四隅

には圓形の小塔を有した構造物であつたことが判明した。

仍て址の中央に方二十四尺の部分を取り、細心の注意を以て発掘を續け

たところ、址の中心に放射形に積んだ壁體があり、此壁體の盡きた所に遺

物室があり、今ベシワリ陳列館に珍藏の舍利容器は、此遺物室中にあつた

さうである。貴重品中の貴重品とあつて、今は館長室の金庫内に格納し、

陳列してあるのは右脅でぬいた摸型である。容器直徑四寸高三寸二分、蓋

上には釋迦三尊の立像あり、總高六寸四分。内容は六方形の水晶、王の像

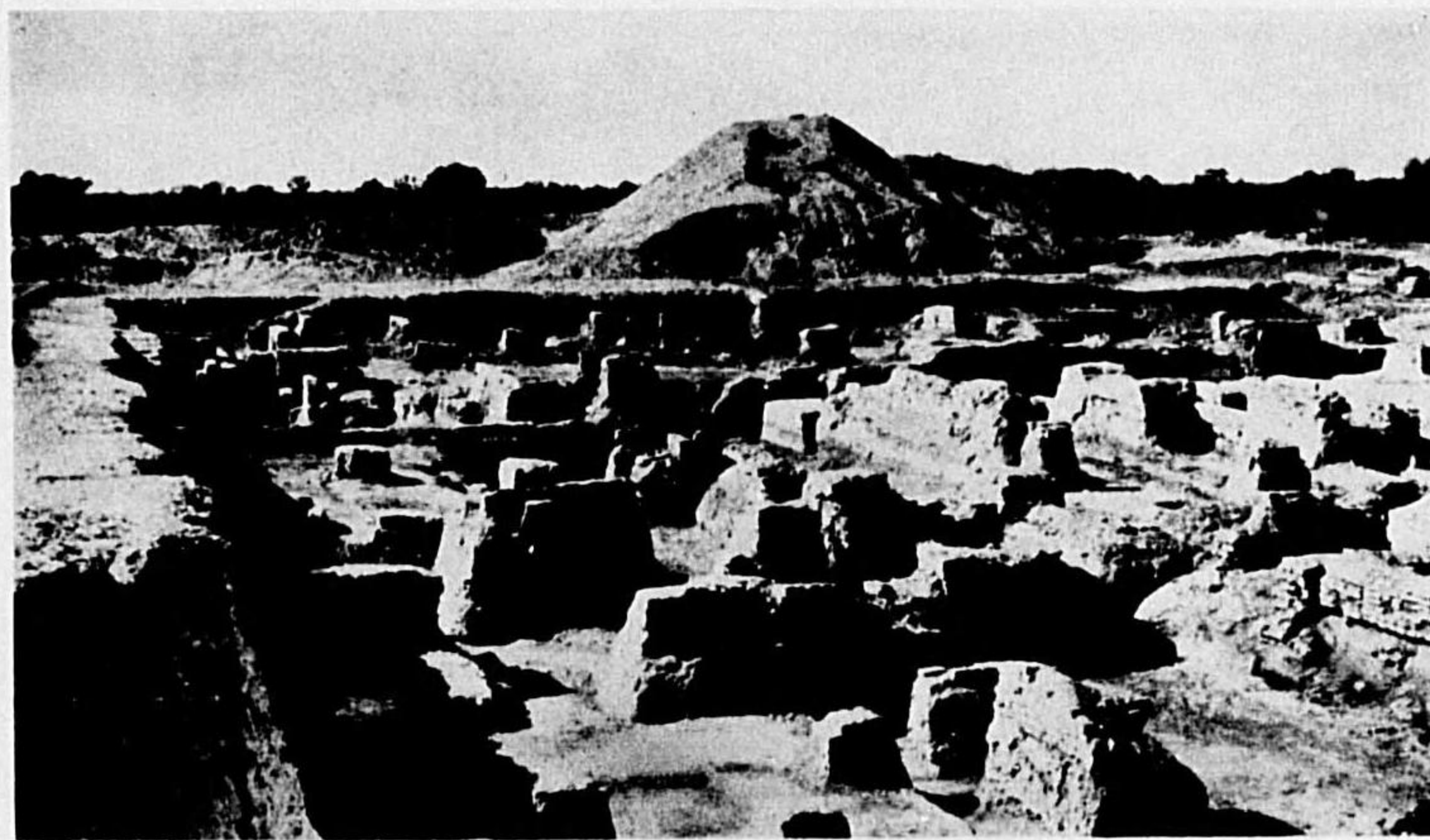
を印せる金貨及び小骨片三とあつた。「此三骨片は勿論佛舍利でカニシカ王

の手で納められたものである」と【印度考古局年報】(一九〇八・一九年に書

いてある。舍利を地下に納めた例となすことができる。圖は迦膩色迦寺塔

墓址を俯切址がとつた寫眞。





上、六二。ハラッパの遺址 其一。

下、六三。同

其二。

インダス河の流域に、今から約五千年の遺址が二所ある。一はモントゴメリー市に近いハラッパ、他はずっと南でラルカナ市から車を通ずるモヘンジョ・ダロ。此二箇所、何をおいても一見しなければならぬと覚悟をきめて行き、漸く目的を達し得た。ハラッパへ行くにはラホールから唐地へ通じてゐる鐵道、西北鐵道(N. W. R. (North Western Ry.))のモントゴメリー(Montgomery)驛下車、ここから自動車で往復するのがよろしい。ここから二つ目に「ハラッパ・ロード」(Harappa Rd.)といふ驛が順路だが、急行は停らないし、自動車もない。だから「はらばぐち」等へ下りたら目的地迄徒歩より仕方がない。ラホールからカラチ・メールにのると一〇四哩を二時間と四十八分で達する。まことに始末がよくできてる。

ハラッパといふのは「原野」のあて字が丁度いいが、これは「Hara pada」といふ事で「The foot of Siva」の意だと書物に書いてある。前日來の雨は夜になって晴れたが、臨時の出水で豫定の道路は通行不能となり、漸く運河に沿へる特別の道を通り、無事に陳列館の前に停った。此陳列所には遺址からの發掘品全部が出陳してあるが、此等の内、尻と足の裏とを地につけ、兩脛を抱へ、少しく上方を見てゐる様な姿勢の、高さ僅に二寸位の泥人形が多数あった。いふ迄もなく粗末な作で、頭等は大豆位の大きさの土の丸めたのを無造作につけた程度のものだが、實によくできてゐた。夫と小型の印章のうち、どう見ても「白澤」らしいと思はれるものがあつたのが特に私の注意を惹いた。勿論これ等以外にも珍品は澤山にあつた。

遺跡の寫眞は可なりとつたが、ここには一枚掲げておく。いろいろの種類もあるかも知れないが、私はある煉瓦の大きさを測つて見たら、長.94×幅.46×高.24(單位)あつた。どうもこれが最も多く、もう少し大型のもあつた。尙ほこの遺址は一つ所にかたまつてゐるのではなく、可なり面積に広がつてゐるのだから、時間も相當にかかることを考へておかなければならない。

六四。モヘンジ・ダロの遺址。
(昭和十二年二月十日)

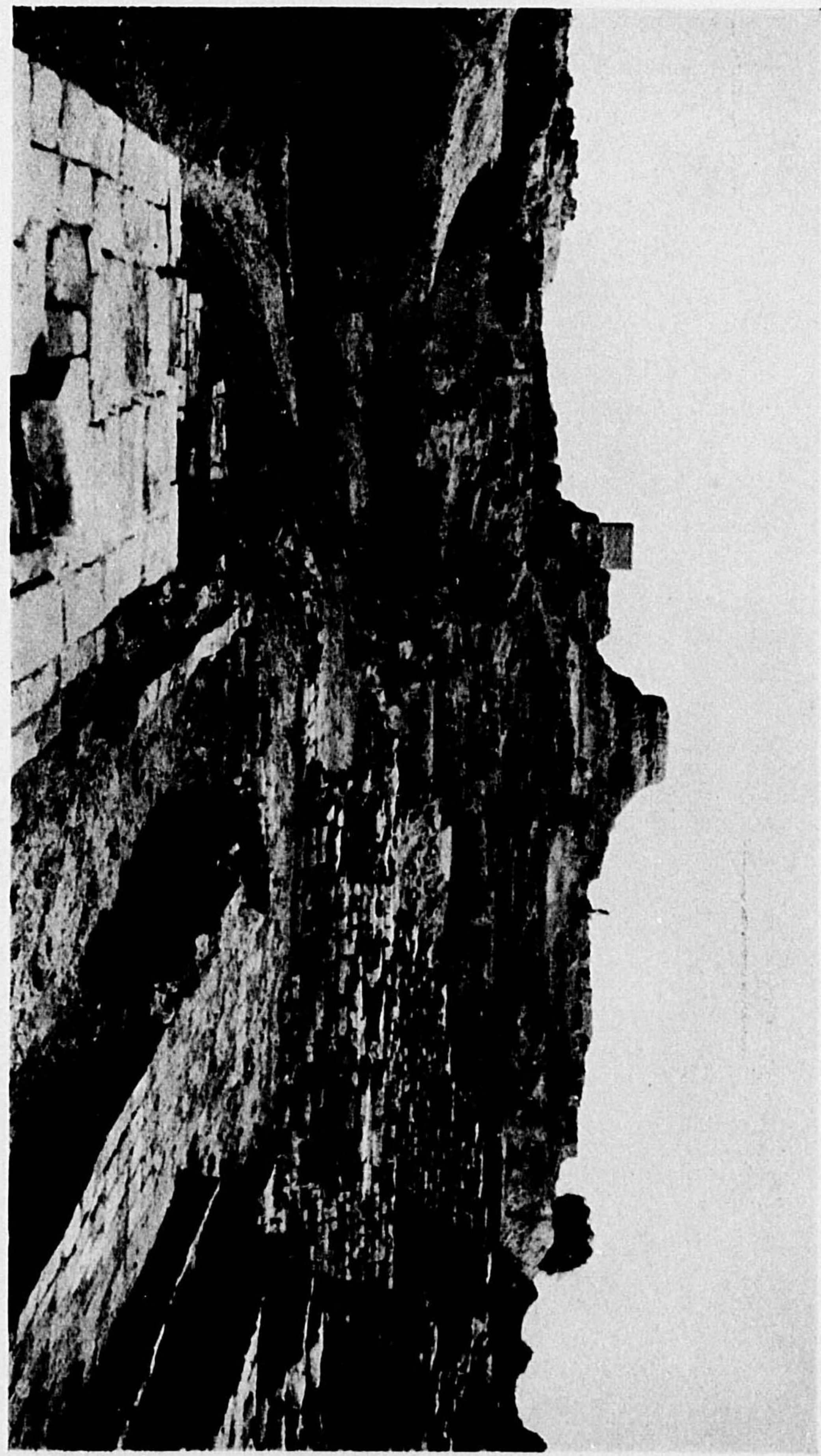
ハラッパ遺址の見學を終へた翌二月八日、モントゴメリ驛から普通列車に乗り南下、翌八日朝ロリリ(Roriri)驛着、乗換、四つ目のルクク(Rukuk)で再び乗換、六つ目のラルカナ(Ralkana)驛へ着いたのは、丁度九日の先づ正午であった。宿泊豫定のペンカローは満員で、仕方なしに驛の待合室へ泊た。幸に小室の占領ができたので落付く事ができた。

私は到着當日、直に遺跡へ車で往復するつもりでゐた。車はラルカナでなくては得られず、仍てここに下車したのだが、此日は都合つかず、翌十日に漸くの事で雇ふ事ができた。驛から遺址案内書には十六哩とあるが、事實二十二哩との事。車屋は二十四哩だといつた。手頃の案内記には「ラルカナの北方(東南方の)二十五哩にある廢墟、下クリ驛から僅に七哩(哩も亦六哩といふのと人)とあるが、距離は何れが真が判然しない。

元來この遺址はシンド地方には以前からよく知られてゐて、郷土史家の跡存は何度も経たが、ここが有史以前の大遺址であつたのは、一九二二年(大正十一年)の發掘迄は知られてゐなかつた。此地には以前から煉瓦を以て築造した塔婆の殘(圖の中央に特立せるもの)と僧坊の廢址のみが、地上高く現はれてゐたので、多くの人は耶蘇紀元を距る遠くない佛教建築と、略同時代であらう位に推定してゐたのであつた。ところが偶然にもハラッパに於いて發見したと同様な不可解な文字を刻してある印章を發見したので、此は容易ならぬ遺址だとの見當をつひ、遂に重大なる結果となり、印度に於ける最古の遺址、西紀前三〇〇〇年、今より五〇〇〇年の舊都である事が判つた。

モヘンジ・ダロは普通「Mohenjo-Daro」と綴であるが、この他に三種「Minojo-Daro」「Mohanjo-Dero」「Mehinjo-Daro」とも綴つたのがあつた。どれでもないのだらう。一九三三年(昭和八年)唐地で發行された案内書 MAHANJO-DARO には、其名の意味は、印度考古局では「Mound of the Dead」と譯してゐるが、「Mound of the Kite」といふ意味だと説明をしてゐる。原語より一層完全な設備のある遺址である。

六四





六五。 イングス河の鐵橋。

(昭和十一年一月九日)

ローリ驛の樓上の露臺から左手に見えてゐるが、汽車が此驛を出てルクに向うと直ちに此橋を渡る。荷重の關係か速力は一時間三哩——窓からちらと見た橋の袂の掲示にもさうあつたと記憶してゐる——に制限してゐるのか、實にゆっくり通過するので、橋の様子も判るし、景色の鑑賞もできる。中央は汽車が通り、脇道は人が通る。日本にこんなのがあるかないか知らないが、何にしる川幅が廣く岸は高く急流だから、橋を架けるのも容易ではあるまい。鐵橋もかうなると頗る美術的構架といへる。

六六。唐地郊外所見。

(昭和十二年二月十日)

紀元の佳節にあたり、千古の遺址モヘンジョ。

・ダロの見學を希望したが、さう行かなかつた

ので十日にすぎ、十一日は唐地に着、午後

から郊外見物。形式文様等に就いて注意を要

する蕪標等もあるが、ここには駱駝の一隊を

掲げておいた。駱駝は従順だと見えて、一列

側面縦隊にして唯一人の男がついて歩いて

る。中央下縁に寫つてゐる人物の影は寫手。

此日私は「CALCUTTA KYOJIKANRYORI

NEARUNYUKOKU KYOKANOTSUCCHI

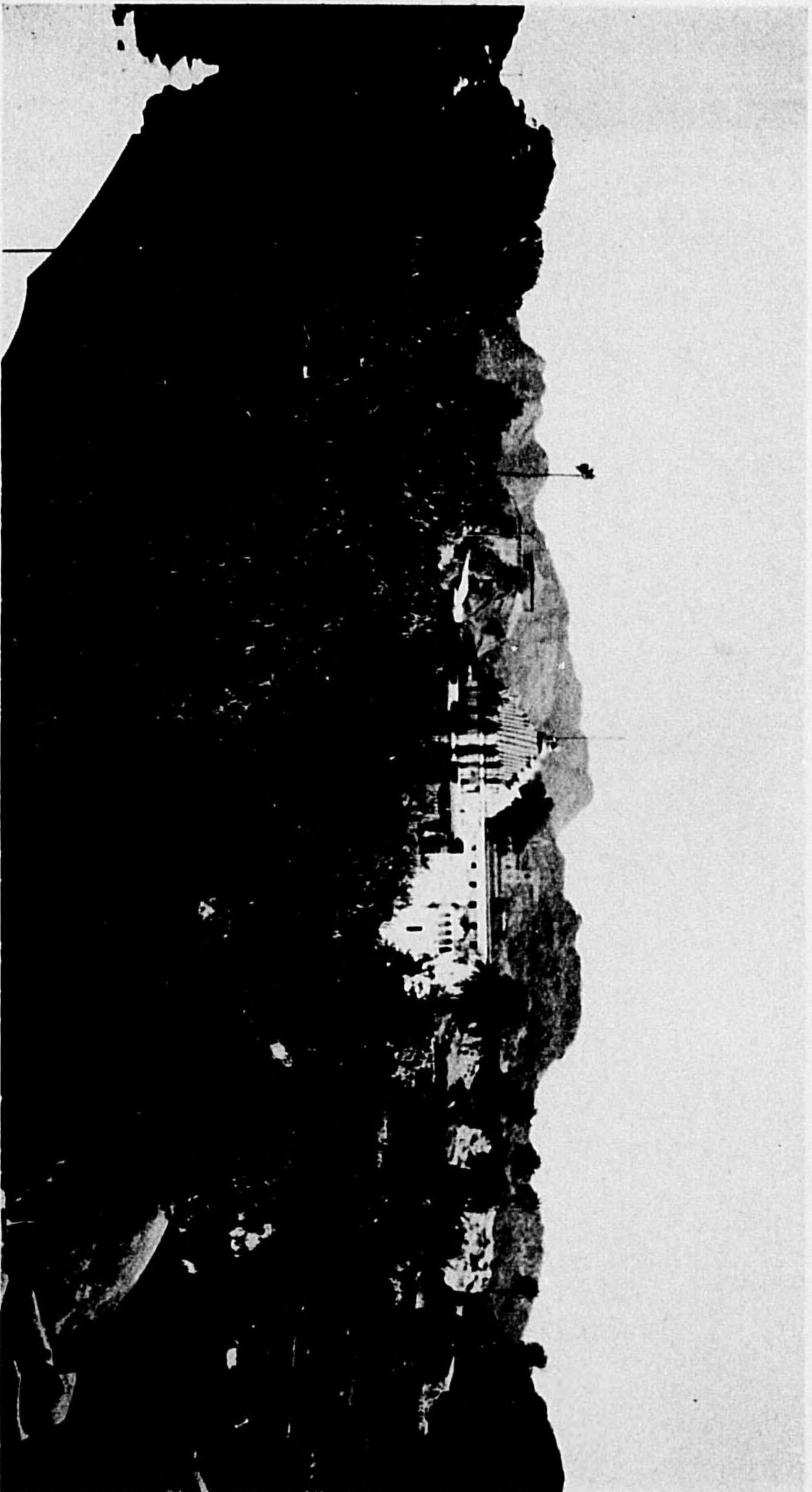
GAARIMASHITA」といふ電報を受取つたの

で、洵にいい記念ができたのを喜んだのであ

つた。

六六





六七. アウ山のデルラ堂全景。(昭和十二年二月十六日)

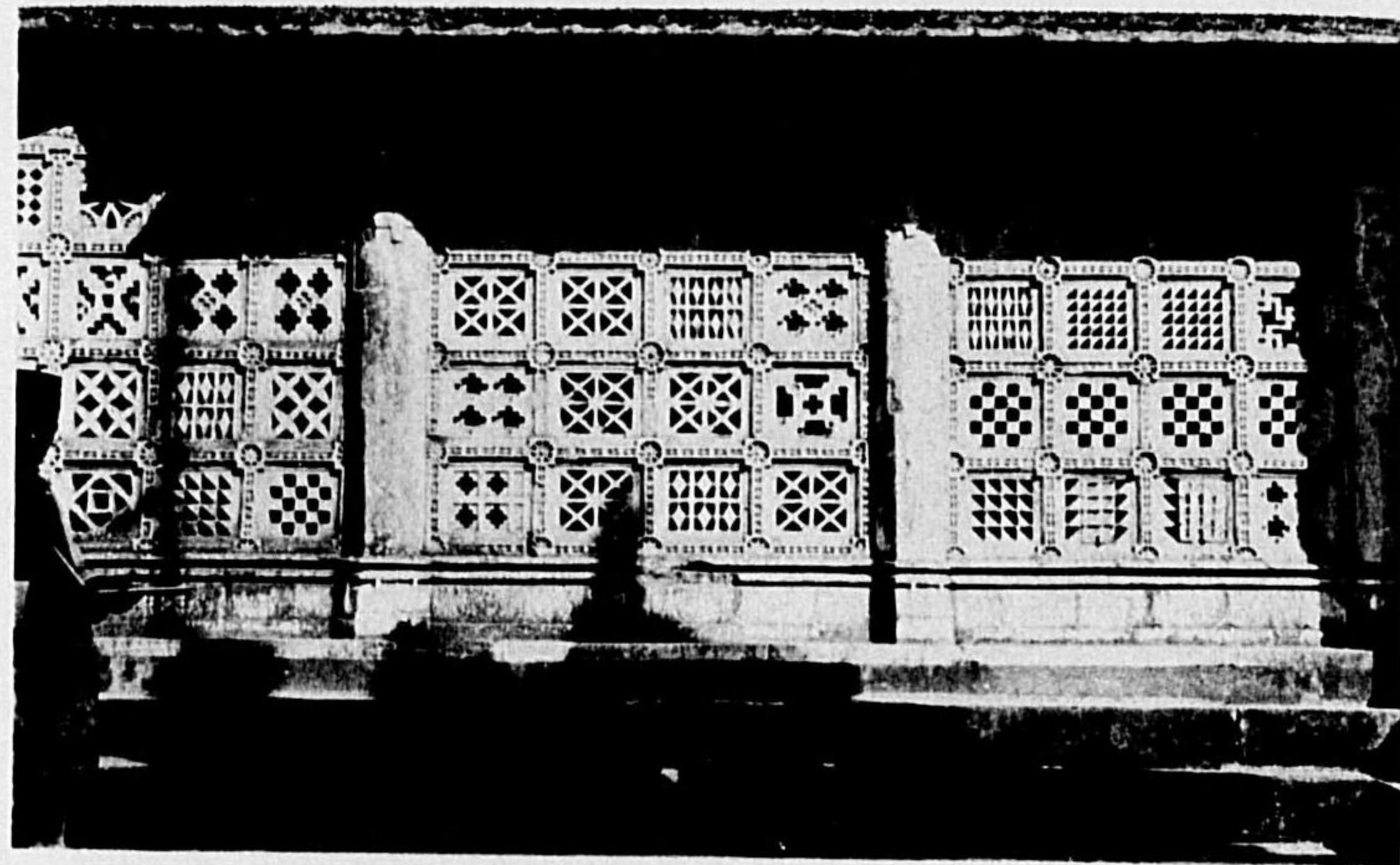
厩地は二泊の豫定であつたが、さうは都合よく行かぬ三泊となり、十四日出發、マウント・アウク(Mount Abu)に向つた。有名なジャイナ教の殿堂見學のつもりである。厩地カントンメント驛から汽車に乗り、暫く行くとハイデラバード(Hydrabad)のチカク高原の同名。ここはシンドのハイデラバード驛に着く。ここで乗換、當時は一六・二〇に發車、一夜走りぬいて、時には長時間停車したりして、終に其翌日、十五日の一六・二二にアブ・ロード(Abul Road)驛に着いた。ハイデラバード驛から丁度一晝夜かかつたのである。

アブ・ロード驛からアブ山迄は自動車で行くことができる。途中は甚だ景色がよろしい。上には宿屋もあるから泊るのに心配はない。宿屋が満員なる公立宿舎もあるから、いつ行つても困る事はあるまい。

デルラ堂(Delra)堂の見物は觀覽券が入用な様に案内書にあるが、昔はとにかく今はない。ただ惜しい事に可なり拙い修理がしてあるのが抵だけども、夫にしても全印に於ける最も美麗で細かな仕事をしてある者伊那教建築であるからである。

デルラ堂の殿堂は二棟ある。一は古く一は新しい。其比較的新しい方は、デルラ堂(Delra)とベスバラ(Besbala)兄弟の建立といふ事になつてゐるが、二三〇年(寛喜二年)に神殿として奉獻したといふ銘文により、建立と財物の寄附とをデルラ一人に歸してゐる。

古い方は一〇三二年(長元四年)にデルラ(Delra)の建立にかかつたもので、前者程込み入つてはゐないが、寧ろこの方がよくできてゐて、建築としてもきつと上品であり、且つ者伊那教の殿堂としては、最も完備した實例として知られてゐる。外部に於いて屋根は方錐形をなして居り、上はシカラ(186頁解説参照)に終つてゐるが、此場合には左程はつきりしてゐない。内部は中央に本尊、其他各小禮拜堂には何れもジナ(Dina)の座像を祀つてゐる。



六九

上、六八。アブー山のジャイナ建築部分 其一。

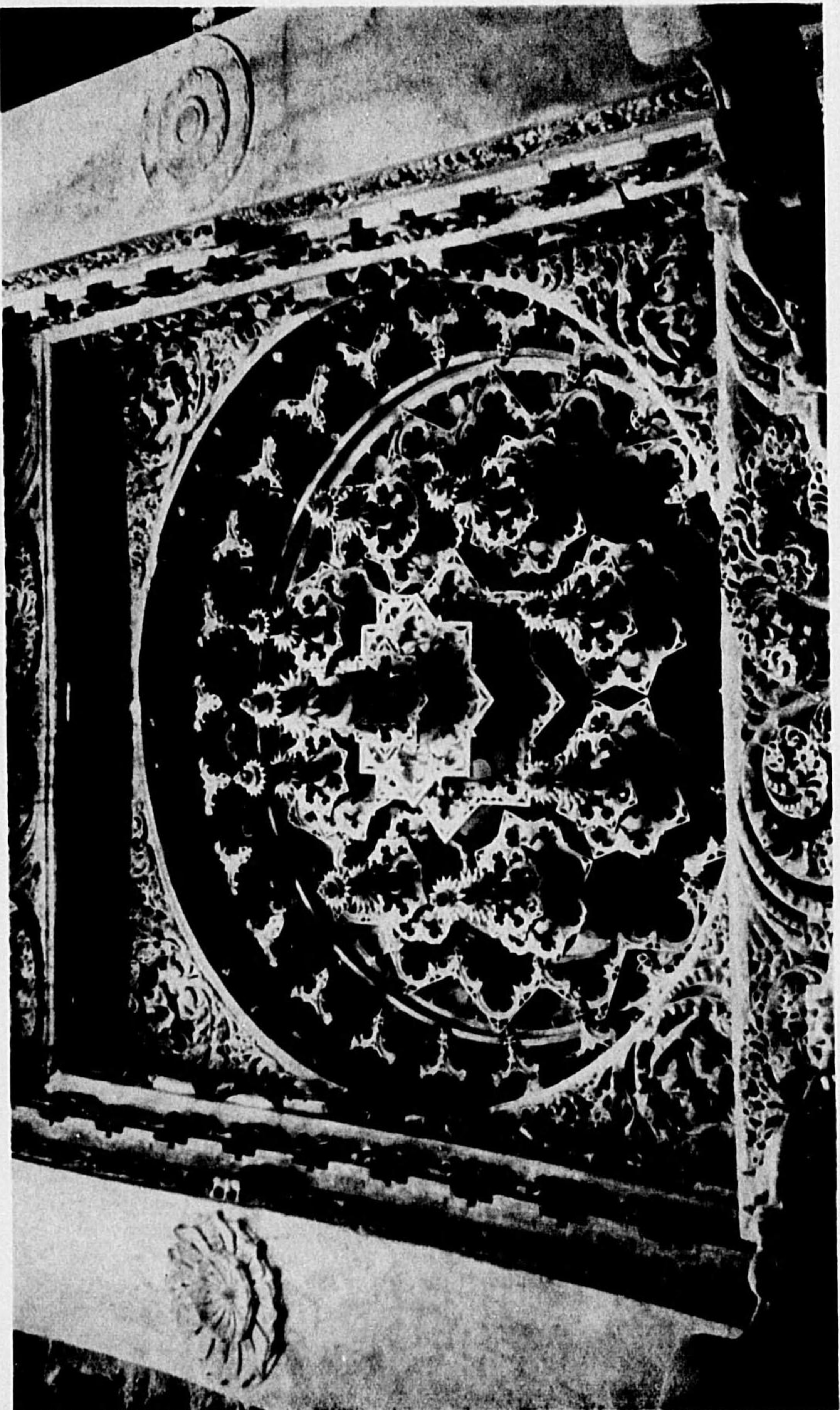
(昭和十一年二月十六日)

下、六九。同

其二。

(昭和十一年二月十六日)

アブー山大殿堂二棟の内の一、テジャバラ・バスタッバラ (Tajjala & Bastupala) 堂の一部、即ち中庭に面した部分の柱間の壁を見せたもの。柱間の壁を縦横共四つづつの部分に區劃し、各區劃内に幾何模様を透彫にしたのである。尤もこの様な透彫には、回教建築の窓に非常に込み入った美しい例が、デリー・アグラ・グワリヤ・ビジャプール等、隨所にあつて従つて其數も多く、此例の様な小規模のものは大して珍らしくもないが、これはこれで又別種の趣がある。壁面のこの様な裝飾法はアーメダバードやその郊外サルケッジ以外には餘り見受けなかつた。これでは窓か壁か、何れにしたらよからうか。六八の左下及び六九の左方の様に、正方形を順に四十五度曲げて、重ねたのは注目を要する。尚ほ其中央に水鳥を入れたのを看過してはいけない(二七八・二七九・二八九)



40

40. アフリ山ジナ建築の天井 其一。

(昭和十一年二月十六日)

ゼルカラ所在のもう一つの堂は西紀一〇三二

年(長元四年、平安後期)ゼルカラ(ジリ)の建

立したものである。これは全部白大理石より成り、實

に美しいもので、其中央の大絨圓天井は、大概

の畫帖には出てゐる位、有名なものであるが、

ここには格縁を以て限られた方形の部分に造り

れた、各間繼て其意匠を異にする天井を本圖と

次圖とに一種づつ掲げておく。此ゼルカラ堂はジナ

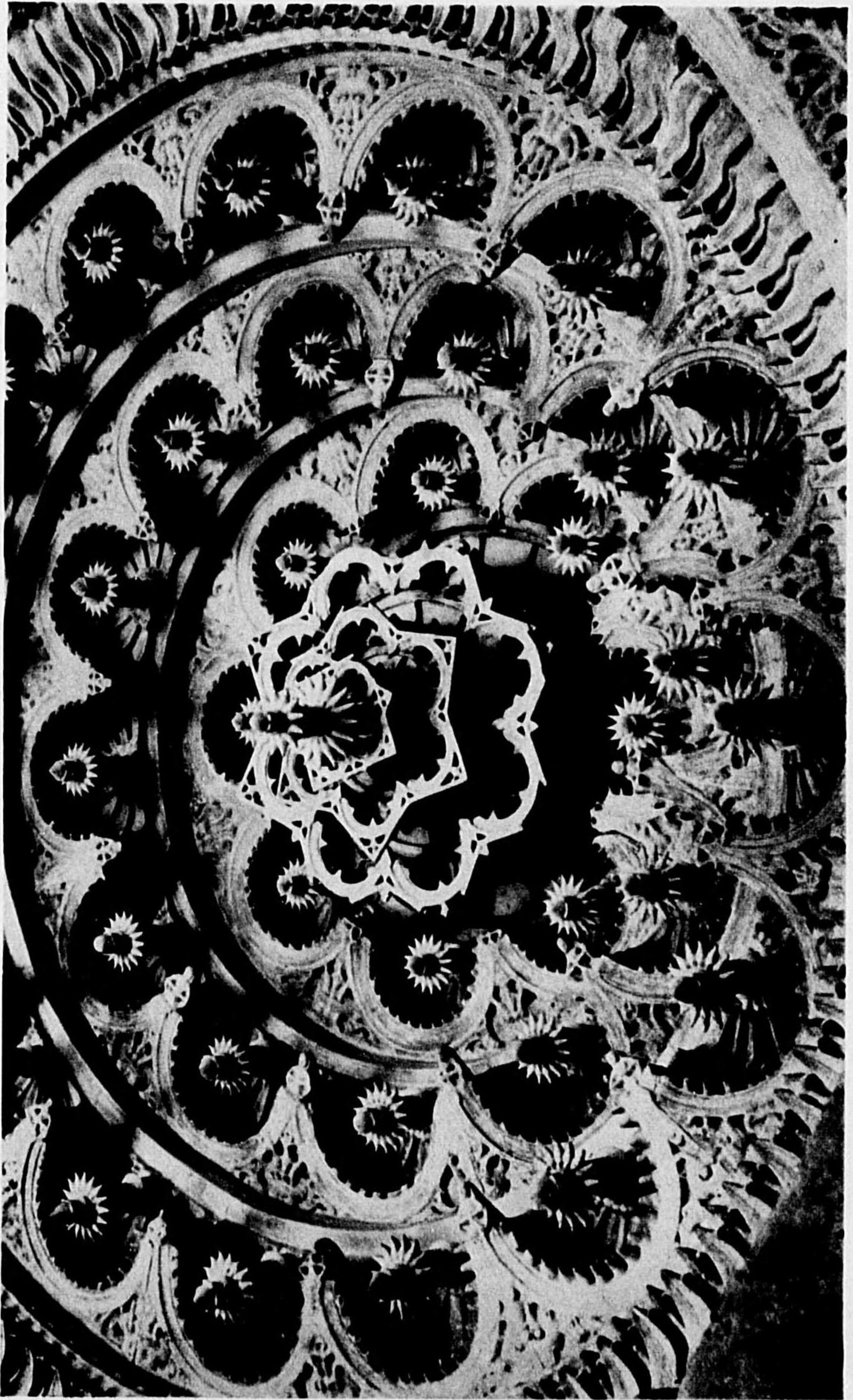
イナ堂としては最古にして、且つ最も完備せる

ものといふ。

實際此建築は、いくら形容詞を用ひて書いて

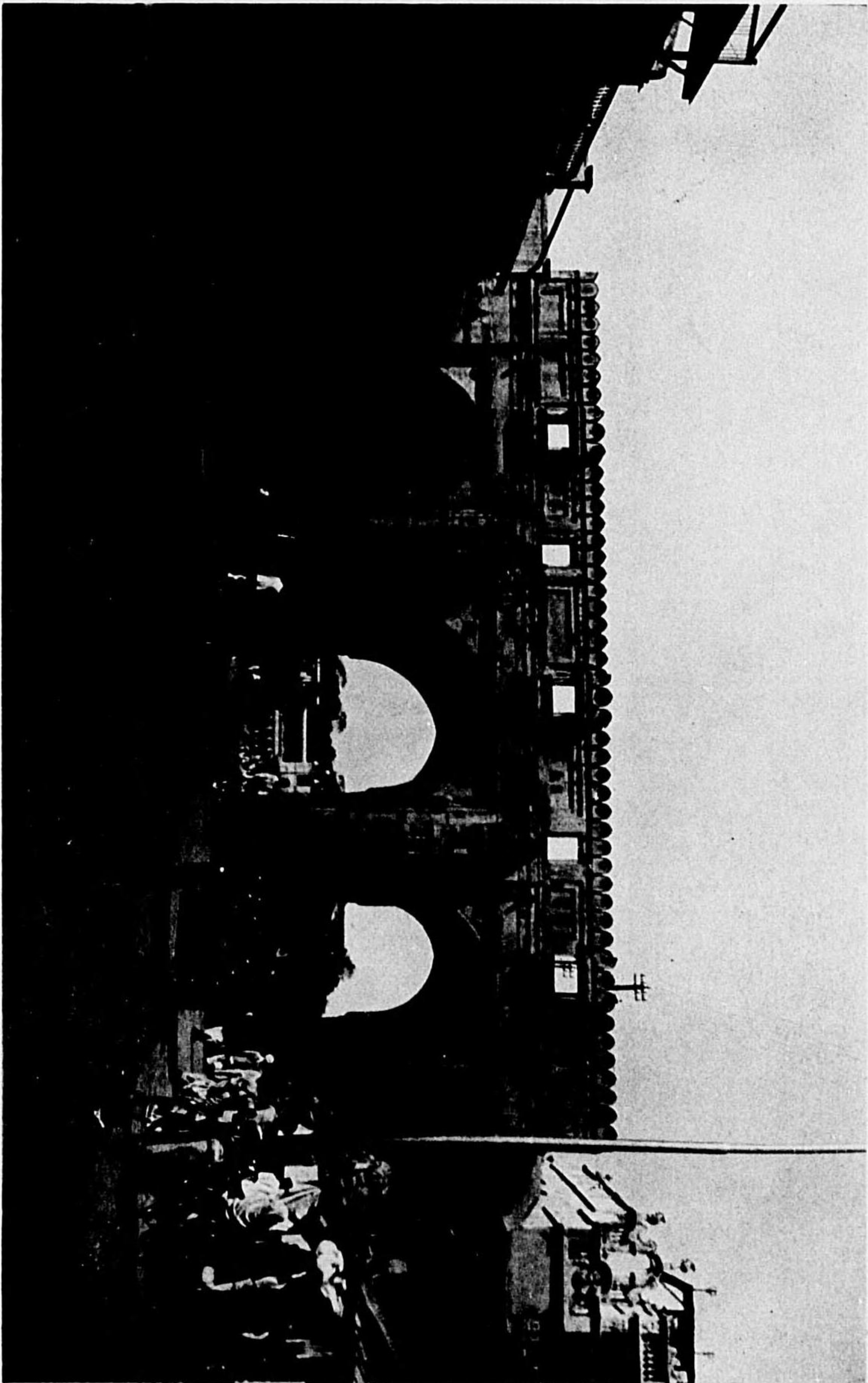
も、到底其真相を傳へる事はできない。空前絶

後といふ言葉が正に當れるのである。



七一

七一。アノイ山ゾイナ堂の天井
其二（昭和十年五月十六日）
前例に負けず劣らずの天井の他
の例を示す。この様な仕事をして
行くうちに、一ヶ所でも失敗した
なら、まさかつぎ足しでもきまい
から、やり直さねばなるまい。尤
も全體が一石から刻みだしてある
次第ではないにしても、どうも大
變な勞作。歐羅巴のモック全盛
時代の石工でも、これには及び難
かつたらう。



七二。アムダバト市の三門。

(昭和十一年二月十八日)

アムダバト (Amudabad) は二にアムダバト (Amudabad) とも綴る。孟買を距る三〇六哩、アフリ・ロード驛より一五哩、グジャラト州にあるが、このあたりは英領になつてゐる北の境に近い大都で且つ舊都。さうして洵に美しい町。よくもこの様に大きな立派な記念物の多い町があるものだと思ふ。十分にみるためには、二日や三日では勿論、一週間でも十日でも駄目、先づ一月位滞在してゆくりと見學しなければ、目的は達し兼ねる。案内書の地圖に於いてある名所舊跡だけでも、市内に二十七ヶ所、郊外に十三ヶ所、合計四十ヶ所。併しこのうちには我はななくともい新建築もあるが、其代り郊外サルケラジ (Sarkaraji) だけでも、ほんとは一日では見きれない位、多くの建築がある。

だから索引勘定四十ヶ所ではすまないのである。

建築——印度に於ける廣い意味の古建築——見學生にとりては、前記の様に少なくとも一月位、腰を落付ければ何にもならない位だのに、夫を私は僅か三日ですましたのだから、神業の様にまさこへるが、實は言語通斷、今更後悔はしてゐるけれども、當時はゆくり出来ない事情もあつたのである。

アムダバトは嘗て西印度に於ける最大都市であり、桃山時代(天正元年から慶長五年にかけて)にあつては印度を恐らく世界に於ける最美の都市であつたらうと言はれてゐた。此都は西紀一四二一年(應永十八年)アムダ一世 (Amir Ahmad I) の建設にかゝる。勿論今日に至る迄、時に消長はあつたが、とにかく此地の建築は印度式と回教式の巧みに折衷混淆したものが多く、殊に驚くべきは井戸即ペオリ (Baori) の建築工事で、これこそ無條件で世界一といへるであらう。後の研究者はどうか此市に遺れる建築をゆくり觀察せられる様希望にたへない。尙ほこはカントメント (Cantonment) が可なり難れて居り、古都には城壁が廻らしてある。

七二は「チン・タルラザ」(Chin Talraza) 即「三門」と呼び、アムダ一世王の建立にかゝる。繁華な町の中にあり、圖の如き三間三層單層平屋構造の門である。

上、七三。アーメダバード市シデ・サイヤド・モスク背面。
下、七四。同

窓詳細。

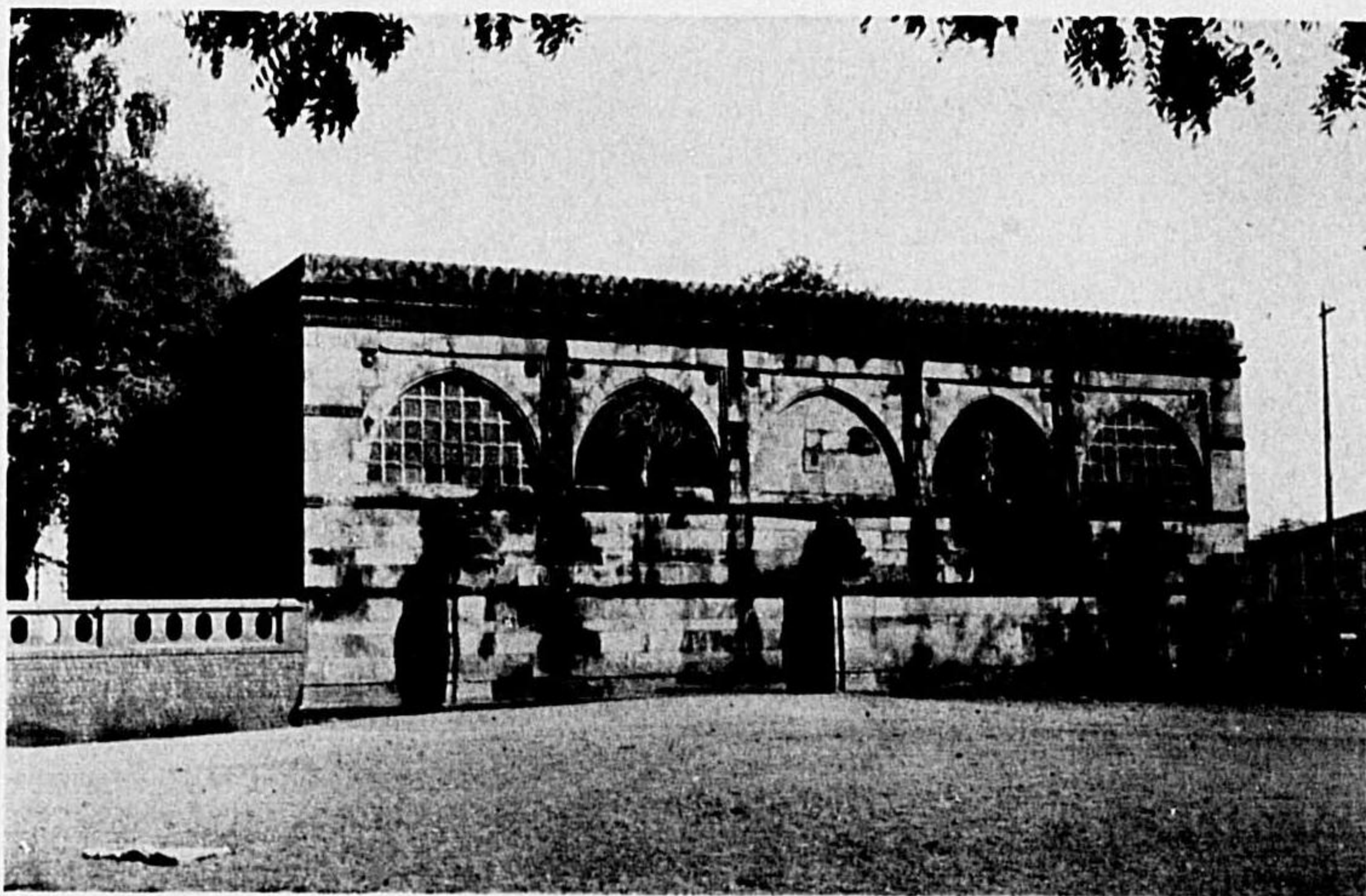
(昭和十一年二月十八日)
(昭和十一年二月十八日)

此寺はアーメダバード市の西端、サベルマチ(Saharwati)河畔の、バーダー(Bhandar)と呼ぶ廣場の東北隅に建つ。シデ・サイヤド、シデ・サイイド、シデ・サイイド(Sidi Saiyad, Sidi Saiyid, Sidi Said)・モスクといふ。曩にも記した通り、回教寺本堂に入り聖龕に對すれば、即ちメッカに對することになるためには、印度に於いては自然東面して建てることになるのである。故に此場合でも七三は西方より撮った寫眞で、窓の中心線の下方より方形に突出してゐるのは、本堂後壁の聖龕の背面である。さうして背面にコー一面に日光があたるのは、午後にさまつてゐる。だから以上の事實を知つてゐるならば、此寫眞は午後とたものだといふ事が判る筈である。

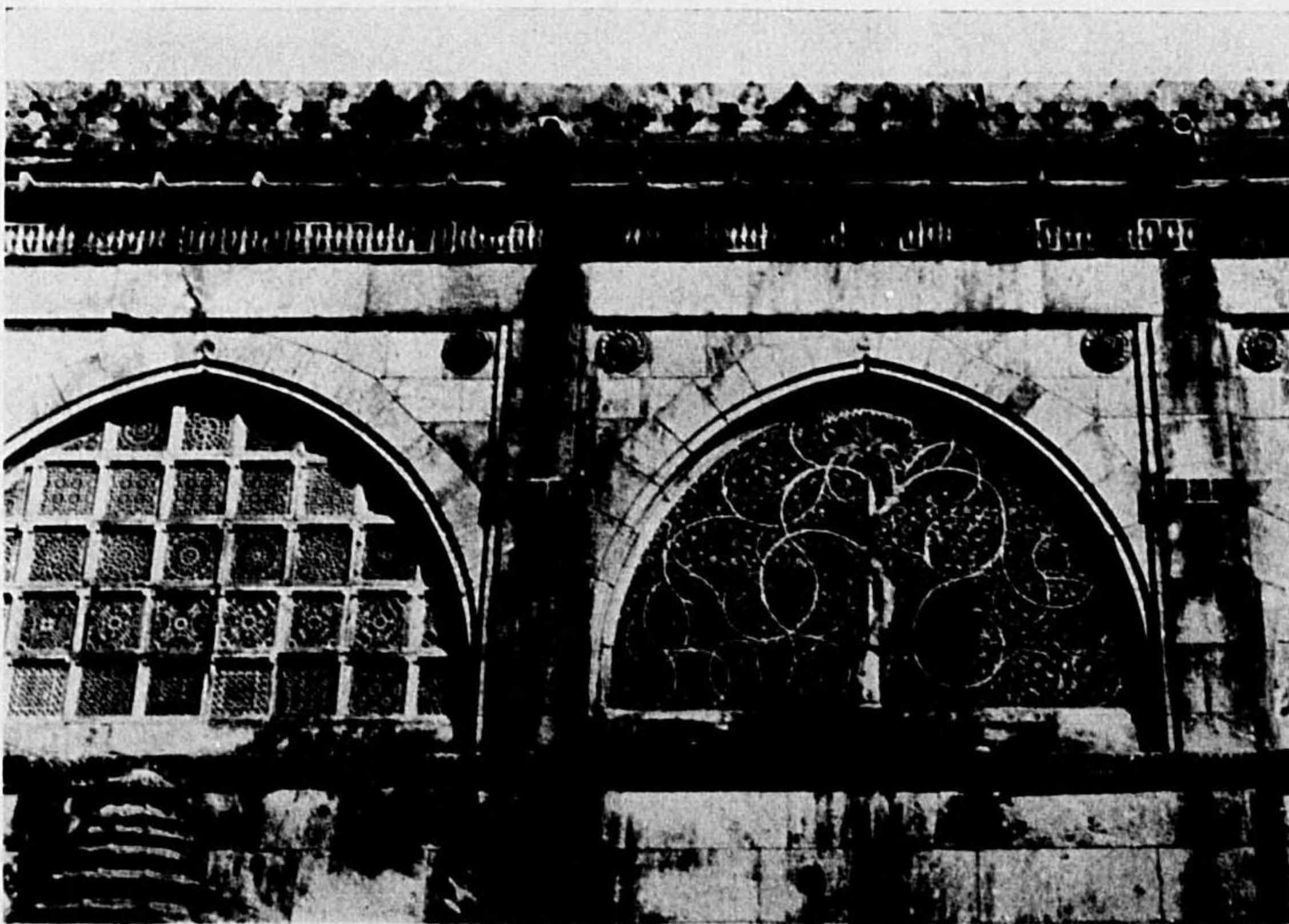
正面五間、背面五間、兩側面三間づつ、正面兩端に一基づつの光塔がある。當初はもと高くてはんたうの高兼光塔であつたのが、後にこの様に本堂の屋根と同じ高さ迄に低くされたのだらうと思ふが、或は元から現在の様であつたか、その邊は調べなかつたから知らないが、多分もと高かつたのであらう。正面は五間とも拱になり、内部天井のおさまりは圓球型圓天井も、又正方形を互に四十五度をなす如く積み重ねた式のもあり、圓天井の隅弓(クワキユウ(Pendentive))の取扱にも二種あり、頗る興味がある。隅追持(Squinch Arch)も少しばかり面白くつてある。

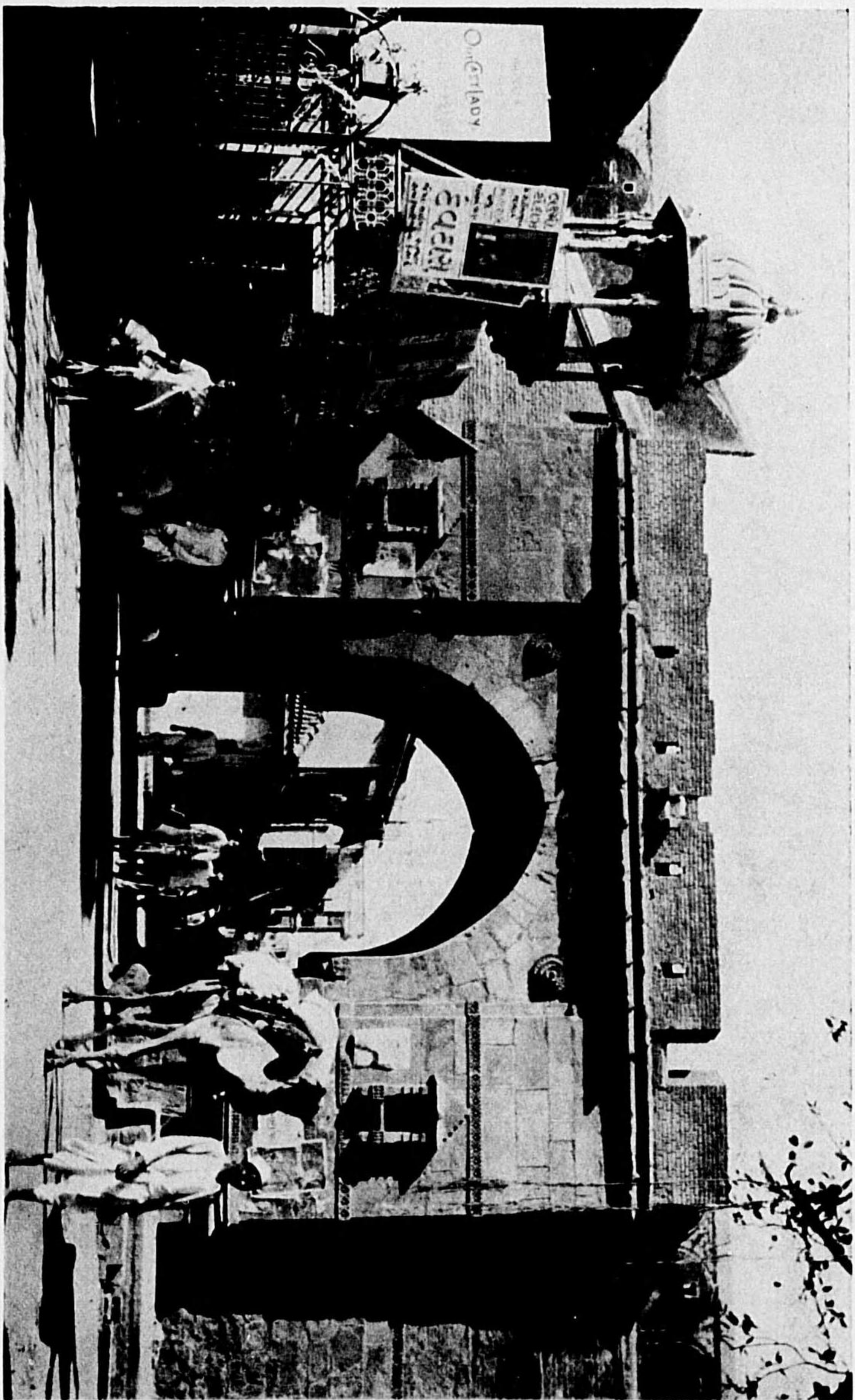
兩側面と背面左右兩端の間の尖拱の上部は六八六九の様なり方で、もっと精巧であるが、背面中央兩脇の間には、特に便化した樹木の優美麗麗な狭間飾が入れてある。中央のも勿論さうであつたが、これは英人がはづして圓へ持て歸り、南謙信屯博物館か何かへ陳列したさうで、土地の心ある人は大に憤慨してゐた。七四は中央現在石壁の向つて左即北側ので、樹の枝の圓轉活脱振り筆紙の及ばない所、内部から見ても非常に美しい。尙ほ楨石には何れも菩提樹を陽刻してある。

七三



七四





七五。アムダバド島の家 其一。

(昭和十二年二月十八日)

何といふ町で何といふ門が忘れて了。

だが、城壁に閉じてゐる門の一であつた

らう。現在は最も殷賑な町で千度門で城

内と城外と異じてゐるのだらう。この門

の向て左方高く、圓屋根をもつた八角形

の小建築がある。

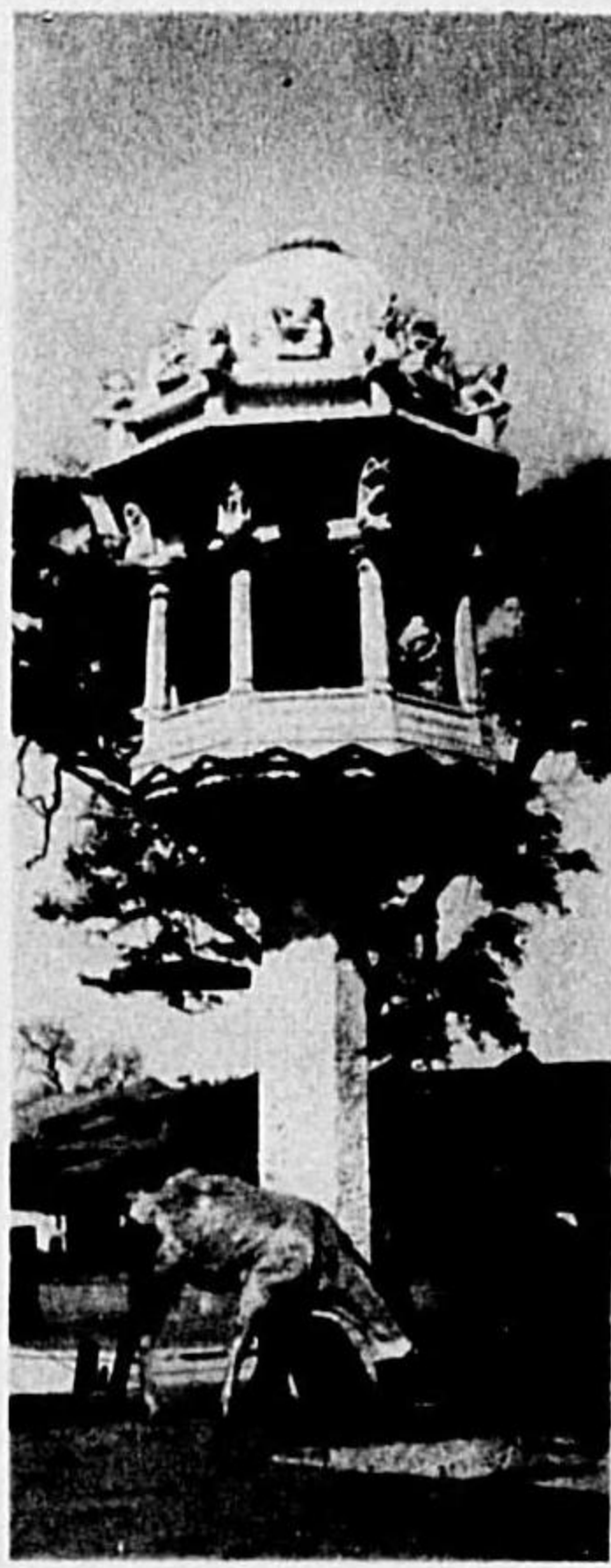
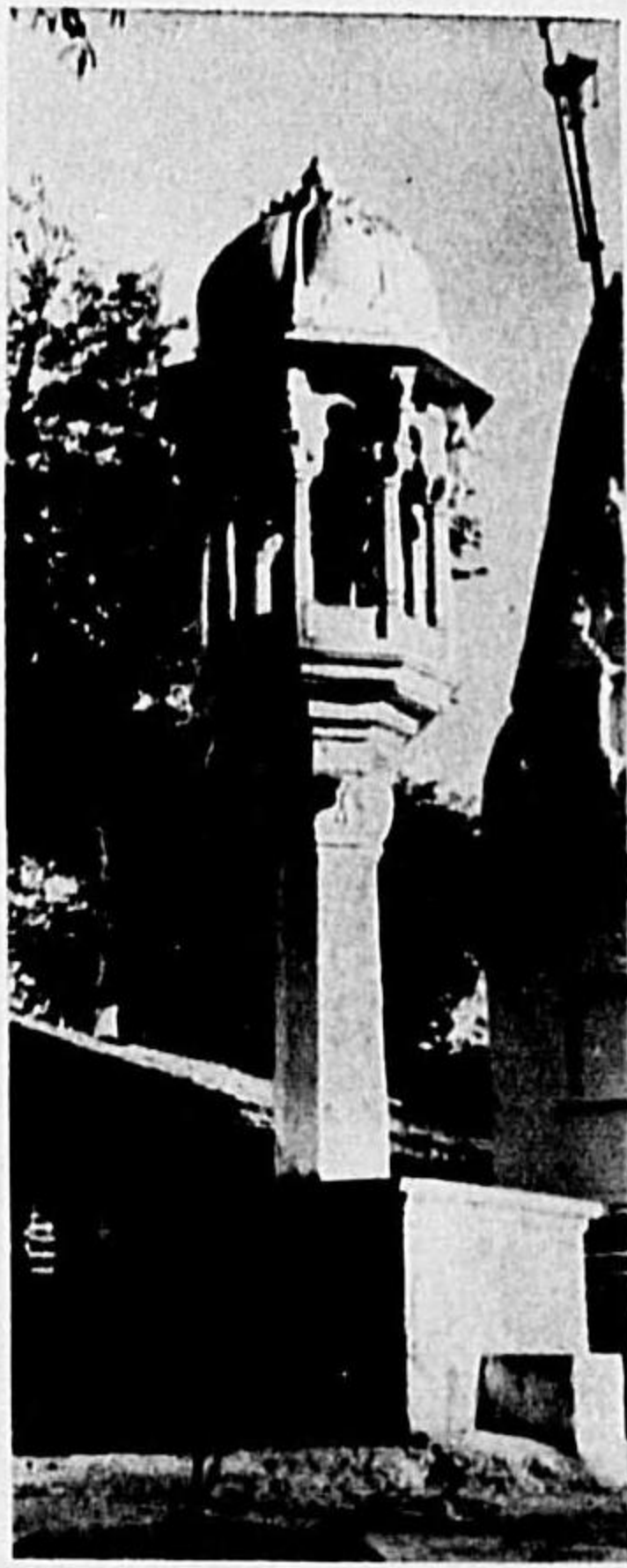
此は島の家でシ・イナ教徒の建てたも

ので、此市の特有なる景観たもある。成

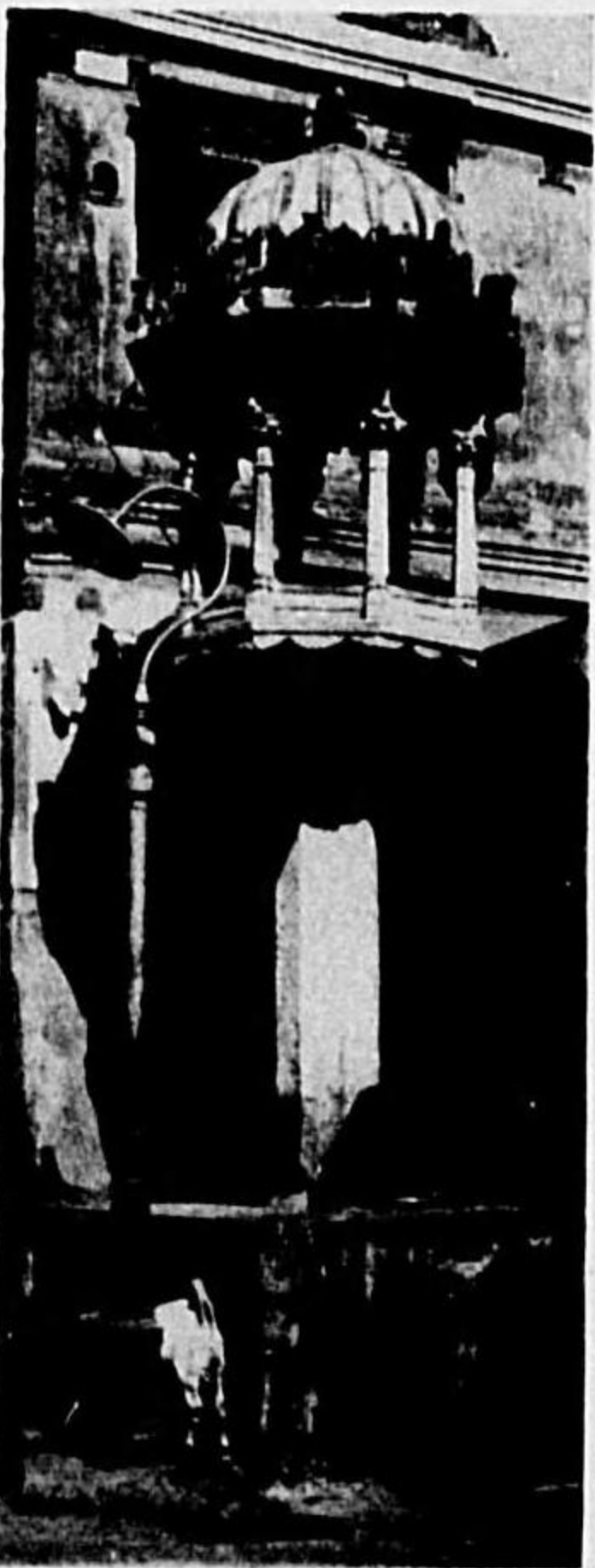
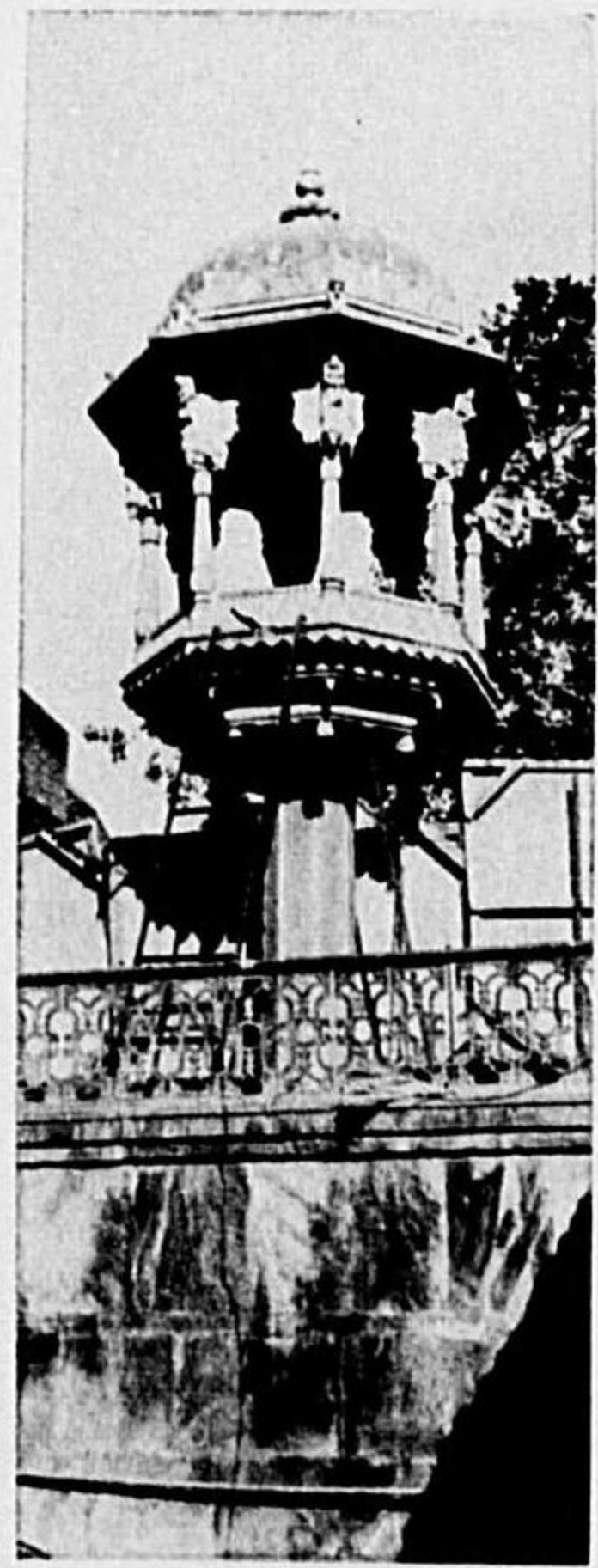
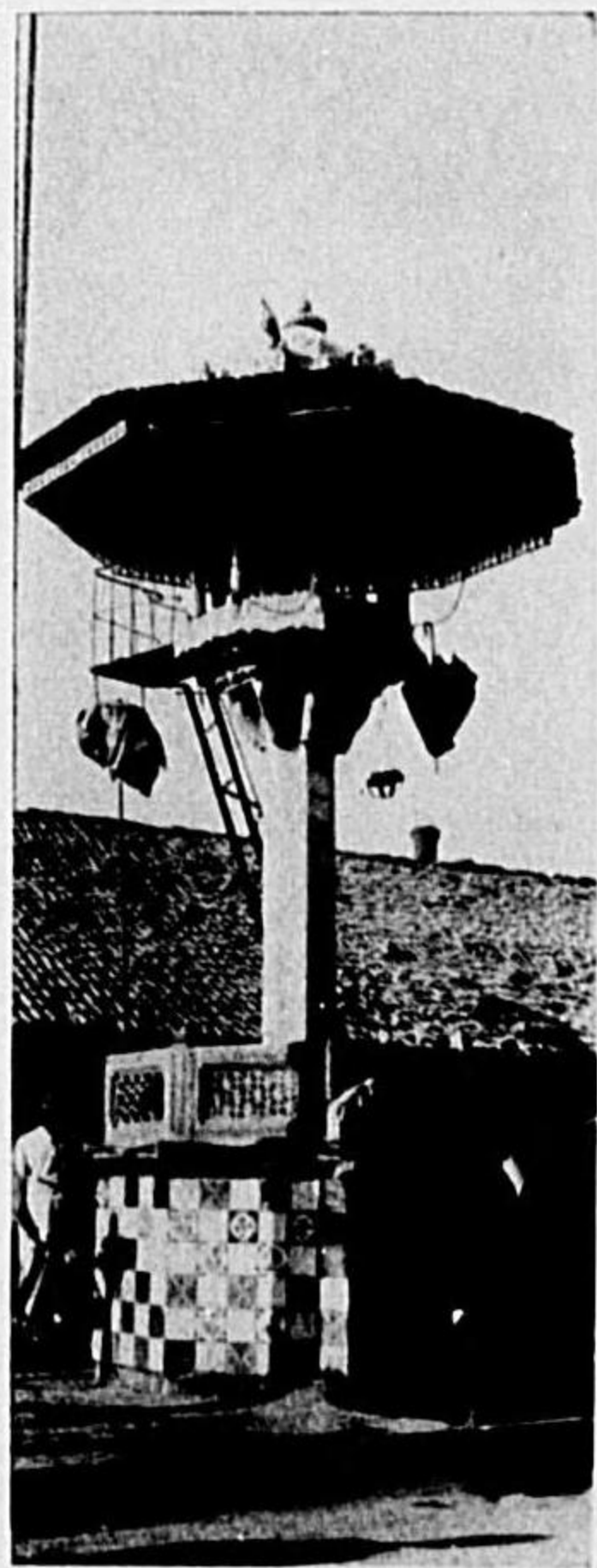
程随所にある。私は次に数例を示してお

く。此等は「極めて美しい」と案内記にあ

るが、そんなでもない。

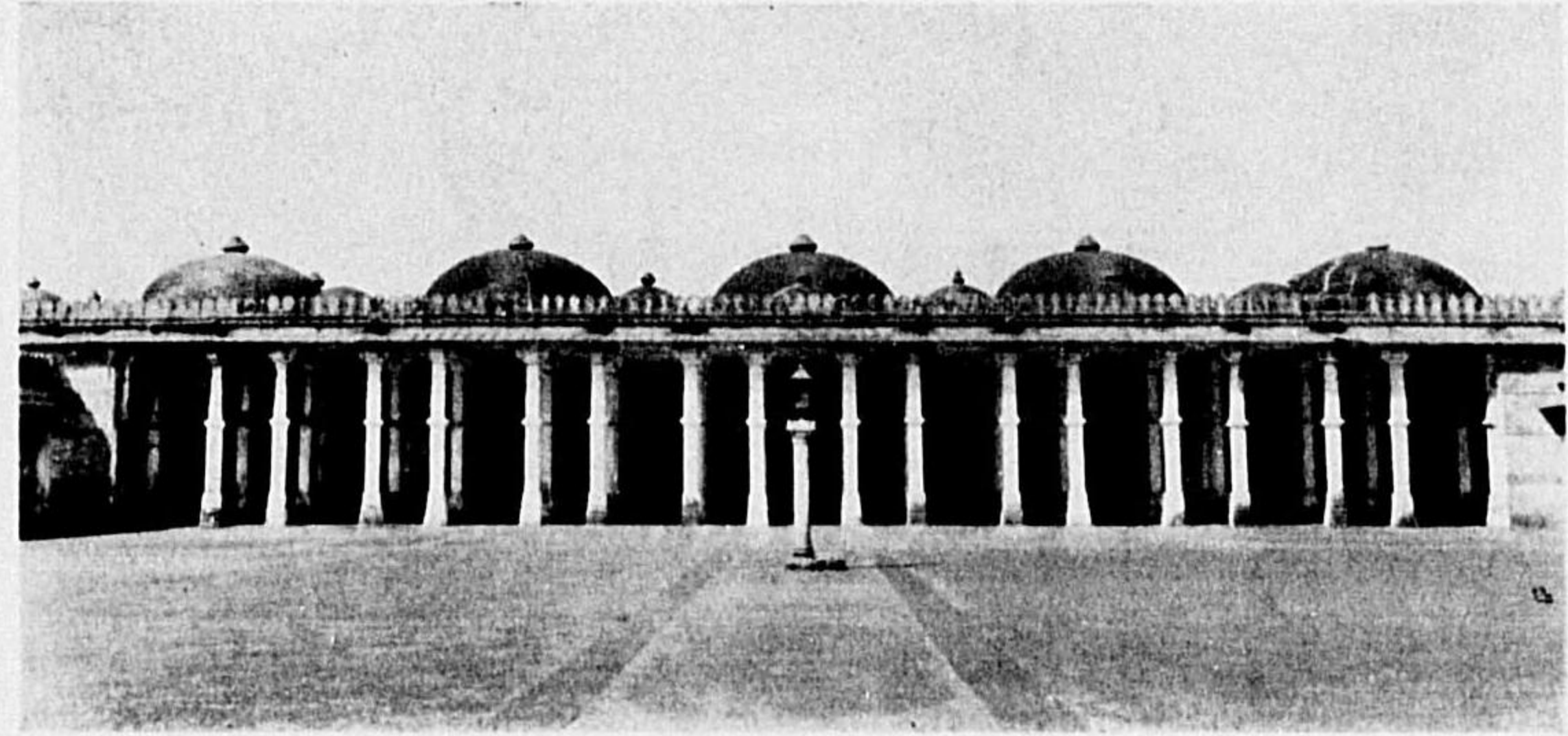


上より下へ右より左へ 七六一八一

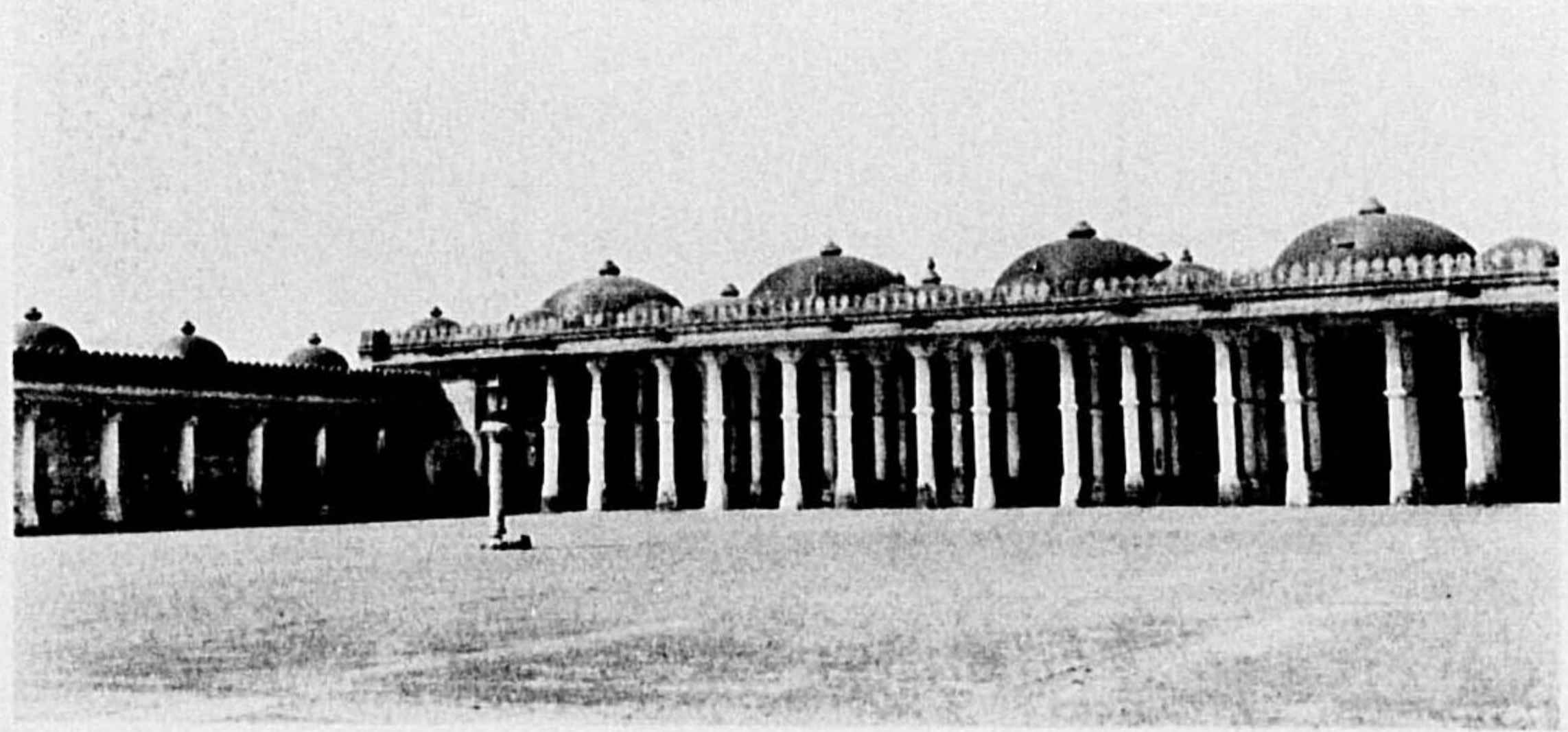


上より下へ右より左へ、七六一八一。アーメダバード市の
 鳥の家六種
 (昭和十一年二月十八日—二十日)
 鳥の家とかいたが、夜泊るところではなくて、鳥に給餌
 する家である。見るとは寫してきたが、其うち六種を掲げ
 ておいた。どうも小建築としては物足りない。先づ左下の
 が最もよささうである。露形外道の仕事として特筆大書の
 價値があらう。八一の様は營巢のできる様にしたのもたま
 にはある。

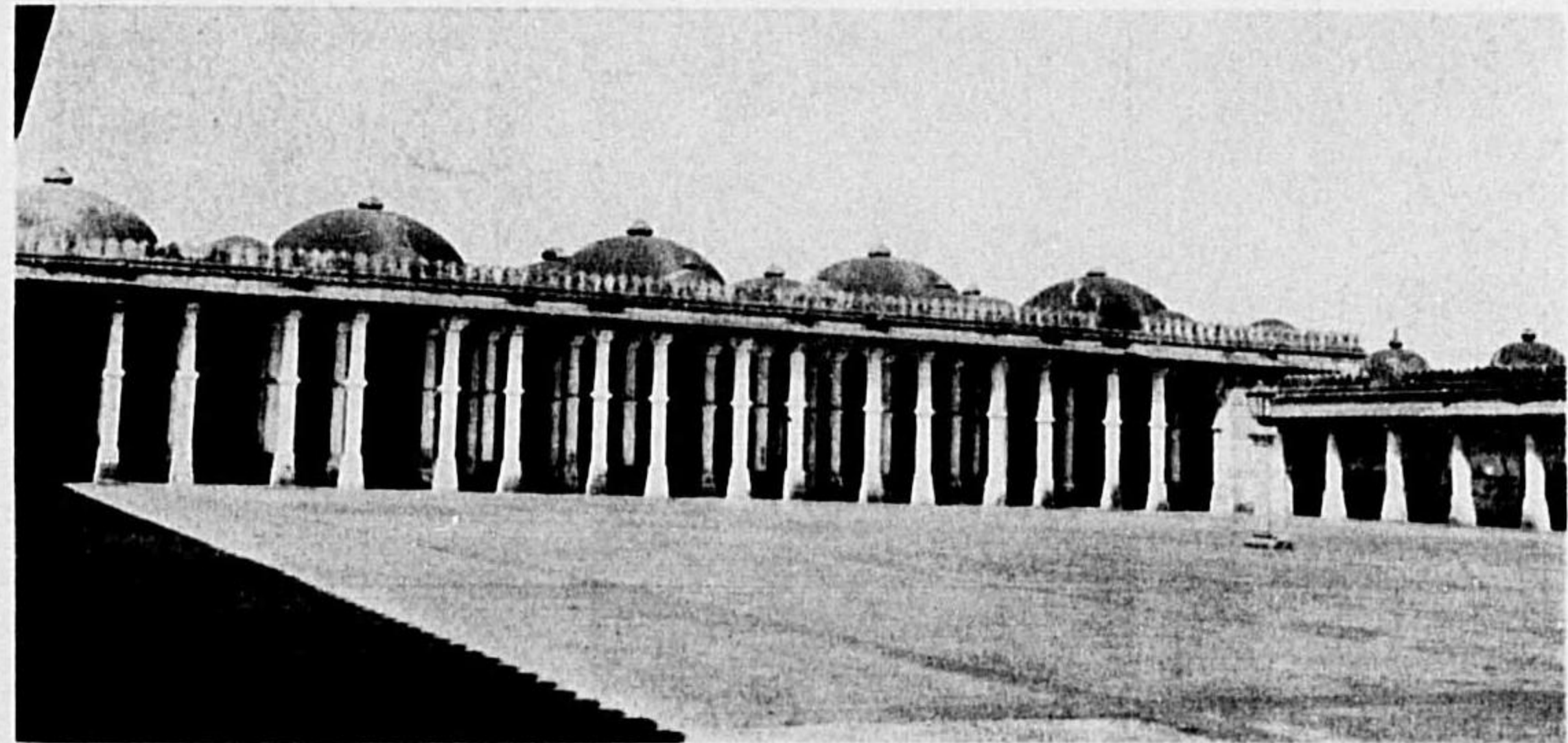
八二



八三



八四



上より下へ、八二・八三・八四。サルケッジの回教寺 共一―共三。

(昭和十一年二月二十日)

サルケッジ(Sarkej)はジャムナプル(Jamnapur)市の南端門の南方六哩にあると案内書にある、けれども其實前記パークアの一郭の西南隅にて、サバルマナ河に架した新しい鐵橋なるエリス・ブリッジ迄、此門から逆戻りをして河を渡り、一本道を西南に進むのである。私は宿屋から半日で車で往復して無理にすました。併し其歸途には、恐らくサルケッジの諸建築に關與した建築家の兄弟であらうといふアザム及びムアッサム(Azam, Mu'azzam)の墓迄、見學をすましたのである。此廟は西紀一四五四年(享徳三年)の建立といふ。

サルケッジに大きな池がある。此大池に臨み大廟墓が一棟、少し離れて更に大規模のが一棟、洵に堂堂たる大建築があるが、以上の一郭と直角をなして、一大地域を劃して、他に比類のない特殊の回教寺が建ててゐる。本堂はすつと奥の突き當りで、正面の入口より境内に入ると、先づ例の如く大きな中庭がある。正面及び左右の兩側は廻廊であるが、正面二十一間、側面二十間、八三・八四に夫夫右側面及び左側面の廻廊の一部が見えてゐる様に、一間隔きに圓蓋をかけてある。廻廊の大き約一九〇尺×二一〇尺、廻廊梁間二三尺餘。

回教寺本堂は八二に正面の全景があるが、これより略は見當がつく様に、正面二十一間、側面九間、その正面二十一間の内、兩端の二間づつは壁で、結局遊離して建てる柱は十八本に、片蓋柱二本、柱間は廣いのと狭いのと交互で、大圓蓋の数は五個づつ二個並び、其間に小圓蓋を配す。本堂の隅弓は甚だ簡單だが、圓蓋に二種の取扱がある。このモスク程簡素で洗練された様式のもの、他に類例なしとの評がある。本堂の大き約一九〇尺×八二尺餘。

八五。孟買市グレート・オアシヤ正面。

(昭和十年十二月十三日)

グレート・オアシヤ (Great Oshia)

は、孟買の海岸、タージ・マール・ホテルに

近く建つてゐる三間三戸單層石築平屋根の

門で、西紀一九二一年

(明治四十四年)當時の英

國皇帝ジョージ五世と皇

后メアリーが印度訪問の

際、上陸を記念するため

に建てたことは上記の銘

文に明かである。美しく

できてはゐるが、印度サ

ラセン建築の細部を寄せ

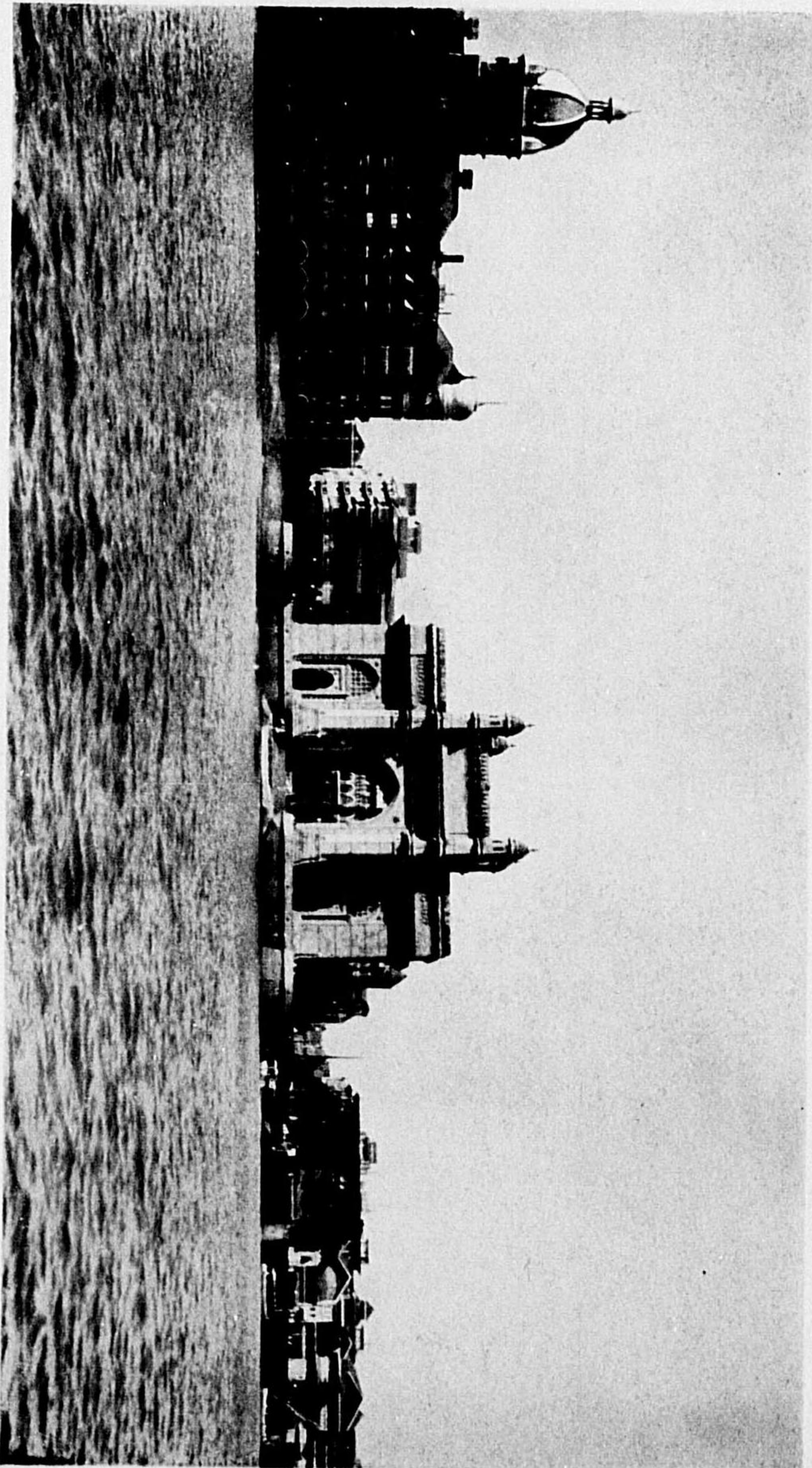
集めただけで、大したも

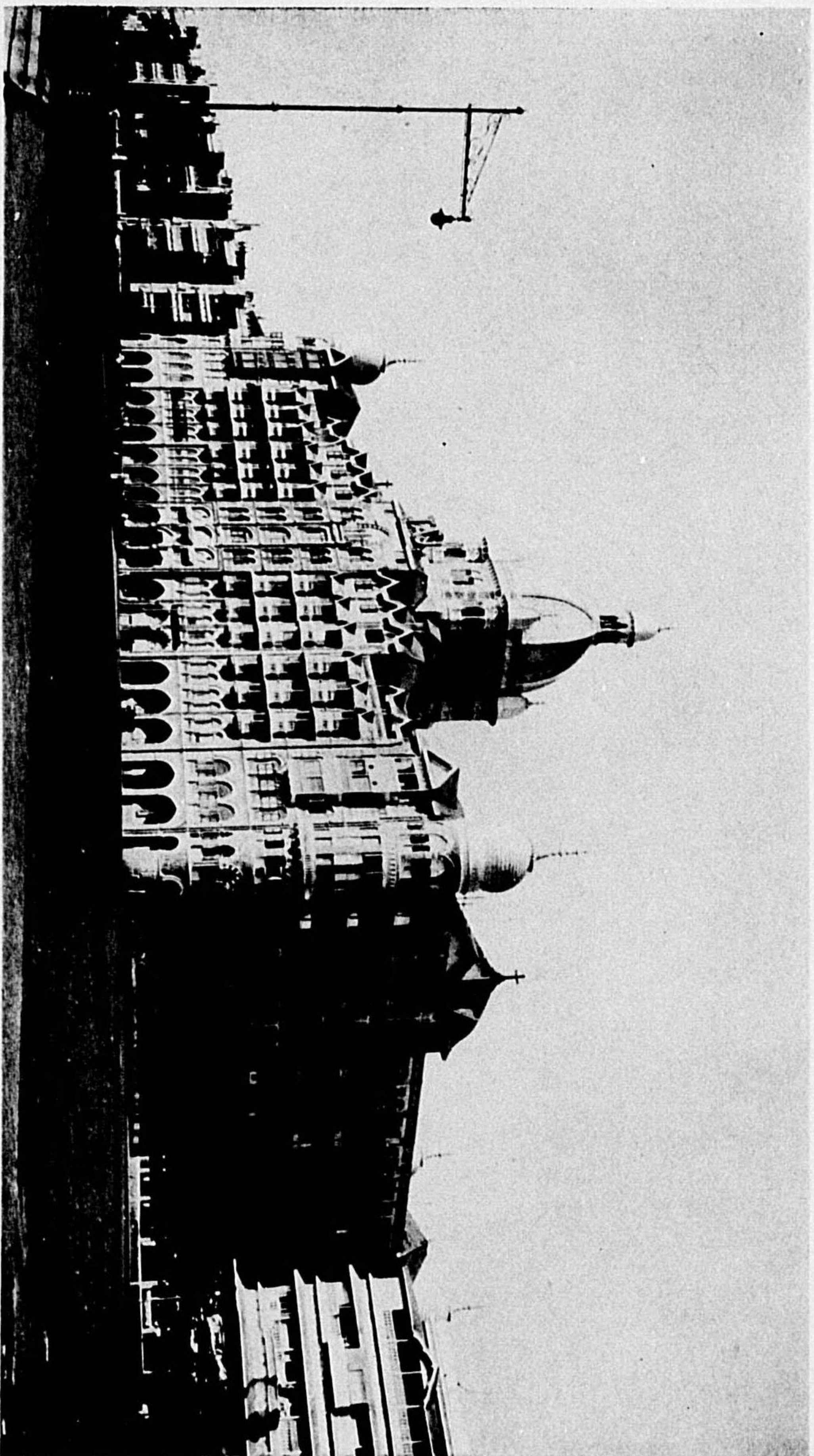
のではない事、圖を見て

知るべし。

銘文
ERECTED TO COMMEMORATE THE LANDING
IN INDIA OF THEIR IMPERIAL MAJESTY
KING GEORGE V AND QUEEN, MARY
ON THE SECOND DECEMBER, MCMXXI

八五





八六. 孟買市タージ・マハルホール全景。

(昭和十年十二月十日)

前圖で見る様にグレート・オアシヤに近く、

海に面して建てる孟買—恐らく全印度でも—

特等旅館の一であらう。恐らくアグラのタージ・

マハル(三六)と名置共に等しく、のみならず形も

質も亦同じく、何れの點から見ても世界一を標榜

してゐるのであらうが、外觀は大きいばかりで似

てはゐない。四隅小塔の圓蓋はいくらもサラセン

式だが、側面には變形形の波形翼形造の屋根が見

えてゐるし、肝心の中央塔が圓い平面ならい

が、四角な上に屋蓋は寧ろ伊太利國フレンツの

大會堂、サンタ・マリア・デル・フィオレのブルネ

レスキの大圓蓋を思はせるもので、サラセン式の

ところなんか少しもない。但したださういふ名を

つけたに止るとせば夫返の話。

八七. 孟買市の圓堂。

〔昭和十一年四月八日〕

此も亦市内を車で通りがかりに見付けたので、先づ印度に於ける最

後の寫眞である。繁華な町の車道の島の上にてある事、さう倫敦

市ストランド町のまな中に、「セント・メアリー・ル・ストランド」や「セ

ントクレメント・テンプル」が頭張って、交通の妨害をしてゐるのと

同じ理窟であらう。此は印度教の圓堂であらうが、中印度・マドラス市

の河辺、ラムナガルの圓堂 (Temple of Ramnagar) を小さくした

様なもの。孟買市には少しばかり珍らしい。

八八. 孟買市邸宅の一例。

〔昭和十年十二月十一日〕

孟買市内住宅區域を通りがかりに、この様な邸宅に氣がついたので、

参考のため寫眞をとつておいた。正面の兩隅に塔があり、其間が切妻

造にしてあるところは、小さい教會等から考へついたものかとも思は

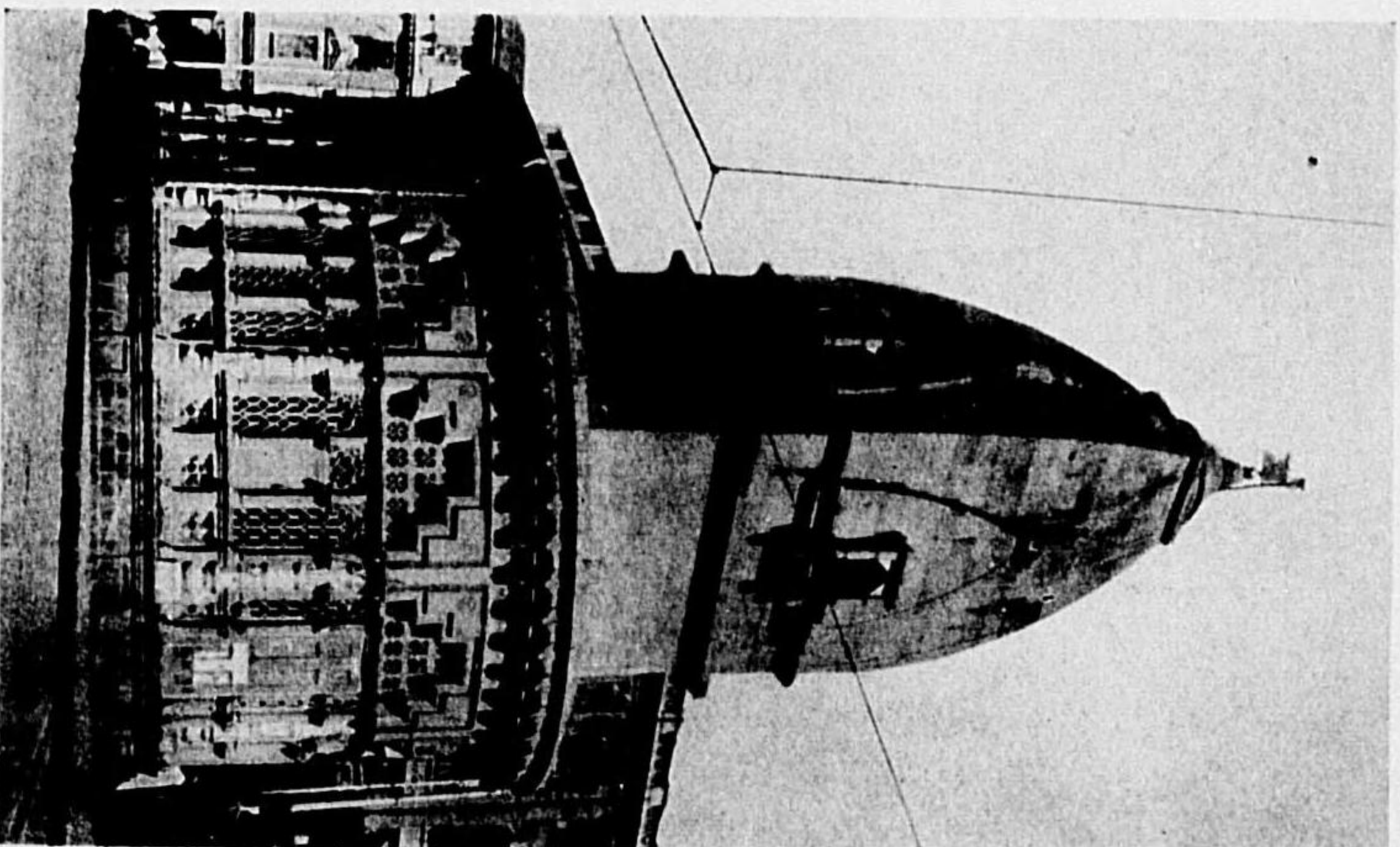
れる。車寄塔の圓窓・窓等、サラセン式を取り入れてまとめたのであ

らうが、夫にしては切妻がいけない。併しこれは折衷式と言ひ換けら

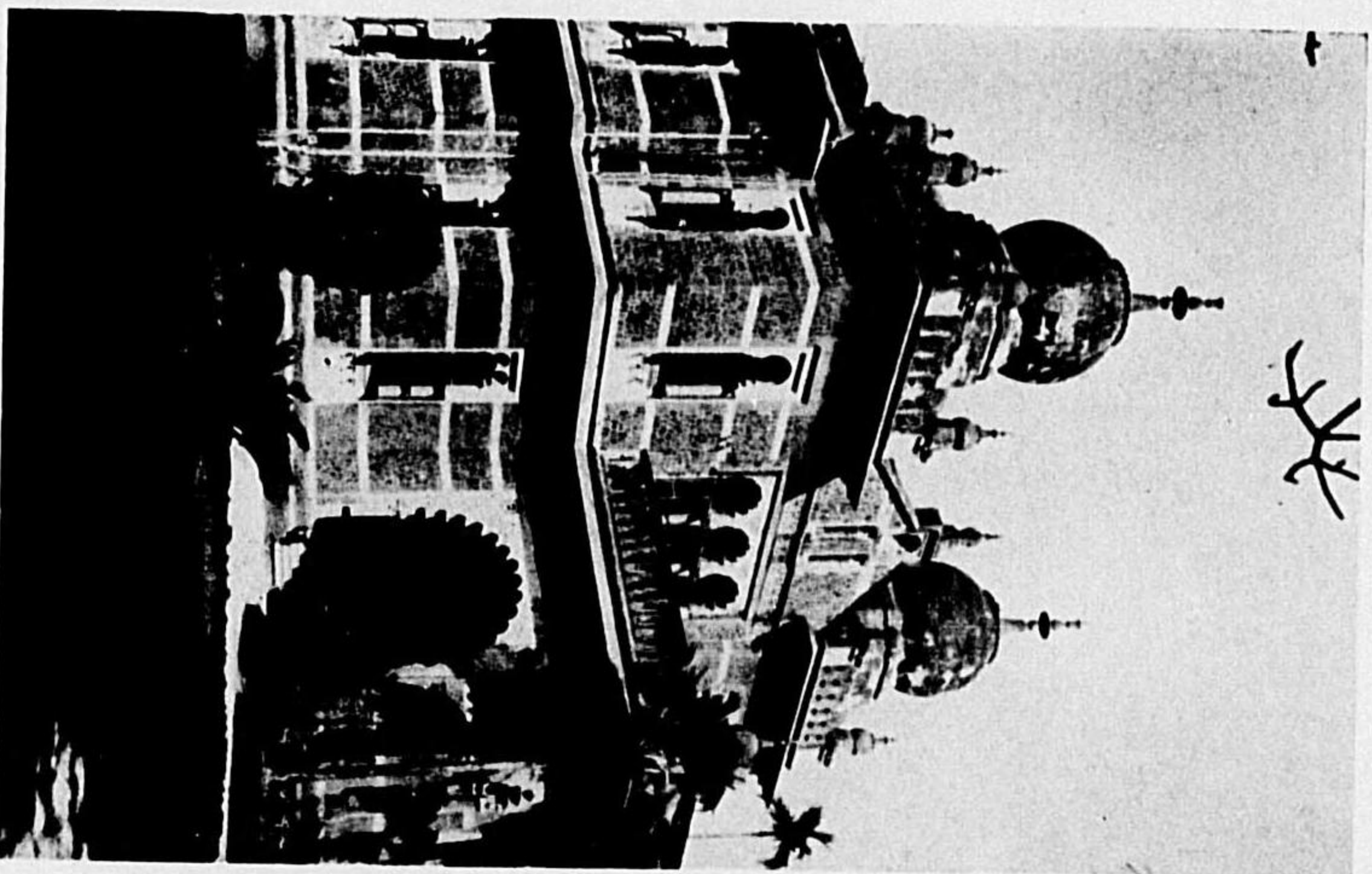
れる。けれども總て細部が中途半端で、恐らくこれはほんたうの建築

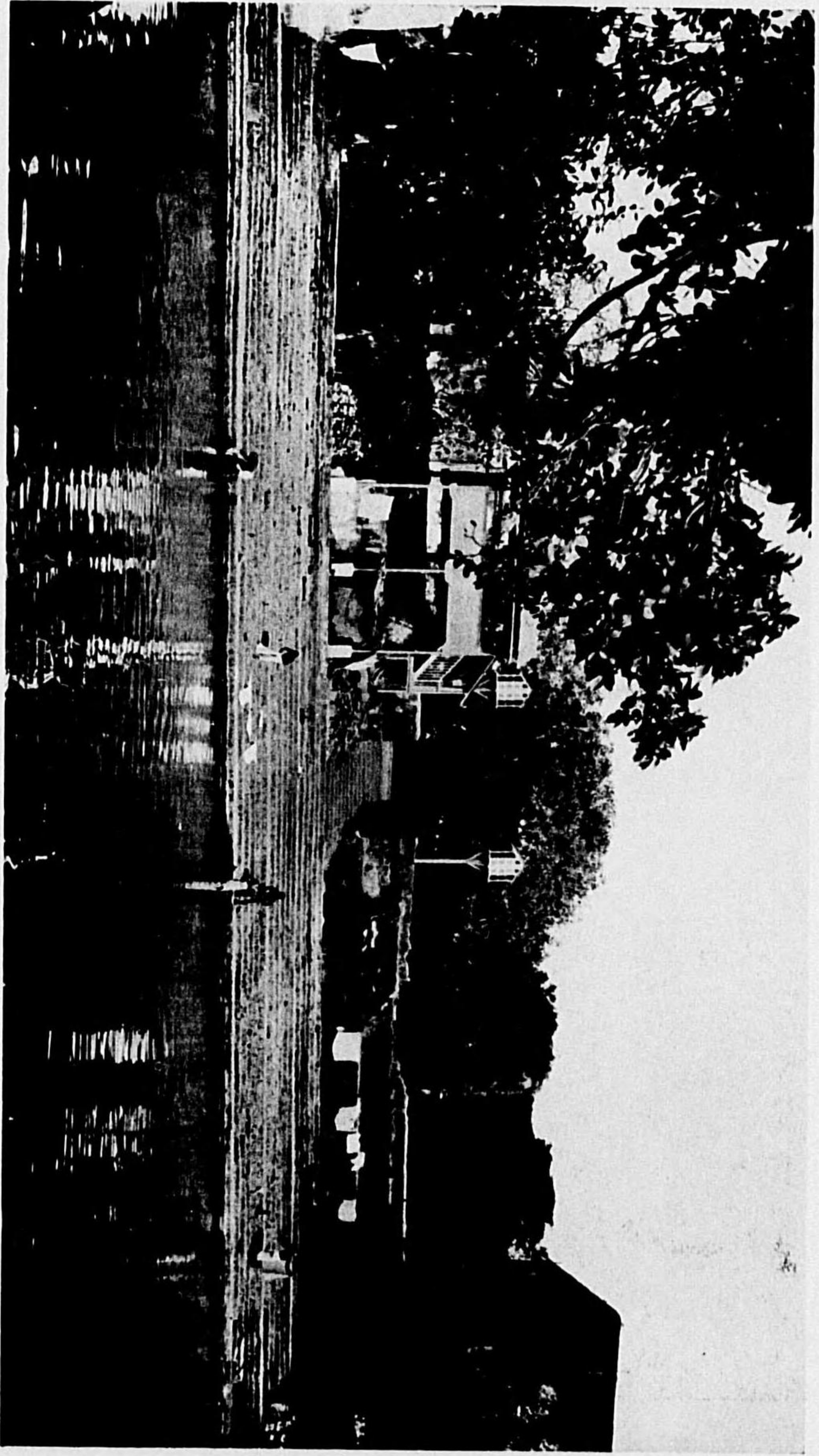
家の設計監督ではあるまい。

八七



八八





八九. 孟買市ベンガンガ・タンク。

(昭和十年十二月十一日)

孟買市には「モンベンデ・タンク」と呼ぶ沐浴

池があり、「ボンベイ」といふ名は夫が元とい

ふことである。どの様な沐浴池だらうかと思

てゐたが、つい見る機会を失した。ここに掲げ

たのは、同じく孟買市内だが、ベンガンガ・タ

ンク(Benganga Tank)と稱する池。可なりな

池で、現在の様な文明開化の歐風の町に、いく

り夫が住民の區域であるにしても、この様な大

沐浴地があるといふ事は、自分で見なければ、

恐らく誰も信じないであらう。「ベンガンガ」と

いふ名は、そこできいたのだから確かであらう

が、案内記にもかいてないから、間違ふとは

言ひきれない。

九〇



九二



九一



上、九〇。エレファンタ窟殿部分

右下、九一。同 柱頭

左下、九二。孟買市ビクトリア公園の石象。

(大正十一年十一月二十六日)

(昭和十年十月十三日)

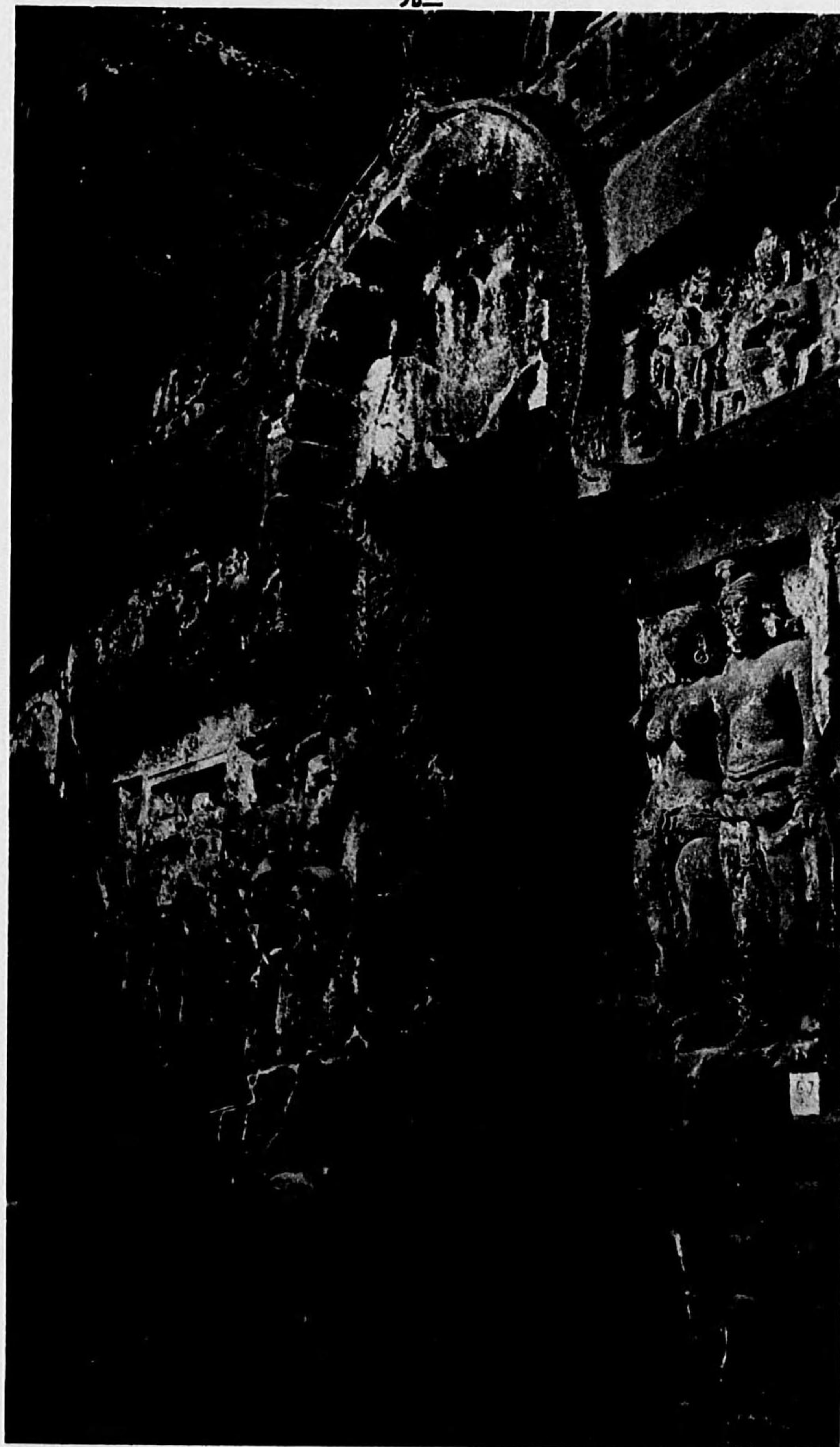
(昭和十年十二月十三日)

エレファンタ(Elephanta)島は孟買市をさる六哩の海中に在るが、毎日定期の便船があり、一時間乃至一時間半で達する。時間と費用とを節約するためには、午前中で十分に見物ができる方法もある。エレファンタ窟殿は、當初は佛道の苦行者即修道僧の隠遁所であつたらうが、後に漸く變つてきたのかも知れないといふ説もある。現在は印度教窟になつてゐる。

窟殿の掘鑿は大凡八世紀頃——奈良時代中期より平安初期にかけて——の事であらう。エロラ窟殿より少し後れる位に考へられてゐる。併し又第六世紀頃らしいといふ説もある様である。窟殿は主室の幅と奥行と殆んど同じで一三〇尺に一二九尺。其主室は北を正面とし、中央の大室は東西に長く、東方の中庭の北に面して更に一小室がある。九〇は此小室の正面即北面である。大きき一四尺×一六尺。隣伽を祀る。

此窟殿に用ひてある石柱は、柱身が方形で、全長の殆んど中央から上、換言すれば上方半分は、圓形となつて周圍に細い「溝彫」(ミゾボリ、Flutings)があり、柱頭は一種の回轉體即「座褥型」なること九一の如く、其中央に平紐で結んだ様な彫刻がしてある。其全長一五尺乃至一七尺。中央の大室正面には創造・保存・破壊を意味せる三頭のシバ神の大胸像(Trinidhi)がある。高さ一九尺、顔面長四尺乃至五尺。尙ほこの大室の西方に近く、方形に石壁を以て區劃してある内にも、隣伽を祀つてある。これに就いては『印度紀行』(明治二十年一月出版、陸軍文庫)に興味ある記事がある。曰く、「……此石洞ハ岩石ヲ穿チシ巨大ノ佛寺ニシテ洞内數室ヲ爲シ圓柱及ビ佛像ノ彫刻實ニ驚クベキ工業ト洞内二三ノ墳墓アリ圓形ノ石ヲ以テ之ヲ標ス標上頗ル滑ラカニシテ光耀アリ聞ク子ナキ婦人來拜シテ腹部ヲ磨スルニ因ルト……」。

九二はエレファンタ島から移したと傳ふる石象で、今孟買市ビクトリア公園博物館前にある。大して美的ではないもの。



九三. カーリー窟殿制多窟入口。

(大正十一年十一月二十五日)

日本人で印度を旅行する場合は、年齢や職業の如何を問はず、誰彼の別なくカーリー・カネリ・アジャンタ・エローラ等の窟院見物をするやうである。ところが同じ窟院でも、ナシク・バージ・ペドサとなると、殆んど誰も行かない。バージ・窟等は停車場から歩いてでも知れた距離なのに、さうして見るものも一つ所にかたまっているのに、面倒なためか行かない。勿論専門家でないから行く必要がないので、やめるのだからが、孟買市に長くなる日本人に、行き方をきいても、そんな窟院がありませんかといふ、私共にとっては洵に意外な質問を逆を受けるのである。

カーリー(Karli, Karle)窟は孟買から八〇哩、汽車でロナウラ(Lonavli)驛に下車するのが最もよらしい。孟買からプーナ行の急行で二時間と三十七分で行く。歸りはさう都合よくないにしても、一日で可なりゆっくり往復ができる。手まわしよくして自動車を得られれば問題はないが、馬車でもよらしい。とにかく七哩半の三里強だから、歩くと六里餘り、さうなると日歸りは少しやっかいである。

カーリー窟殿は山の中腹にある。そのうち制多窟——即ち塔婆を備へた窟殿——は一つで、あとは僧坊である。其唯一の塔婆窟は實によく完全に保存されて居り、又印度に現存せる最大のものである。正面に二本の遊離せる柱及び二本の片蓋柱があり、そこを入ると、幅約五〇尺奥行二〇尺の一室がある、此圖にでているのが此室で、中央は大きく左右は小さい出入口があつて、更に内部に入る様になつてゐる。此圖には中央の大出入口と、其向う左方の小出入口が半分見えてゐる。其壁面にはいろいろな彫刻があり、出入口の上部は古窟殿に特有の拱(九五・九七・九八・一〇〇・一〇二等参照)が刻んである。殊にこの窟殿は大凡西紀前一世紀頃掘鑿されたものとされてゐるし、さうして此種の工事が最も洗練された時代のものだから、旁代表作とするに足り、貴重な遺構の一として、頗る重要視されてゐるのである。

九四、カリーノ窟殿制多窟内部。

〔大正十一年十一月二十五日〕

孟買——といへば驛は「シクロトリア・タリミナス」から「スロン」迄十あるが、起點

から數へて八五哩に「アラリ」(Alari)といふがある。これはロウラの次驛で、

ここからだとカリーノ窟殿迄四哩である。案内書には「アラリ驛から此窟殿へ行く様

に記してあるが、急行が停らないから、どうも都合よくない。やはりロウラ驛から

でないといふ仕来にわるい。

扱て此窟殿の内、制多窟は一つだといふ事は既に記したが、正面に前圖に示した様

な前室があり、そこから更に内に入ると、長約二五尺幅約四五尺、其後端圓形の大

室がある。即ち「後陣」(Atrium)に終り、其圓形になつてゐる部分の中心に、直

徑約一〇尺の塔婆がある。尙ほ壁面より約一〇尺をへたたり、左右に一五本づつ、正

面に四本の美しい石柱が並び、更に塔婆の後方を廻りて七本の簡單な柱がたつてゐる

事、此圖の如くである。だから中央の身廊に當る部分、圓に於いて柱から柱迄の中心

距離は約二五尺である。

左右の柱は、其柱身は八角形、基礎は四重の段形の上の蓮葉のものと、柱頭は特

殊の形式で、其上に二足の象、象の上には人物を刻んである。柱頭の意匠は、象と馬

との差があるだけで、ペドゥッ窟殿入口の夫(九八・九九)に酷似してゐる。カリーノ窟

の柱頭が特殊の形をしてゐるのは、開花した蓮が極端に便化したとも見られるのであ

る。天井は背の高い穹窿状で、木造弧状の肋で支へてゐるのでみると、天井は右造拱

を模したのではない事が明白である。

中央の塔婆は、石欄を廻らせる二重の背高い基礎の上に建ち、上に立方體の平頭があ

り、其上に木製の相輪を存す。輪數は僅に一個だが、これは實重な存在である。二重

の基礎が一重であり、夫が圓くなくて方形の平面である場合を想像せよ、然る時は

我國塔婆の最上部「露盤」に、さうして其上の半球形の塔身は「依鉢」に當る事が判る

であらう。更にその上の立方體をしてゐる「平頭」の上の六重の薄い蓋の様なものも三

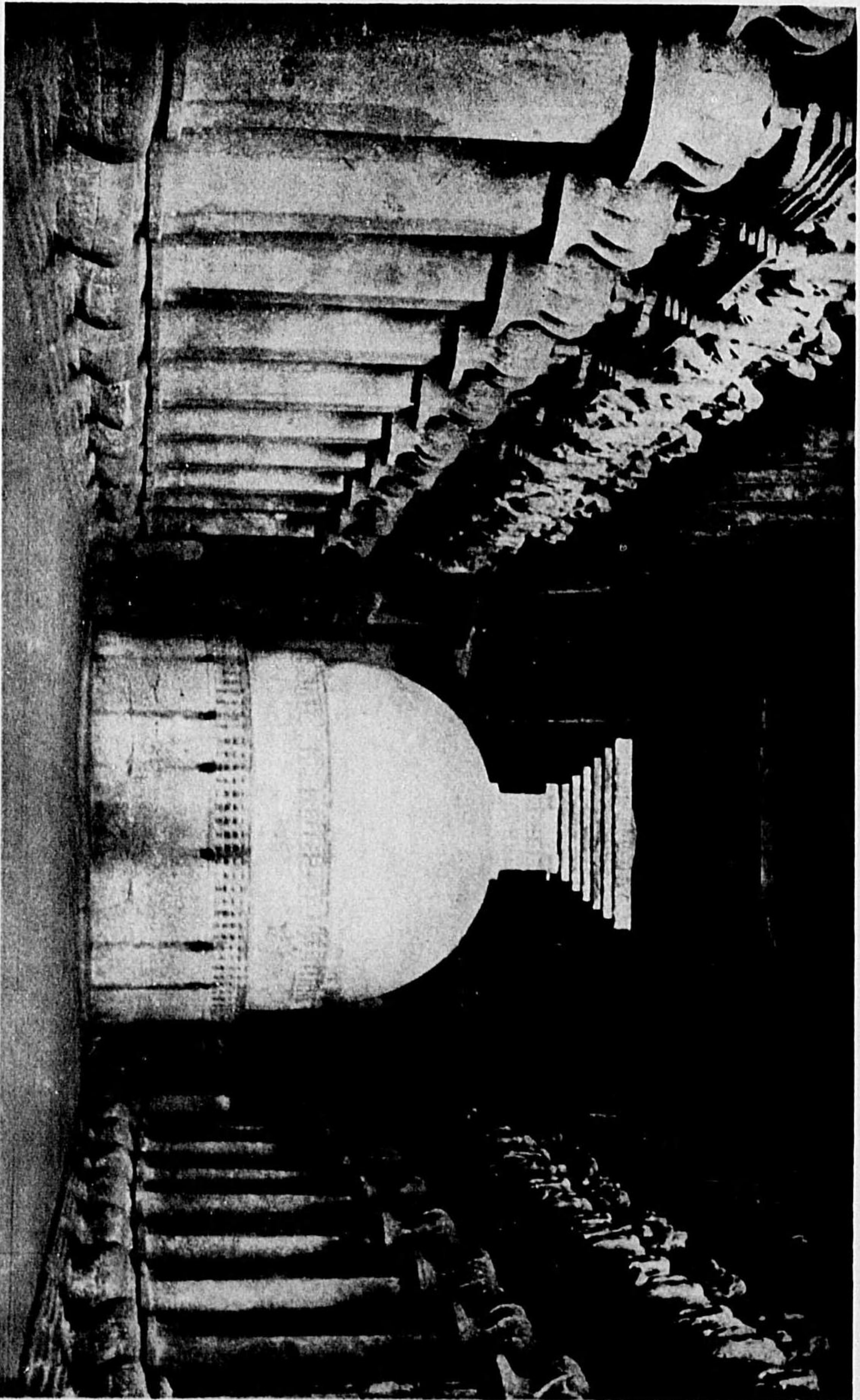
重となり、最上重のものに花瓣がついたならば、夫は正に謂はゆる「講花」(殊に奈良

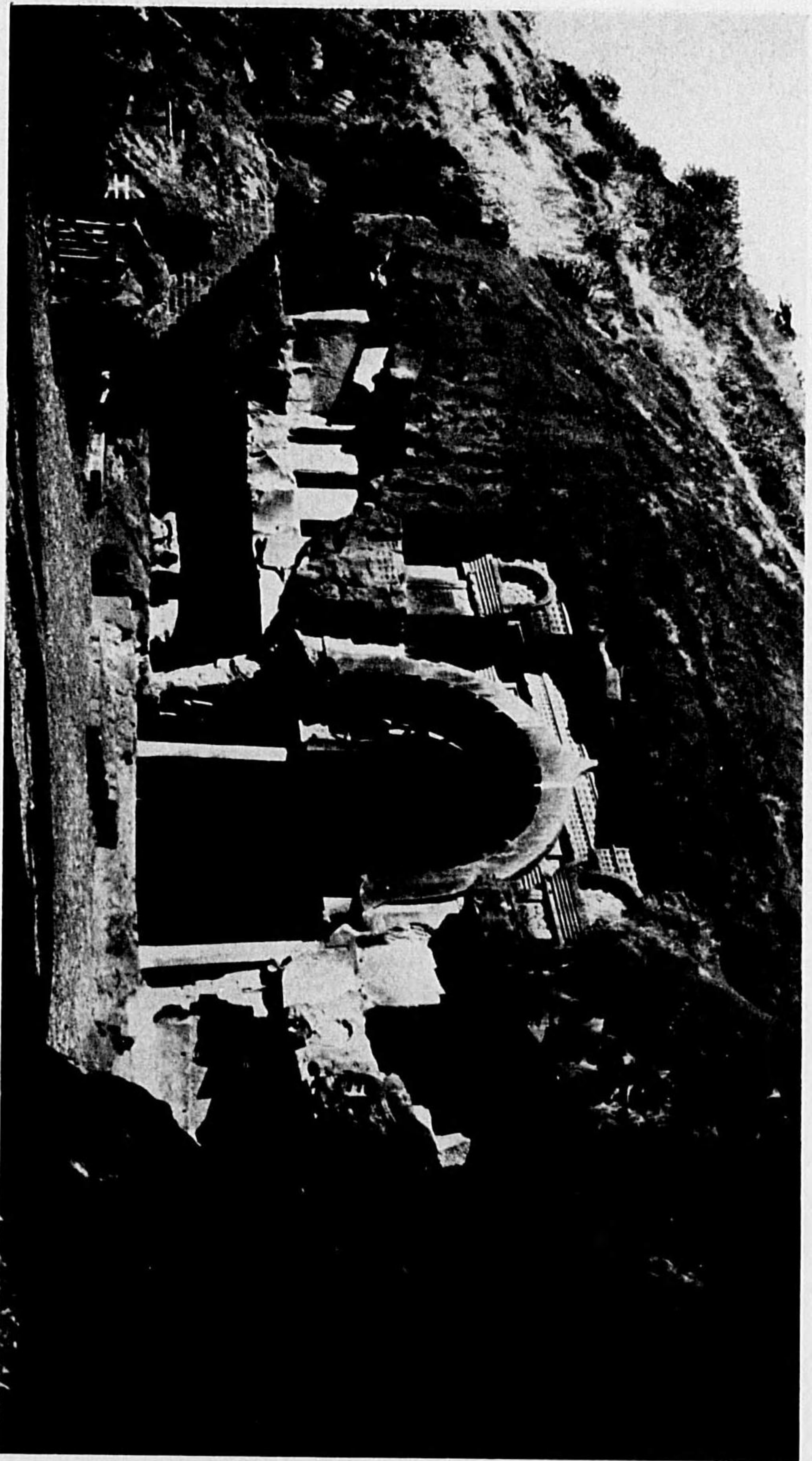
市西ノ京薬師寺三重塔の場合)であり、相輪が一個でなくて九個に發達したならば、即

我國の塔婆最上部の裝飾と全く同一である事を知るのであらう。此窟殿は西紀前一世紀

の中頃との説もある。

九四





九五

九五. パーシヤ・窟殿制多窟全景。

(昭和十一年一月十九日)

パーシヤ(三三三)窟殿は、マラーリ驛の南四分の三哩といふと約一哩といふのと、二種の記事が別の書物にあるが、どちらでも大した事は無い。せいぜい十五町位だから知れたもの。併し窟殿の近く一町位は、分配が急で道は乾燥泥土の粉末が一ぱいだから、今はどうだか知らないが、若しそのままなら車では登りにくい。何れにしても汽車の都合は最もよくないから、畜買から自動車でないと思歸りはむづかしからう。窟殿は總て西向きだから、午後行くと一面に日光が当たつて、内部透明るいから、見学にも寫眞にも都合よろしい。

此所では多くの窟殿の内、第十二號が即制多窟で、圖の中央に、内方に少し傾いてゐる柱で、例の特有の大蓮花拱を支へてゐるのが夫。印度に於いて最古であり、且つ最重要のものと考えられ、西紀前二百年に其起原を有するといふ。此窟は幅約二十七尺、奥行六十尺。カリーリの夫の様に後陣は圓形で、身廊と側廊との間に二十七本の柱がたつち、後方後陣の弧形の部分と同心の位置に、其直径約十二尺五寸の塔婆がある。但し保存はカリーリに及ばず、平頭は右蓋を失つたのが、伏鉢上に單に立方體がのつてゐるに過ぎない。

身廊と側廊との間に立てる柱は、何の裝飾もない八角柱に過ぎないが、圖でみる様に少く内方に傾いてゐる。フーカフンは「最も不愉快な角度」だといつてゐるが、そんなでもない。カリーリに比べれば、夫はいろいろ不満な點もあらうが、少しばかり酷評の様な気がする。私は気がつかないが、カリーリ同様——左側第五柱——右側の第八柱に小籠を造つてあるさうで、これは誰人かの舍利を納入したものと推定し得るといふ記事がある。

圖に於いて左方に新しい石階約二十級が見えてゐるが、其右方が第十二號窟、次はこの大制多窟で第十二號、其右が第十三號窟、第十四號は、と右手で、西真では、さうかきかきになり、眞の裏で見えなくなつて了つた。此窟を南方即ち右(西向き)から右手になる)方に少し行くと、塔婆窟や僧坊の面白のがある。

九六、バース・窟塔婆窟内部。

(物差は曲尺の一尺、昭和十一年一月十九日)

塔婆窟には十四基の塔婆があり、内五基は窟内に、残

餘は窟外にある。窟外最北のものは、特に美し平頭を

有してゐる。圖には窟内塔婆の一を示したが、平頭及び

その上部の、後に發達して講花となるべき裝飾も明か

に、又相輪は天井から刻みだしてあり、此間に木の心柱

を入れた面白例である。

九七、バース・窟殿の内南方僧坊内部。

(物差は曲尺の一尺、昭和十一年一月十九日)

僧坊の一の内部壁面の彫刻の一で、出入口の有様がよ

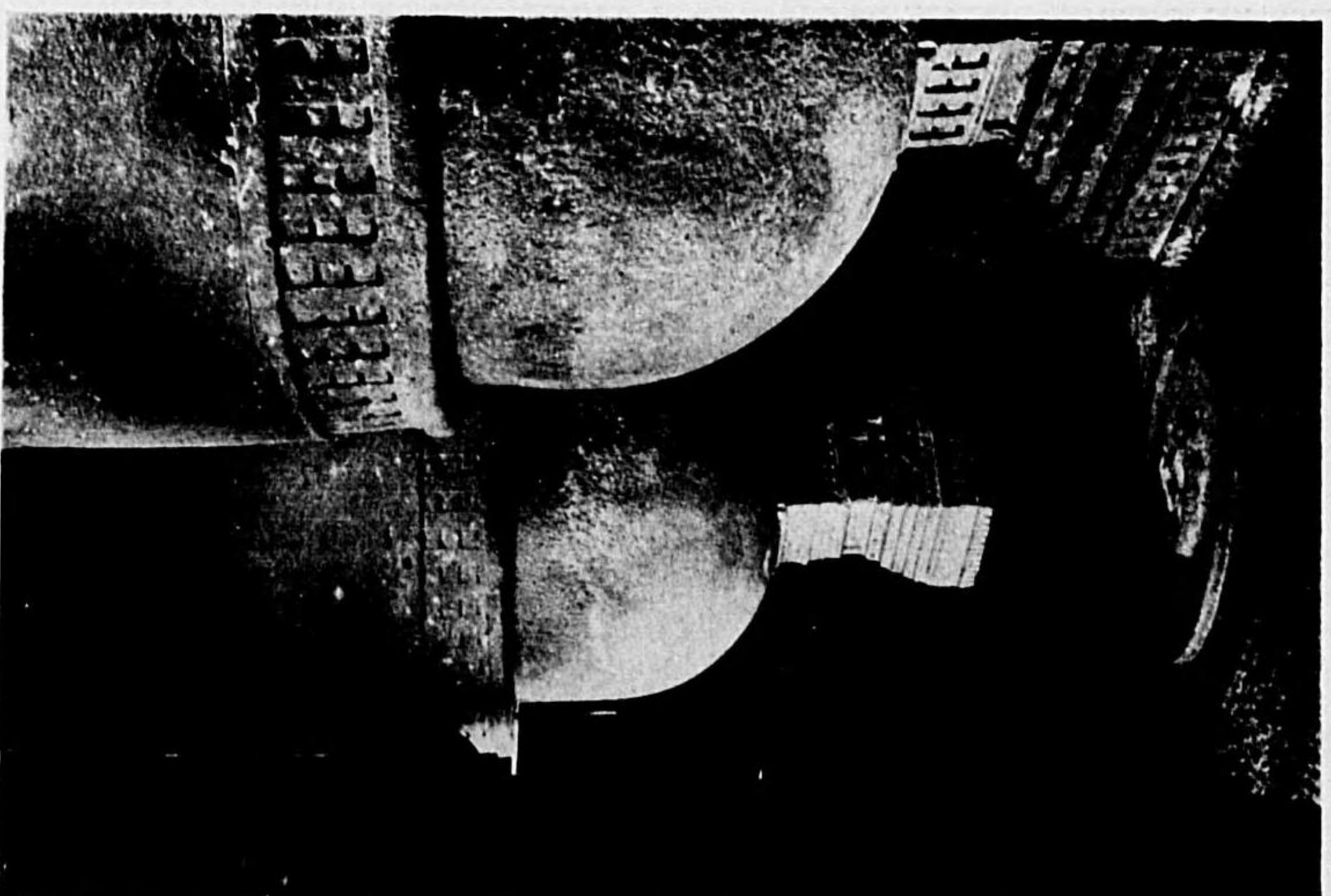
く判る。即ち戸口の上には例の如く菊花拱がある事、

九五の制多窟正面と同じく、兩側の柱・額縁等も亦少し

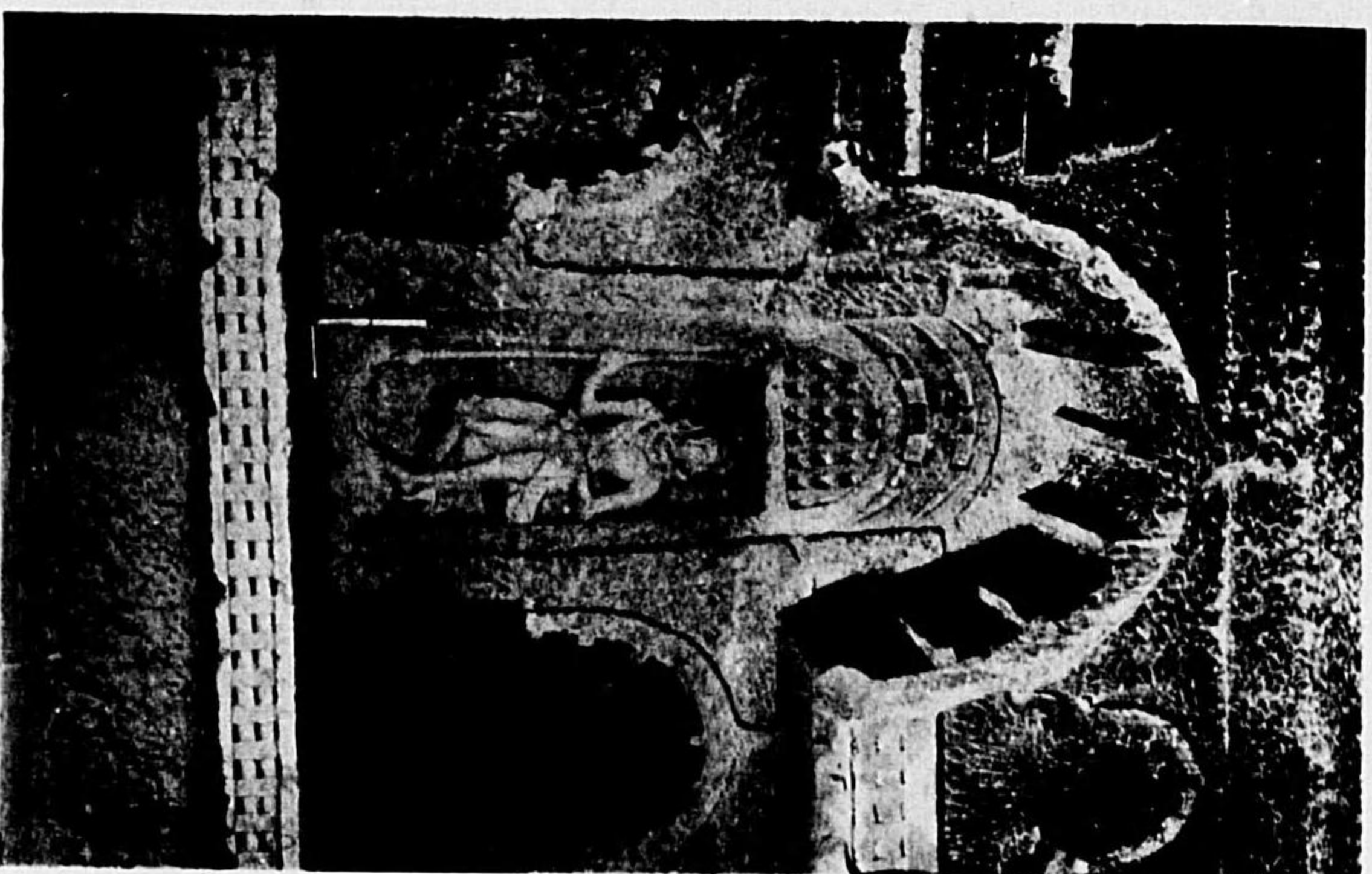
く内方に傾斜してゐる。さうして貴人が此戸口から外へ

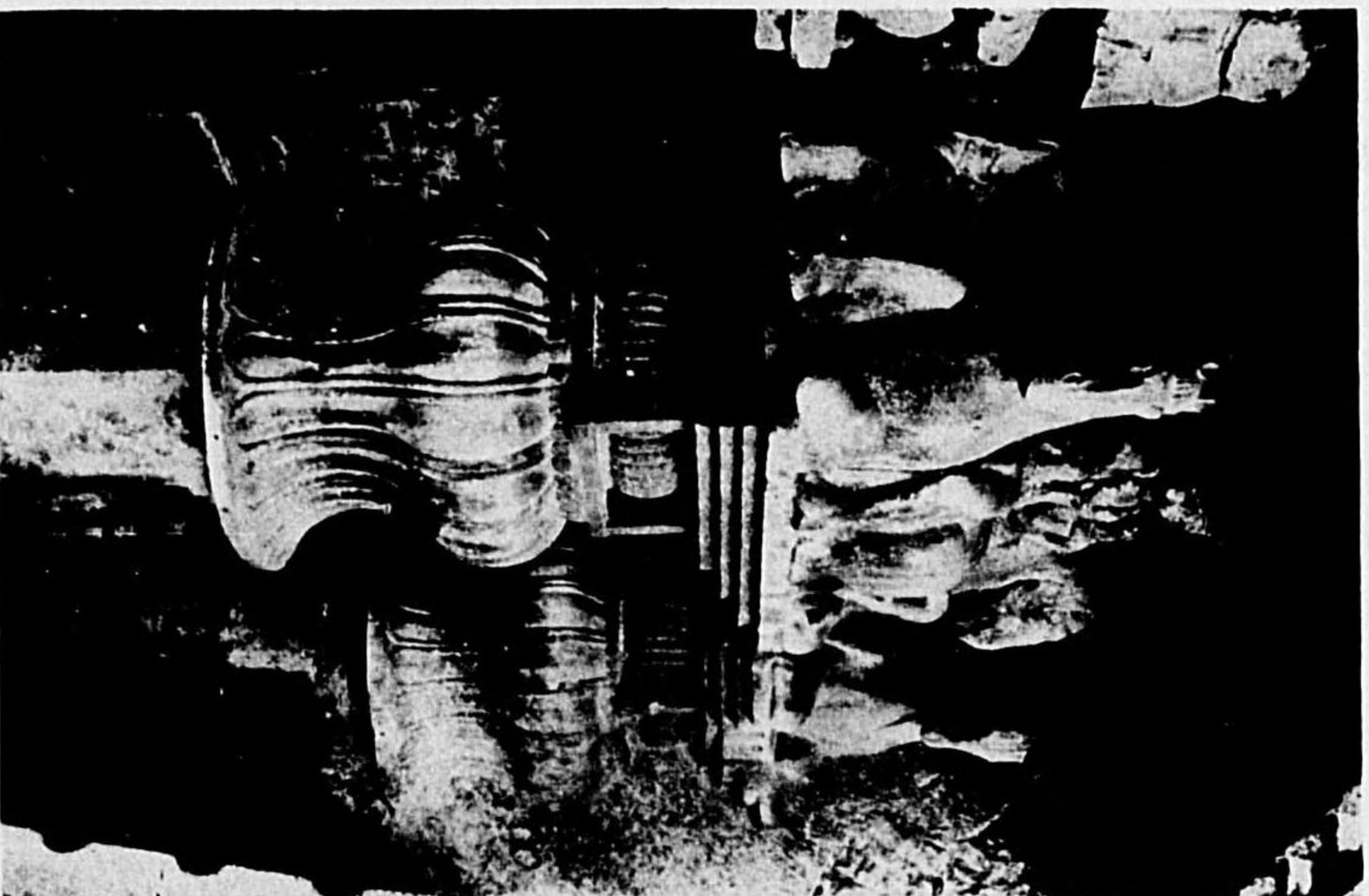
出ようとしてゐるところが彫刻してある。

九六



九七





右、九八、ペトサ廟殿制多廟正面。

(昭和十二年一月十九日)

左、九九、同 柱頭詳細。

(昭和十二年一月十九日)

汽車の都合はうまく行かなくても、ペトサならアラリア驛から近いし、又自動車なら
廟殿の下迄行ける。ところがペトサ(Ἡρώον)と来ては、案内書に驛の東南方約四哩とある
から、まるで平地の様だが、とても大變。餘程覺悟して行かないと、途中で三連も三連
も行かなくなる事がないとも限らない。

私は一月十九日の朝六時半孟買發、三時間餘りを費し、車で行ける所迄行き、下車して
歩き出した。此地點から二哩との事であつた。ところが山に登ったり下ったり、正午少し前
に漸く此廟殿の前についた。歩きつめてたふり二時間を費した上、道をよく知てる筈

の案内者の印度人は、どうした事が大分まごついた。尤も一日にペトサとペトサと二つ
さまさつもありで出かけたので、此様なことになつたのかも知れなかつたが、目的は漸くにし

て達したものの、孟買へ歸着したら夜の十時十分であつた。ペトサの方は行かうと思へば
一人でも行けるが、ペトサは先づ望みはない。早い話が辨當清涼飲料、紅茶、珈琲、氷塊
等、自己保存に必要な品を一切合切持つて行かねばならない。將來天氣がよくなつたら、

行つてみようと思ふ諸君は、餘程用意をしてから出かけた方がいい。

ペトサの廟殿は制多廟と貯水池とより成り、規模は小さいが甚だ面白く、殊に僧
坊は意匠獨特ともいふべく、行つてみるだけの價値は十分ある。制多廟の正面は大變に立
派だが、前に大岩があり、此大岩の中央に幅僅に五尺切り割つて通路にしてあるから、正
面の大部分は此岩に隠されて了ひ、頗る不満足の外觀を呈してゐる(九八)。

正面には四本の柱身八角形の柱があつてゐるが、中二本は完全に遊離し、兩端の二本は
片蓋になつてゐる。此等の柱の基礎は喜型、柱頭は開花蓮で、其上部に珠文を併列してあ
るのは雄樂であらう。其上は圓の様な設備をなし、最上部の平板上に牛・馬・象等が跽踞
し、上に人物がのぼる。これは寧ろカトリクの夫よりも波斯式が濃厚であると言はれ
てゐる。前室の壁面に多くの蓮花拱を刻してあるのは注目してゐる。

上、100。ベドサ窟殿制多窟内部。
下、101。同 毘訶羅窟内部。

(昭和十一年一月十九日)
(昭和十一年一月十九日)

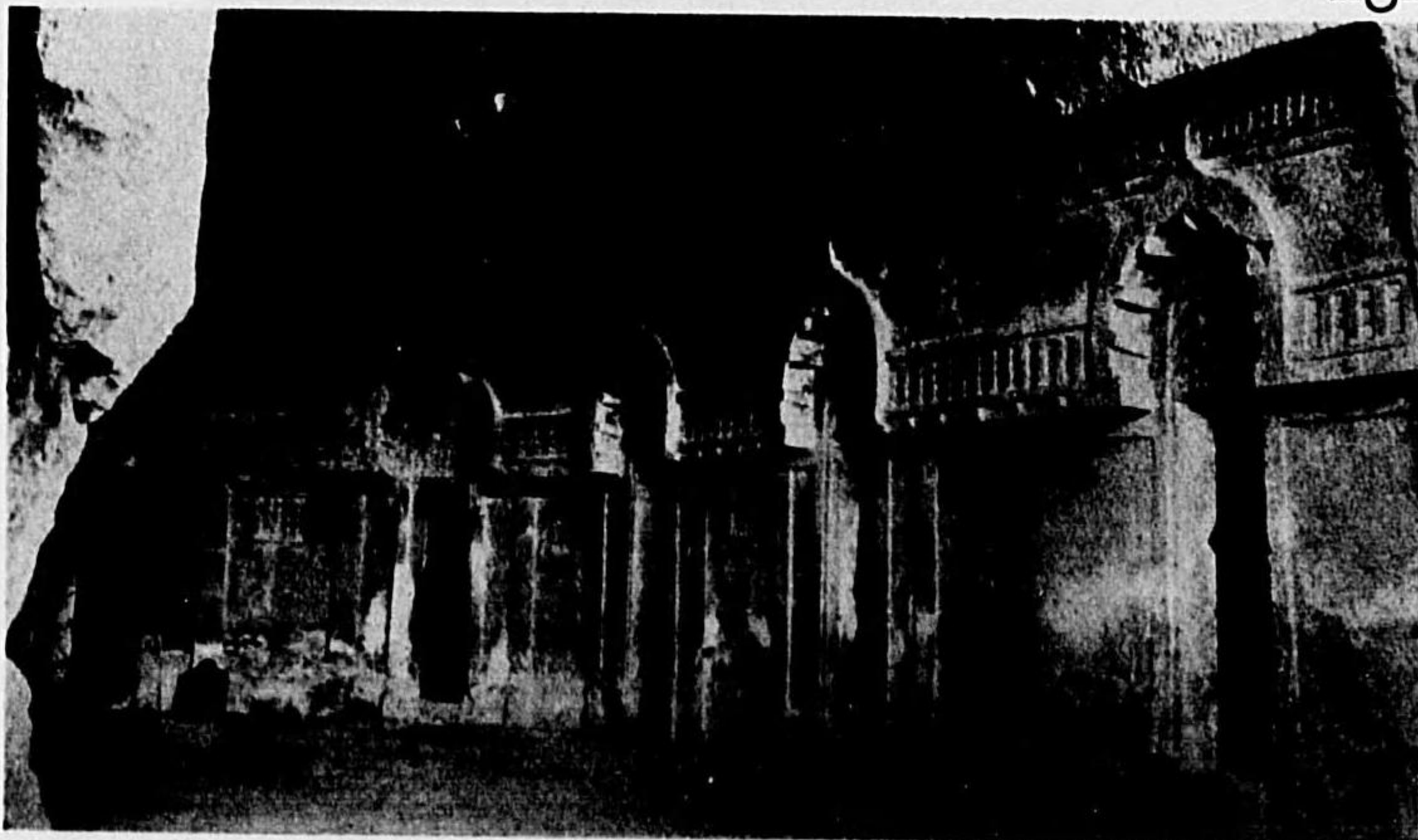
或書物に「孟買・プーナ(Poona)街道を、プーナを距る三十一哩の地點から南方のピムポリ(Pimpoli)に向ひ田舎道を通り、ここから山腹の急斜面を登り、南側の急斜面を下るのが、最も行き易い」とあるが、これでは我我の様な、土地に馴れてゐない外国人には何にもならない。

100は制多窟のつき當り、内部の塔婆も共に見せたもので、長さ四五尺幅二一尺、柱は少しく内方に傾き、八角形をしてゐる頗る簡單であるが、向つて右方の柱五本の上方に、蓮花・輪寶等を陽刻してある。天井は現在何の設備もないが、總て木造の部分は、最近二十年以來、全部跡方もなく除去されてしまつたのであつた。實は一八六一年(文久元年)の頃には、木材の破片が床上に散布してゐたし、其後十年(明治四年)しても、未だ柱には古代佛畫の彩色の跡をたづね得たが、其後石灰水で上塗をしたため、全部臺無しにしてしまつたさうである。中央の塔婆は圓形の二重の基壇上であり、石の玉垣は三重に廻らしてある。平頭上の方形平板の數も多く且つ大きく、甚だ重厚に失し、釣合がとれてゐない。其上から木櫓を出し、上は蓮花に終つてゐる。これは明らかに後補で、平頭上から上はどうも感心ができかねる。

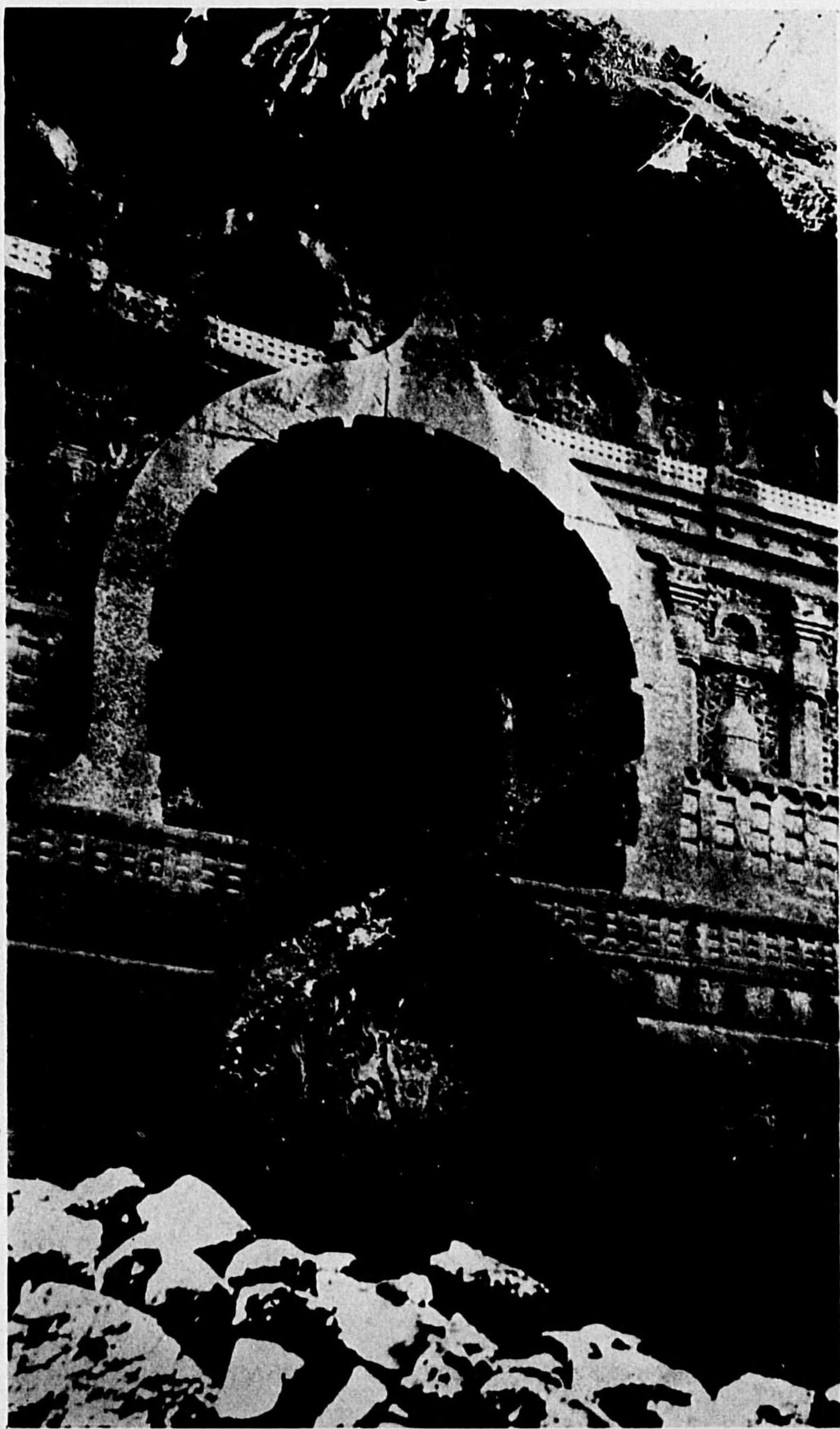
101は其隣の毘訶羅(ゴハラ、(Vihara)僧坊)窟で、制多窟の様の後陣は半圓形をなし、長三二尺幅一八尺、室は其周圍にあり、出入口の上部は制多窟の正面に見る如く、例により例の如き裝飾窓花窓があり。窓と窓との間及び天井に近く、玉垣式の裝飾文様がある。又壁面にも狭間飾を「七寶繫」又は「格子」にし盲窓を飾につけてある。



100



101



1011. ナシク窟殿外部。

(昭和十一年二月二十三日)

ナシク窟殿の見學も亦、孟買から車で往復をした。六二〇孟買市コラバの宿舎を出で、前月十九日バージャとベドサ窟へ行。た時の街道を再び走り、途中通行税を取られる錢取所の前に来た度び、止むを得ず暫時停車したが、あとは走りつづけて正味四時間を費し一〇・一〇窟殿へ登り道のところへ来た。孟買の方から行くと、道路の右手即東方から山脈が出てきて、道の所で終つてゐるが、其部分の北面に多くの窟殿がある。登り道の所で車を下り、緩斜面をもの二〇分もゆくり歩けば、樂に行ける。丁度一〇・三〇に窟殿の前に立つ事ができた。

制多窟は一つであるが、毘訶羅窟は多く、中には美しい佛像を彫刻したのもある、併し私は一〇・三〇から一三・一〇迄、一時間と四〇分で一通りの見學を終り、車のある所迄戻つて車中で食事を終り、其後はここから七哩あるといふナシクの町の觀光に出かけ、夫をすまして孟買に歸着をした。車の表示機に現はれた距離は、コラバ・ナシク間二二六哩、だから往復二五二哩といふわけ。

普通ナシク(Nasik)窟殿といへるが、地方的には「パントー・レナ」(Pantou Lena)窟といふやうで、窟殿の数は合計二十三、年代は西紀前一世紀から後二世紀に亙るといふ。1011は制多窟の正面の上部である。正面に向つて左方は地所が高い。出入口上部の石面に刻した文様、及び其上の葱花窓や壁面の彫刻の寫眞は、どうしても高い位置からの方が都合がいいので、この様な圖になつたのである。其正面は非常に手の込んだもので、大きな柱はないが、大體に於いてベドサ窟に似てゐる。此は第十八號窟でここで最古のもの、即約前一世紀と推定されてゐる。出入口上部や、其上の大葱花窓左右の小葱花盲窓、小塔婆、片蓋柱等、仔細に觀察すると興味は盡きない。殊に七寶繋の様な正六角形の文様、及び木連格子の様な文様は、ベドサの毘訶羅窟の壁面にも現はれてゐた事に注意をすると、一層面白味があるであらう。

上、一〇三。ナシク窟殿制多窟内部。

(昭和十一年二月二十三日)

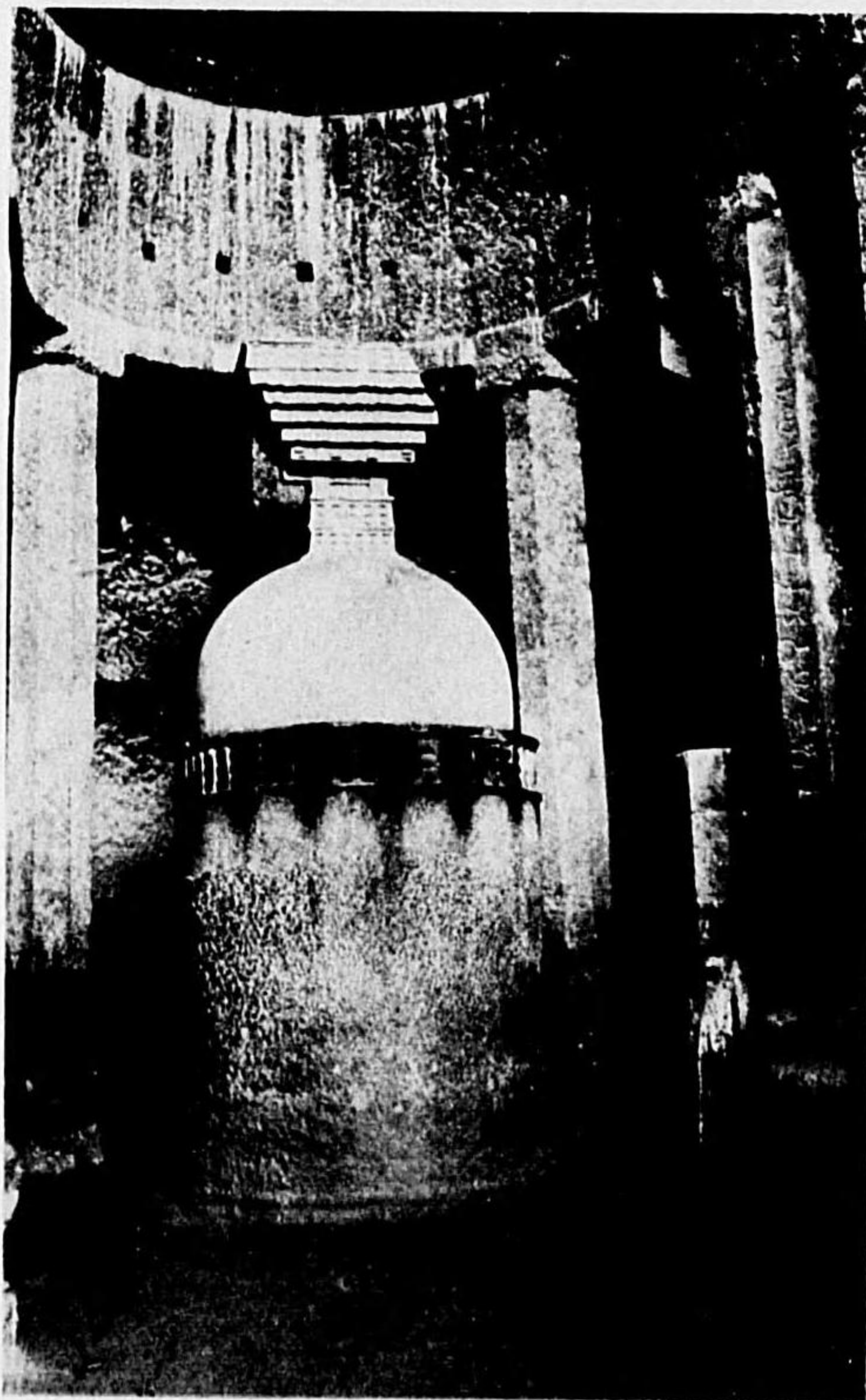
下、一〇四。同。ゴウタミブトラ窟内部。

(昭和十一年二月二十三日)

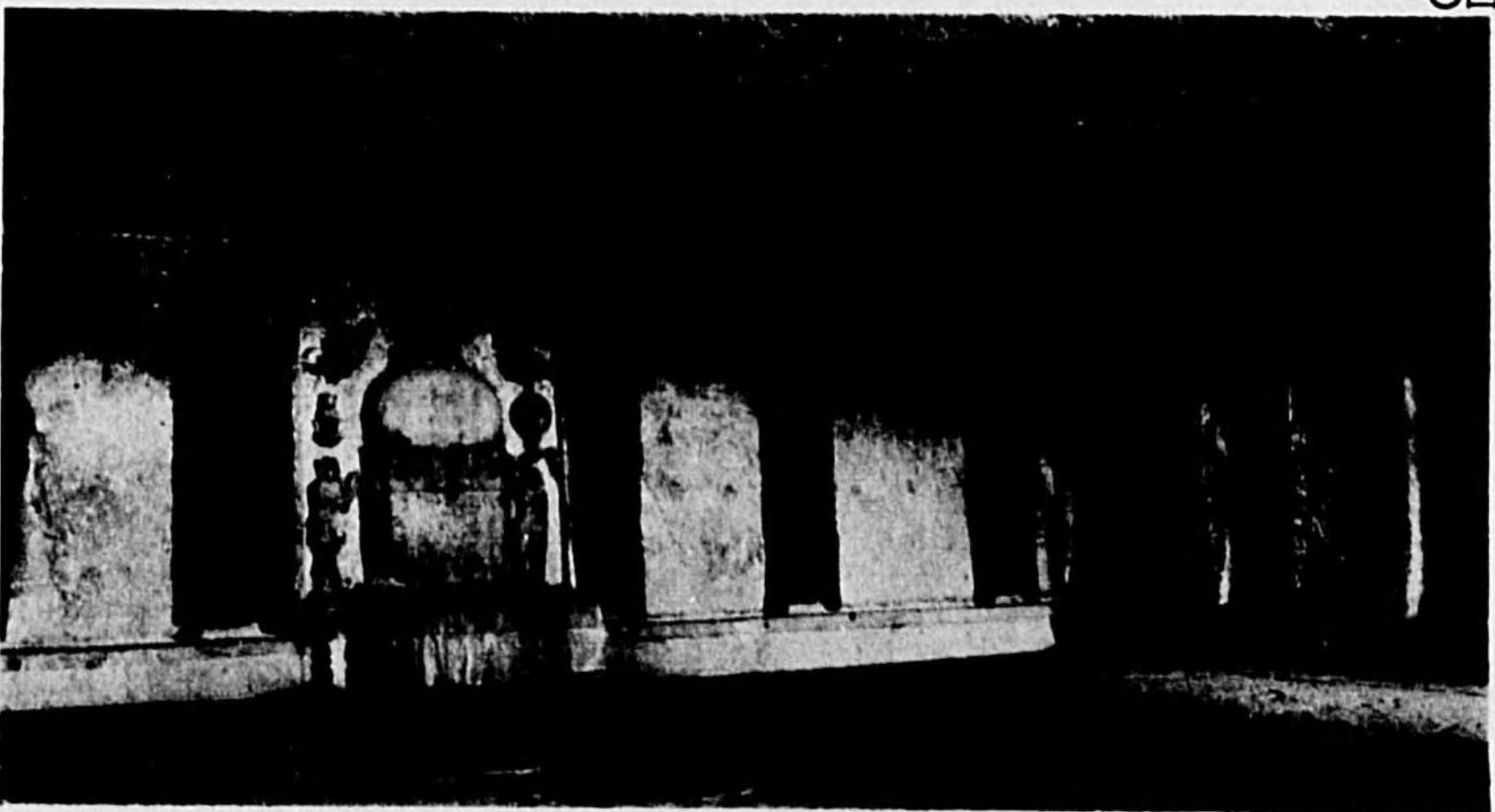
制多窟は内部深さ三九尺、幅二二・五尺、高さ二三尺といふ。内部の有様は圖の如くで、後陣は圓く、列柱で身廊と側廊とに分れ、中央に一基の塔婆がある。塔婆は高さ一重の圓形基壇上に建ち、上に玉垣あり、塔身は徑五尺五寸、高さ六尺五寸ださうで、平頭上の裝飾方形石板は、ベドサ窟の夫の如く、大且つ高きに失してゐる様である。相輪に相當するものは失はれたのか今は亡い。其全形は一〇三の通り。

一〇四は毘訶羅で、ゴウタミブトラ (Gautamiputra) 王の命によりて開鑿されたから、王の名をとってゴウタミブトラ窟といふ。在位西紀後一七二年—一九一年 (成務・仲哀天皇頃) に、アンドラ王朝の一王であった。此窟は中央の大室幅四一尺奥行四六尺、室は右側七、後側六、左側五あり、室前に共通の腰掛を設けてある。後室の中央に近く稍幅廣き壁面があり、一基の塔婆が薄肉に刻みだしてある。此塔は高さ基壇の上であり、完全な平頭もあり、其上に發達すれば請花となり得る三角形の裝飾及び五個の相輪を具ふ。

一〇三



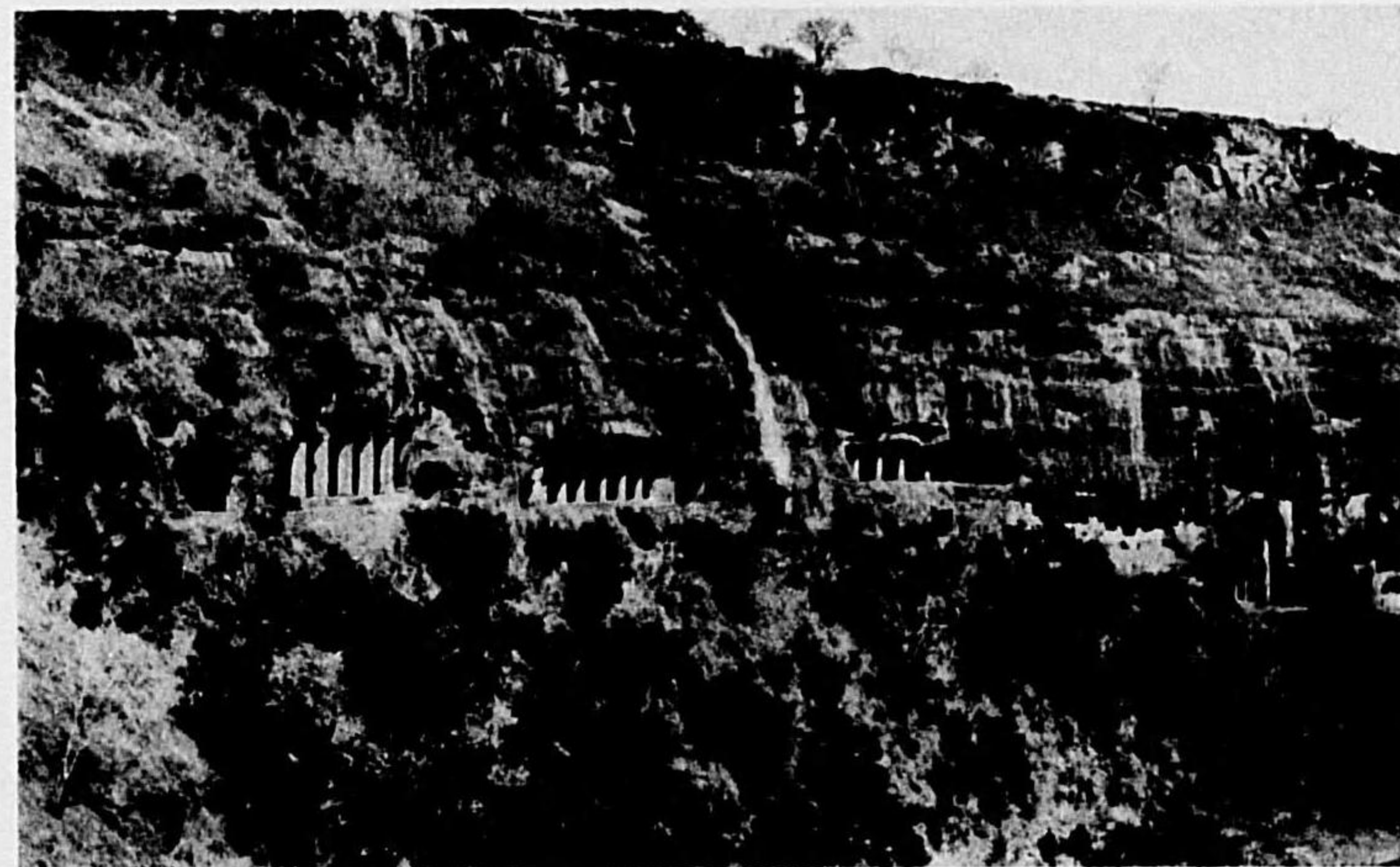
一〇四



—〇五



—〇六



上、一〇五。アジャンタ窟殿全景 共一。
下、一〇六。同 共二。

(大正十一年十一月二十二日)

印度を旅行した日本人は、恐らく一人残らずアジャンタを訪問した筈である。又こととカーリーとエロラとだけは、誰でも知ってる。仍て詳細記述の要を認めない。上の左に下の右がつく。

右、**107**。アジアンタ窟殿第十號制多窟内部。
左、**108**。同 第十九號制多窟外部。

(兩圖英大正十一年十一月二十二日)

アジアンタ(アジミ)窟殿第十號窟は、最古の制多窟の一

で、大き奥行九六・五尺、幅約四一尺、高三六尺といふ。

現在には圖の如く塔婆のある身廊上部は、其昔助のあった痕

跡が残つてゐるが、これにより當初は木製の助のあった事

が判る。柱列と壁との間、即側廊の天井には右助が刻み出

してゐる。身廊の天井の助が木で、側廊のが石刻といふの

は、即木から石に移り行く過程を示したものであるとして、注意

する必要がある。内部の塔婆は、割合に形がよく、背の高

い平頭差完全に備へてゐる(107)。

108は第十九號制多窟の正面向、右方壁面彫刻の一

部分である。第十號窟とは掘鑿の年代も著しく異なり、大

凡第五世紀の末葉とされてゐる。正面中央に大葱花窓のあ

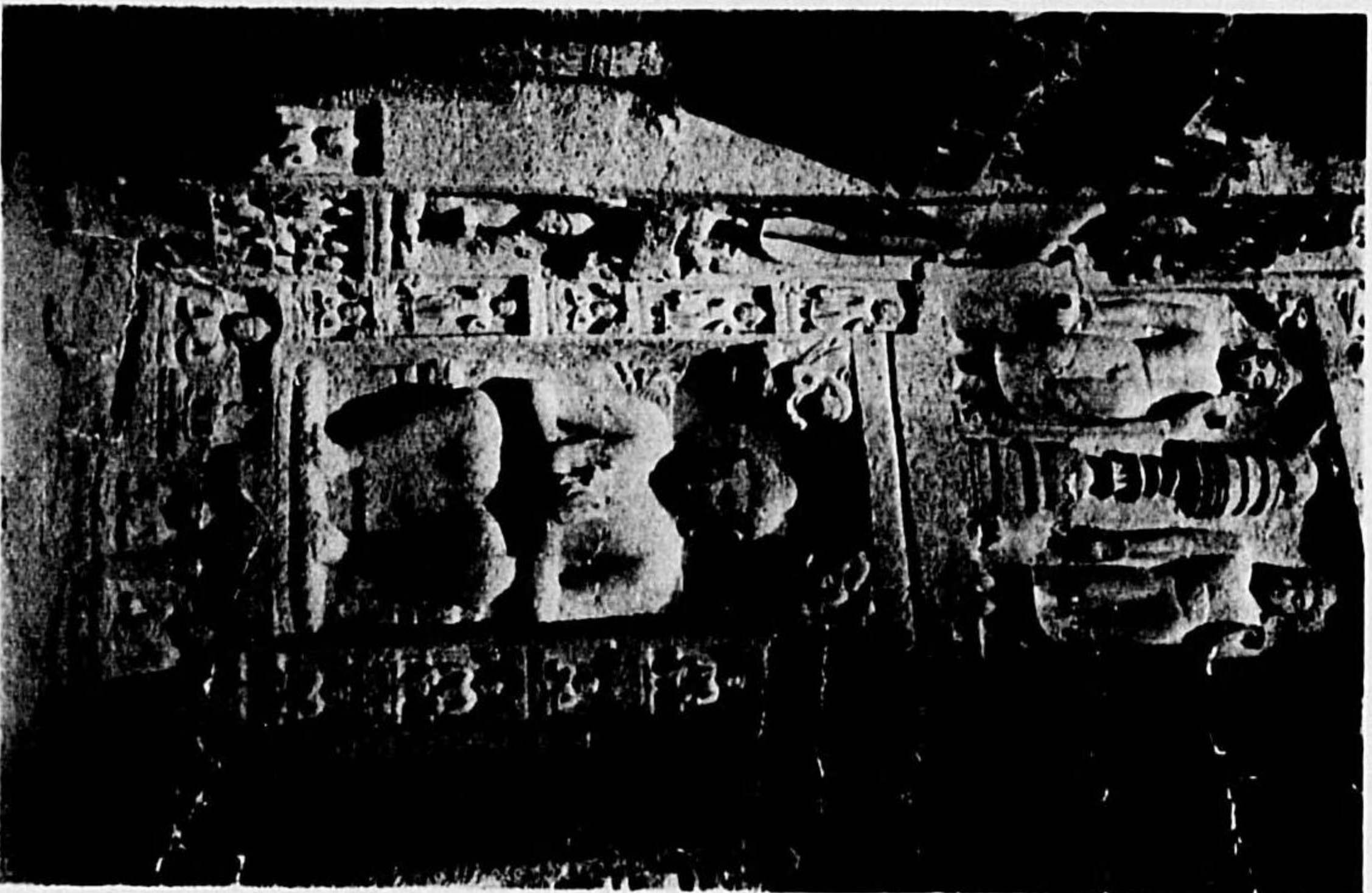
るのと同様だが、内部の塔婆は漸く變化し、近代の塔婆に

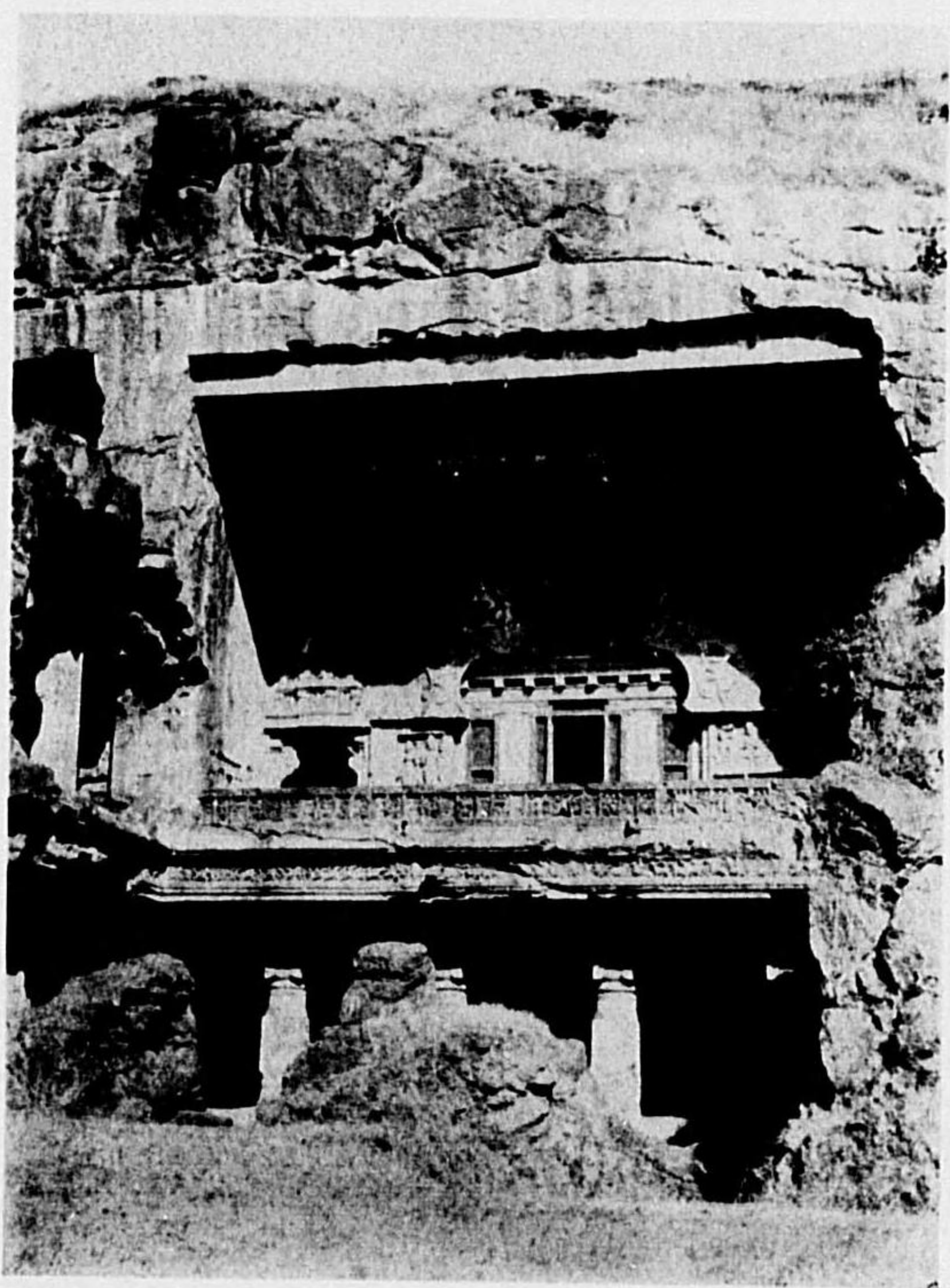
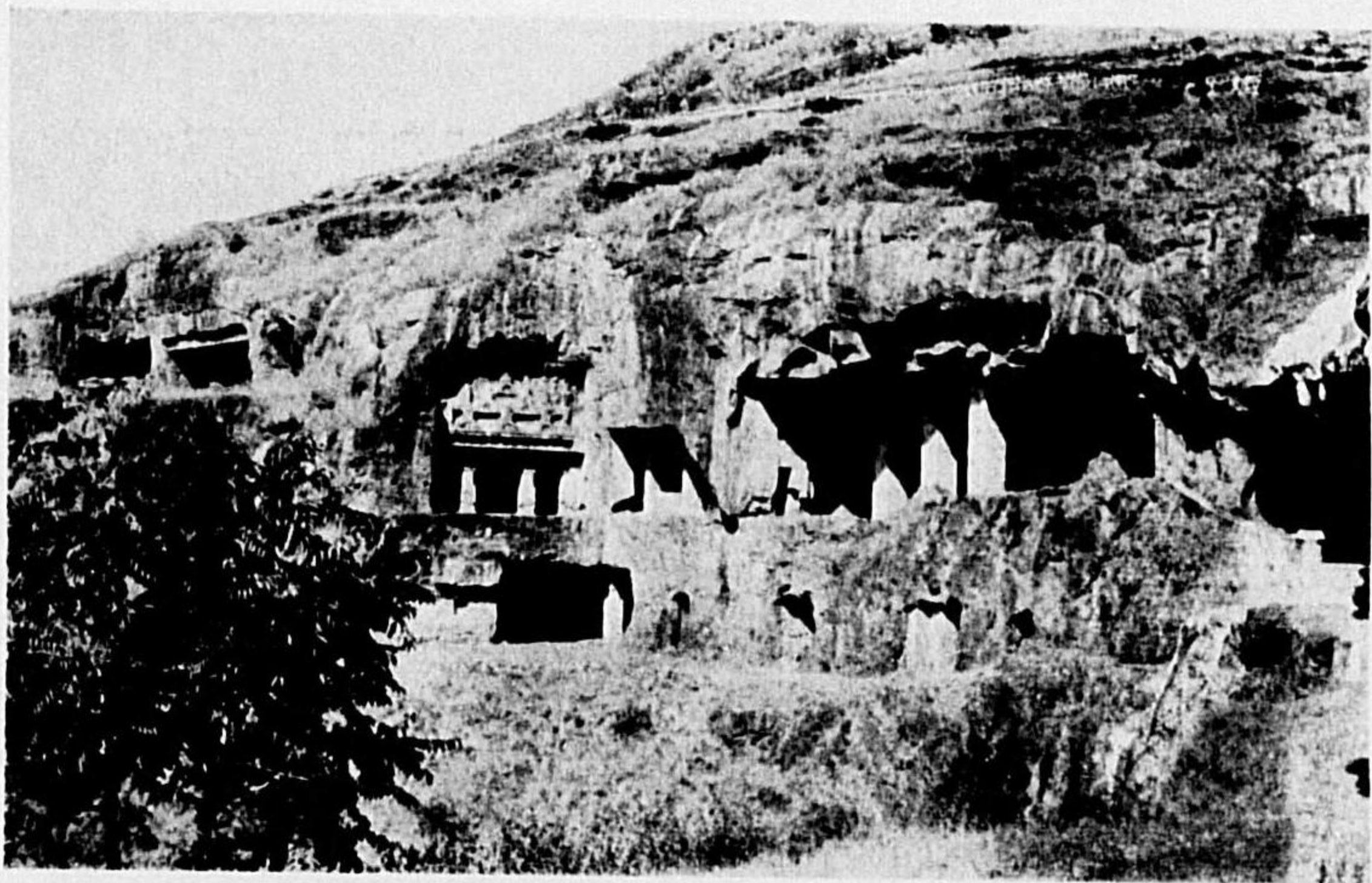
變化の第一歩を踏み出してゐる。

-07



-08





110

上、一〇九。エロラ窟殿佛教窟群。

下、一一〇。

同毘首羯磨窟外部。

(大正十二年二月七日)
(大正十二年二月七日)

エロラ (Ellora, Elura) 窟殿の一群は、印度に於ける最大で且つ最も變化に富めるもの。此うちには佛教窟一二、婆羅門教窟一七、耆伊那教窟五、合せて三四のうち、カイラサナート堂前の道路の左右に、夫夫二〇と一四とに分れてゐるが、佛教窟は全部道路の右方に集つてゐる。さうして婆羅門窟は丁度兩窟の間に挟まれてゐる勘定になつてゐる。

孟買方面から行くには夜汽車でたつと翌朝マンマード (Mannad) 驛へつく。驛食堂で朝食をしてハイデラバード行の汽車 (N.G.R.) へ乗りかへ、九つ目のダウラタバード (Daulatabad) 驛で下車するのがよらしい。其一つ前にエロラ・ロードといふ驛があるが、ハラッパ行にハラッパ・ロードで下車してはいけない様に(89頁)、ここでも「えろらくち」で下車してはいけない。驛からさう遠くないところに公立宿舎がある。辛うじて食事もできるから、宿泊に不自由はない。ここから窟殿迄一〇哩といふ。途中に見るものもあるから、往復は決して無駄ではない。窟殿の近くにある公立宿舎は、豫め手続をしておかないと、だしのけに行つたのでは宿泊は(私の行つた頃は)できない事になつてゐた。

一〇九は佛教窟のうち的一部分で、デドワダ・ケーブズ (Dhadwada Caves) と呼ばれてゐるもの、總計一二窟のうちで、制多窟は唯一つ、第一〇號で普通毘首羯磨 (Visvakarma, Vishvakarma) 窟といつてゐる。又「大工窟」(Carpenter's Cave) ともいふ。此窟殿は大凡第七世紀の末頃と考へられてゐる様だが、ファーガッソンはこの附近の佛教窟殿は、平均後六百年としてゐるとある。一一〇は此窟殿の正面であるが、ここに達するには先づ石段を昇つて大中庭に出て、そこより正面の入口から更に更に階段で上層正面の濡椽に出られる。ここに特に注意すべきことは、既記の諸窟殿の制多窟正面に見た様な大窓の代りに、至極小型の窓になつてしまつたことである。これに就いては、窟殿内の光線を調節するための設備なく、又此種の窟の形式も多少變化したので、自然採光面積の少ない窓になつたのとファーガッソンはいつてゐる。

二一・エロラ窟毘首羯磨窟内部。

(大正十二年二月七日)

前記の如くファーガソンはエロラに於ける佛教窟殿の平均年代を、西紀後六〇〇年としてゐるが、何とよむのか私には判らないが、Wachope といふ人の著書には后三五〇—七〇〇年としてある。私は何れが正しいか判断しかねるのを遺憾とするものである。さてこの窟殿は奥行約八〇尺、幅四三尺、高さ三四尺ださうだが、他の制多窟では塔婆は柱列より離れてゐるから、塔の後方には通路があるが、ここは柱についてゐるので、通行はできない。さうして圖に於いて見る様に、塔婆は高さ基壇の上のり、其基壇の正面を平たくして、本尊及び脇侍二菩薩像を刻み、背光の周圍に多くの飛天を薄肉に彫刻してある。此等により此が後世の大乗佛教藝術であることが知れる。

天井の肋は石から刻みだしてあるが、いふ迄もなく古代の木肋を、石を以て摸したもの。列柱と石肋との間の細長い平たい部分には、一面に佛像を彫刻してある。これはアジャンタ窟殿第一九及び第二六號に於けるものと同じで、これ等は總て後世の手法である事を物語してゐる。

健駄羅式塔婆は高さ基壇の上にあるのが普通である。奉獻小塔婆亦さうの様である。次に伏鉢と稱する半球形のものが、何重かの構架の上のり、平頭及び相輪が其上を飾つた層塔になつた場合、初重にはさまつて佛像を安置する様であるが、夫等はたとひ支那に入つてから漸く變化したとしても、塔婆を高く位置せしめ、其前方に三尊を安置した此式と、一脈相通するものがないとは言へない様に思ふ。さうならば頗る興味があるといへよう。此佛像を毘首羯磨像と誤り傳へ、大工・指物師・彫刻師等が參詣するので、さういふ名がついたといふ。





一一二。エロラのカイラス殿本殿。

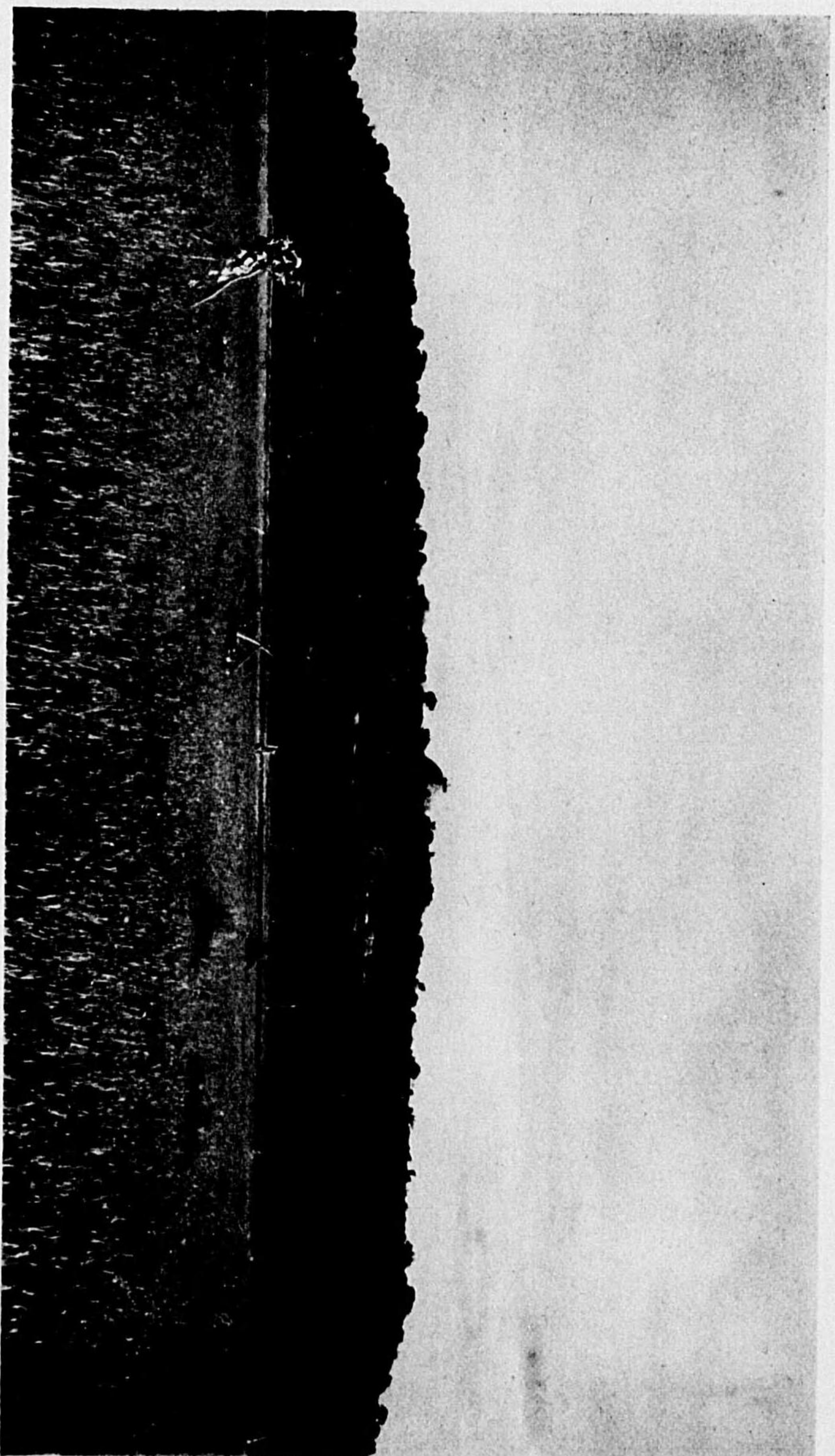
(大正十二年二月六日)

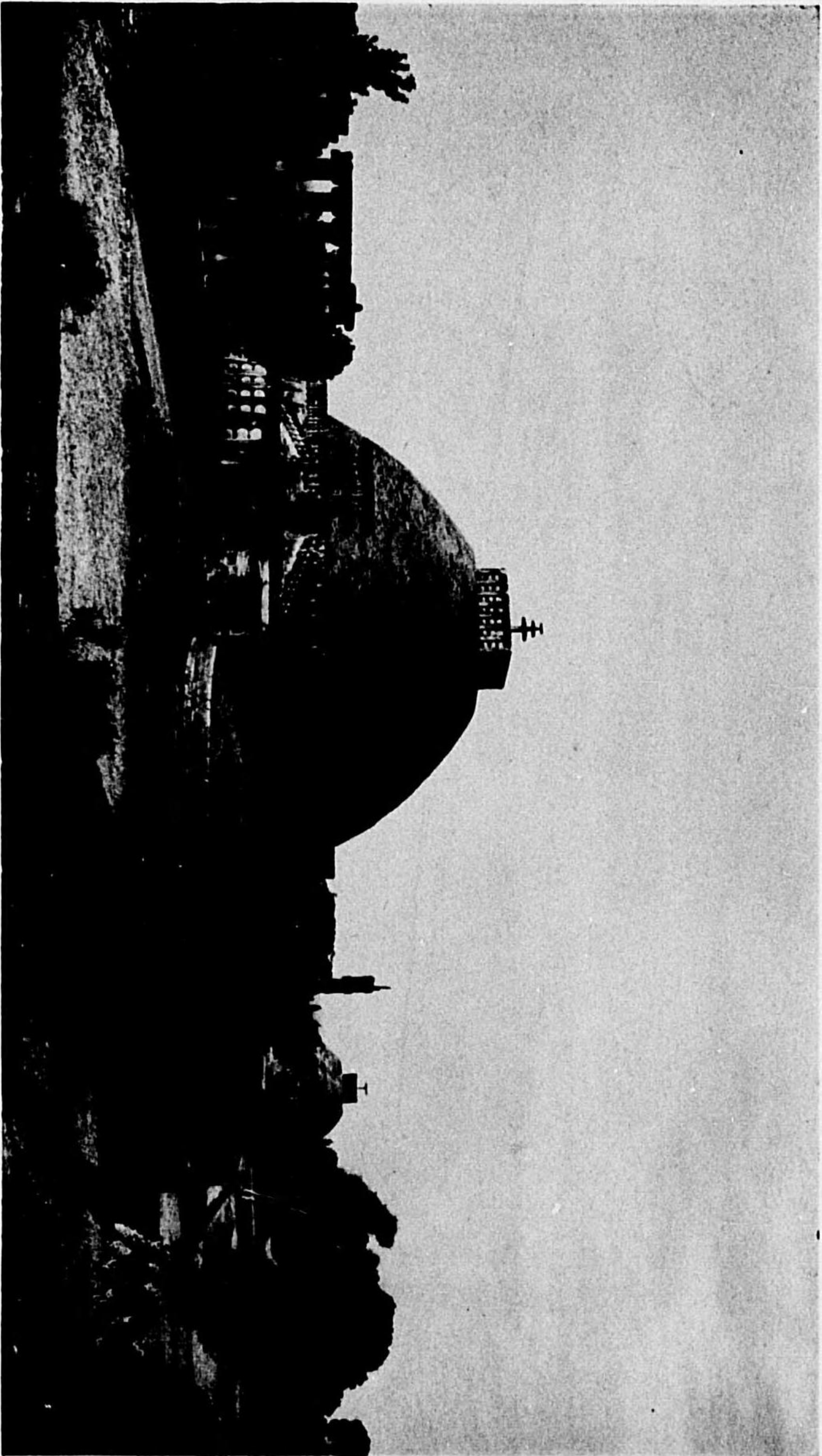
此所にはママラプラムに於けるが如く獨立した適當な岩がないので、露出してゐる岩の一部を必要な長方形に區劃し、且つ必要な深さに鑿り窪め、そこへ非常に込み入った殿堂の形に其岩を刻み残したのである。殿堂の敷地に相當すべき長方形の部分は幅一六〇尺奥行二八〇尺。其中央に本殿・前堂(マンダバム)及び附屬小室をおき、左右及び後方は通路にしてあり、本殿の周囲は一巡し得る様になつてゐる。

圖は其高さ九六尺の本殿を西南方からみたところで、背景の右方は東側、左方日光のあつてゐるのは北側の絶壁、右下の陰影は南側壁の夫。本殿は全體としてはママラプラムの石殿(一五三)に能く似てゐる。さうして其平面は勿論方形であるが、其左右及び後方を巡つて五つの小祠が附屬してゐる。屋根の最上部を右記の石殿其他一五四・一五五等と比較する時は、ドラピタ建築様式たる事が判るであらう。

一三三。サンチ丘全景。(昭和十二年一月廿一日)
 私は幸に此遺址を二度訪れることができた。第一回は大正十一年十二月一日夜蓋買發、翌二日早朝未だ薄暗いうち(五・四〇)着したが、此小丘は線路の東方にあるので、背景の空に丘上の大塔の黒い輪郭がはきりと浮き上つてゐた。第二回は昭和十二年一月二十日夜蓋買發、翌二十一日、もうさ。かり日が高くなつてから(九・三頃)着した。今度は第一塔と第二塔とが、真。白に緑樹の間に見えた。最初の時程感はしなかつたが、非常に親しきを以て汽車中から眺めた。

一月二十一日の午後、第二塔玉垣の圓文の寫眞をとつてから、日が西側からさす様な適當な時機を見計ひ、一人で勝手にどこにも中を歩いてみて、此寫眞をとつた。中央頂界線のが第一塔で、其斜右下中腹のが第二塔。





一四四. サンチ丘第一塔。 (昭和十一年一月二十二日)

丘上最大の塔を第一塔と命名してある。現在は修理が行はれたため、たとひ推定復原のところが相當にあるにしても、立派に堂堂たる塔の形がとれてゐるが、修理前の有様は随分氣のどくな程であつた。

抑も此塔は、江戸末期即文政元年頃迄は、第二・第三塔(此圖右方背景、二五・二六)と共に、完全に保存されてあつ

たうだが、文政四年に最初の、次に嘉永四年に第二回の發掘を行ひ、舍利容器が何かを發見したさうである。何れも英國人の仕事。さうしてせめても罪止ほしに、やはり英國人の手で、推定復原の修理をしたのである。

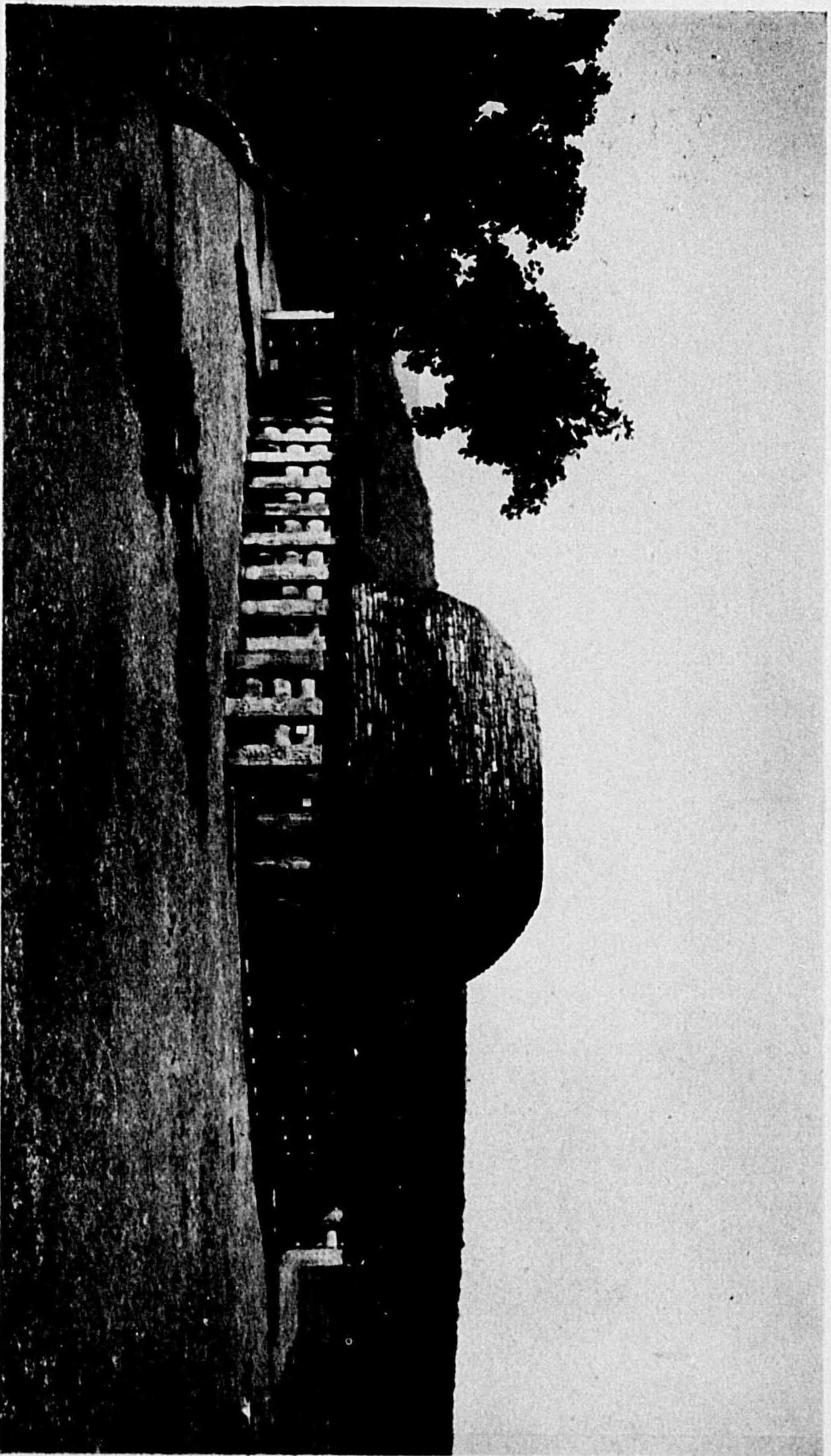
現在の大塔は直徑二二尺、高五三・五尺、途中の禮拜道の高さ二四尺、幅五・五尺、最上部に徑三四尺の平たい場所があり、玉垣を巡らす。周囲の大玉垣は東西徑一四四尺、南北徑二五一尺、此大玉垣の四方東西南北に各門を設け、南門は最古で開化天皇の御世(約西紀前、一五〇年)以下北門・東門此に亞ぎ、西門は最も新し。大塔は玉垣と共に阿育王の時代に、四方の門は約前二世紀と考へられてゐるが、阿育王の原塔は真標始と現在のもの半分であるし、其他玉垣や門も後れるといふ説がある。

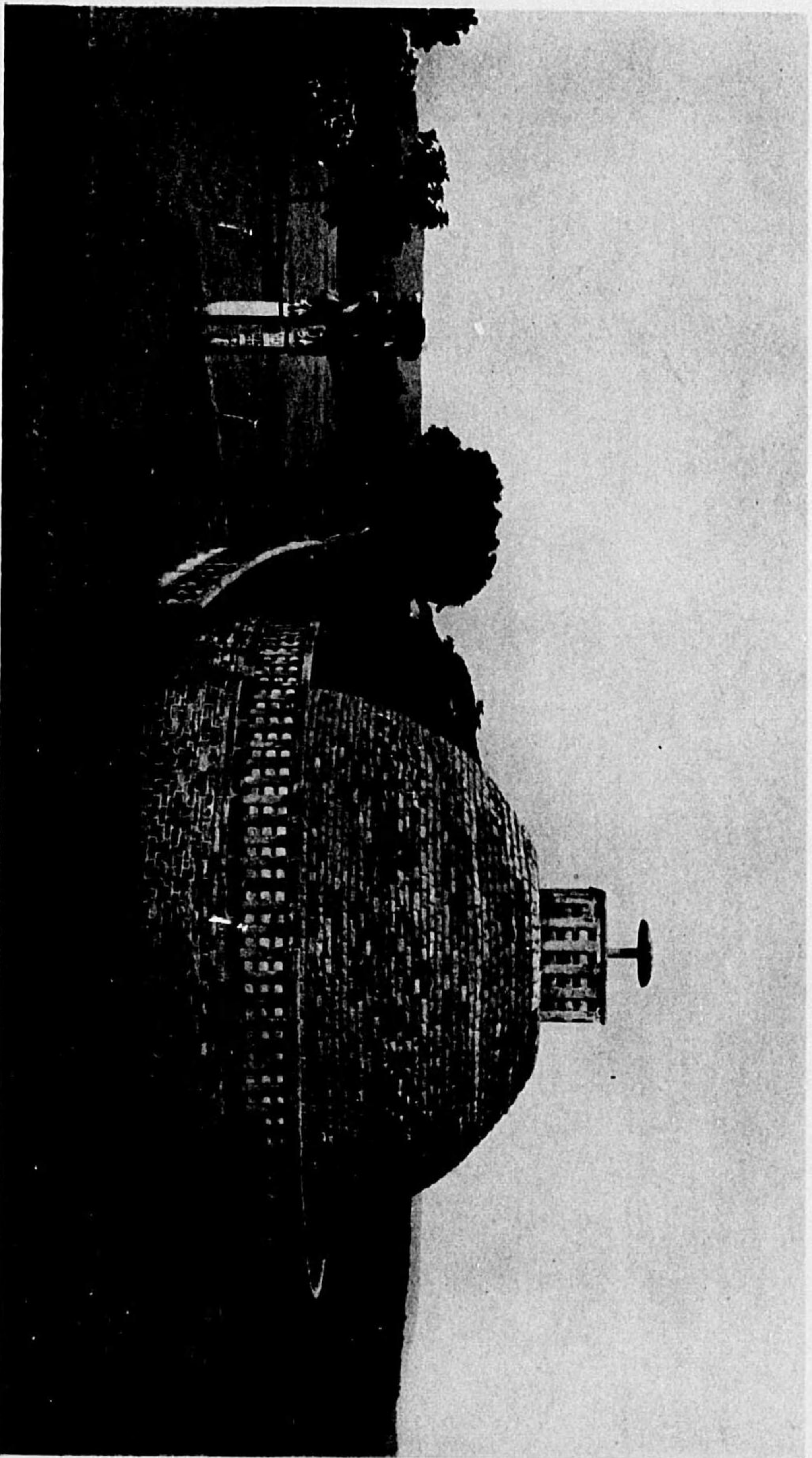
一五五. サンチ丘第二塔。 (昭和十一年一月二十一日)

第二塔は丘上にはなくて中腹にある。修理はすんだが、上の方が割然しなくて、推定復原もできなかつたのが、できたものは物足りない。併し周囲の玉垣はともて立派で、圓文内文様は唐に面白い。但し此玉垣には、四方の出入口に、第一塔の夫の様な美しい石門はない。

文政五年の發掘で半ば破壊して丁。たのを、嘉永四年更に發掘をつづけ、其結果遺物の發見はできたが、伏鉢は殆ど完膚なき迄に壊したさうである。此時發見した遺物は、伏鉢の中心にはなく、上より七尺、西に二尺の處から白砂岩の石櫃が出で、其内に四個の滑石製小箱があり、各人骨の破片を藏してゐたといふことである。

玉垣の圓文内の文様には非常に面白いがある。例へば尾翼を開張した孔雀「人をのせた馬人(センタツル)」「有翼の獅子」「有翼の馬」「五頭蛇(ナガ)」「馬頭人身の女」性」など、數へ上げれば限りがない。殊に摩伽羅には種類が多く、又蓮花文様にはベルハットの夫の様に埃及式のものがある。





一一六。サシチ丘第三塔。(昭和十一年二月二十二日)

第一塔の北約二十五間をへたてて第三塔がある。一

四の右方に近く、小さく見えてゐるから、距離は判らな

くも第一塔との関係は分明であらう。カニツガム(三宮宮)

三宮宮)が此塔婆から舍利弗と大目犍連の舍利を發見

したといふので頗る有名な塔。但し其發見した真重なお

舍利さんは、あとはどうしたか、行衛が書いてないの

で、はつきりしない。又鄭重に元のところへ納めたのか

も知れない。

第一塔と異なり、唯一門を有する事に注意すべきであ

る。さうして伏鉢も亦、第一塔よりは遙に完全に近い半

球形である。塔婆と玉垣とは第一世紀に起原し、門は後

一世紀の前半の建設と推定されてゐる様である。何れに

しても年數に於いては第一塔の四門に及ばないのであ

る。門の高さ十七尺、裝飾の方法は第一塔の夫に似てゐ

る。向つて左方の柱上都と、三本あるうち中貫の中央と

に塔婆の裝飾がある。修理前は伏鉢は殆んど原形を止め

き門も下の貫一本で、「π」字形であつた。

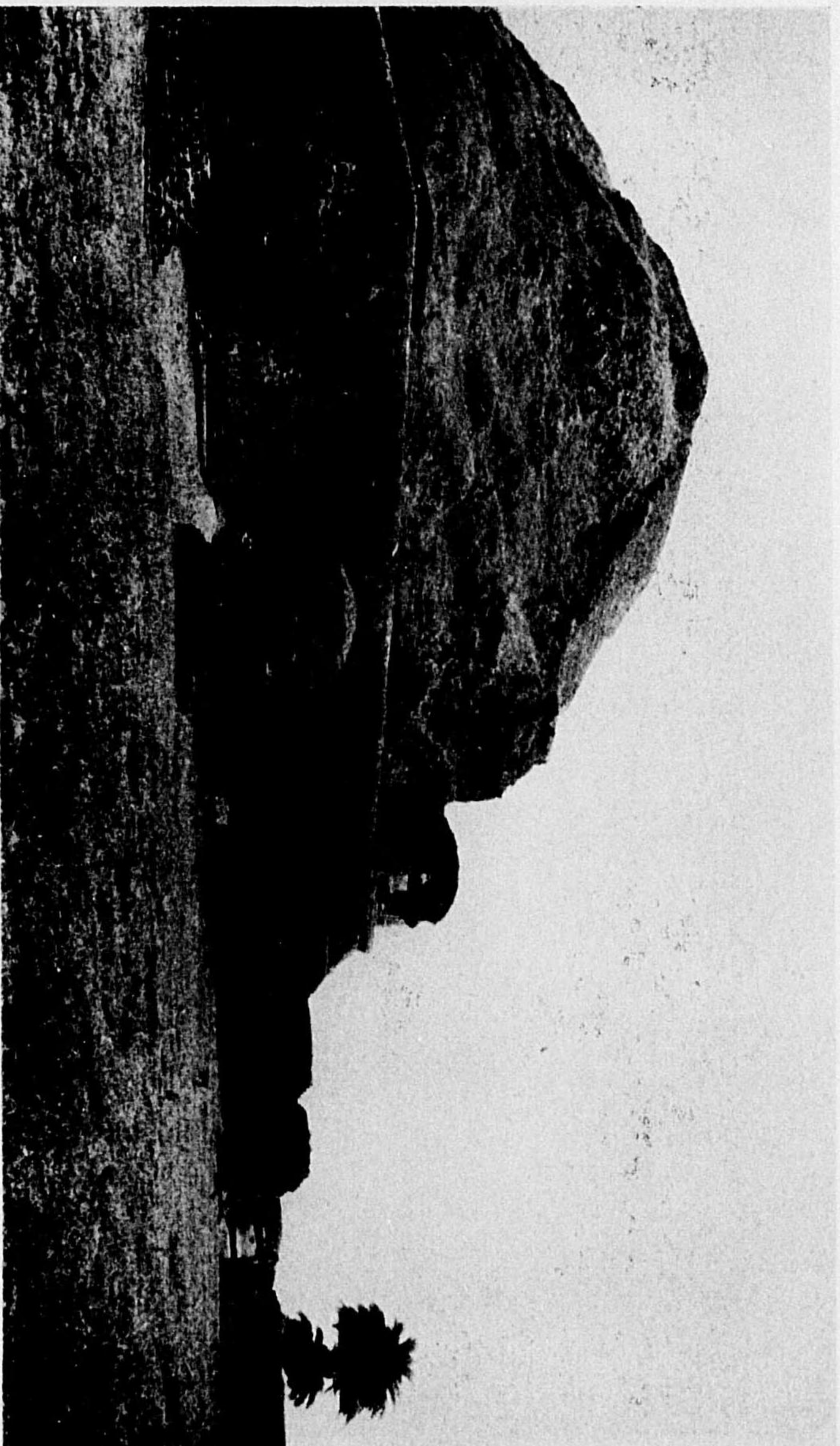
一一七。那爛陀僧伽藍址 其一。(大正十二年一月四日)

中印度のバト驛(Bat)から、甲谷他の方へ七つ目にアチアル(Achul)といふ驛がある。ここアチアル・ビヘル軽便鐵道(Bichpur)へ乗りかると十番目の驛がナラシタ(Narasi)支那の國は唐時代の高僧玄奘三蔵が留學した那爛陀僧伽藍へは、この驛から徒歩で知れたもの。

【大唐西域記】には、「此伽藍の南方の葱嶺羅林の中に池があって、龍が住んでゐた。龍の名をナラシタと呼んだ、其傍に伽藍を建てたのだから、夫で其名をとつて那爛陀椅舎といつたのだと古老はいふが、實はさうではない。ほんたうは世尊が前世に菩薩行を修した時、大國王となり都をここに建て、衆生を愍みたまはつて、いろいろのものを施したりした。だから其徳をほめて「施無厭」と號した。だからこの伽藍をさう呼んだ」とある。那爛陀(Nalanda)とは施與をして少しも厭はない、即「施無厭」といふ事といひ、那爛陀僧伽藍(Nalanda)といふやうである。

大正十二年一月には盛に發掘が進行中であつた、監督は印度人で、あと三十年かかるといふ。土で覆はれた小山の様なところの一隅を深く掘り、そこから飾塗喰を露した壁體一部分が露出したりしてゐた。最も南に位置してゐた第一號と假に名づけてゐる塔婆(其時はいつてゐたもの)の頂上へ登ると、眼下に發掘中の僧坊の大觀する事ができた。其僧坊の有様は周圍に小室が並び、中央に大きな中庭があつた。共有様は二・三に掲げた祇園精舎址の僧坊と同様であることが推察できた。周圍の小室は坊さんの宿舎で、中央の大きな中庭は何にでも使へる。今でも野外で子供に何か教へたり、つまり野外學校の様なものがあるのだから、當時の那爛陀大學の教室は此中庭で、學生がここに胡座し、教授は小高い壇上——そこには塔婆か何か建てゐたかも知れないが——の一部から講義をしたかも知れない。ここでは此周圍の小室に、其一隅に寢臺が設けてあるのがあつた。尤も寢臺といつても寢條の入つたフタの警備なのでないこと勿論で、いつれ内部は煉瓦で固めたのであら(161頁)





一一八、那爛陀僧伽藍址 其一。

(昭和十一年三月十一日)

(158頁より)うが、外側は漆喰を塗た、朝鮮の温泉の床のやうであらう。あつ所
 だから暖房はいらない。だから身體が痛ければ薬を厚く敷きこすればよい。温
 突だと厚い蒲團ではさばり駄目だが、その邊はまことにうまくできてる。

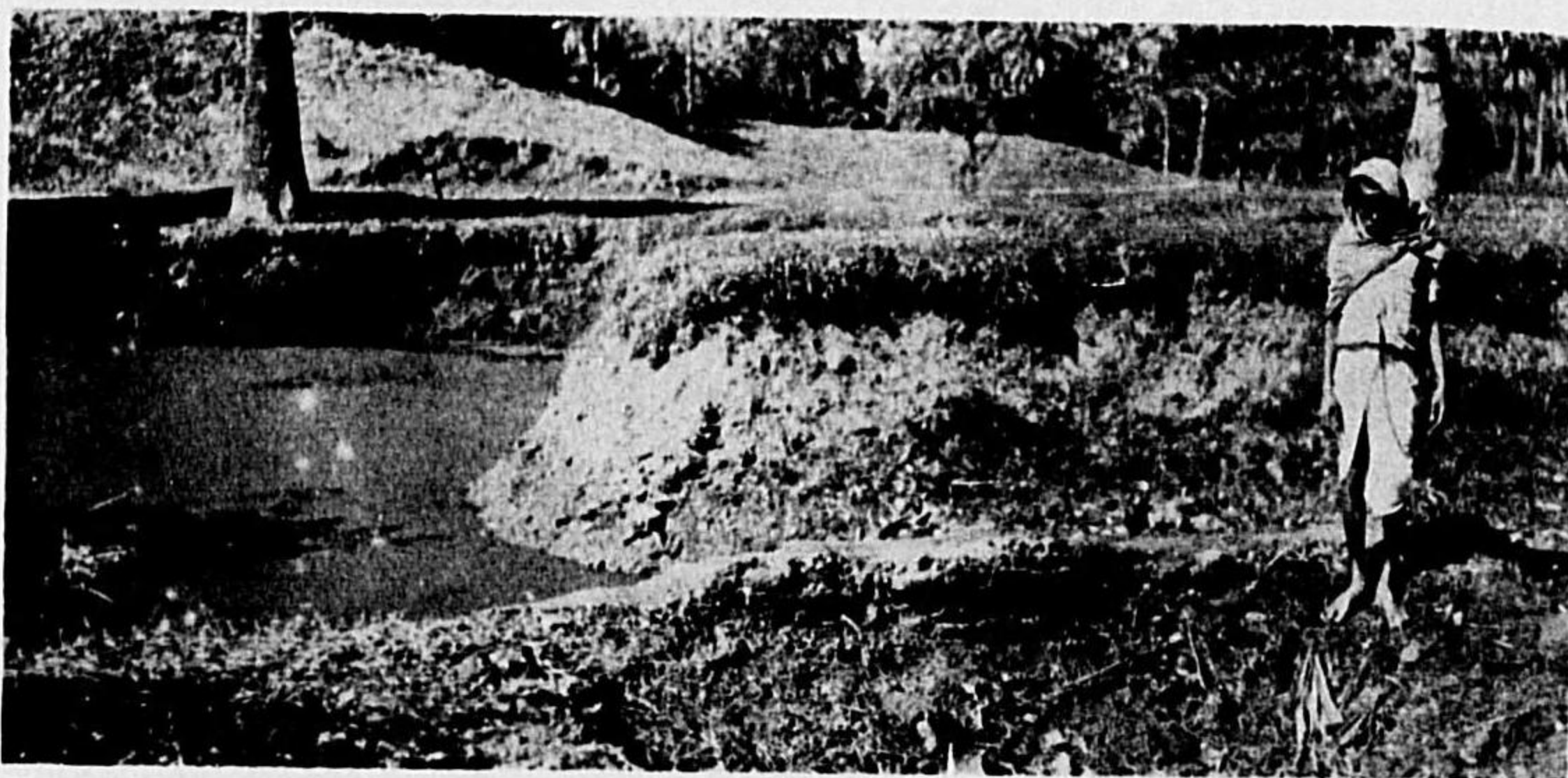
當時は一二七の様な、至極勾配なだらかな山、大きな露餅の様な形山があったが、
 これは未發掘の部分で、全然手がつけてなかつた。これを發掘すれば何が出来るか
 判らない。當局にははつきり判つてゐて、大して重要でないから後廻しにしたのかも知
 らないが、私はどうもできたら斬く——かなくとも一年位——滞在して、發掘事業の
 見學をしたかつた位、興味をもて眺めたのであつた。さうして三十年かかると、十
 五年位だつた時に一度来て、どの様に作業が進展したか、是非見度く思つた。

幸にしてこの夢の様な希望は實現し、此時から足掛十四年目に再度訪れる事ができ
 た。今回は前回と直角の方向から行つたので、最初のうちは見當がつかねたが、暫
 く歩いてゐるうちに自然に判つてきた。前回發掘中であつた、當時第一塔と呼んでゐた
 小山の頂上から發掘した付坊は勿論、其隣りも其又隣りも、何でも僧坊は三つも四つ
 も並んで出現し、夫等が何れも堂堂たる大規模のもので、室の配置等は皆同一ではあ
 だが、此様に多數が並ぶと洵に壯觀である。其各付坊の中庭に立てば、此僧伽藍の盛
 時の佛が正に髣髴できる。筆者は嘗てマニア(Mania)といふ畫家の描いた「ボ
 ムンイの幻想畫」ともいふべき、ボムンイ發掘のアボロ神殿址前の折れた柱に畫家が
 よりかかり、往時を回想してゐるあたりに、夢うつつの中に當時のボムンイ人が完全
 に建てる神殿前に右往左往してゐる所をかいた繪をかいた事があるが、これは如何にも
 尤も千萬な幻想だと思つた事があつた。筆者がこの發掘の殆んど一段落を告げた付坊址
 に立たし時、又は高所から隣合つた付坊を俯瞰した時、此有名な大學の教授學生、高僧
 知識の來往繼るが如く、當時の盛大を憶ふには十分過ぎる位であつた。惜しい事に寫
 眞禁止とあり、なかなかやかましかつたので、漸く一一八の様なのが三枚とれただ
 けで、付坊は寫せなかつた。

一一九



一二〇



一二一

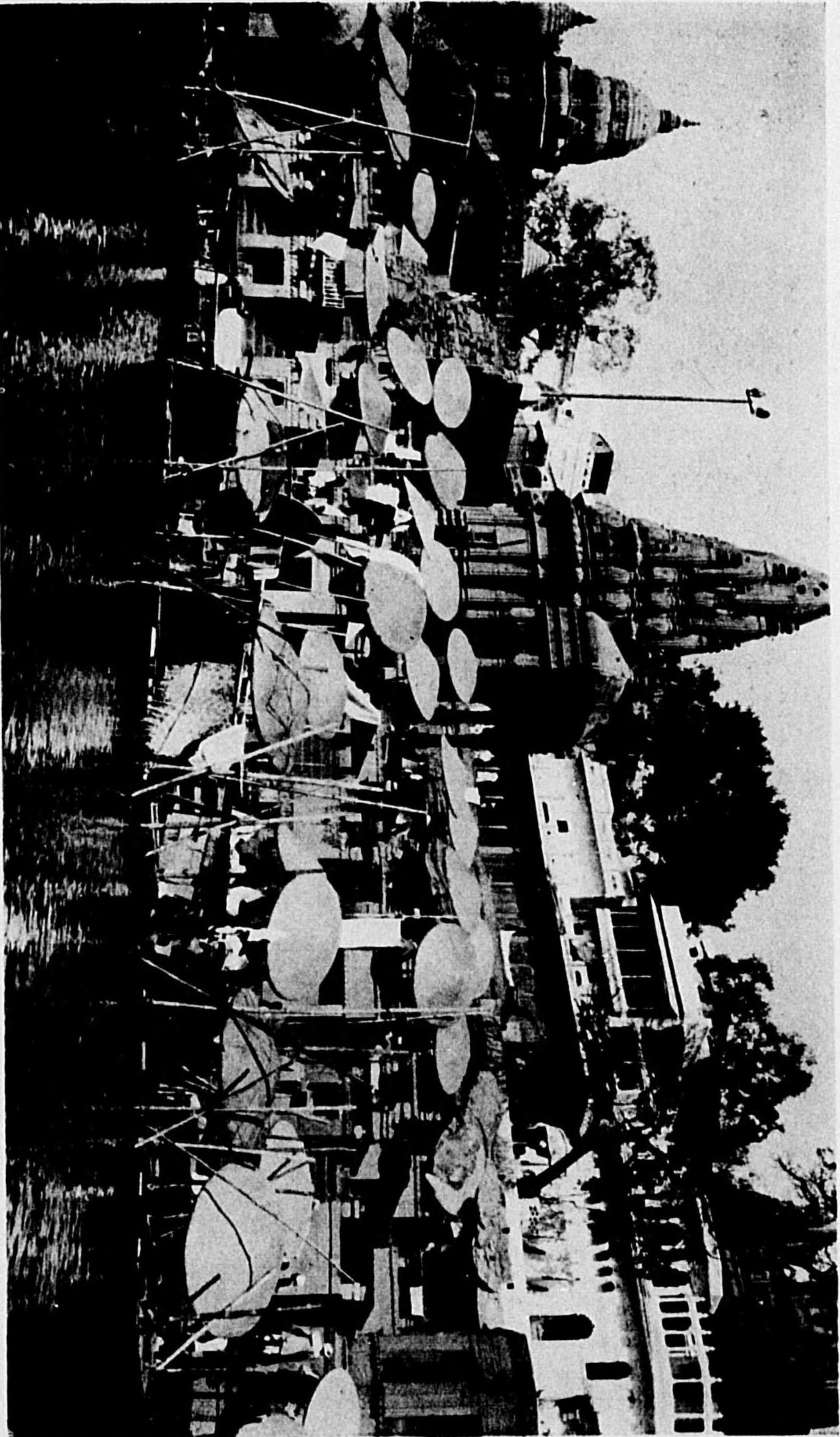


上、一一九。華氏城址の發掘 共一。
中、一二〇。同 共二。
下、一二一。同 共三。

(大正十二年一月二日)
(大正十二年一月二日)
(大正十二年一月二日)

往昔の摩揭陀國、阿育王の居城なる華氏城——波吒釐子城(Po-chi-lin-tsu-ching)パタリプトラ(Pataliputra)——の址は、今のパトナ驛(Patna Jn)を距る遠くない。パトナ驛の待合所へも泊れるし、近所に立派な公立宿舍もあるから、宿泊や食事には少しも不便はないから、ここから自動車か馬車で往復するのが便利である。馬車で一時間位で行ける。

華氏城址が此邊である事は、百年餘り以前からそろそろ注意されたさうだが、近年に至って漸く其位置を突とめ、發掘もできて真相が明らかになった。パトナを距る五哩、クムラハル(Kumrahar)村といふのがある。ここが當初の阿育王宮の主要な部分であるといふ事も判り、發掘は主として此邊で行はれた。さうして發掘された址はここに三圖に示した様な有様で、煉瓦が顔を出してゐる位だから、視察しても説明でも聽かない以上、何が何だかさっぱり判らないが、時に微塵に碎けたもの、乃至中心から眞二つに割れて、まるで偉大なる蒲鉾の様な形になつてゐる阿育王柱の破片があったり、パトナ陳列館には珍しい柱頭其他ここからの發掘品の陳列があり、甲谷他博物館には、これも亦非常に興味深い石欄殘闕がでてるたり、夫等によりて極く大きっぱの輪郭だけは見當をつける事ができるのであらう。



二三。ベナレス市恒河河畔一景。 昭和十一年三月十日

ベナレス(Benares)市で先づ第一に見るべきものは、恒河

河畔に於ける水浴場の景であらう。水浴場は上流(南)から下

流(東北)に向ひ、市の側即西岸に沿ひ一七ヶ所あるが、普通

は中頃から下流に向ひ、ホバ堂(重塔)や回教寺を見て復

び元へ歸り、それで終了といふ次第である。最初の時は知ら

ないでさうしたが、今度は初めから談判して、最初下流に向

ひ、最後の水浴場から上流にのぼり、最南端のもの迄見て戻

たから、先づ一通りは見物ができた。勿論大同小異ではある

が、一見の價値は充分ある。

水浴場はガート(Ghat)といふ。ガートとはここでは沐浴

の爲又は船をつける爲に設けた川端の石階を意味してゐる。

ベニンダグ・ガートといへば、ヒンダウ教徒が死體を焼けた

めの川端階段上の平地で、ここには兩方ある。ここにも大き

な長い幅さの石段が、ひろげた日傘の間から見えてゐる。夫

は中想像も及ばない程の賑かきである。ベナレス市のガート

は特に有名で、あらゆる印度を紹介した畫物の挿繪として

載せてあるから、ここには唯一枚風景寫眞としてこれを見本

に掲げておく事にした。

上、一二三。鹿野苑遺址全景。

下、一二四。同。ダメーク塔。

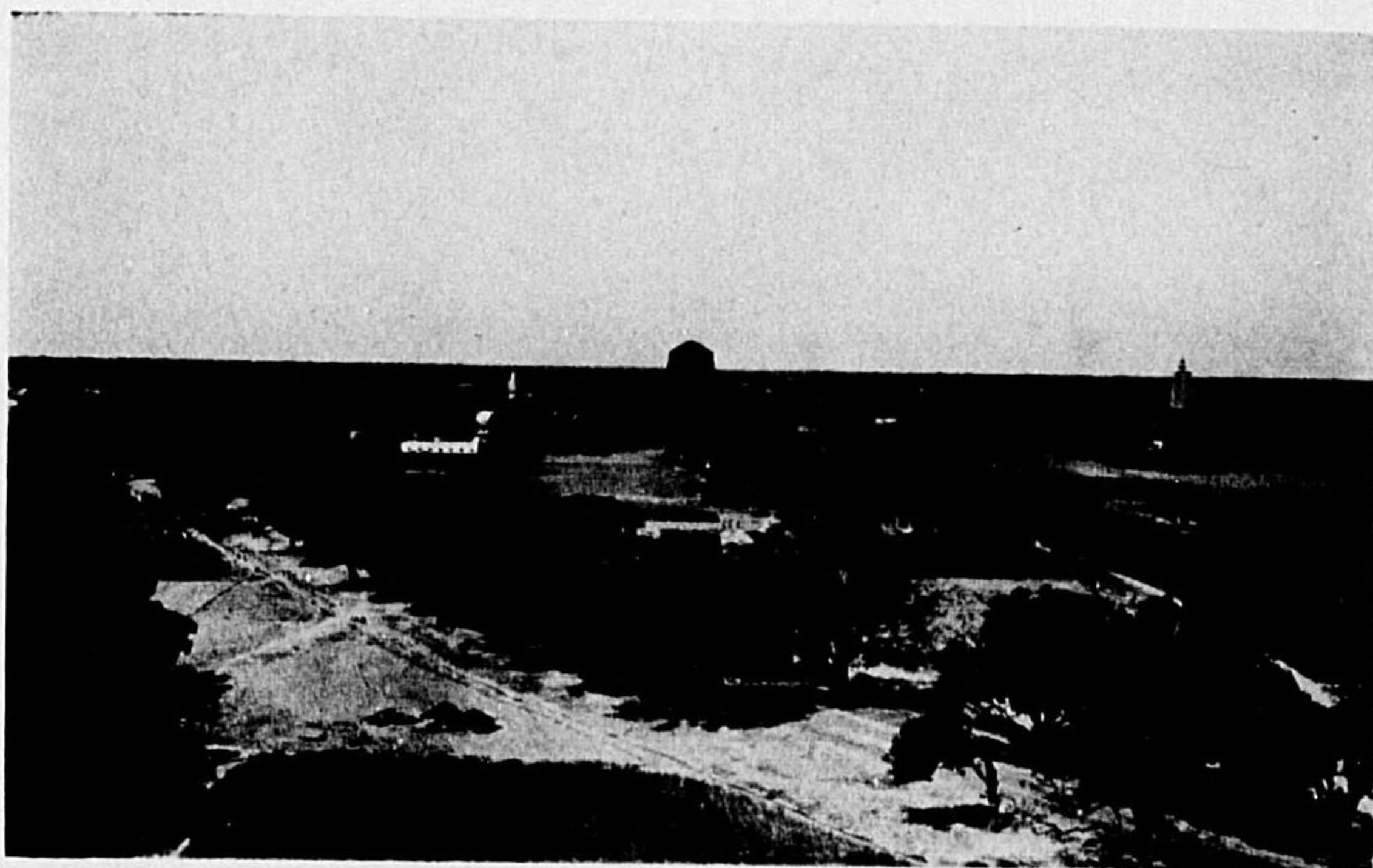
(昭和十一年三月九日)

(昭和十一年三月九日)

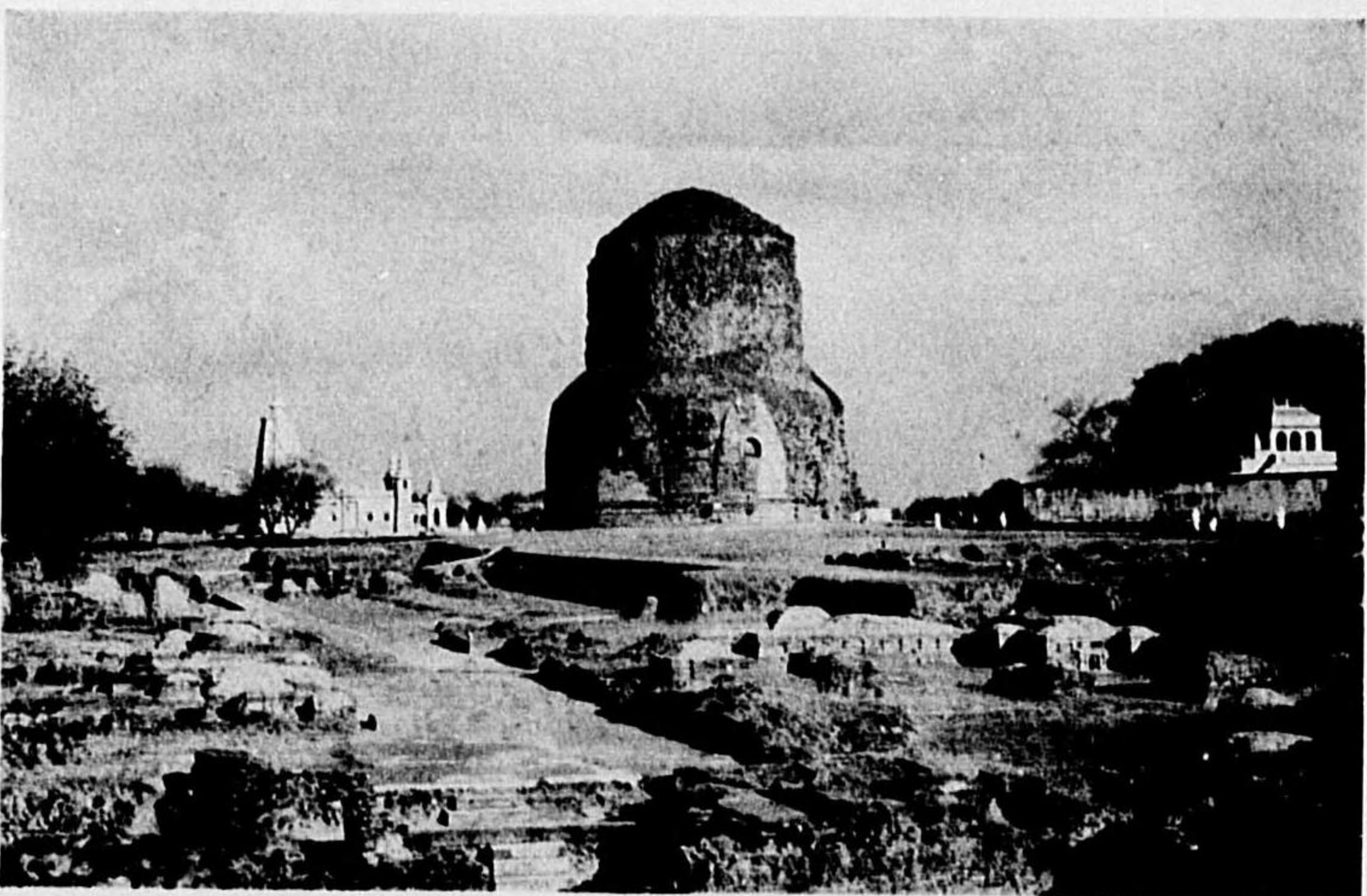
ベナレス市には宿屋も可なりなのがあるが、公立宿舎に泊るのも亦一興。静かで安値で簡單でよろしい。此町から鹿野苑迄四哩といふ。全部舗装してあり、馬車で三十分もあればよろしい。其鹿野苑の廢墟に入らうとする左側に殺風景な塔が見える。併し現在見えてゐる塔は新しいもので、ほんたうはここに昔は「迎佛塔」が建てられた。其破損した上にアクバア大王が八角塔をたててしまつたが、現在残つてゐる八角塔の上までは登れる様に階段がある。其上からは、鹿野苑の廢址は一目に見え、殊にダメーク塔が高いから目標になる。一二三は其塔を中心にして全景を寫したもの。下に斜に轍の跡のついてゐるのは廢墟への道、塔の左下に白く見えてゐるのは陳列館、右方に近く高塔の様なものは、新築の寺。發掘せられたところは陳列館の先きで、ダメーク塔の右のあたりだが、この邊の觀察には相當の時間を要するから、ベナレスから辨當と飲料持参をすすめておく。

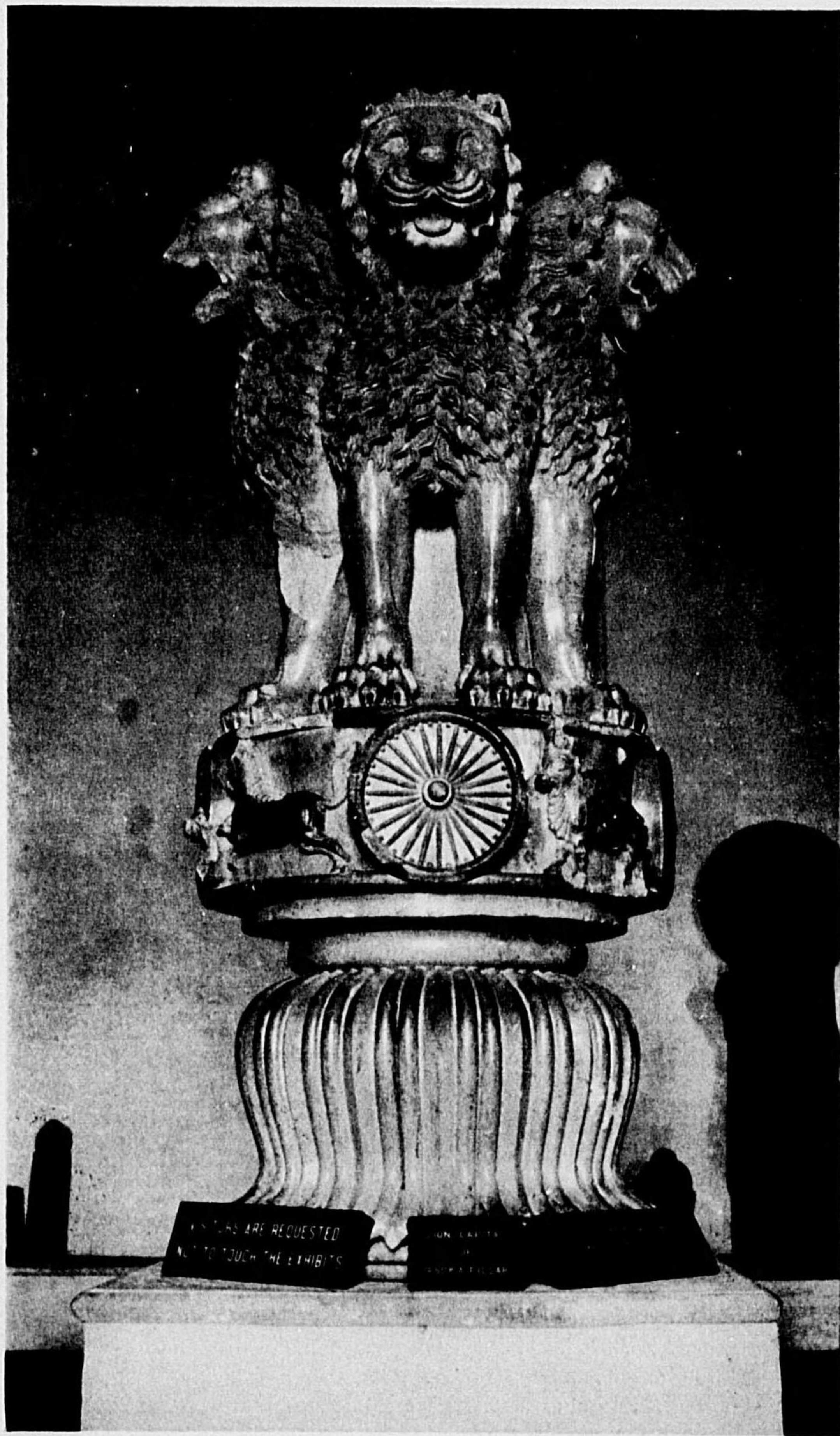
一二四は本殿と呼んでゐる廢址からダメーク塔の方をみた一景で、其後大分發掘ができたので、本殿前は圖の如く多くの小建築の址が見えてゐる。ダメーク(Dameek)塔の周圍には精巧なる文様が今でもよく残つてゐる。下方の直徑九三尺で高さ四三尺、石を以て築造し、其上方は煉瓦を高さ一一〇尺の高さに積んであるさうである。此塔はカニンガムが大凡第六世紀と推定したに對し、ファールガッソンは少なくとも第十一世紀に大修理が行はれたもので、此塔下部の彫刻ある石は他の建築より取り來たものと考へてゐる。更に又此下部の彫刻は笈多時代(グプタ)(西紀後三五〇—五〇〇(仁徳天皇—武烈天皇))といふ説もある。塔の左方遠景は新築の初轉法輪寺で、内部壁畫は野生司香雪氏筆釋迦一代記で頗る有名である。

一二三



一二四





一二五。鹿野苑出土阿育王柱頭。

(大正十一年十二月二十八日)

鹿野苑(Sarnath)は釋迦初轉法輪——初めて説教をした——地である。昔五百の仙人が王の采女をみて神通力を失ひ、墮落をしたので「人墮處」といふたさうだが、また跋羅哈摩達多(ブラハマダッタ(Brahmadatta))王が、この樹林を麋鹿に施與したので「鹿施林」ともいふ。【法顯傳】には「迦戸國」の部に「迦戸國波羅捺城ニ到ル。城ノ東北十里許、仙人鹿野苑精舎ヲ得タリ云々」とあるが、そのあとの記事によりても、建築の事はさう判然しない。然るに【大唐西域記】には

婆羅痾河(Po-lo-ni-ho (Varanā, Varanā))ノ東北、行クコト十餘里、鹿野伽藍(Lu-ye (Migādhava sangharāma))ニ至ル、區界ハ八二分レ、連垣周堵、層軒重閣アリ、麗規矩ヲ極ム。僧徒一千五百人、竝ニ小乘正量部ノ法ヲ學ベリ。大垣中ニ精舎アリ、高サ二百餘尺……精舎ノ中ニハ、鑰石ノ佛像アリ。量ハ如來身ニ等シク、轉法輪ノ勢ヲ作レリ。精舎西南、石窠堵波アリ、無憂王ノ建ナリ。基傾陷スト雖モ、尙ホ百尺ニ餘レリ。前ニ石柱ヲ建ツ、高サ七十餘尺、石ハ玉潤ヲ含ミ、鑿照映徹セリ……是如來正覺ヲ成シ已テ、初テ法輪ヲ轉ゼシ處ナリ……

とあるが、此柱頭だけでも高さ七尺位故、これは多分この精舎の西南の石塔前の高さ七十餘尺の石柱の上部であらう。

柱頭は先づ開花蓮があり、其上の圓盤の四周には「馬・獅子・象・牛(印度牛)」を、其間には一個づつの「法輪」を厚肉に刻みだし、最上部は四方に向いてゐる四頭の獅子を以て終つてゐる、サンチ第一塔前から發見の柱頭も亦四頭の獅子に終つてゐること此に同じであるが、ただ開敷蓮上圓盤の周圍に「忍冬文と水鳥(ヘンサ)」を刻してゐる差があるだけである。この開花蓮は、開花した有様を便化して、此様な形を以て現はしたもので、謂はゆる唐様勾欄の親柱柱頭の裝飾である。圖版九四・九八・九九・一〇二・一〇三・一〇八・九九・一〇〇には、夫それ精粗の差はあるが、何れも此種の實例がある。この開花蓮柱が遂に退化して勾欄親柱となり、唐様建築と共に我國に傳へられたとしても、さう不都合ではなさうに思ふ。

セヤ・シヤ一廟銘文 (大正十二年一月一日寫取)

THIS TOMB
BUILT FOR HIMSELF BY
SULTAN

FARID UD DIN SHER SHAH

EMPEROR OF INDIA

WHEREIN HE HAS BURIED

ANNO DOMINI 1545

WAS REPAIRED BY THE

BRITISH GOVERNMENT

DURING THE VICEROYALTY OF

GEORGE FREDERICK SAMUEL ROBINSON

MARQUIS OF RIPON

UNDER THE GOVERNORSHIP OF

THE HONORABLE

AUGUSTIN RIVERS THOMPSON

LIEUTENANT GOVERNOR OF...

BENGAL

ANNO DOMINI 1882

二六、サハラに於けるセヤ・シヤ一廟。 (大正十二年三月三十一日)

ベナム・カントメント驛から間を一つおいてモルガル・サライ (三驛)

三 (五三三三) といふ驛があり、そこから發行なら間に一つ停るだけで、

サハラ (五三三三) といふ所があつて、相當な公立宿舎もあり、宿泊に不

便はない。

サハラの前では、このセヤ・シヤ一廟が最もみるべきである。大きな池

があり、池の中に方約三〇〇尺高約三〇〇尺の大きな基礎の上に建つ八角形

の石造建築で、一辺の長さ五六尺、直徑一三五尺、中央の圓蓋の直徑七一

尺あるといふ。王の墓は中央の大八角室の内にある。

中央八角室の四隅には、圓に見る如き同様に重厚なる小さい八角室が

あり、其他にも八角形をなしてゐる中堂の第一・第二重の各隅には、圓の

様な吹放の小亭がある。全體としては甚に荘重な廟で、これ位の出来栄の

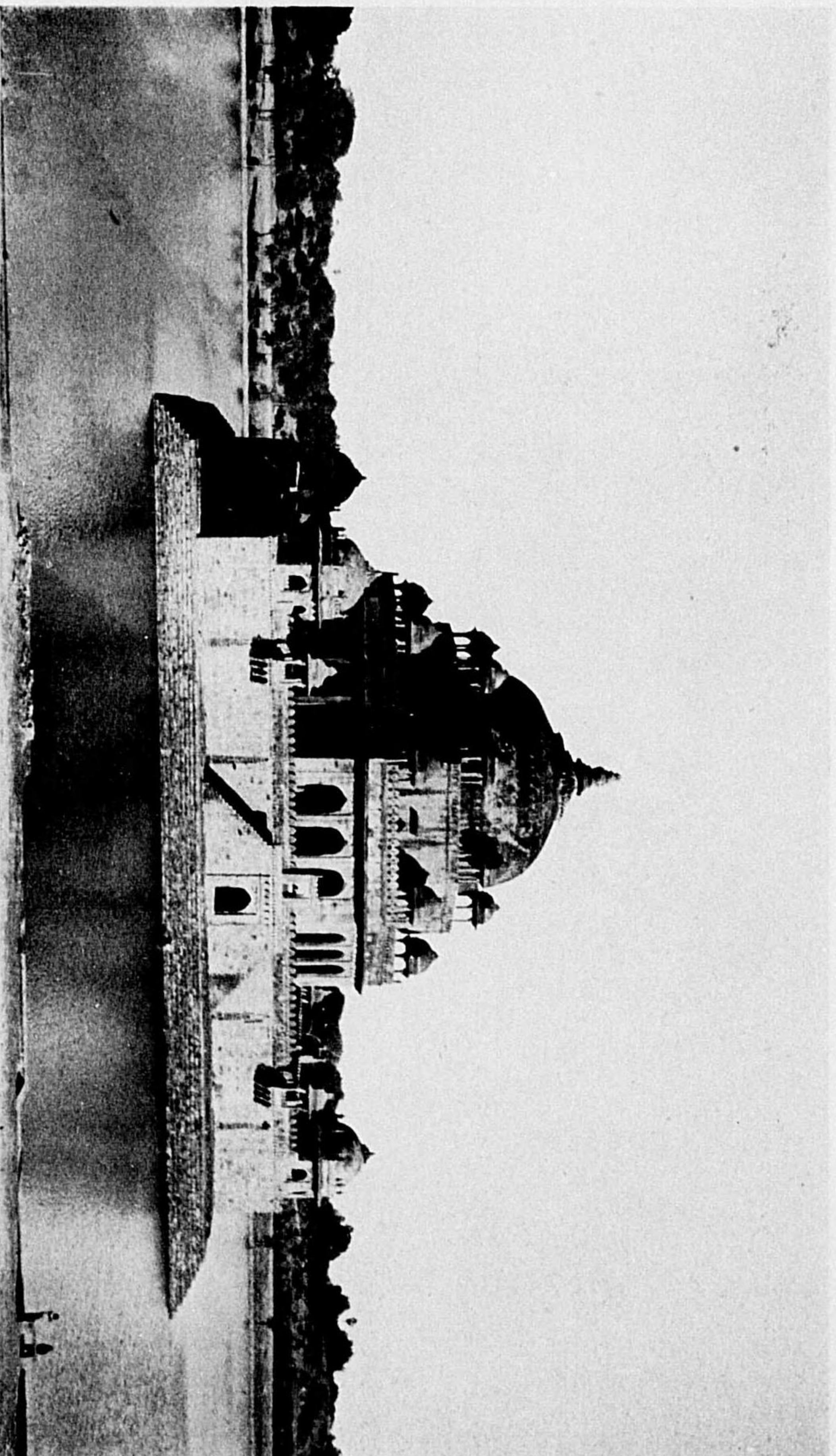
ものは殆んど他にない。此王は西紀一五三九年(天文八年)―一五四五年

(天文十四年)在位の人であつたが、此廟を彼が生前どの位まで自身で造り

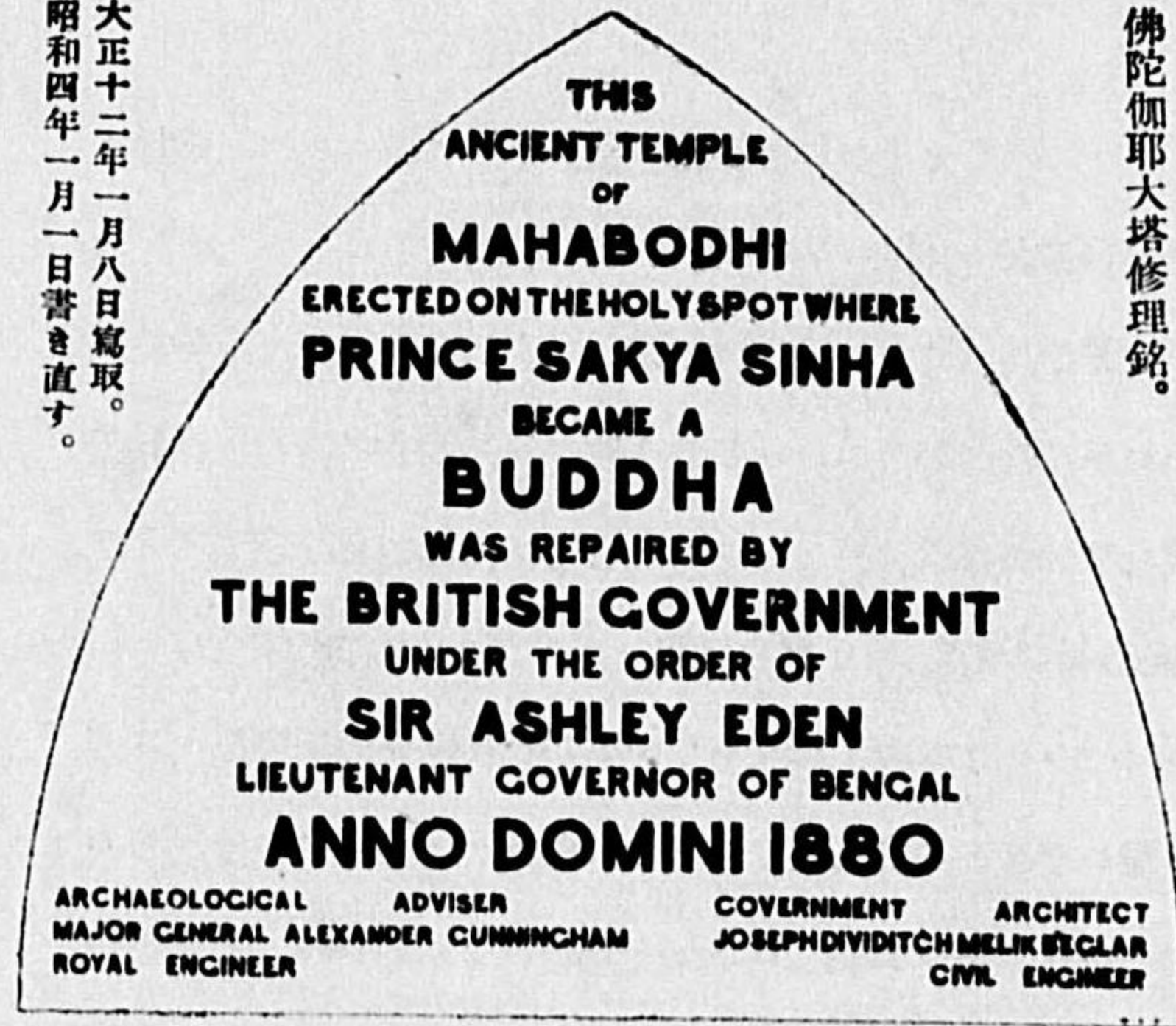
あげたか判然しない。併しタシ・マハルが女性的とするならば、これは

あれとは反對に、どこ迄も男性的で、謂はゆる後期パイクン (三三三三) 建

築としては第一流のものである。



大正十二年一月八日寫取。
昭和四年一月一日書き直す。



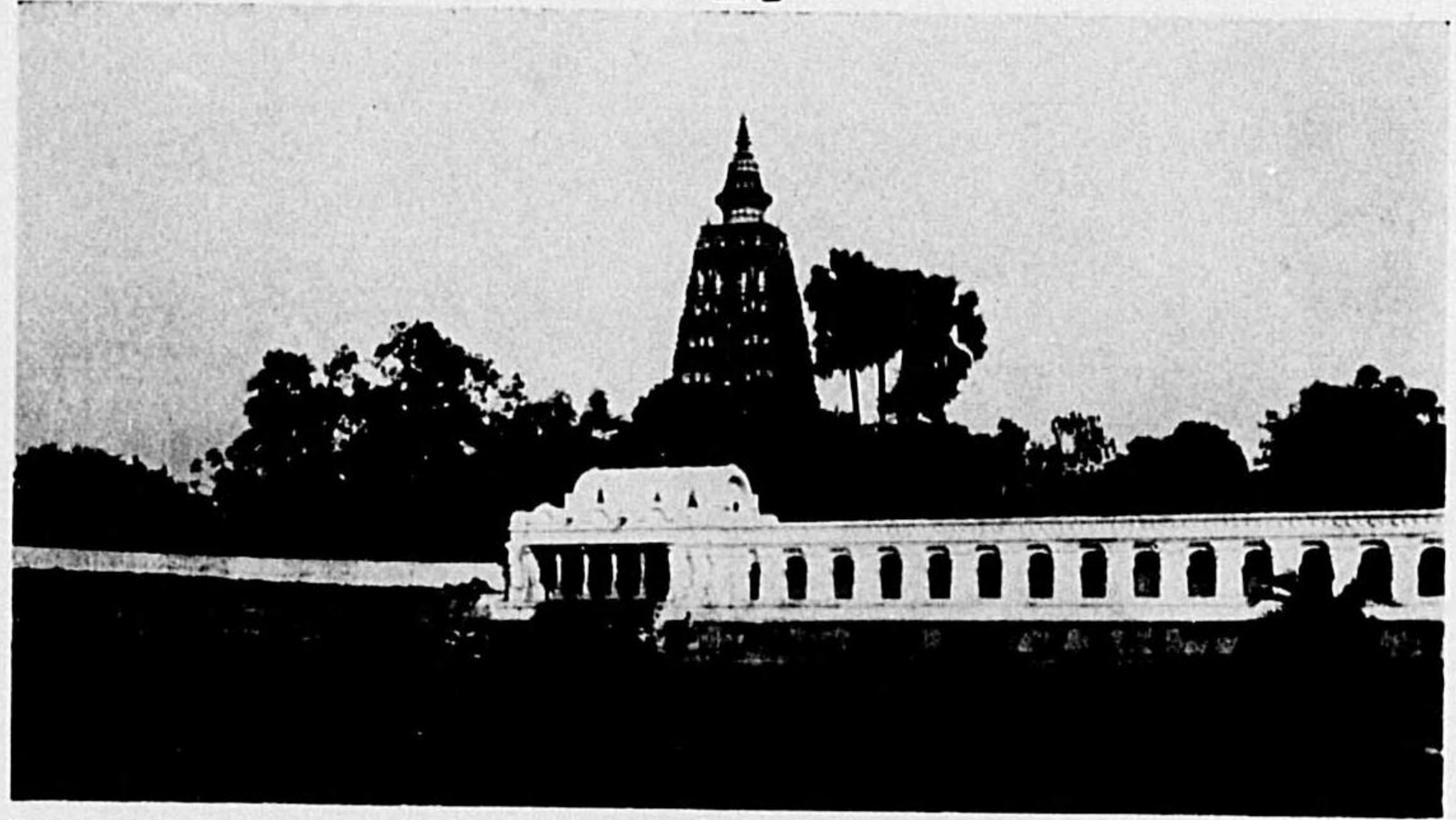
佛陀伽耶大塔修理銘。

上、一二七。佛陀伽耶大塔 其二。
下、一二八。同 其二。

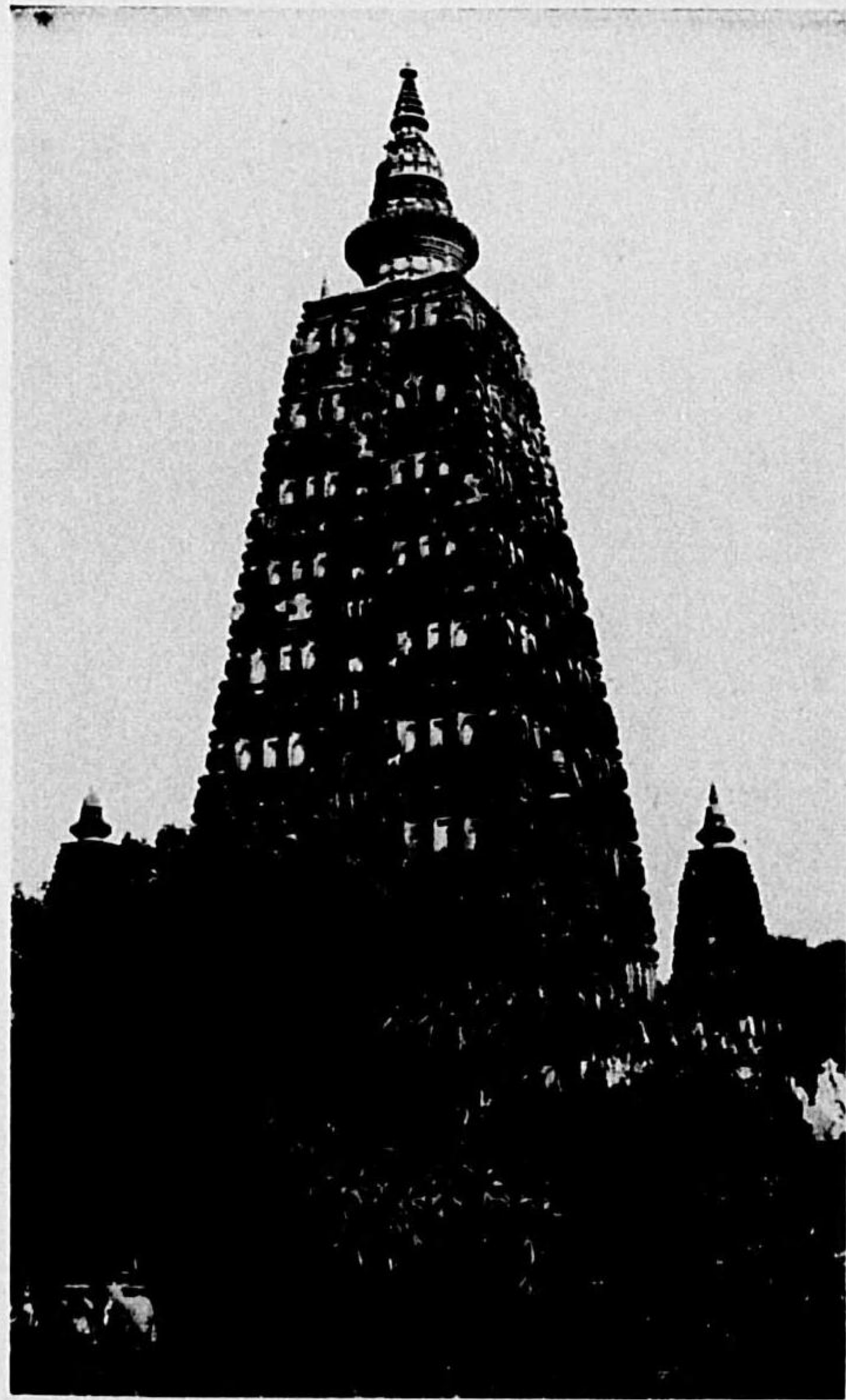
佛陀伽耶大塔は、修理銘に明かなとほり、西紀一八八〇年(明治十三年)に英政府の手により、大修理を経てゐるが、實は明治十三年に漸く着手したものの如く、落成したのは何年か後であらう。といふのは明治十六年に、初めて大塔へ参詣された故北畠道龍師の著書——『天竺行路次所見』(明治十九年發行)——によると、まだ發掘最中であつたから、さう思へるのである。一二七は沐浴池の附近から遠望したもので、この位離れると大分小さくなるから、左程は目立たないが、近くで見ると惜しい事に豪華にしてしまつた。

一二八は大塔西方の高地の今は知らないが、當時は竹林であつた其竹の間から寫したもので、餘り美しくなり過ぎてしまつた。夫だけならまだいいが、折角修理はしたが、よくしたといふよりは寧ろ餘計拙くしてしまつたといふ批評は、氣の毒ながら正に當つてゐる。素人が寄つてたかつて手をつけると、敢てこれのみではない。いづゞこの建築でも、きまつてこれと同様の運命に陥るのである。以前は塔内安置の佛像は、大概其儘であり、尊く拜せたが、最近は無やみに金を塗り、彩色を新にして、なきけなう有様にしてしまつた。ビルマから來た坊さんがしたのだとかいひてゐた。併し周囲の玉垣の文様、殊に圓文文様には「祇園の買収」「舍利塔」「女性」「菩提樹」「馬人」「翼馬」「翼獅」「翼象」「翼羚羊」「人魚」「雙馬柱頭」等、面白いものが多く、其他注目研究すべき材料が多多ある。少なくとも一二三日はゆくりして、何度も繰り返し観察しなければ、相當の効果は得られまい。

一二七



一二八



(大正十二年一月八日)
(大正十二年一月八日)